更なる戦いへ

沙伊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
更なる戦いへ

【Ｎコード】
Ｎ１４０１Ｈ

【作者名】
沙伊

【あらすじ】
ツナの元に届いた九代目からの手紙。その内容は日本で行われる同盟ファミリー主催のパーティーに参加してほしいとのこと。そのパーティーでの出会いが、ツナ達の運命を動かし始める！

標的０　プロローグ

どことも知れぬ場所で、ある会合が行われていた。

「情報は確かなんだろうな」

暗い部屋の長机に設置された椅子の、一際大きく立派なものに座った男が言った。

片目を覆うほど長い髪は薄い金色で、整ってはいるが表情の無い顔は限りなく冷たい。

「いくら俺でもこんなことで嘘つくわけないだろ」

答えたのは、向かいに座る青年だ。

男と同じ金髪、しかし彼の方がやや濃い。芸術的とも言えるほど端正な顔立ちで、唇に悪戯っぽい笑みが浮かんでいる。

「ボンゴレ？（デーチモ）世は日本の並盛町ってとこに居る。……ところで一つ訊いていいか？」

「……何だ」

青年は眉を寄せ、

「なぜマフィアを狙う？　もっと別の要人を狙うべきじゃ……」

「私の方針に不満でもあるのか、ロキ」

男は横に立て掛けてあった黒い槍を手に持った。

かなり大きな槍で、二メートルはありそうだ。

「私の方針に従わないなら……」

「……分かってるよ」

青年――ロキは肩をすくめて立ち上がった。

「別に不満なんざ無いさ。それにアンタと殺りあうなんてごめんだ」

ロキはそのまま部屋を出る。
入口のドアを閉め、にんまり笑った。
「面白そうだからな。まだまだアンタの傍にいるさ。気ィつけろよボンゴレ１０世沢田綱吉。アイツは手強いぜ」

帰路に着いていたツナは、ふと立ち止まった。
「……今、誰か……？」
夕焼けに染まった背後には誰も居ない。
「気のせい、か」
ツナは歩き出した。

運命は動き始めた。
誰も知らない。この先にある未来に。

続く…

標的1　手紙（前書き）

未来編から一年経ってます。

標的1　手紙

どんなに強烈な体験も、時が経てば印象深い記憶になるものだ。

最近、沢田綱吉はそう思う。

未来での戦いからもう一年近く経つ。

あれからも色々あったが、概ね平和だ。

というか暇。

戦いたいわけではないが（ていうか絶対嫌）、ここまで平和だと、何か面白いものはないかと思ってしまう。

（……ま、平和が一番なんだけどね）

内心でしきりに頷きつつ、自宅のドアを開いた時だ。

「おせーぞ」

「！　ぶふっ」

いきなり顔面を蹴られ、ツナは後ろにぶっ飛んだ。

……多分、五メートルはいったと思う。

「いきなりなにすんだよリボーン！！」

ツナは自分を蹴り飛ばした張本人を睨み付けた。

黒い帽子に黒いスーツ。大人の男を想起させるが、実際着てるのは赤ん坊である。

最強の赤ん坊アルコバレーノ。彼――リボーンもその一人だ。

黄色いおしゃぶりを持つ彼は、ツナの家庭教師で、こういう出迎

えは日常茶飯事である。
……慣れたくないが。
「別にいつも通りだろ！？」
「うるせーぞ。早く家に入れ」
「お前が蹴り飛ばしたんだろ！？」
言いつつリボーンに従うツナ。言っても聞かないのはいつものことだ。
「……で、何だよ」
帰って来るなり疲れたツナは、肩を落として尋ねる。
意味無く蹴ったわけじゃないだろう、多分。
「九代目からの手紙だ」
「！！」
渡された白い封筒に、ツナは目を見開く。
見れば、確かにボンゴレの紋章が刻まれていた。
「えーと……げっ。イタリア語だ……」
ツナは顔をしかめた。
リボーンに強制的にイタリア語を学ばされたツナは、日常会話程度なら読み書きできるようになった。
が、長い文章だとどうしても読めない。そのせいで何度リボーンに殴られたことか……
「リ、リボーン」
「しゃーねーな。読むぞ。

『沢田綱吉君へ
一年前の、未来での出来事はリボーンから聞いてるよ。かなり大変だったらしいね。
その事は、時間ができればゆっくり話そう。今回は、そのための手紙ではない。
実は、近々日本で同盟ファミリー主催のパーティーがあるんだ。
君と、君の守護者達にそのパーティーに参加してほしい。

当日、迎えの車を用意する。服などもこちらで用意しよう。
では、元気でね。

九代目より』

ってことだ」

「パ、パーティー!?　そんなの無理だよっ」

「んなこと言えねーぞ。お前は次期ボンゴレボスなんだからな、こういう場は慣れねーと」

「で、でも……」

「嫌とか言うんじゃねーぞ」

リボーンはツナに銃を向けた。

「ひぃ!!　行きます、行けばいいんでしょっ」

ツナは半ば自棄になりながら言った。

「とりあえず獄寺と山本にはお前が言っとけ」

「う、うん……。あとお兄さんと雲雀さんと……あの人来るかな……クロームとランボかな」

「アホ牛は除外だ」

「?　何で?」

ツナが首を傾げるとリボーンが一言。

「ウザいからだ」

（ウザい言ったー!!）

リボーンのあんまりな言い方に、ツナは絶句した。

その後、ツナとリボーンの会話を聞いていたランボが行きたいと駄々をこねたが、リボーンに粛清された……

「というわけなんだ」
翌日、ツナは獄寺と山本に昨日の事を話した（ランボのことは除外）。
ツナは気が乗らなかったが。
しかしである。
「パーティー良いじゃないすか！！　マフィアの交流の場ッスよ！」
「なんか楽しそうだな～。ウマいもんでんのかな」
二人共、ノリノリだった。
「じゃ二人共、オッケーってこと？」
「勿論ッス！！」
真っ先に獄寺が答えた。
「ところでツナ、そのパーティーっていつだ？」
「あ、今週の日曜日だって」
山本の問いに、ツナは答える。
「パーティーか……俺はあんまり気乗りしないんだよな」
ため息をつくツナに、山本は笑いかける。
「まーまー。こういうは楽しまなきゃ損だぜ！」
気楽な親友の言葉に、ツナは再びため息。

（それに……俺が嫌なのは、マフィア絡みってだけじゃないんだよな）

心の中にあるしこりのような不安。

超直感なのか分からないが、行ってはいけないという気がするのだ。

（考え過ぎかな）

ツナは言い知れぬ不安を無理矢理押さえ込んだ。

そう遠くない未来にその不安は現実となるのだが……ツナは知らない。

続く…

標的2　パーティー

パーティー会場となる豪奢なホテルを見上げ、ツナは感嘆の声を上げた。
「すげー……」
ツナと守護者達は黒塗りの車を降りた。全員上質なスーツを着ている（クロームは薄緑のパーティー用ドレスだ）。
パーティー当日、七人はボンゴレの車で並盛から少し離れた高級ホテルに来ていた。
「緊張するなツナ、胸張っていけよ」
彼らをホテル内に案内しながら沢田家光はにやっと笑った。
ツナ達を先導することを九代目に頼まれたらしい家光は、自分の家を歩くように堂々とホテル内を歩いている。
おどおどしてるツナ達とは大違いである（雲雀は普段通りだが）。

しかし、雲雀も来たとは驚きだった。
群れるのが嫌いな彼に、リボーンはどんな説得をしたのだろう。
自分が巻き込まれるものでないことを願うばかりである。

「さあ、ここだぞ」
色々考えてるうちに、パーティー会場に着いていた。
日本人の姿はほとんどない。自分達みたいな学生はもっといない（当たり前）。
「お、いたいた。ツナ、ちょっと待っててくれ」
家光は誰かを見つけたらしく、奥の方に行ってしまった。
とりあえずツナは、隣の獄寺と山本に話しかけることにする。

「なんかキンチョーするね、ここ……」
「大丈夫ッスよ十代目！！　そのうち慣れます」
「すげーパーティーだな～。何のパーティーかな？」
慰めてくれる獄寺に対し、山本は見当違いなことを言った。
と、
「私の引退パーティーだよ」
あらぬ方向から、山本の言葉に答える者がいた。
見れば、家光と一緒に、背の高い老人がこちらに歩いてくるのが見えた。
白髪混じりの頭で、かなりの年齢のはずだが、がっしりした体格といい、精気に満ち溢れた表情といい、実に若々しい。
「はじめまして……君が沢田綱吉君だね」
「は、はい」
戸惑いを隠せないツナに、老人は微笑んだ。
「私は陽（ヨウ）殷（イン）と言う者だ。ボンゴレ同盟ファミリー、ランファミリーのボス――いや、元ボスと言うべきか」
老人――殷は手を差し出し、ツナの手を握った。
ツナがおろおろしてるのもお構い無しである。
「ボスの座は息子に渡すから君と話す機会は今しかなくてね」
「はあ……」
ようやく手が解放され、ほっとするツナに、殷は歳を訊いてきた。
「今年で十五になりますけど、それがどうか……？」
「ああ。実は、私の孫娘も十五でね」
殷は近くの給仕に何やら言うと、ツナ達に向き直った。
「しかし、十代目のファミリーは皆美男美女だねぇ。こういう場では映えるよ」
そんなことを言われ、皆照れ入ってしまう。雲雀だけは無反応だったが。
「十代目ご自身も……良い目をしておられる」
「え！？　俺、ですか？」

思わず驚いたツナである。まさか自分まで言われるとは思わなかった。
「ああ。優しい、とても澄んだ目だ。君の人柄をそのまま表してる」
褒められることの少ないツナは照れまくってうつむいてしまった。
「君みたいな子がいれば安心だね」
どういう意味ですかと訊こうとした時、別方向から声がかかった。

「お呼びですか、おじい様？」

そちらの方を向いて、ツナは固まってしまった。
そこに居たのは、とても美しい少女だったのだ。
腰辺りまで伸びた亜麻色の髪に、フランス人形のような整った、なおかつ愛らしい顔立ち。
特に目を惹くのは大きな瞳で、澄んだ琥珀色だ。
「紹介しよう。孫娘の陽（ヨウ）　明（メイ）だ」
「はじめまして、ボンゴレの皆さん」
明は優しい微笑みを浮かべた。
「あ、えっと、ここんにちはっ。俺、じゃなくて僕、沢田綱吉です！」
思いがけない美少女登場に、ツナは必要以上に緊張してしう。
「知ってます。よく、家光のおじ様から聞いてるから」
そう言って明は家光を見上げた。どうも、知り合いだったらしい。
「実はね、今度から君と同じ学校に通うことになったんだ」
殷の発言に、ツナは再び驚く。彼だけじゃなく、獄寺と山本も驚いた。
「多分、おんなじクラスになると思うからヨロシク！」
明が手を差し出す。ツナは真っ赤になりながら握手を交わした。
「じゃあ俺と殷は向こうで話があるからおまえは明嬢と仲良くしとけよ」
家光はからっと笑って殷と共に向こうに行ってしまった。

駄目親父とはいえ、側に居てくれたら心強かったのに……ツナは緊張がぶり返してしまった。
「ねぇ沢田君、貴方達の町のこと、教えてくれる？」
明がニコニコと顔を覗き込んできた。
どぎまぎしながらも、ツナは彼女の質問に答えた。
一通り教えて、ふと顔を上げると、一人の男性と目があった。
薄い金髪の、随分綺麗な長身の男性だ。

男としては長い髪を揺らしながら男は近付いてくる。
近くで見て気付いたが、男は左目を塞ぐ縦長の傷を持っており、前髪はそれを隠すように長い。
威厳ある美丈夫だが……なぜか背中がぞくりとする感覚に襲われた。
「……沢田綱吉殿ですかな」
男は古めかしい口調で話しかけてきた。
「スウェーデンの資産家の、オーディンと言います」
「な、何で俺の名を……？」
落ち着け、と自分に言い聞かせながらツナは問うた。
なぜか動揺を見せてはいけない……そう感じたからだ。
「貴方の父親――家光殿から聞いたのです。よろしく」
そう言った後、男――オーディンは、ツナの耳元に囁きかける。
「これから貴方とは、長い付き合いになりそうだからね……」
「……え？」
ハッと顔を上げた時には、オーディンは向こうに行ってしまった。
「なんだったんでしょうかね、十代目」
獄寺が不思議そうに言った。
「う、うん……。明ちゃん、あの人知ってる？」
「前に家に来たことあるけど」
尋ねられ、明は困ったような顔をした。
「私も、よく知らない」

「そっか」
ツナは人の群れに消えたオーディンをじっと見つめた。
言いようのない不安を感じながら。

（あれが、次期ボンゴレ……？）
オーディンは失望していた。
あれがあの九代目に次期ボンゴレに選ばれ、最強と謳われる暗殺部隊ヴァリアーのボス、ＸＡＮＸＡＳを倒した男なのか。
（しかし、さっきのあれは……）
オーディンは顔をしかめる。
話しかける前、目が合った時思ったのだ。

こいつは、私の最大の敵となる。

気のせいかもしれない。何より気にしていた男だからそう思っただけだ。
オーディンは不安を振り払い、パーティー会場を後にした。

この出会いが、運命を動かし始めたことに、今は誰も気付かなかった。

続く……

標的3　会話（前書き）

まだ単行本の方で出ていないキャラ（？）が出てくるので本誌読んでない方はご注意を。

標的3　会話

「陽　明です。ヨロシクネ」

明がニコッと笑って並中三年A組の全員に向けて頭を下げた。
男子はもちろんのこと、女子でさえ彼女の愛らしさに見とれていた。
当たり前だよなーとツナは思う。笹川京子という想い人がいる自分でさえ心が揺らいだぐらいで。
で、明はその京子の左隣に座った。ツナから見れば右斜め前だ。
「よろしく陽さん。私笹川京子って言うの」
「コチラこそヨロシク、笹川さん！」
などという会話が聞こえてきた。

そして朝礼が終わったとたん――

「陽さんって中国のどこに住んでたの？」
「中国の学校ってどんな感じ？」
「カレシとかいんの！？」
びっくりするほどの人だかりができた。
それこそ、雲雀がいたら「噛み殺す」などと言いそうなほど。
「凄いね」
避難してきた京子がツナに話しかけた。
「陽さん美人だから当たり前なのかな」
「う、うん……」
どもりながらも頷く。

ここは京子ちゃんも美人だよ、などの気のきいたセリフを言うべきなのだろうが、気恥ずかしくて言えない。
「スゲーっスね。俺ん時もそうだったなぁ」
「ハハッ。そういや獄寺も転校生だったな」
獄寺と山本がツナと京子のもとに来た。
「転校生が珍しい訳じゃねーのによぉ」
「でも、外国からだし、しょうがないんじゃないかな」
「十代目の言う通りスね！」
ツナが言ったとたん意見を変える。相変わらずである。
（そう言えば……）
ツナはふと、昨日のパーティーでの明との会話を思い出す。
『話あるんだけど、明日学校でいい？　ここじゃ話せないの』
（パーティー会場で話せなくて学校で話せることって何だろ？）
ツナは首を傾げた。

「結局お昼になっても話せなかったねー」
屋上で弁当を広げながらツナは呻いた。
なにしろ休み時間中ずっと男子のガードが着いていたのだ。
ツナが行けば「ダメツナが陽さんに近付くんじゃねー」などと言われ、獄寺と山本が行けば「いつも女子に囲まれてるくせに！」とひがまれ……
気持ちはわからなくもないが明からすれば迷惑なのでは。

「これじゃあ話ができるのはいつになるか……」
「今できるよ」
「そう今……ってえぇっ！？」
気付けば話題沸騰中の明が屋上の扉手前に立っていた。
気配も音もしなかったのに……
「め、明ちゃんどうして……」
「あんまりしつこいんだもん。まいてきちゃった」
からっと笑う明。
あの大量の男共をどうやってまいたのだろう。なかなか侮れない。
「あの、それで話って何？」
「あー……うん」
明は少し言いにくそうにしながらツナの隣に座った。
獄寺が睨み付けてるのにまったく気にしてない。
「話っていうのはね、ある新興ファミリーのことなの」
「新興ファミリー……？」
「うん。最近力をつけてきたファミリーなんだけど……ちょっとこれ見てくれない？」
明が取り出したのは一枚の紙だった。
ツナはその紙を覗き込んだが、あいにくまったく読めなかった。
「あ、ごめん！　中国語読めないよね」
気付いた明は慌てて紙を引っ込めた。
「えっと、この紙にはね、こう書かれているの。

『古きものはもはや不要。新たな時代にて消えよ』

……これはうちのファミリーの幹部が暗殺されたところに落ちてたの」
「暗殺……！」
ツナは目を見開いた。
「そ、それが俺達と何の関係が……？」

「うん……。暗殺されてるのはうちのランファミリーだけじゃないの。ボンゴレと、その同盟ファミリーの幹部ばかり狙われてる。しかも古株のみね」
「年寄りばっか狙ってるてことか？」
獄寺がやや顔をしかめながら尋ねた。
「うん。あと、伝統なんかを大切にしてるとことか」
「一体、誰がそんなことを？」
山本が訊いた。ことの重大さを感じ取ったのか、さしもの彼も表情を引き締めている。
「さっきも言ったけど新興ファミリーで名は……アースファミリー」
「アースファミリー……」
ツナは明が口にしたマフィアの名を繰り返した。
「私が日本に来たのはそのため。なんでもアースファミリーは、貴方を狙ってるらしいの」
「いいっ!?　お、俺を!?」
ツナは青ざめた。
せっかく平和が戻ってきたと思ってたのに、また戦いに明け暮れなければならないのか……
「ダイジョブ？」
明が心配そうに訊いてきた。
「えーと……ゴメンネ」
「謝られても……」
ツナはうなだれた。

クンクン

「!?　ナッツ？」
ツナは腰からかけていたボンゴレ匣（ボックス）が動いたのに気が付いた。
現代に戻る時、未来のツナ達のリングでは使えないからと入江正一に所持するよう言われたのだ。

ツナは匣の中にいるナッツこと大空ライオンが慰めてくれたのを感じた。
「……ありがとう。心配してくれて」
ツナに答えるように、匣が動いた。
「沢田君、それなぁに？」
明が首を傾げたのを見てツナは説明を始めた。
未来での戦いや死ぬ気の炎、そして匣――

「へぇ……そんなことがあったんだ。一年前に貴方達が行方不明になったのは知ってたケド」
明は目を瞬いた。
「まぁともかく、これからは私も一緒に戦うから、ボス候補同士ヨロシク！」
「え。ボス候補同士って、明ちゃんも……？」
「そ。私、ランファミリーの二十一代目候補なの。父様は、二十代目ね」
明は誇らしげに言った。
「二十一代目ってことは、ランファミリーってボンゴレより歴史長いの？」
「まーねー」
明はにまっと笑った。
「ランファミリーの起源は中国の義賊なんだけど、それもいれたら千年近くになるかな～」
「せっ……」
ツナは顎が落ちそうになった。
と、その時。

キーンコーンカーンコーン

チャイムのせいでなんとも気の抜けた空気が漂った。

「あ、チャイム鳴ったねー。私、教室戻るから。じゃ、これからヨロシクネ」

明は立ち上がるとパタパタと去っていった。

後に残ったのは、ポカーンとしたツナ達三人である。

「……はぁ。これからどうなるんだよぉ～」

これから来るであろう苦労を思い、ツナは重いため息をついたのだった。

続く…

標的４　忍び寄る影

学校にて色んな意味で疲れたツナは、重い足取りで家に帰った。
「……ただいまー」
「お帰りツッ君。お客さん来てるわよ」
母、沢田菜々の言葉に、ツナは顔を上げる。
「お客さん？」
「そう！　ツッ君凄いのね～。高校生のお友達が二人もいるなんて」
「高校生……？」
一瞬考え、そしてハッとする。
高校生の知り合いなんて、あの二人しか思いつかない。

ドダダッとばかりに階段を昇りきったツナは自室の扉をババンッと叩くように開いた。

「リボーン！！」
「ちゃおッスツナ」
「極限に元気だな沢田！！」
「うるさいよ。静かに歩けないの？」
ツナを迎えたのは三つの声。
一つはリボーン。残りの二つは、
「雲雀さん……お兄さん……」

高校の制服を着た雲雀恭弥と笹川了平だった。

二人は今年、並盛高校に入学していた。
了平は当然だが、雲雀はリボーンに言われて高校に入ったらしい。
入った理由は不明だが、未だ並中風紀委員を取り仕切っている。
十年後にあった風紀財団はこんな風にできたのかもしれないとツナは思っていた。
「おいリボーン！　何でこの二人がいるんだよっ」
ヒソヒソ声で問うと、リボーンはいつもの通りの表情で返した。
「明から話があったんだろ。この二人も、聞いた方がいいと思ってな」
「それは……」
言いかけたツナはん？　となる。
「おまえ明ちゃんのこと知ってんのか？」
「何度か会ったことがある」
リボーンの言葉にふぅんとうなるツナ。
「それより明が言ってたことを話しやがれ」
リボーンが銃口を突き付けてきた。
格好だけなのはわかっているが、どうしても悲鳴をあげてしまうのはほとんど条件反射だろう。
「ひぃぃ！！　わかったから銃おろせよっ」
ツナが言うとリボーンはあっさり銃を下げた。
ツナは安堵のため息をつくと明から聞いたことを話始めた……

「人類を全滅させるにはまずどうすればいいと思う？」

問われた言葉に、ロキは目を瞬いた。

「そうだな……。人の多い要所を消していくとか？」

「そう。普通ならそうするだろう。しかし、私はそう思わない」

馬鹿にしたような物言いにいささかむっとしたロキは問い返す。

「じゃ、おまえはどうするんだ？」

「私か。私だったら……前途ある者を殺す。若い、才能ある者をな。要人も若い者なら真っ先に殺すべきだろうな」

「けっ。時間かかりそー」

「確かにな。しかし未来を奪うという点では確実だろう。新時代を創るなら、その逆だが」

ロキは思わず眉をよせた。

「アンタの方針はそれに基づいてるからか」

「あぁ」

冷たい声で答え、独白するように続ける。

「新しい秩序を我らアースファミリーが創るため、古きものは消さなければならない。そして新しいものを創るためには、新しい『王』が必要」

懐から取り出した写真を眺め、呟く。

「沢田綱吉……私の計画に、彼は必要だ。たとえ何もできぬ木偶人形でも」

「ふ……ん。ま、一応協力するぜ。オーディン」

ロキは薄く笑い、ボスである男――オーディンを見つめた。

獲物を見つけた、獣のように。

「それっておかしくないか？」

リボーンの言葉に、ツナはへ？　と首を傾げた。

「どういうことだよ？」

「暗殺されたのはファミリーの古株ばかり……なのになぜツナを狙う？　ツナはボンゴレの伝統はほとんど知らねーし、ましてや重んじてるわけじゃねぇ」

「た、確かに」

リボーンの指摘に納得するツナ。

一方……

「極限にわからんぞー！！！」

了平は無駄に大声で叫んでた。

いつものことながら声がデカい。

隣の雲雀が思いっきり顔をしかめたぐらいだ。

で、雲雀はというと、冷たい声で言い放った。

「草食動物が狙われようが何されようが、僕には関係無いね。赤ん坊、悪いけど帰らせてもらうよ」

「ひ、雲雀さん！」

ツナの制止も聞かず、雲雀は部屋を出てしまった。

「行っちゃった……」

「極限に相変わらずだな」

ツナと了平はうなってしまう。

「とりあえず、未来と同じく、現代でもとんでもないことになっているということだな、沢田」
「あ、はい」
了平のいきなりの質問に、戸惑いつつ頷くツナ。
「むぅ……何だか極限に燃えてきたぞ！！！！」
「は、ぁ？」
「沢田！　俺はこれから来る敵に備え、　極限にトレーニングしてくるっ。じゃあな！！」
了平もまた、雲雀と同じく部屋を出ていった。静かにと荒々しくの違いはあるが。
「はぁ……これからどうなるんだろ、俺達……」
「さぁな。だか」
リボーンはいつになく真剣な顔で言った。

「また戦いが始まる。多分……並盛でな」
「えっ……それってヴァリアーの時みたいに？」
「かもな。しかも」
リボーンはツナを見上げた。その黒目にツナは、なぜか背筋が冷たくなる。

「未来の時のように、京子やハルやイーピン、そして並盛の人間全員を巻き込むことになるぞ」

「！？」
「ツナ……これはおまえが思っているほど甘くねーぞ。……どうする？」

ツナは思わず身を震わせた。
忍び寄って来る、暗い影に恐れを感じて。

続く…

標的5　現れた敵

リボーンの不吉な言葉から一週間がたった。

事件らしい事件も起きず、めちゃくちゃ平和だった。

……ただ、今までの経験からしてこれは「嵐の前の静けさ」というやつだろう。

「はぁ……。何か日に日に神経すり減らしてる気がする」

ツナは帰路に着きながらぼやいた。

獄寺は用事、山本は部活でここにはいない。つまり一人だ。

なるべく一人になるなとリボーンに言われたが、こればかりはしょうがない。

ただ、こんなところでクラスメイトに会うとは思わなかった。

「よー！！　ダメツナっ」

「あ……」

ツナが道を曲がると、向こうから見覚えのある二人の並中男子生徒が歩いてきた。

確か……小田と佐藤だったはず。

「二人共……何でここに？」

ツナが首を傾げると、二人はにまぁ、と笑って、

「この先並盛神社だろ？」

「？　うん」
「そこで落ちた賽銭拾ってたんだよ」
「結構あったぜ」

……アホらし。

二人には悪いがツナはそう思った。
「……」
「あ、ダメツナにはやんねーぞ！」
ツナの呆れの目を勘違いしたのか、二人はぐぐっと睨んできた。
「別にそうじゃなくて……」
ツナが二人を諌めようとした時――

「そいつらお友達か？　沢田綱吉」

ツナはばばっと振り返った。
今さっき、ツナが通ってきた道から、一人の男が現れた。
夕日に輝く金髪、その下から覗く整った顔立ち。
ぱっと見れば見惚れるほどの美青年だが、ツナは背筋が凍った。

なんて冷たい目なんだ……

髪と同じ金色の瞳は、氷の刃のような鋭く冷たい光を灯していた。
「ん？　ツナの知り合いか？」
状況がわかってない二人が顔を見合わせている。
「……逃げて、二人共」
「は？　何言ってんだ？」
「いいから早く……」
二人に向き直った時――

「友達心配してる場合か？」

背後からの声にもう一度振り返ったツナを迎えたのは、強烈な一撃だった。

ドゴォ！

近くの塀にツナは叩き付けられる。衝撃で塀が砕けた。

「ひ、ひぃぃぃ！！」

二人が悲鳴を上げた。

「お～と、おまえら一般人だなぁ」

男はニタリ、と笑った。

「警察に言われちゃ面倒だし、ここで始末するか」

男はツナをぶっ飛ばした物――二振りの銀の大剣のうち一本を持ち上げ――

ガラッ

瓦礫となった塀が崩れた。

「そいつらには手を出すな。貴様の狙いは俺だろう？」

ボゥッと音を立ててツナの額に炎が灯った。

「……やぁっぱそう簡単にやられねーか」

男は唇の端を吊り上げた。

「ダ、ダメツナ……？」

怯えていた二人はツナの変貌に目を瞬く。

その二人を無視し、ツナは男に尋ねた。

「貴様、アースファミリーの人間か？」

「ご名答。アースファミリー最高幹部、『神格』の一人、ロキってんだ。ヨロシクな、ボンゴレ十代目」

軽い返答にツナは顔をしかめる。

そんな彼にロキは二振りの剣を振り上げた。
「おまえの実力、試させてもらう！」
「――！」
ツナはグローブで一の剣を受け止めた。しかしすぐ二の剣が横殴りに襲ってくる。
それも受け止め、ツナはそれらを押し返そうとする。
――動かない！？
だが、剣は一ミリも動かなかった。ツナが全力で押してるのに、だ。
「そんなもんか？」
「――っ。ハァ！！」
「！　がっ」
ツナは剣を押さえつつ、回し蹴りを放った。
下からの攻撃は想定してなかったらしく、ロキは靴底を滑らせて吹っ飛ぶ。
「ゲホッ。きっつー」
ロキは顔を歪め、しかし薄ら笑っていた。
「いいねー。そうでなきゃつまんねー……あとは、だ」
ボゥッ
「――！！」
ツナは目を見張った。
ロキの二振りの剣。
その刃に、死ぬ気の炎が灯った。

紫色の炎が灯った剣を、ロキはツナと距離をとって振り上げる。

「ハァッ」
シャッ

ロキが剣を振り下ろすと同時に、炎を纏った鎌鼬が襲いかかってきた。

ドガァッ

直撃。
鎌鼬はツナに完全にぶち当たったように見えた。
まだいたクラスメイト二人が再び悲鳴を上げる。
が、しかし。

キィィィ……

澄んだ音と共に炎や土煙が消えていく。
姿を現したツナは全くの無傷だった。

特別な構えをとって。

「……死ぬ気の零地点突破・改かっ」
ロキが歓喜の声を上げた。
一方ツナは顔をしかめる。
「一体貴様は……アースファミリーは何が目的なんだ」
攻撃を防がれたにも関わらず、喜ぶロキを、ツナは気味悪げに見つめる。
「あー、そうだった。うん、話すよ。おまえ合格だし」

「……合格？」

「そ。なあおまえ……」

ロキはすっと表情を引き締め、とんでもないことを言い出した。

「おまえ、俺らの仲間になんねーか？」

続く…

標的6　誘いと戦の狼煙

ツナは固まってしまった。

仲間になれだって……!?

「何言って……!?」

「俺らはおまえを高く評価してんだぜ?」

ロキはニヤリと笑った。

「俺らは都合上マフィアを名乗ってるがな、実際は『革命集団』なんだ」

「革命……?」

「そう!」

ロキは誇らしげに胸を張った。

「この世界は間違ってる……そう思ったこと無いか?　俺らはそんな世界を根本から変えようという組織さ。

もし俺らの仲間になれば幹部の椅子を用意してやるよ。悪い話じゃないぜ。周りからダメツナと言われ、何やっても失敗ばかり。どんなにスゲーことやっても誰も讃えてくれない。当たり前だ、おまえは『裏の人間』なんだから。表に出ちゃいけない。そんな世界にうんざりしてないか?」

ロキは手を差し出した。

「俺と一緒に来れば、おまえの本当の力を認めてやるよ。さぁ、俺と来い」

長いロキの言葉が終わり、ツナの返答は。

「……何があろうが、おまえらの仲間にはならない」

ロキの片眉がピクリと反応した。

「なぜだ？」

「俺は今の現状に満足してる。……確かに他者から見れば、俺は駄目な人間だろう」

でも…

ツナは額の炎を消した。

戦闘態勢を解き、静かに語る。

「俺には大切な仲間がいる。俺を認めてくれる仲間が。だから、貴方達のような人を簡単に殺そうとする人達の仲間には、絶対ならない！」

ツナはロキをじっと見据えた。

ハイパーモードでないツナは、今はただの中学生だ。そして普段のツナは気弱な少年。

だが今のツナには、本人も気付いていない、彼本来の芯の強さが瞳に宿っていた。

対し、ややたじろいだロキが言葉を重ねようとした時――

「よく言った、ツナ」

彼らがハッとして道の奥を見つめた。

目線の先には、金色の髪と鳶色の瞳を持った青年が、スーツ姿の男達を従えて立っていた。

「ディーノさん！」

ツナは青年の名を呼んだ。

「ディーノ……？　跳ね馬ディーノかっ」

ロキが焦ったように呻いた。

跳ね馬ディーノ。

キャバッローネファミリーの若きボスで、リボーンの元生徒。つまり、ツナの兄弟子にあたる。

ディーノはいつもは見せない鋭い目でロキを睨み付けた。

「ツナはおまえらの仲間にならねぇ。とっとと帰るんだな」

「……無理矢理にでも連れ帰るつもりだったがしょうがねー」

ロキは小さく舌打ちすると、人間技とは思えないほどの跳躍を見せた。

「――！！」

驚くツナ達を見下ろし、手近の家の屋根に乗ったロキは大声で言った。

「いずれまた会うだろう、沢田綱吉、跳ね馬ディーノ！　おまえ達が、新たな時代を背負う限りな！！」

敗走とは思えない堂々とした走りっぷりで、ロキは去った。

ツナはゆるゆると息を吐き、ディーノに向き直る。

「ありがとうございます、ディーノさん。おかげで助かりました」

「いいって。……しかしあいつは何者なんだ？」

ディーノの疑問に、ツナは答える。

「たしか、アースファミリーの最高幹部『神格』だって……」

「神格、なぁ……。神にでもなったつもりか？」

「まさにその通りだと思うよ」

突然の声に、ツナとディーノはばばっと振り返る。
ディーノ達が来た方向から逆の道から亜麻色の髪の美少女が走ってくる。
「め、明ちゃん!?」
「間に合わなかったみたいね」
驚くツナに対し、明は残念そうに肩をすくめる。
「うちのファミリーの奴を殺した連中の顔でも拝んでやろうと思ったんだけどな」
ため息を吐き、すっと表情を改めた。
「はじめまして、よね。跳ね馬、私は陽　明と言います」
「知ってるぜ。ランファミリーの姫。日本に来てるってのはリボーンから聞いてる」
「そう」
明は頷くとツナに向き直り、心配そうに顔を歪めた。
「ダイジョブ、沢田君？　ケガは？」
「あ……腕に擦り傷つくったぐらいだよ」
吹っ飛ばされた時つけたかすり傷に目線を落とし、ツナは苦笑いした。
「ならいいんだけど……。ところで」
明は視線をある一点に向けた。
「アソコの二人は何？」
「あ……」
ツナはハッとした。
目線の先には、半分気絶しかけてる小田と佐藤の姿があった。

「交渉決裂ですね」
「！　……ヘルか」
あるビルの屋上に降り立ったロキは、背後に現れた女性に肩をすくめた。
膝辺りまで伸びた漆黒の髪に、灰色の瞳。顔立ちは人形のように愛らしいが、右頬に薄く火傷の痕があり、美貌が半減してる。
喪服のような黒衣を身に纏ったヘルはそっと頭を下げた。
「心中お察しします。あれほどの逸材、手中にできれば我々の計画に役立つのですが」
「あぁ。おまえも気付いたか」
ロキはニヤッと笑った。
「沢田綱吉には他の奴らには無い『魅力』がある。もっとも、本人は気付いてないようだが」
ロキは頭を振る。
「もったいないねぇ。アイツが気付けば、もっと楽しくなるはずなんだがなぁ」
「ロキ様、その発言は幹部としてどうかと」
ヘルが諫めの言葉を口にした。
「いーじゃねーか。俺がアースファミリーにいるのはただ楽しいから。革命なんて祭り、乗らなきゃ損だろ？」
ロキは笑みを深くし、目を細める。
「さぁて、戦の狼煙は上がった。どう出る？　沢田綱吉君よ」
ロキは笑いながらその場を後にした。

続く…

標的7　襲撃

「……なるほど」
小田と佐藤は納得したように頷いた。
「つまりダメツナはマフィアのボス候補で、さっきのアイツはそれでツナを狙ってきた……って、納得できるかぁぁぁ！！！！」
突然叫ぶ二人にツナはびっくりした。
その後ろで明が、
「わぁ。これが日本のマンザイ『ノリツッコミ』ってやつねっ」
「いや、明ちゃん……んなこと言ってる場合じゃ無いって！」
「わかってるわ。冗談よ、ジョーダンっ」
「まったく……。とにかく、これは嘘とかそんなんじゃ無いんだ。解ってくれる？」
ツナの言葉に二人はめいっぱい顔をしかめて首を横に振る。
「困ったなー……」
ツナは頬をかく。
隣のディーノは難しい顔で、
「それより俺はさっきのロキって奴が気になるな」
「確かに……」
人間離れした身体能力、そしてこの時代ではまだ研究段階のはずの死ぬ気の炎を使っていたこと――
革命集団などと言ったり、多くの謎を残していった彼は何者なんだろう。
「なぁ明嬢。アースファミリーについて、何か解らないか？」
ディーノの言葉に、明は顔を曇らせた。

「め、明ちゃん……？」
「……解らないの」
「えっ？」
明の小さな声に、ツナは首を傾げる。
「な、何が解らないの？」
「ボスよ」
明は眉を寄せ、声を低めた。
「アースファミリーのボスについて……なぜか、何の情報も無いのよ」
「情報が無いって、顔も名前も解らないのか？」
ディーノが訊くと、明は無言で頷く。
「ボスだけじゃない。幹部も、詳しい構成も何も解んないの。解るのはファミリーの名前と末端の構成員だけ。他は何も……」
明は小さくゴメン、と呟いた。
「謝ることないよっ」
ツナが慰めると明の唇が少しほころんだ。
「しかし、情報力だけならボンゴレも凌駕するランファミリーですら実態が掴めてないなんて、不気味だな」
ディーノの言葉にツナはうつむく。
また戦うことになるのかと思うと、不安が心にのしかかってきたのだ。
「……とにかく今は、それは置いとくとして、問題は」
ディーノはまだいる小田と佐藤を見下ろした。
「なぁおまえら、さっき見たことは誰にも言うなよ」
「え。何で？」
……どうやら言う気まんまんだったらしい。
「頼むから二人共黙ってくれる？」
「何でだよ？　あんなにスゲかったのに」
逆に尋ねられてしまった。
「いーから黙っててて！　ね？」

「何でだよ。おまえ本当はめちゃくちゃ強いのに」
そう言われ、ツナは再びうつむいた。
「……俺が強くなったのは、またみんなで平和に暮らしたかったからなんだ。だから」
ツナは言葉に詰まった。

自分が強くなったのはみんなで平和に暮らしたかったから。それは事実だ。
でも、ダメツナと呼ばれたくない、もっとたくさんの人達に認めてもらいたいとも、心の底で思っていた。
矛盾してる。ロキの言葉が、今さらながらツナの心を揺さぶった。

「……とにかく、黙ってて。ね？」
「えー」
不服そうな二人にディーノがずいっと詰め寄る。
「おい。もし喋ったらどうなるか、解って言ってんのか？」
「へ……」
「もし喋ったら……命は無いと思えよ」
普段は温厚なディーノだが、さすがマフィアのボス。脅しはかなり怖かった。
「はい！　喋りませんっ。すんませんでしたあああぁぁ！！」
二人は青くなって走り去ってしまった。
「……やり過ぎたかな」
ディーノは苦笑した。
ツナは答えない。うつむいたまま、ただじっと考えていた。
自分の本心を。

次の日、ツナは学校で獄寺と山本に昨日のことを話した。
ただ、勧誘されたことは黙っておく。何となく言いずらかったのだ。
「謎の革命集団アースファミリー、か……。何か手強そうスね」
というのが獄寺の感想だ。
「うん……。それに、死ぬ気の炎やあの人間離れした力とかも気になるし」
ツナは首を巡らせ、小田と佐藤の方に目線を向けた。
二人共ツナと目が合うと、焦った様子で視界から消える。ディーノの脅しが効いてるようだ。
「リボーンとも話したんだけど、とりあえず今は向こうの出方を見た方がいいって。相手の正体がわからないなら、こっちから動くのは不利だから」
ツナの言葉に二人は頷く。
それを見、ツナはふと、ロキの言葉を思い出した。
「……ねぇ、二人共」
ツナが呼びかけると、獄寺の山本は顔を上げた。
「二人は、さ、俺のこと、どう思ってる？」
「は……」
「えっ、と……」
二人は一瞬顔を見合わせ——まず山本が口を開いた。
「ツナは俺にとって、大切な親友だぜ。……それにさ、ツナがいなきゃ、俺、今ここにいないし」
山本は気負うわけでもなく、二ッと笑って答えた。
「……俺も同じッス」
獄寺は照れ笑いを浮かべて言った。
「俺も十代目に助けられてここにいるんです。ですから十代目は俺にとって、誰より尊敬できる方であり、恩人です」

「二人共……」
ツナは照れまくってうつむいてしまう。
しかし、二人の言葉が、とても嬉しかった。
不安がる必要など無かった。
やっぱり俺の居場所はここなんだ……
深い安堵に、ツナはしばらく浸っていたかった。
しかしそうもいかないだろう。
「ありがとう、二人共。……これから何が起こるか解らないから、気をつけてね」
「あぁ！」
「勿論ッス！」
力強く頷く二人に、ツナも微笑みをもって応えた。

ツナ達を遠方から見つめる者が二人――

「あれがボンゴレX世（デーチモ）か……。なかなかカワイーじゃなぁい」
屋上に立った女性が目の前の並中校舎を見つめ含み笑いを浮かべた。
ウェーブがかった長い金髪、空色の瞳の美女で、女性的な身体のラインがわかるピチッとした赤いドレスを着ている。
「餓鬼と思って侮るな。なにしろあのロキを退かせたのだからな」
隣に立った男が眉をひそめた。
美女と同じ金髪碧眼の美男で、顔立ちにも彼女と似通ったところ

がある。
「解ってるわ。だって我々の敵となり得るかもしれないコだもの。……だからこそ、私の下僕達を送り込んだんだから」
美女は笑みを深めた。
「ボンゴレX世、私達兄妹の前にひれ伏させてあげるわ」
フフフ、アハハハ！
美女の高笑いが空にうるさいほど響き渡った。

帰路につくために校舎を出たツナ、獄寺、山本は、校門にクロームがいることに気付いた。
「クローム！　どうしてここに？」
「ボス……」
クロームはほっとしたように表情を緩めた。
多分、慣れない人間が大勢いるところで一人だったので心細かったのだろう。
「あの……骸様が、気付いたことがあって」
「骸が？」
三人は顔を見合わせた。
「気付いたことって？」
「この前の、パーティーで会った男の人……」
男の人とはあのオーディンのことだろうか。
そう訊くと、クロームはこくんと頷いた。
「あのオーディンって人……骸様、見たことあるって」

「えっ！」
ツナは目を丸くした。
「み、見たって、どこで？」
慌てて尋ねると、クロームはびっくりしたように肩を震わせ、やがて小さく言った。
「……骸様が、昔犬や千種と一緒にいたところ」
「そ、それって」

エストラーネオファミリーで……！？

ツナ達は愕然とした。
「な、何で骸と同じファミリーに……！？」
ツナが眉をひそめていると――

「十代目！」

獄寺が大声を上げた。
ハッとして顔を上げると、複数の男がこちらに近付いてくるのが見えた。
少なくとも数十はいる。
「こいつら、もしかして……」
「ボ、ボス……」
山本とクロームが焦りの声を出した。
「まずい……」
ツナは周りを見渡した。
並中の生徒達が何ごとかとこちらを見ている。
「ボンゴレX世ですね」
男の一人が前に出た。
殺気を、その目に灯して。
「アースファミリー最高幹部、フレイヤ様の命により、貴方を排除

します」

続く…

標的8　アジト

並盛町のある一角――

真新しいビルの前に立ったディーノは、後ろにいる明にに確認を取った。

「ここの所有者は確かにアースファミリーなんだな」

「ええ」

明は真剣な面持ちで頷く。

「表向きはノルドゥ革新教とゆう宗教団体だけど、それはアースファミリーの隠れ蓑みたいね」

「なるほどな……」

ディーノは唇を歪めた。

「さすが次期ランファミリーボス。よく一日で突き止めたな」

「苦労したけどね。こんなに苦労したの初めてよ」

明は顔をしかめつつ、制服のスカートの下に隠してあった銃を抜いた。

「多分、ここにいるのも末端だろうけど、少しはアースファミリーのことわかるかも」

「だな」

ディーノも懐から鞭を取り出した。

「行くぜ！」

後ろに控えた部下に声をかけ、ディーノはビルに乗り込んだ。

大量の敵を前に、ツナは冷や汗をかいた。
（ヤバいよ……こんな大勢の前で戦うわけには行かないし……）
それは獄寺や山本、それにクロームにも言えることで、三人共、武器を出すか否か迷っているようだ。
「どうしました？　抵抗しないのですか？」
先頭の男が挑発してきた。
口調はていねいだが、こちらを馬鹿にしたような響きがあった。
「来ないなら……」
男が上着の内ポケットに手を伸ばした時――

ガギィィッ

突然破壊音が響き渡った。
「君達……僕の学校で何してんの？」
低い、不機嫌きわまりない声。
この声は……
むさい群れを打ち倒しながら現れたのは華奢な黒髪の男――雲雀だった。
「ひ、ひひ雲雀さん！？」
「沢田綱吉……これらは何？」
血の付いたトンファーで男達を指し、雲雀はじろりとこちらを睨んだ。

怒ってる……めちゃくちゃ怒ってる……！

ツナが言い訳を考えあぐねいていると――

「ちゃおッス」

右肩に負荷がかかったと思うと、リボーンが肩にちょこんと座っていた。

「リボーン！　何で……」

「話は後だ。雲雀、そいつらは並盛に害をなす奴らだ」

リボーンの言葉に雲雀の片眉が反応した。

「ふぅん……。じゃあ」

雲雀の唇に、獣のような笑みが広がった。

「噛み殺さないとね」

だっと男達に突っ込む雲雀。

男達やツナ達以外の並中生徒が悲鳴を上げるのもお構いなしだった。

「ツナ、ここは雲雀に任せて移動するぞ」

「えっ」

目を見開くツナに、リボーンは淡々と言った。

「アースファミリーの支部が見つかった」

高いビルを見上げ、ツナはリボーンに尋ねた。

「ここが、アースファミリーのアジト？」

「あぁ。明が手に入れた情報だ、間違いねぇ」

ちなみに場所は並盛ではなく、黒曜中の周辺だ。

「このビル……一年前に建ってた。宗教団体の建物だって聞いたけど……」

クロームが囁くように言った。
確かに扉の横にかけられた看板には『ノルドゥ革新教』という宗教名が書かれている。
「ノルドゥ革新教は政治家が主な信者の新宗教だ。しかし実態は……」
「マフィアの隠れ蓑ってワケッスね」
リボーンの言葉を獄寺が引き継ぐ。
「並盛町にあるのも含めて、現在二つ確認されてる。もう一つの方はディーノと明が調べてる。こっちは、俺達で調べるぞ」
リボーンに対し、四人は顔を見合わせた。
恐れているのではなく、意思確認でだ。
「よし。入るぞ」
リボーンを先頭に、五人はビル内に入った。
中は薄暗く、視界が悪い。
慎重に足を進めていく。
誰もいないように見えた。

ジャキッ
「――!」

次の瞬間、連続する銃音が鼓膜を貫いた。

ディーノは違和感を感じた。
ビル――もとい、アースファミリーのアジトの制圧は簡単だった。

――それこそ、赤子の手を捻るより簡単に。

「おかしい……。なぜ抵抗してこないんだ」

部下達によって縛られたアースファミリーの構成員を見下ろし、ディーノは眉をひそめた。

銃を向けることも逃げることもしない彼らに、ディーノは逆に恐ろしくなる。

「……もしかして私達、ハメられた？」

明が苦々しそうに顔をしかめた。

「抵抗しないし、そもそもここにいる人がたったの四人！」

明が言うと、すぐ近くの男が薄ら笑いを浮かべた。

「我々の目的はボンゴレ十代目。我々はオトリに過ぎん」

ディーノは明と顔を見合わせた。

「ボンゴレ十代目の命は、あの方々の手に堕ちる」

「あの方々……？」

ディーノはハッと目を見開いた。

「マズイ！　残りの敵は、ツナ達の行ったビルだ！」

明が顔を上げた。

「じゃ、急がないといけない！　情報じゃ、幹部らしき人物が二人いるらしいのっ」

明は身をひるがえすとビルの外へ走り出した。

「行くぞロマーリオ！　残りはここでそいつらを見張ってろ！」

ディーノの命令に、ロマーリオ以外の部下達は頷く。

それを見てディーノはロマーリオと共に明を追いかけた。

無事でいろよ、ツナ……！

ガガガガガガガッ！！

複数の銃弾が皆ある一点に向けて放たれ続けた。
数十秒後、ようやくそれらが収まり、サブマシンガンを持ったダークスーツの男達が姿を現す。
穴だらけの死体が転がってるはずの場所を見た彼らは驚愕する。
そこには死体どころか、人一人立っていなかった。

「後ろだ」

背後からの声に男達がハッとして振り向くと――

バキッ
「ガッ」

男の一人がぶっ飛んだ。
ハイパーモードのツナに殴り飛ばされて。
「ボンゴレだ！」
「撃ち殺せ！」
男達は銃をツナに向けた。

スパパパッ

銃身が半ばで絶ち斬られた。
呆然とする男達に、更なる衝撃。
三叉槍が二人の男を数瞬のうちに打ち倒し、残りの敵は小さな何かによって地面に伏した。

「……これで全員か」
ツナの言葉に、獄寺、山本、クロームは頷いた。
三人の内山本は男達の銃を全て叩っ斬り、クロームは三叉槍で、獄寺は匣アニマルの嵐猫『瓜』で敵を倒したのだ。
「三人共、ケガは？」
ツナが訊くと、山本はニッと笑った。
「大丈夫だぜ！　獄寺やクロームもな」
「そっか」
普通の状態に戻り、ツナはほっと胸を撫で下ろす。
「クロームのおかげだよ。ありがとう」
ツナが微笑みかけると、クロームはぽおっと頬を赤らめた。
最初入ってきた時、敵が待ち構えているのにツナ達は気が付いた。
そこで、クロームの幻覚で敵の不意を突くことにしたのだ。
ちなみに獄寺がダイナマイトを使わなかったのは、ツナ達が爆発の巻き添えになる可能性があったからである。
「私は……ボスに言われたことをしただけ……」
クロームはよほど恥ずかしいのか俯いてしまう。声も空中で消えてしまいそうだった。
「そんなに照れなくても……」
ツナも困った様子で頭を掻いた。
「と、とにかく、上に行こう。多分、敵は上にいると思うから」
ツナは率先して階段に足を進める。獄寺達も、彼の後に続いた。
そんなツナ達を見つめながら、リボーンはふっ、と小さく笑みをこぼした。
クロームへの指示も、あの一瞬で立てた作戦も、全てツナが考え行ったことだ。
猶予はほんの数秒だけだった。その間にあれだけのことをするには冷静かつ的確な判断力が無ければならない。
（いつの間にかそんだけ成長しやがって……）

本人の意思に関係なく、ツナはボスにふさわしい男になりつつある。

家庭教師として、これほど嬉しいことは無いだろう。

「……ま、もうしばらくは俺がついてなきゃ駄目だろうな」

あのダメツナめ。

言葉とは裏腹に、楽しげな笑みを浮かべながらリボーンはツナ達の後を追った。

標的9　新たな敵

ビルの最上階まで来た。
その間、敵の迎撃にはあってない。
単に一階にいた男達しかいなかったのか……あるいは罠か。
「……」
一番奥の部屋に続くであろう扉の前で、ツナ達は顔を見合わせる。
「……どうしたおまえら。怖いのか？」
リボーンの言葉に、ギクリとする四人。
「怖いというか……」
「ちょっと緊張しちまって」
獄寺、山本という順番で答え、ツナとクロームはこくこくと頷く。
特にツナは、ロキのように人間離れした動きを敵がするのではないかと不安があった。
「いいから入りやがれ」
リボーンの一言に、おっかなびっくり扉を開けるツナ。
部屋は思ったより広かった。

その空間で、十数人の人間が待ち構えていた。

「伏せろ！！」
彼らが構えていた物を見てツナは叫んだ。

ダダダダダ！！！

銃声が耳をつんざき、頭の上を無数の銃弾が通り過ぎていった。

「っこの、果てろ！」
獄寺が複数のダイナマイトを投げた。

ドガガガガァァン！！

繰り返し鳴る爆発音。今度は爆風をしのぐために床に伏さなければならなかった。
「くっ……みんな大丈夫！？」
ツナは膝立ちになって後ろを振り返った。
ところどころ煤けているが（爆風のせい）、全員ケガはなさそうだ。リボーンなど汚れゼロである。
ツナがほっとしていると、思わずのけ反ってしまうほどの高笑いが鼓膜を貫いた。

「オーホッホッホッ！」

ビックリを通り越して白けるツナ達。
当然と言えば当然で、全員こんな高飛車な女性の笑い声を聞いたことがなかった。
「あの銃弾をかわし、なおかつ反撃するとは……さすがね、ボンゴレX世！」
顔を上げると、部屋の奥に窓を背にして二人の男女が立っていた。
どちらも見事な金髪で、顔立ちが似通っている。兄妹だろうか。
「はじめましてね。私はアースファミリーの最高幹部、フレイヤよ！」
「同じく最高幹部の一人、フレイだ」
高圧的な物言いの女性に対し、男性の方は淡々としていた。
「我々はボンゴレX世、おまえを抹殺するためにきた」
「……？」
ツナは眉をひそめた。

ロキと言ってることが違う。誘いを断ったからだろうか。
「下僕達を打ち倒した実力といい、味方だと頼もしいけど、敵だとこれほど手強い奴はいないわ。……それにしても」
フレイヤが不用心にもつかつかと近づいてきた。
思わず身構えるツナ。
しかし――

「やっぱりカワイー！！」

抱きつかれただけだった。

……じゃなくて。

「！！！？？」
「あー、近くで見るとやっぱカワイイわ～。目とか男の子にしては大きいし。ボスに頼んで私の物にしようかしら～」
驚きまくるツナに対し、カワイイを連呼するフレイヤ。後ろでは、仲間が驚愕の表情を浮かべていた。
獄寺は酸欠の魚みたいに口をパクパクさせてるし、山本はポカァンとした顔をしている。
感情の起伏が薄いクロームでさえ、目を真ん丸にして両手を口元に当てていた。
「な、何するんだ！？」
ツナはビックリしつつ、フレイヤを剥がした。
「ん・ふ・ふ～♪　反応もカァワイ～」

ずれてる。完全にずれてるこの人！？

ツナは頭痛がしてきた。
「フレイヤ、我々はボンゴレX世を抹殺しに来たのだぞ」

フレイが呆れ顔で言った。
この時ばかりは、敵に感謝したくなったツナだった。
「解ってるわよ。ボスの命令は絶対、でしょ」
不服そうにフレイヤは言った。
「沢田綱吉、我々はおまえの抹殺を我らがボスに仰せつかっている」
フレイはフレイヤを後ろに押し、自分は前に出た。
「しかし、我々の仲間になるなら話は別だ。もし、アースファミリーに入る気があるなら……我々と共に来い」
「……それはもう断った」
ツナはなるべく強気に聞こえるよう声を調節した。しかし、緊張してるせいか、なかなか難しい。
「俺は、ここにいたい。ここは俺の居場所だから。それに、目的のために人殺しする貴方達の手助けなんて、したくない」
ツナの言葉に、フレイは渋い顔をした。
「解らんな。なぜこんな場所に執着するか」
彼はそう言いつつ、背中に手を伸ばした。
今気付いたが、彼は長剣を背負っている。
「死ね」
フレイは信じられないようなスピードでツナに迫った。

ガギィィン!!

「――!」
「あんた、剣を使うみたいだな」
フレイの剣は、もう一振りの剣によって防がれた。
山本の、時雨金時によって。
「山本!!」
「剣なら、俺が相手な」
山本はニッと笑ってフレイの剣を押し返した。
吹っ飛ばされる――ことは無かったが、靴底を滑らせてフレイは

後ろに退く。
「ツナ、ここは俺に任せろ」
「でも……」
言いかけたツナを遮るように、フレイヤの声。
「お兄様ばかりずるいわ。私も参戦させてもらうわよ」
フレイヤは二ィと笑って、小さな匣のような物を二つ取り出した。
あれは……
「匣(ボックス)!?」
ツナは驚愕した。
この時代にはまだ無いはずなのになぜ!?
「さぁ、出てきなさい!」
フレイヤは左の中指にはめたリングに炎を灯し、匣の窪みに当てはめた。

バシュバシュッ

音を立てて現れたのは、晴れ属性の炎を纏った二匹の猫だった。
しかも、普通の猫より大きい。中型犬ほどもあるのだ。
「行きなさい!」
フレイヤの号令と共に、猫達は山本に襲いかかった。

「させねぇ!!」

嵐属性の炎が猫の一匹を撃った。
「獄寺君!」
「十代目!　自分も参戦します!!」
獄寺は左手にドクロを象った匣兵器を付け、戦闘態勢に入っていた。
「フフン、不良美少年がお相手?　好みじゃ無いけどちょっと遊ん

であげるわ」
「余裕ぶっこいてんじゃねー。俺は女でも容赦しねーぞ」
獄寺はギロッとフレイヤを睨んだ。
「……我々の狙いは沢田綱吉だけなんだがな」
「悪ぃがツナには手出させねぇぜ」
四人は互いを睨み合う。
「クローム、俺達も戦わないと！」
「う、うん」
ツナとクロームははっと気付き、武器を構えようとした。

「邪魔すんなよボンゴレ」
ツナは固まった。
この声は……
ツナは振り返り、そして叫んだ。
「ロキ！」
その声に振り返る獄寺達。
特に、フレイとフレイヤは目を見張った。
「ロキ！　貴様何しにきた！！」
「ボンゴレは私達の標的よ！」
「べっつにー。ただおまえらの戦い見に来ただけ。それよりさぁ」
ロキはニヤッと笑った。
「ここで戦ったらビル壊れちまうぜ？　場所変えた方がいいんじゃねぇの？」
「……言われなくてもな」
フレイは忌々しげに返すと、フレイヤと共に窓から飛び下りた。
「あ、待て！」
獄寺と山本は二人を追いかけて同じく窓から飛び下りた。
残ったのは、ツナ、クローム、リボーン、そしてロキだけ。
「……おめーがロキか」
最初に口を開いたのはリボーンだった。

「一体おまえらは何が目的なんだ？　ツナの話じゃ革命集団らしいが」
「アルコバレーノのリボーンか。言葉通りさ。俺達は旧体制のこの世界をぶっ壊し、新時代を創り出したい。そのために、沢田綱吉の力が必要らしい」
「らしい？」
ツナは首を傾げた。
「うちのボスがアンタを欲しがってんだよ。理由はこの間解ったがな」
「？」
意味ありげな目で見られ、ツナは当惑する他無い。
と、その時だ。

「ツナ！　リボーン！」

聞き慣れた声に、ハッと顔を上げると、ディーノと明、そしてロマーリオの姿があった。
ディーノはロキの姿を認識すると、目を見開く。
「テメェ！」
「おっと、誤解すんなよ跳ね馬」
ロキは両手を上げて一歩後ろに下がった。
「俺は様子見とボスの言葉ボンゴレに伝えに来ただけだって」
「俺に？」
今度はツナが目を見開く番だった。
「ボスが、近々会うことになるだろうってさ。意味わかるか？」
「ど、どういう意味？」
ツナは少し身構えて訊いた。
「鈍いなぁ。会談の席設けるってこと」
「……！」
ツナはディーノと顔を見合わせる。

「じゃな。俺帰るわ」
軽い口調でロキは階段に向かった。
しかし明の顔を見て唇を歪める。
「陽　明。あんたにもファミリーに入って欲しいんだがな」
「誰が入るもんか！」
明はギッとロキを睨んだ。
ロキは笑みを深めると、そのまま去っていった……

続く…

標的１０　ｖｓフレイヤ（前書き）

遅くなって申し訳ありません！
やたらと時間かけたのに大した文書けませんでした……
それでもいいという人はどうぞ！！

標的１０　ｖｓフレイヤ

窓の下は、ビルから出っ張るベランダのような屋上だった。
「逃がさねーぜ」
「覚悟しろ」
山本、獄寺はそれぞれの武器を構えた。
「逃げはしない」
「あんた達こそ、私達に恐れをなして逃げないことね！」
フレイ、フレイヤが対抗するように声を張り上げる。
「お兄様、私一人で充分よ」
「どうかな。一応試してみろ」
フレイの言いようにむっと顔をしかめつつ、フレイヤは晴れの炎をまとった猫達に命令した。
「行きなさい！」
「ニギャァ！！」
晴猫達は鋭い爪を立て、向かってきた。
獄寺と山本はそれぞれの匣に炎を注入する。
「行け、瓜！」
「小次郎、頼む！」
嵐猫と雨燕が大猫を迎え撃つ。
なぜあの二人が匣を使えるのかは知らないが、匣戦で負ける気は獄寺達には無かった。
しかし、敵の関心は戦闘から外れたらしい。
フレイヤは自分の匣アニマルを退かせると、眉を寄せて訊いてきた。

「何であんた達が匣兵器を持ってるの？　一体どこで手に入れたのさ！？」

「それはこっちのセリフだっての」

獄寺は顔をしかめて言った。

この匣は未来にて手に入れた物だ。

しかし、彼らの場合はどうなんだろう。

まだこの時代では匣は研究段階のはず。

まさか……白蘭か！？

二人の脳裏に、未来での最大の敵だった男のことが浮かび上がる。

異なる未来で生きる自分の記憶を共有するという、とんでもない能力を持つあの男が匣開発に関わっていたのは知っている。その男が彼らの背後にいるのではないか。

もしそうだとしたら……

一抹の恐怖を抱く二人を、フレイヤはギッと睨んだ。

「質問してるのはこっちよ！　でも……まぁいいわ」

フレイヤは不機嫌そうに金髪を後ろに払った。

「あんた達を殺せばそんなの関係ないものね。あのカワイイボンゴレ十代目もね！」

そこでフレイヤは馬鹿にしたような笑いを浮かべた。

「ボンゴレ十代目はなかなかカワイイし、実力もあるようだけど、先の見えない愚か者でしかなかったわね、今思えば」

獄寺の額にビキンと青筋が浮かんだ。

フレイヤの、ツナを馬鹿にする物言いが、彼の逆鱗に触れたのだ。

獄寺にとってツナは常に至上の位置にある存在だ。

そんな彼を馬鹿扱いすれば、獄寺が怒るのは無理無い。

だから、獄寺は暴言を吐いた。

「うるせぇ！　十代目を馬鹿にするんじゃねぇ。このド派手年増女！！」

今度はフレイヤのこめかみに青筋が浮かぶ番だった。

どうも堪え性が無いようである。

「なんですってー！！　餓鬼のくせに生意気よっ」

フレイヤはバッと腰に手を伸ばした。

取り出したのはディーノが使っているような鞭で、革製の物だった。

「行きなさい、おまえ達！」

フレイヤは獣使いよろしく、自分の匣アニマルの足元を鞭で打った。

「ギャァォ！！」

猫達は雄叫びを上げた。

……そう、まさに雄叫びと呼ぶにふさわしかった。

それだけでなく、跳びかかってきたスピードもさっきより速くなっていた。

「ぐぁっ」

「！　獄寺っ」

瓜と共に吹っ飛ばされた獄寺を見て山本は声を張り上げる。

獄寺はなんとか堪えたものの、そのまま行けば屋上から落下してたかもしれない。

山本がほっとするのもつかの間、第二撃が彼に飛んできた。

「よそ見してる場合！？」

「！　ぐっ」

鋭い鞭の攻撃を時雨金時で何とかしのぐ山本。

しかし、鞭が刃に絡み付き、更に刀そのものが奪われてしまう。

「しまった！」
慌てて追いかけるも、すでにフレイヤの手の中に収まってしまっていた。
「ふふ。刀が無かったら、戦えないわよねぇ」
竹刀に戻ってしまった時雨金時を手に、フレイヤは勝ち誇った笑みを浮かべた。
一瞬顔をしかめた山本だったが、すぐ笑顔を取り戻す。
「ワリーけど、俺の武器はそれだけじゃねーんだぜ」
「なんですって？」
訝しげな顔をしたフレイヤに対し、山本はボンゴレ匣を開匣した。
「出てこい、次郎！」
ボンゴレ匣からつぶらな瞳の中型犬が三本の柄をくわえて飛び出してきた。
柄からは雨属性の炎が刃のように放出されている。
山本はその内二振りを受け取ると、ダッと走り出した。
焦ったフレイヤが鞭を振るも、山本はあっさりそれをよける。
一気に間合いをつめて右手に持った刀をフレイヤに突き付けた。
「くっ……」
フレイヤは顔を歪めた。
「時雨金時、返してもらうぜ。それから――」
あの猫も退いてもらう、と言いかけ、山本はハッとして後ろに跳んだ。
フレイが剣をこちらに向けて振り下ろしたからだ。
ガガッ
嵐属性の炎を纏った刃に砕かれた床は、ビキビキと音を立てて崩壊していった。

「なっ……」
山本は目を剥く。
いくら死ぬ気の炎を纏っているとはいえ、こんな破壊力があるわけない。たとえ嵐属性の特徴は『分解』でも。
足元が崩れたせいで、山本は空中に投げ出される。
落ちる……！！
思わず目を瞑る山本の手首を、誰かが掴んだ。
「！　ツナッ」
「大丈夫か？」
ハイパーモードになったツナが安心したようにほっと息をついた。
いきなりのことで自分が匣を使って飛べることを忘れていた山本は苦笑するしかなかった。
「十代目、山本！」
匣兵器のシールドに乗ってこちらに来た獄寺がほっとしたのか少し弛緩したような顔をした。
しかしすぐ表情を引き締めると、さっとフレイとフレイヤがいた場所を見る。
完全に瓦礫化してる屋上に、もはや二人の姿は無かった。
「埋まっちまったか？」
「いや」
獄寺の言葉を、ツナは首を振って否定する。
「多分、逃げたんだろう。そう簡単にくたばる連中じゃない」
「でも、どこに？」
山本が見渡す限りでは、隠れる場所は無い。
しかし、ツナの言う通り、簡単に死ぬ奴らだとも思えなかった。
「とにかく、いったん戻るぞ」

三人は再び上に戻った。

最上階に戻ると、心配顔のクロームが駆け寄ってきた。
「ボス……怪我は？」
「無いよ。獄寺君と山本も大丈夫みたい」
普通の状態に戻ったツナは獄寺と山本を振り返って言った。
「それにしても、戦いの振動がここまで伝わったぜ」
ディーノは顔をしかめた。
「一体、どんな戦い方したんだ？」
「それは……」
獄寺と山本は顔を見合わせ、とりあえず説明すると、ディーノは首を傾げた。
「匣、ねぇ……。リングの炎のことは知ってたけどそれは知らなかったな」
ツナ達は顔を見合わせた。
ディーノも知らない、となると、やはりこの時代の匣は、まだ研究段階なのだ。
なのになぜ、彼らが匣兵器を使えたのか。
「一体何なんだ、アースファミリーって……」
ツナの呟きは、その場にいる全員の疑問だった。

「お兄様、何で逃げたの！？」

逃走用に用意してあった車の中で、フレイヤは喚いた。

「奴らの匣兵器は私達の物より性能が上だった。あのままでは我々は負けていただろう」
運転するフレイが言えば、自分もそう思っていたのか、フレイヤは口ごもる。
「やはり、あの男に匣兵器の開発を急がせなければ。アレを手に入れる手筈もな」
「……日本にいるのよね、それを持ってる奴」
「あぁ」
フレイはハンドルをきりながら言った。

「ランファミリーの陽　明がな」

続く…

標的１１　新たな狙い

ハルと並盛商店街にいた京子は、むこうからツナが歩いてくるのが見えた。
隣には亜麻色髪の美少女――明がいる。

「ツナさん！　……て、誰ですかっ。あのビューティフルな女の子は！！」

目を三角にするハルに明のことを教える前に、ツナ達の方がこちらに気付いた。

「京子ちゃん！　それにハルも。どうしてここに？」

駆け寄ったツナが首を傾げた。

「学校帰りにケーキ屋さんに寄ろうって、前にハルちゃんと決めてたの」

「そうなんです！　それよりツナさん！」

ハルがずいっとツナに詰め寄った。

「その子、誰ですか！」

びっと明を指差すハル。

明は私？　と自分を指差していた。

「こ、この間転校してきた陽明ちゃんだよ。っていうか、何でハルそんなに気にするんだよ！」

「当たり前です！　もしツナさんが浮気でもしてたら……」

「してない！　てか、おまえ関係無いじゃんっ」

言い合う二人に、明はのんびりと「夫婦ケンカみたいねぇ」と言った。

「なっ。何言ってんの、明ちゃん！」
あわてふためくツナに対し、ハルは態度を一変させた。
「そんな……夫婦なんて！　確かにハルはツナさんの未来の妻ですけど」
「こっちも何言っちゃってんのーーー！！」
全力でツッコむツナに、京子は尋ねた。
「ツナ君達、どうしてここに？」
「あ、うん。ちょっと用事があって、その帰りなんだ」
ツナは頬をかいた。
そんなツナの服がすすけているのに気付き、京子は目を丸くする。
「ツナ君、服汚れてるよ。どうしたの」
「あ、こ、これは、さっきあっちで転んじゃって。ね、ねぇ、明ちゃん」
「そうなの。沢田君ってドジなのね」
明は特に普通だったが――
ツナは少し慌てた感じだった。
普段ツナを注視してただけに、その様子に違和感を覚える。
そういえば、最近ツナの様子がおかしかった。
ふっと何かを思い詰めたような顔をするのだ。

まさか……何かあったのだろうか。
未来で話してくれた、マフィア絡みで。

「ツナ君」
京子は思わず、ツナの手をとった。
ビックリ顔のツナに、京子は囁くように言った。
「無茶しないでね。私達にできることがあったら、なんでも言って。私達……ツナ君の力になりたいから」
「京子ちゃん……」
ツナはじっと京子を見つめた。

「ハルもです！」
ハルが声を上げた。
「ハルもツナさんの力になりたいです！　だから、頼りたい時はいつでも頼ってくださいっ」
「ハル……」
ツナはちょっと困った顔をした後、照れたような、それでいて嬉しそうな笑顔を浮かべた……

「…ねぇ、彼女達もしかして」
京子達と別れて、明がそっと尋ねた。
「……うん。知ってるよ、マフィアのこと」
「なぜ？　危険すぎるわよ」
訝しげな明に、ツナは哀しく笑う。
「解ってるよ。……でも、何かあること解ってるのに、知らないって辛いことだから」
十年後の世界でもそうだった。

最初は、巻き込みたくなくて、ずっと黙ってた。
危険だから、そして、傷付いてほしくないから。
でも、それは身勝手だということに気が付いた。
彼女達はすでに辛い状況下に置かれたいた。
その上何も知らないなんてあまりにも辛い。
自分だったら、何があるのか知ろうとするだろう。だから。

「だから、二人が知りたいなら教えるし、力になりたいなら一緒に戦う。……それに、傷付いてほしくないなら、俺が強くなればいいって思ったんだ」

ツナがそう言えば、明は複雑な顔をした。

しかし、やがてそれは微苦笑に変わる。

「その優しさ、ボスにとっては致命的だけど……貴方の最大最強の武器かもね」

「そ、そうかな」

ツナは照れ入った。

「そういえば、リボーンどこ行ったんだろう」

ツナは話を変えるためにふと浮かんだことを口にした。

リボーンは何やら用があるからしばらく帰らないと言っていた。

行先も教えず、本当にどこに行ったんだか。

「あと、獄寺君のお姉さん。毒サソリだったのねぇ」

明がむぅ、という表情で言った。

獄寺はツナ達と一緒に帰ると言っていたのだが、たまたま近くを歩いていたビアンキに会って例の如く気絶してしまったのだ。

そんな彼を、ビアンキは看病するために引きずっていった。

哀れ獄寺。今日は目が覚めることはないだろう。

「そういえば山本君のあの竹刀、とても頑丈なのね」

「あ、あれ、中身は鉄だから」

ツナは言った。

フレイヤに奪われた時雨金時は瓦礫の下から見つかった。

普通ヒビの一つぐらいはいってもいいはずだが、ヒビどころか傷一つ無かった。さすが一流派専用として受け継がれただけある。

「ボンゴレ十代目ファミリーのメンバーってみんなスゴいよね。私も見習わないと」
明の言葉に、ツナは目を丸くする。
「別に見習うとこなんて無いよ！　みんな勝手にやってばっかだし」
「でも、そのわりにはチームワークとれてると思うよ。外から見たら解る――」
突然明が言葉を切ってハッと後ろを振り向いた。
「明ちゃん？」
「沢田君、こっち！」
明はツナを引っ張って誰も通らない裏通りに入った。
奥までずんずん進み、半ば辺りでようやく止まる。
そしてスカートの下から銃を取り出した。
「め、明ちゃん？　どうし……！」
言いかけたツナも気付いた。
今ツナ達が通っていった道から、複数人の男達が現れたのだ。
「跳ね馬の護衛断ったのはまずかった――かなっ」
ズガガンッ
語尾と共に二発の銃声。
二人の男がそれぞれ腕と足を押さえて倒れた。
「何人いるか知らないけど、まとめて相手になるよ！」
明は銃を構えた。
男達もサブマシンガンをこちらに向けるが引金を引く前に明に肩などを撃たれ倒れていく。
「沢田君、今のうちに逃げて！」
「で、でも……！」
ツナは迷った。

明はかなりの実力者だったらしく、男達を次々倒していく。
逃げても、さして彼女の優勢に変わり無いだろう。
しかし――嫌な予感がする。
ツナはぐっと唇を引き締め、手袋と死ぬ気丸を取り出した。
「沢田君？」
「女一人ほっといて逃げたら、リボーンにどやされるからな」
ハイパーモードになったツナはすっと構えをとった。
「行くぞ」
「……ええ！」
二人はダッと走り出した。
ツナはXグローブで敵を殴り倒し、明は銃をしまって足技を男達にお見舞していた。

次々と敵をぶっ倒した結果、裏通りに立っていたのはツナと明だけになっていた。
「ビックリしたな。沢田君がそこまで強いなんて」
明は感嘆の声を上げた。
ツナは足元の男の胸ぐらを掴み、顔を上げさせた。
「おい。一体何が目的だ」
「沢田君抹殺じゃないの？」
明は首を傾げた。
「いや。俺が見た限りでは、おまえを狙っていたぞ」
「えっ」
明が目を見開いた。
「なぜ私を？　沢田君ではなく？」
「……貴様の持っている石だ」
男が苦々しく言った。
「石……？」
一瞬眉をひそめたあと、明はハッとして胸元から何やら取り出した。

紐を通した小さな袋で、薄い赤色をしている。
「それは？」
ツナが訊くと、明は袋を持ち上げた。
「虹石（ツァイホン シートゥ）よ」
「ツァイホン、シートゥ？」
「日本語に言うと、虹の石。ランファミリーのボスの証なの。父様は私が適齢期に　なるまでの仮ボスみたいなのだから私が持っているのよ」
「その石が、こいつらの目的か」
ツナは男を見下ろした。
「しかしなぜこの石を……」
言いかけ、ツナはハッとする。
「その石、七つあるんじゃないか？」
「何でわかるの？　そう、七つあるわ。それぞれ色が違うの」
「……なるほど、そうか」
ツナは男達が現れたわけを理解した。

こいつらはアースファミリーなのは目に見えて明らかだ。
そんな彼らがなぜ虹石を狙ったか。

おそらく、リングの材料にするつもりだったのだろう。

リングはある特別な石で造られることは未来で聞いて知っている。
ツナが持つボンゴレリングもトリニセッテからできている。
明が持つ虹石からリングが造られてもなんら不思議じゃない。

「……理由はわからないけど、これは渡すわけにはいかないわ！」
明は虹石が入っている袋を握りしめた。
「……とにかくここから離れよう」
今度はツナが明の腕を引っ張った。

「う、うん……」
明は頷き、たっと走り出した。
ツナは男達が追いかけてこないのを確認すると、同じく走り出す。
（リボーンの奴、どこ行ったんだよ。色々相談したいのに……）
不安を抑え込み、ツナ達は表通りに戻っていった。

「……おっ」
ロマーリオと別れ、一人歩いていたディーノは見慣れた黒髪の丸い頭を見つけた。
「おーい、恭弥ぁ！」
ディーノは小走りで教え子に近寄る。
一方教え子――つまり雲雀はディーノを見たとたん、嫌そうな顔をした。しかしその顔に僅かな驚きが広がる。
目の前で大の大人がいきなりずっこけたら誰だって驚くだろう。

雲雀は少し間を置き、雲雀は「……大丈夫？」と訊いてきた。
全然心配してなさそうな声だったが。
「大丈夫だぜ。鼻打ったけど」
ディーノはガバッと起き上がった。
ちなみにここに至るまで五回転んでいる。
「久しぶりだな、恭弥。ちょっと背、伸びたか？」
立ち上がったディーノは雲雀の頭をぽふぽふと撫でた。

雲雀はめちゃくちゃ嫌そうにそれを振り払ったが。
「貴方は相変わらずだね」
「ハハッ、まあな」
笑うディーノを、雲雀は下から睨み上げる。
「貴方何で日本にいるの？」
「あぁ。仕事でな。リボーンから聞いてないか、アースファミリーのこと」
「一応ね。でも、僕には関係無いよ」
話は終わりとばかりに、雲雀はディーノに背を向ける。
声をかけようとしたディーノは手を伸ばしかけ――ハッと振り返った。
雲雀も気付いたようで、ディーノと同じ方を向き、トンファーを構えた。
「ボンゴレファミリー雲の守護者と、キャバッローネファミリーの跳ね馬とお見受けする」
影のようにふらりと現れたのは、一人の男だった。
黒髪に黒目、さらに服まで黒だから全身真っ黒だ。
妙な雰囲気を纏い、一般人ではないことが容易にわかった。

つまり、裏社会の人間ということだ。

「はじめまして。アースファミリーのヘイムダルと申す」
男は二人に優雅な動きで腰を折った。

続く…

標的１２　情報

表通りに出て、ツナはクロームの姿があったことに驚いた。
彼女は先程ふらりと姿を消したのだった。
「クローム！　何でここに？　てか、どこ行ってたの？」
「骸様と話してて、それで……。ごめんなさい……」
うつむくクロームにツナは慌てて顔を上げるよう言った。
「謝らなくていいから！　それで、骸は何て？」
「うん……。ボスの学校の前で話した男の人のことで、骸様、直接ボスに話したいって」
「俺に？」
訊けばこっくりと頷かれた。
「あと……貴女にも聞いてほしいって」
「私に？」
脇で傍観者になってた明は首を傾げた。
「別にかまわないけど」
「あ、じゃぁ場所変えた方がよくない？」
ツナは提案した。
「骸、クロームの身体借りて出てくるんでしょ？　ここじゃ人目が多くて駄目なんじゃ？」
「骸様も同じこと言ってた」
クロームは頷いてたたっと走り出す。
ツナと明もそれに続いた。

人気の無い近くの公園まで来ると、クロームの身体が霧で包まれた。
「何……？」
明が警戒心全開で後ずさった。まぁ無理もないが。
しばらくして霧が晴れると、クロームではなく一人の男が立っていた。
クロームと同じ特徴的な髪型、高い背、そして凍てつくような、冷たい雰囲気――
六道骸だ。
「クフフ。お久しぶりですね、沢田綱吉」
独特な笑いを浮かべ、骸はツナに向き直った。
「話って、何？　オーディンって人、おまえと同じファミリーだったってクロームから聞いたけど」
ツナの質問に、目の端で明が眉をひそめるのが見えた。
それに気付いたろうに、骸はなんの反応もせず、ツナに向かって頷く。
「そうです。初めクロームの目を通して見た時は見間違いかと思ったんですが――」
骸は珍しく言い淀んだ。
しかし、僅かに首を振って話を続ける。
「彼は僕や犬、千種と同じエストラーネオファミリーの実験台の一人でした。もっとも彼は僕らと違い、少年ではなく成人間近の青年でしたが」
「ちょっと待って！」

明が顔色を変えて口をはさんだ。
「貴方……エストラーネオファミリーの人間だったの!?」
「そうですよ。ランファミリーの陽　明」
骸は無表情で言った。
明は、狂人でも見るような目で骸を眺めた。
そんな彼女が何か言う前に、ツナは慌てて質問をする。
「そ、それで骸、あの人は何で実験台に？　ファミリーの子供だけじゃなかったのか？」
「ええ、彼は例外中の例外でした。もともと彼――オーディンと名乗っていましたが、本当の名はオッデロだったはずです」
「改名したのか……」
「おそらく。とにかくオーディンことオッデロは、ある力により、例外的に実験台――というより研究対象になっていました」
「力って？」
ツナが尋ねると、骸は詳しくは知りませんが……と前置きして、答えた。
「どうも未来を視る力……つまり未来予知の力を持っていたようです」
「未来予知？」
ツナと明は顔を見合わせた。
「僕は彼と何度か話したことがあります。それで覚えていたのですが……どうも最初は、断片的に未来を視るだけだったようです。ファミリーの大人達はそれを自分の意思で視れるようにしたかったようですね。その過程で別の能力も目覚めたようですが、そこまでは知りません。彼と最後に話した数日後、僕はファミリーを壊滅させましたから」
「そんなことが……」
ツナは一瞬考え込み、ふと、疑問を口にした。
「でも何でそんなことを俺に？」
骸は、そう易々と自分の過去を話すような奴ではない。

おまけに骸からすれば、自分は憎いマフィアの一人なのだ。
そんな俺に、なぜこんな話を？
疑問に思ったツナだったが、骸の答えはごく単純だった。
「話したかった。ただそれだけですよ」
「――は？」
「理由をあえて挙げるなら、これから必要になるかもしれないから、ですかね」
「……それだけ？」
「はい」
あっさり首肯され、めまいすら覚えた。

こ、こいつこんな単純な性格だったか！？
もっと屈折してたような……

「悪かったですね、屈折した性格で」
骸の笑みを含んだ声にツナは身を強張らせる。

こいつ人の心読んだ！！

などと思ったが、隣の明に「全部口にしてたよ……」と指摘され、真っ赤になった。
「ご、ごめん」
「気にしてませんよ。自覚してますし、直す気もありませんから」
本当に気にしてないようで、骸は楽しそうに笑った。いや、こいつはいつも笑っているんだが。
「ところで私も呼んだのはなぜ？　沢田君はともかく、私は貴方となんの関係も無いんだけと」
明が眉を寄せて訊いた。
声音からして全く信用してないようだ。
「ランファミリーは独自の情報網を持っていると聞きました。この

話を聞いて、調べないわけはないでしょう。彼はおそらく、アースファミリーと繋がっています。そのことは、すでに知ってるはず」

「えっ」

ツナは骸を見、次いで明を見た。

明はめちゃくちゃ不機嫌そうに顔をしかめていた。

「知ってたのね」

「クフフ、さぁ、どうでしょう」

明の顔がますます歪められた。せっかくの美人顔が台無しである。

「貴方、嫌い」

「同感ですね。僕もマフィアと馴れ合う気はない」

骸は冷たく微笑むと、ツナに向き直った。

「では、僕は戻らせてもらいます。……沢田綱吉」

「な、何っ？」

ふと真剣な眼差しを向けられ、ツナはびっくりした。

「クロームと……犬や千種をお願いします」

「！　……わかった」

ツナは力強く頷いた。

一瞬骸の顔が弛緩したように見えたが、すぐさまひんやりとした笑みを取り戻す。

「では……」

骸の姿が霧に包まれる。それが晴れると、今度はクロームが立っていた。

クロームはふらりとよろめき、慌ててツナが支える。

「大丈夫!?」

「うん……平気……」

クロームはツナの肩に触れながらも頷いた。

「……ともあれ新情報獲得ね。ちょっと不本意だけど」

明が複雑な顔で言った。

「沢田君、私は部下にこのこと調べさせるわ」

「えっ、明ちゃん部下とかいたの!?」

「当たり前じゃない。次期ボスなんだから。それじゃ、また明日ね」
明は身をひるがえしてさっさと帰ってしまった。
「……ハァ。俺達も帰ろっか」
「うん……」
明の背を見送った後、ツナとクロームも帰路に着いたのだった。

突然現れた男に、雲雀はもちろん、ディーノも戦闘態勢をとる。
ディーノは鞭を構え、雲雀に言った。
「恭弥、おまえはさがってろ！　こいつは俺がやる」
「え。……跳ね馬、貴方部下は？」
雲雀が尋ねると、ディーノはちょっと首を傾げつつ答える。
「先帰らせたぜ」
「……さがるべきなのは貴方じゃない？」
雲雀はひんやりとした視線をディーノに向けた。
部下のいない時のディーノがどれだけ悲惨か、教え子の雲雀は嫌というほど知っているのだ。

例えばこんなことがあった。

リング争奪戦の修行で、髭をはやした部下（確かロマーリオだったか）がいないことが、一度だけあった。
別にその時は気にしなかったが、異変はそれだけでないことにすぐさま気付いたのだ。
まずディーノの放った鞭が本人に当たったとか。その次は手から

すっぽ抜けてた。
その後も、砂利に足をとられるわ、鞭が腕や足に絡み付くわ、目を覆いたくなるようなことが続いた。
始めの五分ほどは面白がって見てたが、だんだん飽きてきてディーノを放って帰ったのだった。
ちなみに修行場は山の深奥部で、ディーノは三日姿を現さなかった。

そんなのがあるから雲雀は正直不安だった。
無論、ディーノがやられる不安ではなく、戦いの邪魔になるのではないかという不安である。
「僕があいつと戦う。手出しは無用だ」
「何言ってんだ！　おまえは下がってろっ」
僕が、いやっ俺が、などと完全に堂々巡りである。
そんな師弟の押し問答を黙って見ていた男――ヘイムダルはようやく口を開いた。
「俺は戦いに来たのではない」
その言葉に、雲雀はむっとする。
「関係ないよ、そんなの。君は僕が噛み殺す」
雲雀はディーノを脇に押して前に出る。
「……なるほど。情報通り、好戦的な性格らしい。見た目に似合わず」
ヘイムダルの言い様に、雲雀はますますむっとした。
「……見た目は関係ないだろう。とにかく君は――」
「落ち着け恭弥！」
ディーノは雲雀を止めに入った。
「ヘイムダルとか言ったな。俺達に何の用だ？」
「ボンゴレ十代目にも言ったことだ。俺達の同志にならんか？」
「同志？」

雲雀は眉をひそめた。
ディーノはそのことか、などと言っているので、何か知っているようだった。
「……よくわからないけど、君達の仲間になれってこと？」
「左様」
雲雀は鼻で笑った。
「君達と群れを成すなんて冗談じゃない。僕は強いからそんなの必要ないしね」
そう言って、雲雀はトンファーを振り上げた。
飛び退くヘイムダルに更なる攻撃。
「戦いに来たのではないと言ったはずだぞ！」
「君に戦意があろうと無かろうと僕には関係――ない！」

ガッ

雲雀の強烈な攻撃がヘイムダルの腹にヒットした。
腹を抑えるヘイムダルに容赦なく雲雀は襲いかかる。
その時だった。

「ほい、そこまで」

雲雀のトンファーに何かが絡み付いた。
これは……ワイヤーか？
顔をしかめた雲雀の前に第三者が現れた。

「坊主、お楽しみのとこ悪いがお開きだぜ、パーティーはよ」

金髪の男は不敵に笑った。

続く……

標的13　楽しみ

現れた男は、先程ビルで会った男――ロキだった。
「おまえっ……」
「おっと、動くなよ、跳ね馬」
ロキはもう一本ワイヤーを出して、雲雀の手首を拘束した。
更に、ナイフを取り出して、雲雀の首に突き付ける。
「教え子の首が飛ぶぜ？」
「くっ……」
ディーノは唇を噛んだ。
雲雀をいとも簡単に拘束したことも驚きだが、今はうかつに動けないのも確かだった。
雲雀の方はなんとか反撃しようともがいているが、ただ体力を消耗しているだけにしか見えなかった。
「ロ、ロキ！　貴様なぜ」
「ボスが退けとさ。狙いを変えるんだと。あと、こいつらに伝言。正確には沢田綱吉なんだが――て、うお！？」
突然ロキが吹っ飛んだ。
雲雀が身体をひねって回し蹴りを食らわせたからだ。

無理な体勢だったため、ナイフが首をかすめたし、ぐらっとよろめいたが、すぐに構えをとった。
「なめた真似してくれるね……まず君を噛み殺すことにするよ」
雲雀は未だうずくまっているロキにトンファーを振り下ろした。
「うお！　話聞きゃしねーなこのガキっ」
すんでのところでよけたロキは、雲雀の猛攻を紙一重でかわしていく。
「おいヘイムダル！　先帰ってくれ。俺はまだこいつらに話がある

んでな！」
「あ、あぁ……」
ヘイムダルは微妙な顔で頷き、去ってしまった。
「おい跳ね馬、悪いがこの状態で話すぜ」
雲雀に絶え間無く攻撃されてあるにも関わらず、ロキの声は割りと平然としていた。
「うちのボスからの伝言だ。一週間後、会談の席を設ける。場所はそっちが決めていーとよ」
「会談の場所を？」
ディーノは眉をひそめた。
「あぁ。だが、護衛として何人か連れていくのはいいが、会談自体は二人っきりでやりたいとさ」
ロキはさっと雲雀との間合いをあけた。
雲雀はそれを追いかける。
しかし、ロキはニヤッと笑うと、地面を蹴って近くの民家の屋根に飛び乗った。

あの時と同じように逃げる気かっ。

ディーノは走り出したが、足が絡まり、ずべっと転んでしまう。
「何やってんの……」
雲雀が呆れるぐらい見事なこけっぷりだった。
「あはは！　ドジな跳ね馬、一つだけいーこと教えてやるよ」
笑いながらロキはディーノ達に言った。
「俺達は狙いを沢田綱吉から陽明の持ってるあるものに変えた」
「あるもの？」
「そう。純度の高い死ぬ気の炎を得るためにな。匣兵器の開発もある科学者の手も借りてる」
「ま、待て！　なぜそんな重要なことを俺達に教えるっ」
「なぜ？」

ロキはニッと笑った。
邪気の無い、感じのいい笑みだ。
「楽しいからさ。革命も戦いも俺が参加するのは楽しいからだ。これ言えば、もっと楽しくなりそうでな。じゃ！」
ロキはしゅたっと手を額に指を揃えて当てると屋根を跳んで逃げた。
いや、逃げたと言うより走り去ったと言うべきか。逃げたにしてはあまりに堂々過ぎだ。
「……最悪。あいつを噛み殺せなかった」
雲雀はめちゃくちゃ悔しそうに呻いた。
「それより恭弥、首から血が出てるぜ」
ディーノの指摘通り、ナイフがかすめたところから血が流れてた。
「鼻血出してる人に言われたくない」
「げっ……」
ディーノは思わず鼻を押さえた。

「ボス！」
「委員長！」

聞き慣れた声に二人は振り返った。
ディーノの部下のロマーリオと、雲雀の部下の草壁だ。
「近く通ったら二人がロキって奴といたから驚いてよ」
「委員長！　大丈夫ですか！？」
ロマーリオ、草壁の順にそれぞれの上司に声をかける。
「委員長、首から血がっ」
「平気だよ」
雲雀は首の血を拭った。
しかし傷にそれがしみたのか、顔をしかめる。
「ったく。ロマーリオ」
「うい」

ロマーリオはバンソーコを取り出して雲雀の首の傷に貼り付けた。
「……あの男、誰なの？」
雲雀は眉を寄せて訊いてきた。
「アースファミリーの幹部らしい。……しかし、妙な奴だな」
ディーノは首を捻った。
敵意は感じないし、どうも裏社会の人間には見えない。
あの力を除けば、普通の青年に思える。
どうもやりにくい……無論、手加減はしないが。
「……とにかく、ツナに奴の話をするか」
疑問を抱えたまま、ディーノは自分のやるべきことをするため、歩き出した。

――――

イタリアのある人里離れた夜の森。そこにリボーンはいた。
「情報が確かなら、ここのはずだが……」
リボーンは辺りを見渡す。
ふと、崩れかけた廃虚が目に入った。
「あれだな」
リボーンは足音をたてずその廃虚に入った。
部屋をざっと見、床に隠し扉を見つける。
そこを開けて下に降りていくと、古びた石壁がある場所から人工的な鉄壁に変わった。
明らかに誰かが手を加えている。そして情報が正しければ、その誰かは自分のよく知る人物のはずだ。

最下層に来ると、つきあたりに鉄の扉があった。
カードが必要なタイプらしい。
「レオン」
リボーンの呼びかけにリボーンのペット、レオンはニュニューと変化した。
カードに変身したレオンを、リボーンは扉横に付いた小さな箱形機械にスライドさせた。
音もなく開く扉。
それをくぐると、幾つもの謎の機器がリボーンを出迎えた。
その中にいる小さな人影に、リボーンは呼びかけた。
「久しぶりだな……ヴェルデ」
人影――ヴェルデは振り返り、ニヤッと笑った。
「そろそろ来る頃だと思っていたよ、リボーン」
「まわりくどい言い方はせず、用件だけ言うぞ。アースファミリーの匣兵器……あれはおまえが作った物だな」
リボーンの鋭い視線にも、ヴェルデは笑みを浮かべたままだった。
「そうだ。アースファミリーのボスは私の研究に資金援助してくれてねぇ。その礼として匣兵器を渡してるわけだよ」
もっともまだ開発途中だが、などと付け加え、ヴェルデはとうとうと語った。
自分の研究成果に酔っているらしく、リボーンの僅かな表情の変化に気付かなかった。
「アースファミリーはいい試験体になってくれてるよ。おかげで死ぬ気の炎に属性があることや他にも……」

ズガァンッ

銃弾がヴェルデの頬をかすめ、後ろのパソコン画面に当たった。
「俺が訊きてぇのはそんなことじゃねぇ」
リボーンは煙が上がる銃を構え、低い声で言った。

「なぜ、ツナ達を……ボンゴレを狙う手伝いをした。アルコバレーノの掟を忘れたか」
「……アルコバレーノの掟？」
ヴェルデは頬を拭ってふんと鼻を鳴らした。
「そんなもの、私には関係ないよ。研究で使えるものは使い、いらないものは排除する。私にとってボンゴレファミリーも、ボンゴレリングが無ければただのその他大勢だよ」
「テメェ、言いやがった、な……！？」
一歩踏み出そうとしたリボーンは、身体の変化に気付いた。

身体が、動かない！？

「まさか、これは……」
ノントリニセッテか……！？

言い終わる前に、リボーンの意識は闇に沈んだ。

「……まったく、手間をかけさせる」
ガスマスクを付けたヴェルデは目の前で倒れるリボーンを見つめ、ため息をついた。
研究途中に見つけたアルコバレーノに有害な物質。
使ってみたが……上々な効果だ。
「他のアルコバレーノが邪魔したらこれを使うか……ん？」

ヴェルデはふと顔を上げた。
「また誰か来たようだな」
ヴェルデは物質の放射を止めないまま、その人物を待った。

やがて扉が開き、長い金髪の男が現れた。
男はヴェルデのガスマスクを付けた顔を見、倒れたリボーンを見、入るのを躊躇した。
「平気だよ。これはアルコバレーノにだけ有害なものでね」
「この前言っていたものか」
ふ、と息を吐き、男は部屋に入る。
「研究を早く進めてほしい、と部下達が言っていた。どうもボンゴレが我々より性能の良い匣兵器を持ってるらしくてな」
「何……！？」
ヴェルデはさっと顔色を変えた。
「どういうことだ……私以外に匣兵器を開発していた者がいたのか……いや、それ以前に私の研究成果より良いものなど！？」
「やってくれるか？」
「勿論だよ！　負けてなどいられないんでね」
ヴェルデは身体の向きを変え、パソコンに向かった。
リボーンに一つ壊されたが、まあ支障はないだろう。
「……ところで、こいつはおまえと同じ？」
男が尋ねた。
多分、同じアルコバレーノかと訊きたいんだろう。
「あぁ。黄色いおしゃぶりのアルコバレーノ、リボーンだ」
「ボンゴレX世の家庭教師か」
男は呟き、しばらくの間を置いて出ていった。
ヴェルデが振り向くと、男の姿は当然無かった。

――なぜか、リボーンの姿まで。

「『視た』通りだ」
男は呟いた。
彼の腕にはぐったりしてるリボーンが抱えられている。
「ボンゴレX世に……沢田綱吉に土産ができた」
男は森を出、外に待たせてあった車に乗り込んだ。
「……う……」
小さな呻き声を上げ、リボーンが目を覚ました。
「……！　おめぇは……」
「久しぶりだな」
男はにこりともせず、リボーンを見下ろした。
「オーディン……！」
「話がある。日本に行くまでの間、付き合ってもらうぞ」
男――オーディンはただ静かな目でリボーンを見つめた。

続く…

標的１４　雲雀、了平ｖｓ……？（前書き）

長く間を置いてしまい、すいませんでした。
楽しんでくれたら幸いです。

標的１４　雲雀、了平ｖｓ……？

ピンポーン

夕飯を食べ終わり、部屋に戻ろうとしたツナは、インターホンの音に顔を上げた。

「？　誰だろ？」

「ツー君、悪いけど出てくれない？」

「あ、うん」

ランボのおかわりをよそう母、奈々に言われ、ツナは玄関に出る。

「誰ですか……って、ディーノさん！」

扉の前に立つ兄弟子とその部下に、ツナは目を丸くした。

「どうしたんですか？」

「あぁ。実はさっき、ロキに出くわしてな。あと、アースファミリーの他の幹部にも」

「えぇ！？」

ビックリするツナに、ディーノは静かに話す。

「なんでも、奴らは狙いをおまえから、陽明に変えたらしい。彼女の持ってる、あるものが必要だからと」

「あるものって、まさか……！」

ツナはハッとした。

ツナの表情の変化にいち早く気付いたディーノは素早く尋ねる。

「何か知ってるのか？」

ツナはこくんと頷いた。

「今日、帰りに明ちゃんといて、アースファミリーの奴らに襲われたんです。奴らは、明ちゃんが持ってる虹石って言うのを狙ってました」
「虹石か……。ランファミリーのボスが代々受け継ぐ七つの石だな。ランファミリーにとってはボンゴレリングと同じぐらい重要だ」
ディーノは難しい顔で言った。
「でも、何でそれが必要なんだ？」
「多分、リングを造るためだと思います。死ぬ気の炎を出すリングを」
「……なるほどな」
ディーノは頷く。
雲雀に死ぬ気の炎のことを教えたのは、他でもないディーノだ。
死ぬ気の炎とリングの関係性は、よく知ってる。
「……あ、そうそう。もう一つ情報が」
「？」
「一週間後、アースファミリーのボスが会談の席を設けたいと言ってたらしい」
「いっ！？」
ツナは驚愕してディーノを見返した。
「場所はこっちが決めていいらしい。罠の可能性は薄いが、用心しないとな」
「ちょっ、ちょっと待ってください！」
ツナは慌ててディーノの話を遮った。
「何でそんな急に！？　いきなり、会談とか言われても……」
「ツナ」
今度はディーノがツナの言葉を遮った。
「おまえはボスなんだぜ。これくらいで慌ててどうする。ボスならどっしり構えねーと」
「で、でも、俺はボスなんて……」
「ツナ。一週間後だ。一週間のうちに会談の場所を決めろ。多分、

近いうちに使いが来るだろう。それまでに、場所を決めろよ。じゃあな」

「あ、ディ、ディーノさん！」

ツナが呼び止めるも、ディーノはさっさと帰ってしまった。

ツナは呆然と立ち尽くしていたが、後ろでバタバタと走り寄ってくる音に振り返った。

「ガハハハハ！　ツナ、ランボさんと遊べ！！」

モジャモジャ頭を振りながら飛んできたランボを、ツナは反射的に受け止める。

「ガハハハハ！　ツナ、ゲームするぞ！　ランボさんが勝ちまくるもんね！！」

相変わらずのわがままに、ツナはため息をつく。

しかし、すぐに重苦しい表情に戻った。

もし戦いになったら、ランボも参加させることになる。

守護者だから。ただ、それだけの理由で。

ツナが思わずランボを強く抱きしめてしまい、ランボが暴れだす。

「ツナ、苦しいぞ！」

「あ、ごめん」

謝り、ランボを床に降ろす。

「ツナ兄～、誰だったの？」

今度はフゥ太とイーピンが来た。

「あぁ、ディーノさんだよ」

「ディーノ兄？　この前は了平兄と恭弥兄が来てたよね」

「うん……」

そういえば来ていた。

そんなに経っていないはずなのに、何年も前の気がする。

一日が、凄く長く感じてきた。

雲雀は苛ついていた。
昨日獲物を噛み殺せなかったと言うのもあるが（草食動物達を噛み殺して発散したが）、今の苛つきは別にあった。
「何を怖い顔をしてるのだ、雲雀！」
「……誰だって嫌な奴にあったらこんな顔すると思うけど？」
雲雀は低い声で言った。
「嫌な奴だと？　それは極限俺のことか！？　極限ぷんすかだぞ！！」

極限多すぎ……

そう思ったが止めた。
よけいうるさくなるだけだ。
せっかく誰もいない公園で昼寝してたのに……

「雲雀、こんな朝早く公園でなぜ寝てる？」
「家を早く出すぎたんだよ。それでここで時間を潰してたんだ」
顔をしかめつつ、了平の質問に答える雲雀。こういうところは律義である。
「君こそ、ジャージ姿で何してるの？」
逆に質問すると、了平はなぜか胸を張った。
「俺は極限ランニングだ！！」
「……あ、そ」

別に凄いわけじゃないのに胸を張る了平に、雲雀は冷たい目を向けた。
「……ところで雲雀、アースファミリーとやらと戦ったか？」
「少しね。逃げられたけど」
昨日のことを思い出し、雲雀はむっと顔をしかめた。
「そうか……俺はまだ戦ってないのだか――む！」
了平が突然身構えた。
雲雀もトンファーを構える。
いつの間にか、何人もの男達が周りを取り囲んでいた。
「もしやこいつらがアースファミリーか！」
了平はファイティングポーズをとって叫んだ。
「……朝から僕の前で群れるなんていい度胸だね」
怒りのボルテージが上がりっぱなしの雲雀は寝転んでいたベンチから立ち上がって、ダッと走り出した。
近くにいた男を殴り倒し、返す手で後ろに回っていた男も撃破。
「極限！！」
一方了平も雲雀に続き、男達を見事なラッシュで打ち倒していく。
男達は反撃するも、ボンゴレ守護者たる二人には敵わない。
たちまち男達は一人残らず地面に伏した。
「あっけなかったな、雲雀」
「うるさいな。こんなの、僕一人で充分だったのに」
眉を寄せた雲雀に対し、了平はからっとした笑いを浮かべる。
「まぁそう言う、な……！？」
了平の言葉が途中で途切れ、顔に驚愕が広がった。
不審に思った雲雀は振り返り、目を見開く。
男達はゾンビよろしくゆらりと立ち上がっていた。
「なぜだ？　殺しはしてないがしばらく動けんはずだぞ！」
了平は狼狽の声を上げた。

不気味な動きに雲雀も思わず後ずさる。
ジリジリと包囲を狭まれ、二人は自然と背中合わせになった。
「な、何だこいつら……極限に気味が悪い」
「……確かにね」
雲雀も了平も構え直しつつ、薄気味悪げに男達を見渡した。
「……死体だったりして」
ぽつりと呟いた雲雀の後ろで了平は肩を震わせた。
「な、ななな何を言うのだ雲雀！　しししし死体がううう動くなど……」
「とりあえず黙って」
ビビりまくりの了平に、雲雀はぴしゃりと言い放つ。
男達はどんどん近寄ってくる。冗談抜きでゾンビみたいだ。
雲雀はふと、彼らの両手首に石の付いた腕輪がはまっていることに気が付いた。
「どうかしたか？」
了平が雲雀が何か見ていることに気付く。雲雀は無言でトンファーで男達の手首を指した。
それを目で追った了平は驚愕する。
「あれは死ぬ気の炎ではないか！　しかも俺と同じ晴れ属性のかっ」
了平が叫ぶと、初めて男達の一人が声を発した。
「そう。我々は両手足に晴れ属性の炎を灯すリングを付けることにより、全細胞を活性化させてるのだ。だから、貴様らの攻撃は我々には効かん」
「……草食動物の癖に、生意気だよ」
雲雀は男達を思いっきり睨んだ。
ふつふつと男達に対するある感情が沸き起こってきた。
彼にとって死ぬ気の炎を出すのに必要な感情――ムカつきが。
ボウッ！

雲雀のボンゴレリングに炎が灯り、さらにトンファーにも移る。
「君達全員、今ここで噛み殺す」
すでに戦闘態勢の雲雀に半瞬遅れて、了平もリングに炎を灯す。
「出てこい、漢我流！」
匣に炎を注入すると、ドシュッという音と共に晴れ属性の炎を纏ったカンガルーが匣から飛び出した。
その腹の袋から放出されたグローブを付け、ざっと構える。
「行くぞ、雲雀！」
「僕に命令しないでくれる？」
二人は炎をまとった武器を手に、男達に向かって行った。

その様子を遠く離れたビルから見ていたフレイは顔をしかめた。
「十代目といい、あの二人のボウヤといい、なぜあそこまで高度な匣兵器を持ってるのかしら」
部下達（フレイヤからすれば下僕）がやられるのを苦々しく思いながら呟いた。

今回のこの行動、完全なフレイヤの独断によるものだ。
なぜわざわざ陽明から虹石を奪わなくてはいけないのか、ボンゴレリングを手に入れたほうが早いのではないかと常々思っていた。
それで、行動に起こしたわけだ。

このことは兄であるフレイですら知らない。もし知っていたら止

めるはずだ。
だからこそ、部下達だけを連れて雲の守護者と晴れの守護者を襲ってるわけだ。

はたから見れば、部下達の方が苦戦してるように見えるが、晴れの炎によって全細胞が活性化した彼らは疲れ、痛みを覚えることはない。
二人の守護者が倒されるのも時間の問題だろう。
「手間かけさせるわね……ん？」
フレイヤはふと視線を滑らせた先にある人影に目を見張った。
「な、何で彼が居るの……！？」

倒しては起き上がり、起き上がっては倒す……
それの繰り返しに雲雀と了平はげんなりしてきた。
疲れてもきている。かなりマズい状況だった。
「きりが無いぞ！　どうする、雲雀！」
「僕に訊かないでよ」
焦る了平に対し、雲雀は比較的落ち着いていた。しかし、かなりイラついてはいたが。
一方、敵の方はニヤリと笑う。このまま押しきれるとふんだんだろう。
その時だ。

ズガガガァン！

突然響いた銃声に、全員が身を強張らせた。
「多勢に無勢とは感心しませんね」
よく通る声に、男達は顔を驚愕に染めた。
更に、再びの銃声。
その全ては男達の手足のリングを撃ち抜いていた。
瞬く間に男達は倒れ付した。
二人は知らないことだが、リングが壊されたため、無理矢理身体を活性化させた反動で、男達は動けなくなったのだ。
「大丈夫でしたか？　お二方」
銃弾を放った人物は、男性だった。
まだ青年と呼べる年頃で、明るい金髪に、水色の瞳をしている。
整った面差しには、優しい微笑が浮かんでいた。
「だ、誰だ、おまえは……？」
了平が尋ねると、青年は笑みを深くした。
「はじめまして。バルドルと言います」

続く…

標的１４　雲雀、了平ｖｓ……？（後書き）

ようやくランボが出てきました。ずっと出てきてないことに気付いて……ファンの方、すいません。

了平の方も、一回出しただけなのに気付いて……私の中では二人の影は薄いみたいです。

評価などいただけたら嬉しいです。

では！

標的15　バルドル

見たこと無い青年の出現に、了平と雲雀は戸惑った。
青年はただ微笑むだけ。しかしその手には硝煙を上げる大柄の銃が握られていた。
その、あまりにもアンバランスな彼に、了平はとりあえず一つ尋ねる。
「なぜ、こいつらを倒せたのだ？　俺達が極限倒しても起き上がってきたのに」
「あぁ、それは」
青年――バルドルは男達のリングを指す。
「彼らはリングの炎によって痛みを感じない身体になっていました。つまり、リングを壊せば痛みは一気にきます。そうなれば、彼らが耐えられずに倒れてしまうのは当然でしょう」
なるほどバルドルの言う通りである。
了平が感心していると、雲雀はチャキッとトンファーを構えた。
「君……僕の獲物を横取りするなんていい度胸だね」
「横取りもなにも」
バルドルは困ったように頬をかく。
「僕が助けに入らなければ、君達は今頃疲れ果てて彼らに倒されていたと思うけど」
「助けなんていらない。君……噛み殺されたいの？」
再びトンファーに雲属性の炎が灯った。
「僕は、君達と戦いたくないんですよ」
バルドルは懐に銃をしまって言った。
「できれば、見逃してくれたら嬉しいです」
「何言ってんの？　見逃すわけ無いでしょ」
「そうですか……なら、逃げます」

そう言ってバルドルは踵を返して走り出す。
いきなりのことだったので、雲雀も反応できなかった。

「……」

無言になる二人。
雲雀はイラつきからだが、了平は別の意味でだ。
しきりに首を傾げている。

「……どうしたの」

「いや……あのバルドルという男……誰かに似てるような……」
了平にしては珍しく、微妙な言い様だった。
しかし雲雀も、彼に言われて確かに……と思うところがあった。

誰かに似ている……でも誰に？

奇妙な感覚を覚える二人は、学校のことなど全く忘れているのだった。

ある程度まで走ったバルドルはぴたりと足を止めた。
「さて……次は沢田綱吉か」
ふっと息をつき、ゆったりとした足取りで歩きだした。

―――

屋上にツナ、獄寺、山本、そして明はいた。
ディーノからもたらされた情報を彼らに話すためだ。
「一週間後、スか」
第一声を発したのは獄寺だ。
「少し短すぎやしませんか？」
「うん……俺も思った。でも、ディーノさんは一週間以内に決めろって……」
「でも、どこにすんだ？」
山本が難しい顔で尋ねる。
「……わかんない。どこでするか、全然決まってないし」
「リボーンは何て？」
明が訊いてきた。
しかしツナはうつむく。
「リボーンの奴……昨日から帰ってないんだ」
「音沙汰無しッスか！？」
獄寺の質問にツナは黙って頷く。
「小僧にしちゃ、珍しいな、何も連絡無ぇって」
山本は首を傾げた。
「俺もそう思った。こっちから連絡とろうにも、あいつ、自分の携帯番号とか教えてくれないし」
ツナはハァとため息をついた。
「嫌な予感――はなぜかしないんだけど、でも心配だし」
母も、そしてリボーンの愛人であるビアンキも心配している。

それくらいリボーンはわかってるはずなのに、なぜ何も連絡が無いのか。
ただ、なぜかツナは落ち着いている自分を不審に思った。
家庭教師であり、もっとも信頼する人物が居なくなったというのに、動揺も不安も感じなかった。
「……とりあえず今は会談のことを……？」
ふとツナは空を仰いだ。
雲が点々と浮く空に、小さな黒い点が見えた。
「どうしたんスか、十代目？」
獄寺の問いにツナは「あれ……」と言って指差す。
そうしてる間にも黒点は近付き、それが鳥だということに気付いた。
しかもただの鳥じゃない。
「あれってタカか！？」
山本の言う通りだった。

それは巨大なタカだったのだ！

水色の炎をまとったタカは、一直線にツナに向かっていった。
「ひ、ヒィ！？」
驚いて尻もちをつくツナを守るように、獄寺と山本が前に立つ。
しかし心配は無用だった。
タカは羽ばたきつつ、ツナの足元に降り立った。
近くで見て気付いたが、猛禽類にしては目がクリクリしていてなんだか……

「カワイー！」

明が声を上げた。
呆れ顔の男三人をスルーし、明はしゃがんでタカに手を伸ばす。

「あ、ちょっと明ちゃん！　触っちゃ駄目だよっ」
「あら、なぜ？」
「このタカがまとってんの、死ぬ気の炎だよ！？　ヤケドじゃ済まないよ！！」
慌てて止めるツナに明は不満そうながらも手を引っ込めた。
「……！　十代目、こいつ、足に何かくくり付けてますよ」
獄寺に言われ、タカの足を見ると、確かに何かがくくり付けられていた。
「な、何だろ……紙？」
おっかなびっくりそれをはずし、広げる。
「――！」
ツナは目を見開いた。
「？　どうした、ツナ」
山本の問いに答えず、ツナは立ち上がる。
「ごめん、俺早退する。先生にはうまく言っといて」
「あ、ツナ！」
「十代目！」
ツナはダッと早足で屋上を後にした。

――

誰もいない公園。
ツナは知らないが、雲雀と了平が敵と戦った場所だった。
「ここ、だよな……」
ツナは紙を見つめた。

『沢田綱吉殿へ
並盛公園にて話したいことがあります。
どうか一人でおこしください』

どう考えても怪しい手紙。しかしツナは危険は全く感じなかった。むしろ、行くべきだと思う。
反対されるのはわかっているので、手紙に一人でと書かれてなくても自分だけで来るつもりだった。
「まだかな……」
呟き、ハッと振り返る。
「……気付きましたか」
よく通る、静かな声に、ツナは警戒心を解いた。
「あの手紙は、貴方が書いたんですね」
背後に現れた男に、ツナは静かに言った。
金髪碧眼の美男子は淡く微笑んだ。
「質問でなく断言ですか。ボンゴレの『超直感』ですかね」
青年はツナを見つめた。
「はじめまして。私はバルドルです、沢田綱吉君」
彼の言葉と共に、羽ばたきの音が聞こえた。
空を見ると、先ほどのタカがこちらにやってきていた。
「フェリス」
青年が呼ぶと、タカは彼の肩に止まった。
「貴方の匣アニマルなんですね」
「ええ」
答えつつ、タカを匣に戻す。
バルドルはふ、と息をついた。
「炎が弱いので、長時間は無理ですが。やはりあれが必要です」
「明ちゃんの、虹石ですね」
ツナは眉を寄せた。
「……アースファミリーなんですよね。俺に何か用ですか？」
「用、というか警告です」
バルドルは笑みを消した。
「父とは会わないでください」

「父？」
「……アースファミリーのボスです」
バルドルの言葉にツナは目を見開いた。
「あ、貴方がアースファミリーのボスの息子！？」
「驚かれるのも無理はありません。ですが事実です。そして父の名は……オーディン」
「！！？」
更なる衝撃が来た。
「え、あの人がアースファミリーのボス！？」
確かに彼はアースファミリーと何か関係があるようだが、ボスとは思わなかった。
しかし、表面ほど内心は驚いてなかった。
心の中でやっぱり、と思っているのだ。
未来でも、真の敵が白蘭だとわかった時、同じような感覚があった。
日に日に自分の直感力が強くなってる。そう感じられた。
ただ…

「あの人、二十代か三十代くらいに見えたけど」
目の前の男性は二十歳そこそこ、多分ディーノと変わらないだろう。
すると、バルドルは哀しそうに微笑した。
「息子と言っても血は繋がってないんです。義理の親子なんですよ」
遠くを見つめるバルドルに、ツナは何と言っていいかわからず、黙り込んでしまう。
しばらくの沈黙の後、バルドルが再び口を開いた。
「父は、君の出方によってはボンゴレを潰すつもりなんです。勿論君が我々のやり方を肯定してくれるなら、同盟ファミリーとして一緒に戦うでしょう。でも、君はきっと賛同してくれない」
バルドルは長く息をついた。

「僕にはわかる。君はは優しい、優しすぎる。マフィアとしては危ういほど。だからこそ、僕らの敵となりうる」
バルドルは薄く微笑んだ。
「今時、損得無しで正しいことをしようとする人は少ない。君は強いんですね」
「なっ。俺は強くなんかないですって！」
慌てて否定するツナに、バルドルはふるふると首を横に振った。
「強いですよ。……うらやましいな、僕にも、それだけの強さがあったらよかったのに」
バルドルは哀しげな目をこちらに向けると、踵を返した。
「あっ……」
「どうか父と会わないでください。……どちらを選んでも、君は後悔することになるから」
呆然としたツナを置いて、バルドルは静かに去っていった。
とても哀しい雰囲気を残して。

「いいのか、あんなこと言ってよ」
バルドルが顔を上げると、ロキが手近な木にもたれかかってこちらを見ていた。
「何がです？」
「ボスに会うなっての。会談はうちにとっちゃ大事なことだぜ。戦争か、同盟かのよ」
「……僕は、正直今回のことには反対なんです」
「ほー。会談は『神格』全員が賛成してると思ってたがな」
ロキは顎をさすった。
「いいのか？　息子のおまえがそんな否定的でよ」

ロキに言われ、バルドルはうつむく。
「……ま、おまえがそうしてーなら別にいいけどよ。お目付け役の俺の身にもなってくれ」
「すみません……」
バルドルは素直に謝った。
「父さんは、僕を信用してないんでしょうか？」
「逆だ、逆。おまえが心配だから俺をお目付け役にしてんだろ。……もう、大切なモンを失わないように」
飄々としたロキにしては珍しく、重々しい口調だった。
「……そうですね。あの、今日のこと、父さんには……」
おどおどするバルドルに、ロキはニッと笑った。
「言わねーよ。俺がどやされるからな」
バルドルは安心したのか、ほっと息をついた。
「先帰ります」
「おー、帰ぇれ帰ぇれ」
めんどくさそうに手を振ると、バルドルは弱々しく微笑して歩きだした。
「……やっぱ似てるな、あいつ」
「誰にです？」
背後に控えていたヘルが首を傾げた。
「別に。独り言だ、気にすんな」
返しつつ、ロキはバルドルの背中を見つめ、顔をしかめた。
沢田綱吉と同じ危うさを持つバルドルに不安を覚えて。
続く…

標的１５　バルドル（後書き）

学校がある理由で休みにもかかわらず、書くのが激遅の沙伊です。
最初の方で雲雀と了平がバルドルに対し、誰かに似ていると感じたのはツナに似てるからです。言っていいのか、これ…
次こそはちゃんと書けるよう努力します。では。

標的１６　決意（前書き）

少し間を開けてしまいました。最近書くのが遅い気が…
とにかく、楽しんでよんでくれたら幸いです。

標的16　決意

屋上から戻ってきた獄寺達の中にツナが居ないことに気付いた京子は、首を傾げつつ、三人に歩み寄った。
「獄寺君、山本君、ツナ君は？」
「あー……十代目はちょっと」
「実はさ、帰っちまってさ」
言いにくそうに話す二人を横目で見たあと、明は京子に向き直った。
「多分すぐ帰って来ると思うよ。だから心配しなくても大丈夫」
「う、ん……」
京子は頷きつつ、目をツナの机に向ける。
鞄は置きっぱなしだった。
「帰って来なかったら、ツナ君の鞄、家に持っていってあげよう」
「そうだね。……あ、悪いけど私、ちょっと保健室行ってくるね」
「な！　ま、待て陽！　あそこには――」
獄寺は青冷めて止めた。
しかし、明は笑って手を振る。
「すぐ戻ってくるから。じゃぁね」
明はそのまま教室を出ていった。

「季（リー）、居るわね」
教室を出て誰も居ないことを確認すると、明は呼びかけた。
「勿論です、主（あるじ）」
全身黒の服を着た男が、霧のように姿を現した。
「沢田綱吉を監視してほしいの。彼自身は勿論、彼のファミリーにも気付かれずにね」
「わかりました。……しかし主、なぜ沢田綱吉を監視する必要が？」
「彼の動向を探るためよ。彼の出方によっては、私も対応を変えなければ」
明は制服越しに首にかけた袋を握りしめた。
「虹石を奪われるわけにはいかない。場合によっては、ボンゴレと敵対することになるかもしれないから、布石はある程度打っておかなくちゃ。わかった？」
「……御意」
男は深々と腰を折ると、スゥッと姿を消した。
「……さて。そろそろ出てきたらどう？　トライデントシャマル！」
「……やれやれ」
廊下の角から白衣の男が姿を現した。
「そう呼ばれるのは久しぶりだな」
「あぁ、こっちではドクターシャマルと呼ばれてるんだったね」
明はニッと笑った。
しかし目は笑ってない。射抜くように鋭く、冷たかった。
「気配は消したんだがな。さすがランファミリーの明嬢、鋭いよ。それに配下に術者をお持ちとは」
シャマルはつかつかと近寄って彼女の手をとった。
そのまま唇を押しあてようとして振り払われる。
「触らないでくれる？」
「気が強いね～。オジサンの好みだよ」
「死にたいなら相手したげるけど？」

ジャキッ

いつの間にか向けられていた銃に、さしものシャマルも狼狽した。

「おいおい」

「さっきのやりとり、ボンゴレサイドに漏らしたら即刻殺す。生きたかったら口を閉じとくことね」

明は銃を下ろすと、踵を返した。

「……やれやれ、美人だが性格が難点だな」

シャマルは首を振った。

（しかし、ボンゴレボーズを監視とは……）

早い段階であらゆる可能性に対し手を打つ。噂通り、侮れない少女だ。

リボーンにツナ達の助けになってほしいと頼まれた身としては、頭の痛い相手だが。

「……ま、ダチに頼まれてる以上、俺なりに手助けするか。男の助けなんざ、したくねーが」

シャマルは頭をかいてその場を後にした。

――――

「え!?　まだ帰ってない?」

京子は目を瞬いた。

「そうなのよー。ツナったらどこ行ったのかしら」

奈々も玄関で首を傾げた。

京子はツナの鞄と自分の鞄を抱え、困惑する。

（てっきり、家に帰ってきてると思ったのに……）

少し考えたあと、京子はツナの鞄を奈々に渡した。
「あの、私ツナ君探してきます。これ、ツナ君の鞄です」
「あらそう？　ごめんなさいね、京子ちゃん」
奈々は鞄を受け取ると、申し訳なさそうに謝った。
「いえ。それじゃ……」
京子は踵を返した。

探すと言ったもののあてがあるわけでなく、どうしようかと思う。
ふと、十年後の世界でツナがマフィアのことを話してくれた川の土手を思い出した。
なぜそこを今思い出したのかわからないが、とりあえずそこに行ってみることにした。

土手には人が居る気配が無かった。
やっぱりいないか、と少し落胆しつつそこを離れようとした時だ。

「き、京子ちゃん……？」

驚いて振り返ると、ツナが身体を草むらから起こしていた。
草影のせいで気付かなかったようだ。
京子はパタパタと走り寄った。
「ツナ君、こんなところにいたんだ」
「うん……京子ちゃんは、何でここに？」
「ツナ君を探しに来たんだよ。学校にも戻ってこなかったし、家にも帰ってなかったから」
京子はツナを見下ろした。
ツナはそっか、と言って頬をかいた。
「ちょっと、あって……気付いたら、ここに来てたんだ」
ツナは川の水面を見つめた。

十年後と変わらない川の流れをひとしきり眺めたあと、ツナはため息をついた。
「……ね、隣、座っていい？」
京子が遠慮がちに尋ねると、ツナはどもりながら頷いた。
京子が座ってから、しばしの沈黙が流れる。
「……そういえば、ここだったよね」
ツナが唐突に口を開いた。
「え？」
「ボンゴレのこと、話したの」
「そう、だね」
京子はうつむいた。

あの時話してくれた真実は、あまりにも現実からかけ離れていた。
クラスメイトの一人がマフィアのボスで、彼の友達や自分の兄は同じマフィアの守護者。
そして、そのせいで巻き込まれた、多くの戦い。

あの時、思わず泣きそうになった。
彼にとって辛い現実を、安易に知りたいと思っていた自分が恥ずかしくて。
ハルもまた、京子と同じ気持ちだったのは、あの後に知った。
何で、そんなに変わらないでいられるんだろう。
普通なら、自分の運命を呪って、自暴自棄になるのに。

「……ツナ君って、やっぱり凄いね」
京子が言うと、ツナは大袈裟なほどのけ反った。
「な、なな何言ってんの京子ちゃん！！」
「だって、どんなに辛くったて変わらないでいてくれるから」

人は変わっていくものだけど、彼だけは違う。

勿論、彼は時間が経つほどどんどん成長していく。
でも根本的なものは、なに一つ変わってなかった。
それだけで、何だか心安らかでいられた。

ツナは困ったように顔を下に向けた。
心なしか、顔が赤いような気がする。
しかしやがてふっと息を吐いた。
「京子ちゃんが思うほど俺は凄くないよ」
ツナは何だか切なそうだった。
「ツナ君は気付いてないだけだよ」
京子は微笑んだ。
「いつかきっとわかるよ、ツナ君がどれだけ凄いか」
「だと、いいんだけど……」
ツナは再び頬をかいた。
「……そういえば、何か、あったの？」
京子はそっと尋ねた。
学校に戻らず、家にも帰らないのはわけがあるはずだ。
案の定、ツナは言いにくそうに「うん、まぁ……」と小さい声を出した。
「あ、言いたくなかったらいいの。話さなくったって……」
「いや、ちゃんと話すよ。十年後の時みたいに」
ツナは京子をじっと見つめた。
「京子ちゃんやハルには、ちゃんと話さなくちゃいけないと思う。二人は、大切な、その……」
ツナは口ごもる。
首を傾げる京子の前で、ツナは真っ赤になった。
「その――大切な、存在だから」
「ツナ君……」
頬が熱くなった。なぜかドキドキする。
「京子ちゃん？」

ツナの声で、京子はハッとした。
「ご、ごめんなさい！　あの、じゃあ、話して……？」
「？　うん」
ツナは今までのことを全部話してくれた。
明から聞かされた新興ファミリーのこと、ロキという男の出現、彼らの狙い、そしてバルドルからの助言――
「どっちを選んでも後悔することになるって、どういうことだろう？」
「俺もわからない。何であの人が、あんなこと言ったのか……」
ツナは顔を自分の腕にうずめた。
「こんな時、リボーン君、居ないの？」
「え？　リボーン君が居てくれたらなー」
「うん、どっかいっちゃってて。アイツにばっか頼るわけにはいかないけどさ……」
ため息をつくツナに、京子はそっと尋ねる。
「ツナ君は、どうしたいの？」
ツナは顔を上げ、川に目を向けた。
「オーディンには、会うつもりだよ。何でこんなことするのか、訊きたいから。革命ってロキは言ってたけど、ワケわかんないし」
川面から目を逸らさず、ツナは続ける。
「俺がどう思ってるかちゃんと話さなくちゃならない。でも……」
ツナは言葉を切った。
しばらく沈黙した後、またため息。
「肝心の場所なんだよな。俺ん家とかは無理だし、並中だと雲雀さんに噛み殺されるだろうし……」
「確かにできるところ無いね」
京子は頷きを返した。
「どこがいいんだろう？」
「あ、京子ちゃんはそんなに悩まなくてもいいよ。俺が決めなきゃ

だし」
「でも、一緒に考えるぐらいできるよ。私も、それにハルちゃんも力になりたいから」
そう言うと、ツナはなぜか哀しそうな顔をした。
そして唐突に立ち上がる。
「もう遅いし、送るよ」
「え、でも……」
「お兄さん心配するだろうし、暗くなってきたから、ね！」
ツナは二、三歩進んで振り返った。
京子は少し驚きながらも頷き、立ち上がった。

巻き込みたくない、とツナは思った。
話したのは、隠し事をしたくないから。隠されるのは、とても辛いことだと、未来の世界で悟った。
だからこそ、十年後のように怖い思いをさせたくなかった。

（守ってみせる、絶対に）

ツナは心の中で決意の言葉を呟いた。

続く……

標的１６　決意（後書き）

明ちゃんのキャラがわからない沙伊です。
冷たいのかなんなのか。すみません、ダメ人間で。あとシャマル、出す気無かったのに出てきた（汗）

ツナと京子は好きです。ほのぼのとしてて。皆さんはどうですか？

では、次の話で会いましょう！

標的17　予感

冷や汗をかいたフレイヤを前に、兄であるフレイは硬い表情で机についた。
アースファミリーの最高幹部である『神格』が日本に居る間、滞在しているアジトの広間にフレイヤは呼び出されたのである。

「なぜ、呼ばれたかわかるな」
この場にはロキもバルドルもおり、傍観者に徹していた。
「ボンゴレ雲の守護者と晴れの守護者を襲ったのは、完全な命令違反だぞ」
「……」
いつもは高圧的なフレイヤも、兄には頭が上がらないようだ。
普段甘い分、怒った時は誰よりフレイヤに厳しいのだ、フレイは。
「ボスは狙いをランファミリーの陽明が持つ虹石にすると言っていた。ボンゴレに関しては会談が終わるまで待てと言っているんだぞ」
「いーじゃない、別に！だいたい虹石奪うよりボンゴレリングを奪うほうがよっぽど早いわよっ」
喚くフレイヤ。ロキからすれば、開き直ったようにしか見えない。
「ボスは何を考えてるわけ！？　ボンゴレは私達と手は組まないと思うわよ。X世の態度でわかることじゃない！！」
「それに関しちゃ俺も同感だな」
ロキはニヤッと笑った。
「でもよフレイヤ、アイツはアイツなりに考えてやってるんだ。あんま騒がんでくれや」
「アンタはあの方に近いからいいけどね、私やお兄様は何を考えて行動してるのかわかんないのよ？」
フレイヤは苦々しげに吐き捨てた。

まぁ、気持ちはわからなくもない。
ロキもついこの間までボスであるオーディンの意図を読めずにいた。

（だが……あのことを聞いたら誰だって納得できる）

オーディンの『視た』ものの話はバルドルから聞いている。
あんなことが未来で起こるなら、ボンゴレと手を組む方が得策だろう。
（知らない奴らからすりゃヤキモキするだろうが）
目を三角にして喚き散らすフレイヤを横目に見、ロキは頭をかいた。
とりあえず話を変えるべく口を開く。
「そういやヘイムダルの奴がどこ行ったか知らねぇか？」
「ヘイムダルさんなら、霧の守護者に会いに行きましたよ」
隣のバルドルが答えた。
「自分と同じ術士だから見ておきたいって」
「ふぅん？　……無事に帰ってくるといいんだがな」
妙な不安に、ロキは顔をしかめた。

最近クロームは、並盛に散歩しに行くことが多い。
そしてたいがい、顔見知りに出会うのだ。
今もそうだった。

「クロームちゃん、アイス何味にします？」
並盛商店街のあるアイス店でハルが尋ねた。
「私……チョコレート」
「じゃあハルもチョコにします！」
ハルは二人分のアイス代を払うと受け取ったコーンに乗った二個のアイスのうち一つをクロームに渡した。

商店街を散歩中だったクロームは、下校途中のハルに出会い、なぜかアイスをおごってもらうことになったのである。

「ここのアイス、とってもおいしいんですよ！」
「ほんとだ……おいしい……」
クロームは微かに頬を綻ばせた。
「なんだか最近、クロームちゃんに会うことが多くなりましたね」
「そう、だね」
「そうだ！　今度、京子ちゃんやイーピンちゃんと一緒にケーキ食べに行きません？　すっごくおいしいところがあるんです！」
「ぇ……」
いきなりの提案に、クロームは目を瞬く。
「あ、もしかしてケーキ嫌いですか？」
「う、うぅん。ちょっと、びっくりしただけ」
「じゃあ行きます？」
「……うん」
はしゃぐハルを見て、クロームは少し笑った。
昔は他人と居ることが苦しかったのに、今は全然そんなことはない。
むしろ、楽しいと思う。
（あの子の、おかげかな）
クロームの脳裏に、弁髪の女の子が浮かび上がる。

こうやってハルと話したりできるのは彼女のおかげ。
そして彼女と出会えたのは、自分の命を救ってくれた骸と、敵の一味なのに受け入れてくれたツナのおかげだった。
ぼんやりそのことを考えていると、隣から慌てたハルの声。
「ク、クロームちゃんアイス溶けてます！」
「え……あっ」
いつの間にか手に垂れていたアイスに、クロームとハルは慌てた。
「えーっと、ティッシュ、ティッシュはー……」
「はい」
がさごそ鞄をまさぐるハルとは逆方向から、ハンカチが差し出された。
そちらを見ると、亜麻色髪の見覚えのある少女の姿があった。
「あー！！　あ、貴女確か、前にツナさんと一緒にいたビューティフルガール！」
「陽明よ。名乗ったはずだけど」
明はふふっと笑った。
「これ使って。どうせ近々捨てるつもりだったから」
「あ、ありがとう」
クロームはハンカチを受け取ると、アイスを拭った。
「あの、陽さん」
「明でいいよ」
「じゃあ明ちゃん。どうしてここに居るんですか？」
ハルの質問に、明はニコッと微笑んで、
「近くに用があったの。二人は寄り道？」
「はい！　たまたまクロームちゃんと会って。あ、クロームちゃんとは初対面――」
「じゃないよ。前に会ったことある」
クロームが口を挟んだ。
「うん、そうね。少し前に会ったよ」
「そうだったんですか！！　知りませんでしたっ」

ハルは意外そうな顔をした。
「それよりアイス、また垂れちゃうよ？」
明の指摘に二人はハッとした。
「はひっ！　どうしましょう」
「どこかに座ったら？」
明はクスクス笑いながら提案した。
「そ、そうします。あ、明ちゃんも一緒にアイス食べません？」
ハルに尋ねられ、明は一瞬キョトンとした。
しかしすぐに笑みを浮かべる。
「じゃあそうしよっかな」
明もアイスを買いに店に寄ることになった。

近くの公園のベンチに並んで座った三人は、他愛ない話をした。
もっとも、話すのはハルと明だけで、クロームは聞き手になるのだが。
「へぇ、ハルちゃんって沢田君が好きなんだ」
「はい！　ツナさんには前に川で溺れていたところを助けてもらって……それ以来、ハルはツナさんラブなんです！」
「はは、一途ねぇ」
明は笑って足を組んだ。
「沢田君って、どんな子なの？　私、未だにわかんなくて」
「ツナさんですか？　強くて優しくて……とーってもハイパーな人

です！」
「ハイパー、ねぇ。クロームちゃんから見てどうなの？」
「え……」
いきなり話を振られ、クロームは目を瞬いた。
「ボスは……私にとって、大切な人との繋がりの一つ。そして……優しい人」
「優しい、か。確かにそんな感じよね。今時珍しいよ、あんな子。ハルちゃん、捕まえとかないと誰かに取られちゃうよ～」
「はひっ。こ、困ります！！」
慌てるハル。それを見て明はアハハと笑った。
クロームも笑いかけて――ハッと身を強張らせた。
「……！」
「？　クロームちゃん、どうしたんですか？」
ハルがキョトンとして首を傾げた。
明の方は立ち上がって、ハルを守るように立ちはだかる。
「ハルちゃん……私達から離れないでね」
「はひ？」
目を丸くするハルをちらっと見、クロームも立ち上がった。
鞄から三叉槍を取り出し、構える。
明はというと、スカートの下からから銃を引き抜き、鋭い声を発した。「隠れてるのはわかってるわ、出てきなさい！」
思わず背筋が伸びるような、鋭い叱責だ。クロームはちょっとびっくりする。
「霧の守護者を見に来たら、まさか目的の物が現れるとは」
何も無かった空間から、一人の黒衣の男が出現する。
（術士……！）

槍を握りしめた。

「虹石、悪いが奪わせてもらう」

黒衣の男は感情の読めない目でこちらを睨んだ。

続く…

標的１８　ＶＳヘイムダル

クロームには見覚えの無い男だった。
それは明も同じらしく「誰よ、貴方」といぶかしげに言っていた。
「アースファミリーみたいだけと？」
「申し遅れた。俺はアースファミリー『神格』が一人、ヘイムダル」
「ヘイムダル……？」
一瞬顔をしかめた後、明はあぁ、と声を上げる。
「跳ね馬と雲の守護者が会ったっていう男か」
「さすがランファミリー次期ボス。情報が早い」
男――ヘイムダルは淡々とした口調で言った。正直、何を考えてるかわからない。
「あの人、敵なのね……」
クロームは槍を持ち上げた。
「クロームちゃん、気を付けて。彼、貴女と同じ術士みたいだから」
警告の言葉を口にしつつ、明も銃口をヘイムダルに向けた。
「ここは共同戦線といきましょ」
「……わかった」
クロームは頷くと、槍の石突きを地面に突き立てた。

ドドドドドッ

「は、はひーーー！！」
後ろでハルが叫んだ。
いきなり火柱が地面から噴出したら、誰だって驚くだろうが。
「へぇ、やるじゃん。私も負けらんないな！」
火柱をよけてるヘイムダルに、明は銃弾を連射した。
火柱によって誘導されたヘイムダルの動きを、明はいとも簡単に捉えた。

足に銃弾を受け、ヘイムダルはその場にうずくまる。
「やった！　……て、え！？」
歓喜の声を上げかけた二人の前で、ヘイムダルの姿が消え、変わりに霧が出始めた。
「しまった、幻覚か！！」
身を強張らせる二人の耳に、何かの音が聴こえてきた。
「な、何の音……？」
「……ホラ貝……」
「え！？」
「昔、戦国時代で使ってたっていう、貝の笛の音に似てる」
クロームは一生懸命説明するが、中国人の明にはぴんとこなかったらしい。
「ええッと、とにかく、その音に似てるのね」
「うん」
「多分、この音が私達に幻覚を見せてる原因なんだわ」

『その通り』

どこからともなく、ヘイムダルの声が聞こえてきた。

『この音は脳に直接響き、より高度な幻覚を見せる。更に、こんなことも可能だ』

ヒュンッ

「！！　二人共伏せてっ」
風切り音にいち早く反応した明が叫んだ。
慌ててうずくまるクロームとハルの頭上で、何かが通り過ぎた。
「そこか！」
明が何かが飛んできた方向に銃弾をぶっ放った。

しかし、苦悶の声は聞こえない。
『無駄だ。今のは霧属性の炎により実体を持った俺の幻覚だ』
「そんな……」
明が絶望的な声を上げた。
「場所さえわかれば反撃できるのに……」
「……私、わかるかもしれない」
クロームはボソッと呟くように言った。
「え？」
「私の匣なら……！　後ろっ」
ハッとしたクロームの声に、明は背後に回し蹴りを放った。

ドガッ

割れる音と共に小さな黒い玉が落ちた。
しかしさらさらと溶けて消えてしまう。
「実体のある幻覚ってのは本当みたいね。足が痛い」
相当の威力だったらしく、明は足をさすった。
「それでクロームちゃん、奴の場所がわかるって？」
「うん……これで」
クロームは藍色の匣を取り出した。
十年後の世界で手にいれたボンゴレ匣だ。
「匣兵器、だったわね。何か打開できるのが入ってるの？」
明に尋ねられ、クロームは顎を引いた。
「……わかった。頼むわよ」
明に言われ、クロームはもう一度頷くと、匣にリングの炎を注入した。

ドシュッ

霧フクロウが炎をまとって匣から飛び出した。

「……形態変化（カンピオ・フォルマ）」
クロームが呟くように言うと、霧フクロウは片眼鏡に姿を変えた。
三重の眼鏡は羽が生え、そのうちの一つに『？』の刻印が刻まれている。
「……ランファミリーの人、右！」
レンズを除き込んだクロームの言葉に、明は半信半疑ながらも引き金を引いた。
『！？』
何かに銃弾が当たる音と共に、幻覚の霧が揺らいだ。
「斜め左！」
「オッケー！」
クロームの指示通りに銃を連射すると、霧がゆらゆらと揺れだした。

『な、なぜ俺の位置がわかる！？』
ヘイムダルの狼狽した声が響く。
「私の匣は、真実を映すの。幻覚は、もう効かない」
クロームはレンズの奥に居るヘイムダルを見つめた。
『……幻覚を見抜いた程度で』
風景が一瞬グニャリと歪んだ。

『図に乗るな！』

「！！？」
四方八方、それに上空にまで先程の黒い玉が現れ、迫ってきた。
「マズい！！」
明が叫んだ。
「っ！」
クロームは慌てながらも自身の幻覚を発動させた。

ドドドドドッ

前後左右に迫っていた玉は火柱で防ぎ、上の玉は有幻覚の盾で受け止めた。

「あ、危なかった……」

反射的にハルをかばおうとした明はかすれた声を上げた。

「二人とも、大丈夫？」

「ハルは大丈夫です～」

「私も大丈夫よ」

二人の無事を確認し、クロームはほっと息を吐く。

「幻覚がここまですごいとは思わなかったな。私の配下にも術士が居るけど――」

明は言葉を切った。

「！　霧が晴れてく……」

クロームは驚いて辺りを見渡した。

「やぁっと姿を隠すの止めたわけ？」

「らちがあかんのでな。幻覚を作り出す間は、俺は大した動きはできん」

こちらから数メートルも離れてない場所に、ヘイムダルは立っていた。

頬や服が裂けてるのを見るに、明の銃弾はかすっただけのようだ。

さらにその手には、鎖付きのどでかい鉄球があった。

「な、何よあれ……あれも幻覚？」

「……違う」

クロームはこくん、と唾を飲み込んだ。

「あんなの、人の筋力じゃ扱えないよ」

「普通人ならな」

ヘイムダルは言下と共に鉄球を投げ付けてきた。

バキバキバキッ

慌ててよけた三人の後ろで、何本もの木が折れた。
「はひーーー！　デンジャラスです、デストロイです！！」
ハルの叫びにクロームは思わず頷く。
こんな力、ありえない。
「『神格』は、我らがボスに力を与えられた者達。常人を超えた存在だ」
鉄球を手元に引き寄せ、ヘイムダルは冷たく言った。
「理由も無しに、神を冠すると思うな」
クロームは再び唾を飲み込んだ。

彼の動きを止められないだろうか。
不可能ではないだろうが、相手もそれは予測してるはず。へたをすれば、ハルや明に大怪我をさせかねない。
どうしよう、と槍を強く握りしめた時だ。

『大丈夫ですよ、僕の可愛いクローム』

クロームはハッと顔を上げた。

『彼の相手は僕がしましょう。物質的な攻撃は、おまえより僕の方が上だ』

その声に、言葉に、クロームはひどく安心した。
（はい、骸様……）
クロームは全身の力を抜き、意識を手放した。

明はぞくりとした。
前にも感じたことのある、冷たい雰囲気。
まさか……

「クフフ……」

笑い声に振り返ると、クロームの身体が霧に包まれていた。
「な、何ですか！？」
ハルが狼狽の声を上げた。
「この声は……」
聞き覚えのある笑い方に、明は顔をしかめる。
「何だ……？」
目の端でヘイムダルが鉄球を持ち上げるのが見えた。
しかし攻撃してこないところを見るに、警戒してるらしい。
そうこうしてるうちに、霧が晴れてきた。

「ヘイムダルとやら、クロームの代わりに僕が相手をしましょう」

『彼』は立ち上がり、唇に薄い笑みを浮かべた。

「この、六道骸がね」

続く…

標的１９　騙し合い（前書き）

骸さん大活躍です。そしていつもより短い……

それでも楽しんでくれたら幸いです。

標的19　騙し合い

クロームがいきなり男になってしまったことに一番驚いたのはハルだった。

「はひ!?　ク、クロームちゃんが男の人になっちゃいました!!」

ハルの方を振り向き、男――六道骸は唇の端を持ち上げる。

「そういえば君とは初対面でしたねぇ。いつもクロームがお世話になってます」

「えっあ、こちらこそクロームちゃんには色々助けられて……」

「のんきに話てる場合!?　来るよっ」

明の言葉通り、鉄球が音をたてて突っ込んできた。

骸は槍を持ったまま器用にハルと明を脇に抱え、それをよける。

「貴様が六道骸……真の霧の守護者か」

ヘイムダルがじろりと骸を睨んだ。

「半分当たりです。リングは持っていますが、沢田綱吉の部下になった覚えは無いので」

骸はにこやかに答えた。

「……まぁいい。できれば霧の守護者だけは無傷ですませたかったが、貴様の言い様だとそれは無理なようだ」

ヘイムダルは鉄球を振り回し始めた。

「何であんな軽々と振り回せるの……」

驚愕を通り越してげんなりする明に対し、骸はあくまで涼しい顔だ。

「武器の扱いを得意とする術士とは珍しいですね」

「……貴様もだろう?」

「さぁ……」

つい、と肩をすくめる骸の右目の文字が変わった。

『六』から、『四』へと――

「どうでしょう？」

骸はダッと地面を蹴った。

ヘイムダルは骸を鉄球でむかえる。それをあっさりよけ、骸は槍を振り下ろした。

「ぐっ」

ヘイムダルは紙一重でよけ、匣を取り出した。

ガチィッ　ドシュッ

匣から何かが飛び出したと思ったら、いきなり無数の矢が正面から襲ってきた。

骸は槍を回転させてそれを防ぐ。

「後ろががら空きだ」

後ろを振り向くと、二つの鉄球を両手に持ったヘイムダルが居た。

「終わりだ」

二つの鉄球が骸に激突した。

骨がひしゃげる嫌な音がしたと同時に、骸の姿が消えた。

「！？」

「忘れてませんか？　僕は君と同じ術士ですよ」

ヘイムダルの背後に移動した骸は冷たく微笑んだ。

目にも止まらぬスピードで繰り出された三叉槍は、ヘイムダルを容赦無く貫いた。

「忘れてないさ」

黒衣が揺れ、そして消える。

「俺も術士なのだからな。それに」

骸から少し離れた場所に出現したヘイムダルは、鉄球を持ち上げた。

「最初から、俺は貴様を狙っていない」

「？　……っ、マズい！」

珍しく焦りを見せた骸の目はハルと明に向けられた。

先程の無数の矢は、今度は二人に向けられていた。

「！」

明は一瞬目を見張ったが、次いで不敵な笑みを浮かべる。

「なめないでよね」

ガギギィン！！

矢は全部叩き落とされた。

「死ぬ気の炎の研究をしてるのは、あんた達だけじゃないよ」

明が持つ、死ぬ気の炎を灯した赤い棒によって。

「な、にっ……」

予測してない結果に、ヘイムダルは目を剥いた。

「大空属性の炎、だと！」

「ランファミリーはボンゴレ以上の歴史を持つマフィア。しかも起源は義賊よ。リングの一つや二つ、持ってるに決まってるじゃない」

炎を放つリングを掲げてみせ、明はニッと笑う。

「匣はまだ研究途中だけど、死ぬ気の炎の扱い方は調べずみよ。というわけだから、貴方の力は借りないわ、六道骸」

「クフフ……まぁいいでしょう。クロームの頼みとはいえ、マフィアを助けるのは僕も嫌ですしね」
薄く笑い、骸は槍を構え直した。
「これで戦いに集中できますし、僕も文句はありません」
骸はいきなりダッシュした。
ヘイムダルに鉄球を投げる隙は与えない。

「む！」
しかしヘイムダルは幻覚で何本も太いツルを出し、骸に絡み付かせる。
あまりに強く締め付けるため、骨がミシリと音を立てた。
「っ！？」
「もはや手加減はせん」
ヘイムダルは鉄球ごと突っ込んできた。
「幻覚でごまかせんよう、直接潰す」
ツタはもがいても離れようとしない。
鉄球は骸の眼前まで迫っている。
もはや逃げられなかった。――普通なら。

「かかりましたね」
さっきまで苦痛に顔を歪めていた骸が、不敵な笑みを浮かべた。

バキィィ！！！！

「！？」
後ろからの衝撃に、ヘイムダルは目を剥いた。
「な、にっ……」
後ろを振り向くと、薄い笑みを浮かべたオッドアイが目に入った。
「げ、幻覚か……！　こいつは」

ツタに自由を奪われた骸を見、ヘイムダルはうめく。
しかし、彼を背中から襲った骸は首を横に振った。
「いいえ。僕は――」
「幻覚ですよ」
捕らわれている方の骸が後を引き継いだ。
「僕が本物です。貴方を攻撃した方が偽物ですよ」
「なん、だと……」
ツタがシュルシュルと退いていく。ヘイムダルが幻覚に集中できてない証拠だ。
「術士なら覚えておくべきですよ」
うずくまるヘイムダル。その後ろで、幻覚の骸がさらさらと消えていった。
「同じ術士を相手にする時は、裏の裏、さらに裏をかくべきだと」
骸は槍をヘイムダルの首筋に突き付けた。
「さて、貴方には少々話してもらわなければなりませんね」
骸の目が刃のように細められた。
「オーディンはどこに居るんですか？」
「……」
「だんまりを決め込んでも無駄ですよ。もう逃げられない――！」
言いかけた骸の目の前で、ヘイムダルは何かをあおった。
あ、と思う間もなく、ヘイムダルは地面に倒れ込む。
「あ、あの方を裏切るぐらいなら、死をえら……」
言葉は途中で途切れた。
骸は顔をしかめ、振り返る。なぜか明がぐったりしたハルを抱え込んでいた。
「あんな場面、普通の女の子に見せらんないわよ」
口から血が流れているヘイムダルの屍を顎で指し、明はため息をついた。
どうも、いち早くヘイムダルのやることに気付いた彼女は、ハルを気絶させたらしかった。

「やれやれ、オッデロの……いえ、オーディンの居場所は掴めずじまいですか」
後味の悪い結果に、さしもの骸もため息をつくしかなかった。

瞑目していたオーディンは目を開いた。
「ん？　どうした、オーディン？」
イタリアの某ホテル、ＶＩＰ専用の宿泊室の赤いソファーにオーディンと向かい合うように座ったリボーンは、顔を上げた。
一応捕まっているのだが、優雅にエスップレッソを飲む姿は完全にリラックスモードだった。
「ヘイムダルが、死んだ」
「ヘイムダル？　……おまえの部下か」
「あぁ」
手短に答えるオーディンの目が、微かに揺らいだ。
それを見て、リボーンはニッと笑う。
「やっぱりおめー、ツナに似てるな」
「……どこがだ？」
「ツナもオメーも、仲間が傷付くのを嫌う。オーディン、今おまえは、仲間が死んで『泣いて』いるんだろ？」
オーディンの秀麗な顔に、淡く驚きが広がった。
「なぜわかる？」
「俺は読心術を会得している」

随分前に、ツナに言った言葉を口にすると、オーディンはゆるゆると首を振った。
「さすがアルコバレーノ。最強というのも頷ける」
腕っぷしだけが彼を今まで生かしてきたわけじゃないと悟り、オーディンはふっと息をついた。
「オメーこそ、遠くに居る仲間の死がわかるなんてスゲーな」
「同志のみだがな。……ヘイムダルには、霧の守護者に近付かないよう、忠告していたんだがな」
眉間を押さえ、オーディンは呟く。リボーンの存在を忘れてるのではと思わされた。

ドドドドドッドガァァ！！！！

静寂を破るように入口のドアがぶっ飛んだ。

「ボス！！　日本から連絡がっ！」

騒音のような声がドンッと入ってきた。
「……トール、少し静かにしろ」
オーディンはこめかみを押さえた。
黒いボサ髪にゴツい身体。小さい黒目は意外に綺麗な男だった。
「ヘイムダルの訃報だろう？　知っている」
「へ？」
「私の『力』のことを忘れたな……」
本格的に頭痛がしてきた。
「自殺、なんだろう？」
「う、お、おう」
バツの悪い顔で大男は頭をかく。
「明日イタリアを発つ。護衛のおまえがしっかりしないでどうする」
オーディンはため息をついた。

「リボーン、おまえにはもうしばらく私と行動を共にしてもらうぞ」
「あぁ。構わねーぞ」
リボーンはニッと笑った。

しかしオーディン、おまえはわかってるんだろう。

リボーンは内心でオーディンに囁きかける。

ツナはオメーと手を組まねぇ。話し合っても、無駄だぞ。

自分の思いを表に出さず、リボーンはエスプレッソを飲み干した。

続く…

標的１９　騙し合い（後書き）

沙伊です。
いきなりですがうちの学校臨時休校になりました。大雨警報で…。だから朝から小説を投稿できました（勉強しろ）
骸さん大活躍の話でした。出すつもりなかったのになぜ……

で、読者の方々にお願いなのですが、登場してほしいキャラがいたらコメントにて書いてほしいです。
特別な意味は無く、単にネタが無いだけです。ともあれ、お願いします。それでわ！

標的２０　訪問

獄寺は顔をしかめた。
一人商店街に買い物に出かけたところ、嫌な連中に捕まったからである。

「てめえぶつかったのに詫びも無しか、あ゛ぁ？」
目の前の、不良を絵に描いたような男達に、獄寺は内心でため息をつく。
それを表に出さないのは、めんどくさいことになりそうだからだ。

ぶつかってきたのはそっちだろうがよ……

少し眠い獄寺はあくびをもらした。
「てめえなめてんのか！？」
不細工な顔をこれでもか、ぐらいに近付ける男達のリーダー格に、獄寺は蹴りをいれてやろうとした時だ。

バキッ
「ぐへっ！」

後ろの方で男の一人がぶっ飛んだ。
唖然とする獄寺と男達の視線の先に、トンファーを構えた青年が居た。
「げっ、雲雀……」
「獄寺隼人……何だい、この群れは」
顔をひきつらせた獄寺に対し、雲雀は全くの無表情だった。
しかし目が鋭い。視線で人を殺しそうだった。
とりあえず怒りが男達に向いてるようなので少しほっとしつつ、

経緯を簡単に話す。
その間、男達は無言で後ずさっていた。
「……ふぅん、つまり君達は並盛の風紀を汚してたわけ？」
雲雀に睨まれ、男達は首をブンブン横に振った。それこそ、取れるんじゃないかと言うくらいに。
「その罰として」
しかし雲雀は全く聞いてないようだった。獄寺は哀れな獲物に同情する。
「君達を……噛み殺す」
男達の悲鳴が、商店街に響き渡った。

「それで……こうなってるの？」
クロームは足元に転がる死体モドキを見下ろした。
買い忘れた物があったので来てみれば、男達が倒れているのでびっくりしたのだ。
明とはさっき死体の処理をするからと別れたし、ハルは明の部下という人に家まで送り届けられたため、クロームは一人だった。
「あぁ。……ったく、雲雀のヤロー派手にやりやがって」
連帯責任だよ、と言われて腹に一発食らった獄寺は顔を歪めた。
「あの、嵐の人……」
「何だ？」

「ボスの家、どこ？」
買い物ついでにさっきのことも話そうと思ったクロームが尋ねると、獄寺は顔をしかめる。
「十代目の家？　……まさかてめえ骸に言われて十代目を狙ってんじゃないだろうな！？」
「違う……」
見当外れな問いをクロームは否定し、ヘイムダルとの戦いのことを話す。
もっとも、後半は明から聞いたことなのだが。なにしろ、途中で骸と入れ換わっていたので、後の方はよく知らない。
「なるほど……それを十代目に……。……よし、俺も行く」
「え……」
「十代目の右腕である俺も一緒に聞くつってんだ！　行くぞっ」
「きゃっ……」
獄寺はもう聞かなくてもいいんじゃないだろうかとクロームは思ったが、無理矢理腕を引っ張られ、何も言えなくなる。
半ば強引に、獄寺と並んで歩くことになったクロームだった。

あとに残ったのは、むさい男達の死体モドキと、恐怖で固まった人々だった。

クロームと獄寺がツナの家まで来ると、ツナはちょうど京子と一緒に居た。
「あれ、獄寺君にクローム？」
ツナはちょっと首を傾げた。京子もちょっと目を丸くする。

意外な組み合わせに驚いているのかもしれない。
「十代目、笹川と一緒に居たんスか？」
「うん、ちょっと話を……獄寺君は何でクロームと？」
「クロームが十代目に話があると言うんで俺が連れてきました」
無理矢理だということは獄寺の頭からすっぽ抜けてた。
「そうなんだ……」
「あの、ツナ君、私帰るね」
京子が遠慮がちに言った。
「あ、うん。バイバイ京子ちゃん！」
ツナが手を振ると、京子も振り返した。
「バイバイ、獄寺君、クロームちゃん」
「おう」
「バイバイ……」
獄寺とクロームにも手を振り、京子は帰っていった。
「ええッと、話だっけ？　ここじゃなんだし、家入ろっか」
ツナはそう言って自宅の扉を開いたのだが……

「ツナ！　あんた今までどこ行ってたの！！」

三人を迎えたのは、玄関で腕を組んで怒りモードの奈々だった。

「か、母さん……」
「まったく。何で家に帰って来なかったの！？」
奈々の言葉に、獄寺は驚く。
「十代目、家に帰られてなかったんですか？」
てっきり、あのまま帰ったと思ったのだ。
「母さんに心配かけて！　京子ちゃんも探しに行ってくれたのよ！」
「うん……さっき会った」
「中三だからってあんまり夕方に出歩くもんじゃないわよ」

「そうよ、ツナ」
居間の入口からビアンキがひょいっと顔を出した。
「ぐはぁ！！　あ、アネキ……」
ビアンキの顔を見たとたん、獄寺は腹を押さえてうずくまった。
「ご、獄寺君！！」
ツナは慌てて獄寺の隣に膝を着いた。
「ツナ、ママンは貴方のこと心配してたのよ。あまり軽率な行動はしないでよね」
「うん……ごめん……」
ツナはうつむいた。
「ところで隼人は何でうずくまってるのかしら？　まったく病弱になっちゃって」

（まだ気付いてないのー！？）

ショックを受けるツナだが、奈々の顔を見て表情を改めた。
「ごめん、母さん。心配かけて」
「今度でかける時は一言言ってから行きなさいよ」
「うん……」
ツナは少しだけ笑った。
「まったく。何も言わずにふらっと居なくなっちゃうのはお父さんに似たのかしら」
ツナはぐっとなった。
あまりあのダメ親父に似たくない。
改めて気を付けようと誓ったツナだった。

「……そんなことがあったんだ」　　ツナはクロームの話を聞き終え、彼女の方を見た。
「やっぱり奴らの狙いは明ちゃんの持ってるあの石なんだ」
「らしいッスね」
復活した獄寺も同意するように頷いた。
「あの人が持ってた匣……多分、そんなに性能はよくないと思う」
「そうだね」
三人はそれぞれの自分のボンゴレ匣を見つめた。
「十代目、ヘイムダルって奴が死んだ以上、奴ら話し合いなんてせず、攻撃してくるんじゃないでしょうか」
「……それは、無いと思うけど。でも……」
獄寺の言葉に、ツナは言葉につまった。
ツナが答えかねていると、ドアがいきなり開いた。

「ガハハハハ！　ランボさん登場！！」
一気に獄寺の顔が険しくなった。
「アホ牛……真剣に話してる時に！」
「ご、獄寺君、抑えて！！」
ツナは獄寺に落ち着くよう言い、ランボの方に向く。
「ランボ、俺達大切な話の最中なんだ。向こう行っててくれる？」
「ヤダもんね！　ツナ、オレっちと遊べ！！」
一年たって少しはおとなしくなるかと思えばこれである。

（あーもー！　いつになったら大人ランボみたく落ち着いてられるんだ！？）
ツナは内心で呻く。
本当に十年という月日は人を変える。

中には、まったく変わらない人も居るが（了平とか雲雀とか）。
なんとかしてランボを部屋から出そうと四苦八苦していると、ランボの後ろからイーピンが顔を出した。
「あ……」
クロームが小さく声を発した。
イーピンの方も気付いたようで、ニコッと笑って頭を下げた。
クロームも慌てて頭を下げる。微笑ましい場面だが、ランボによってぶち壊された。
「おいイーピン！　オレっちを無視するな！！」
ランボはぐい、とイーピンの弁髪を引っ張った。
「あ、こらランボ！！」
ツナがいさめ、イーピンは中国語で何かを叫ぶと、ランボを正拳突きでぶっ飛ばした。
ランボは壁に叩きつけられた。
「……が、ま、ん」
お馴染みのフレーズを呟き、なんとか耐えるランボ。目には大粒の涙がたまっていた。
「あ～あ、もう。イーピン駄目だろ、殴ったりしちゃ」
「ごめん、なさ、い……」
イーピンは最近覚え始めた日本語で謝った。
「十代目、さっきの話なんスけど」
獄寺はツナにそっと話しかけた。
「奴らのボスと会うの、止めませんか」
「え！？」
「アイツら何するかわかったもんじゃないっスよ。ヘイムダルって奴といい、あのフレイとフレイヤって奴らといい」
「でも……」
ツナはうつむいた。
そう言えば、バルドルも言っていた。
オーディンには、会わない方がいいと。

なぜ、会ってはならないのか。
そんなに彼は危険なんだろうか。
たとえばあの、白蘭以上に。

考えただけでぞっとした。
あの、化物集団を率いる白蘭以上に恐ろしい人間が居るなんて、考えたくない。
「ボス……大丈夫？」
クロームが心配そうに訊いてきた。
「う、うん……」
ツナがためらいがちに頷いた時だった。

ピーンポーン

玄関のチャイムが鳴った。
「？　誰だろ？」
「ツッ君ー、かわりに出てちょうだーい！」
下の階から奈々の声が聞こえる。
ツナはしぶしぶ立ち上がった。

チャイムが鳴る数分前、沢田家の家の前に、ある人物が立っていた。

与えられた任務を、遂行するために。
彼女は、一歩踏み出した。

「よう、カワイコちゃ～ん♪」

彼女はバッと振り返った。
背後には気を付けて居たのに、いつの間にか白衣の男が立っていたのである。

「そんなとこで突っ立ってないで、オジサンと遊ばない？」
男――シャマルがウインクしたのを、彼女は黙って見ていた。

続く…

標的２０　訪問（後書き）

こんにちは、沙伊です。
最後にシャマル出て来ましたねー。出す気は無かったんですけど、話の流れ上出すことに……

最後に出てきた『彼女』というのは、忘れてる人が多いと思いますがロキの部下のあの人です。次の回で名前出すのでこれ以上はご勘弁を！

最後に……
ここまで読んでいただきありがとうございます！

標的２１　前日

「そう怖い顔しないでさー、オジサンと遊ぼーよー」

シャマルは軽口を叩きながら一歩前に出た。

おそらく二十歳前後であろう女性は、冷たい目でこちらを見ている。

顔にある火傷を隠す気は無いらしく、痛々しい跡をさらしたままだった。

「君、名前何て言うの？」

「ヘル」

名乗らないと思いきや、あっさり言った。

「でも本名じゃない」

しかし直後にそう言って、本当の名前はわからなかった。

「ヘルちゃんかー。ところで」

シャマルは笑みを消さず、目だけを鋭いものに変えた。

「ボンゴレボウズに何の用だ？」

「……おまえ、関係者か」

ヘルはサッと身構えた。

「関係者つーか？　オジサン、裏ではわりと有名なんだけどなー」

「……なるほど、トライデントシャマルとはおまえのことか」

ヘルは納得したように頷いた。

「ボンゴレ十代目とは親しいと聞く。私は敵意は無い。ただ、主であるロキ様の命令をこなしに来ただけ」

機械みたいだな、とシャマルは思った。

抜け落ちたように、感情というものが感じられない。

一体何が目的なのか、シャマルが聞き出そうとした時だった。

「あれ？　保険医のオッサン？」

聞き慣れた男の声（男の声なんざ聞き慣れたくないが）が背後から聞こえた。

驚いて振り返ると、制服姿の山本武が突っ立ってた。

「ん？　そっちの人、誰っすか？」

能天気な質問に、シャマルは言いよどむ。

「ツナんちの客？」

「は……？」

顔を正面に戻すと、ヘルは沢田宅のインターホンを押していた。

「はい」

おまけに出たのは沢田綱吉その人である。シャマルは危機感を覚えた。

「あ、あの……どなたですか？」

見覚えの無い女性が現れたことにより、ツナは戸惑った。

「ロキ様より、伝言を預かりました」

「ロキ……！？」

ツナは目を見開いた。

ロキという人物を知ってるらしい。

「我らがボスは、明日、日本に着くそうです。よって、会談の日も明日にしたいと」

「明日！？」

ツナは目を剥いた。

「えっでも、まだどこでするか決まってないし！」

「ですから」

ヘルは相変わらず無機質な声で言った。

「ボスが泊まるホテルで会談をおこいたいと」

「待て、意義ありだ！」

シャマルはばっと前に出た。

「シャマル！？」

ツナはびっくりしてシャマルを見た。さっきからいそがしい。
「そっちが指定した場所なんて、どんな罠がしかけられてるかわかったもんじゃねぇ」
シャマルの主張に、ヘルはまったく動揺せず、視線をツナに向けたまま、
「こちらとしては、色々問題を起こしてしまい、だからこそ貴方がたに手数をかけたくないのです。十代目、どうするのです？」
「え！？」
「貴方がこれを断れば、会談は無かったことになります。その場合、有無を言わせず攻撃を行いますが」
「え、ちょっと待ってください！」
ツナは慌てた声を上げた。
「今、結論を言っていただきたいものですね。会談は明日ですので」
ヘルは、答えが出るまで動かない、と言うようにぴくりとも動かず立ち尽くした。
「お、俺は……」
ツナは迷った。
いきなり明日と言われても困る。でも、断れば攻撃してくる……
「……わかった。明日、ですよね」
「初めからそう言えばよかったのです」
皮肉たっぷりのセリフを残し、ヘルは踵を返す。
「明日、迎えにあがります。護衛はいくらでも連れてきてかまいませんよ」
黒髪をひるがえし、ヘルは去ってしまった。

シャマルは苦々しげにツナに言った。
「まんまとやつの口車に乗せられたな」
「え？」
「攻撃するつったのは、おまえを確実に会談に出させるためだろ」

「……わかってる、けど」
ツナはうつむいた。
「しかし明日か……。跳ね馬に何か言ったほうがいいんじゃねーか？」
シャマルの言葉はもっともなので、ツナは頷く。そしてハッとシャマルを見上げた。
「シャマル、何でここに居るの！？」
「あー……リボーンに頼まれてな。『俺が居ない間、よろしく』ってな」
「そ、そうなんだ」

あいつ、俺には何も言わずに！！

ツナがため息をついていると、何もわかってない山本が一言。
「……また何かの遊びか？」

沢田宅の前で行われていたやりとりを見ていた人物は、目を細めた。
（このことを主に――明様に報告せねば）
その人物、明の部下である季は、その場を後にした。

『……明日!?』

電話の向こうで、ディーノの焦ったような声が流れてきた。

『そんな急に……やっぱり、ヘイムダルって奴が死んだせいか?』

「多分……。獄寺君も山本もクロームも、一緒に行くって言ってくれてるけど……」

ツナが言うと、ディーノはさっきより落ち着いた声で、

『その方がいいだろうな。何があるかわからないし。俺は仕事の関係上、行けないんだけどな』

「ディーノさんまで来なくても、俺達だけで大丈夫ですって!」

『しかし護衛は多ければ多いほどいい。恭弥も居ればいいんだが……』

「来ないですね……絶対……」

ツナは乾いた笑い声を上げた。

『とにかく、準備は万全にしとけよ。武器も忘れずにな』

「わかってますって! そんなに言わなくても」

『しかしなー……心配なんだよ。今はリボーンも居ないし』

今のがずっしときた。

そうだ、今はリボーンは居ないんだ……

ツナは受話器を持ったままうつむいた。

『……まぁ、明日はうまくやれよ』

「……はい」

電話が切れた。

「ハァ……」

ツナは受話器を置いてため息をついた。
明日、自分はオーディンに何と言えばいいんだろう。
戦いたくない、と言って、通じる相手なんだろうか。
「……どうしよう、リボーン」
遠くに居る家庭教師の名を呟き、ツナは拳を握りしめた。

「……どうして、会うことにしたのかな」

バルドルは椅子に座りながら呟いた。
「ヘルのやつ、脅しかけたらしくてな」
ロキははぁ、とため息をつく。
「まぁ、明日の会談は避けて通れないことだし、しょうがねぇよ」
「でも、彼が父の提案を蹴るのは目に見えてる」
バルドルはうつむき、手に持った匣を見つめた。
「そうなれば、一体どれだけの人間が死ぬことになるのか……」
「ハッ。んなもん気に病むなっての」
ロキは吐き捨てて持ったグラスをあおった。中には、ウィスキーが入っている。
「俺らの力も、匣も、人を殺すためのもんだ。いちいち気にしてたらきりがねぇ」
「……そうですね」
バルドルはそう言って匣を上着のポケットにしまった。

「ところで、ヘイムダルの死体は？」
「あー、ありゃ駄目だ。ランファミリーに回収されちまった」
ロキはめんどくさそうに言った。
「大丈夫でしょうか。彼の死体のせいで、僕らの秘密がばれたら……」
「それは無ぇ。奴ら、ただの死体としか見てねぇだろうし、なによりばれたって俺らが不利になるわけじゃねぇ」
バルドルは二ィ、と笑った。
「ヘイムダルは俺らの中じゃ、弱い部類だった。あいつの死体が解剖されようと、知ったことじゃねぇ」
ロキはそう言って、部屋を出ていってしまった。
「……ロキさんと比べたら、誰だって弱くなると思うけどな」
バルドルはボソリと呟いた。

部屋を出て、自室に戻ろうと歩を進めていたロキは、目の前に現れた男を見て足を止めた。

「……ボス！　到着は明日の朝じゃなかったのか？」
ロキの言葉を受け、オーディンは珍しく微笑を浮かべた。
「ロキか。予想より早く飛行機が着いてな」
「そっか。……お、そっちはアルコバレーノリボーンだな」
「ちゃおッス」
オーディンの肩に乗っていたリボーンはしゅたっと手を上げた。
「あり？　トールはどうした？　一緒に来たんだろ」

オーディンの背後を見ても、あの大男の姿は無かった。
「車酔いだ」
「……相変わらず乗り物に弱ーな」
ロキはやれやれ、と首を振った。
「おいオーディン」
リボーンはひょい、とオーディンの肩から降りた。
「俺はもう寝るぞ。しばらくの間、よろしくな」
「あぁ」
オーディンが頷くと、リボーンはニッと笑って去ってしまった。
「しばらくこっちに居るんだっけ、あいつ？」
「あぁ。私はすぐボンゴレサイドに身柄を渡すつもりだったんだがな」
オーディンは首を横に振った。
「何を考えているのかまったくわからん。我々の仲間になる気でも無いようだし」
「しかしボンゴレ側に戻る気も無い、か。マジで何考えてんだ？」
ロキは頭をかいた。
「……ま、いいや。早く寝ろよ、オーディン。明日は早いからな」
ロキはオーディンの肩を叩くとその場を後にした。

「明日、か」

オーディンは小さく呟くと、ロキとは逆方向に歩き出した。

続く…

標的２１　前日（後書き）

こんにちは、沙伊です。
今気付きましたがオリキャラ多いですね…この小説……
なるべくリボーンキャラを出すよう努力します！

よければ感想などでこのキャラを出してほしい！と書いていただければと思います。
でわ！

標的２２　会談

空を見ると、雲も無く、散歩に行きたくなるようなほど青かった。
しかし……

「なんか、緊張してきた……」
ツナは自室にて重苦しいため息をついた。
「大丈夫です、十代目！　俺がついてます！！」
獄寺が力強く言った。
同じく同室に居る山本も、
「そう緊張すんなって。どうってことねよ」
「だといいんだけど……」
ツナは山本のお気楽思考に賛同できずにいた。

とうとう今日、アースファミリーのボス、オーディンとの会談するのだ。
オーディンがボスということは、獄寺と山本、そしてずっと黙っているクロームは昨日ツナが話したので知っている。
もっとも、クロームは骸から聞いてある程度予想はしてたようだが。

「クローム、骸から何か連絡は？」
「骸様……何も言わないの。何か、ずっと考え込んでるみたい」
クロームは寂しそうに言った。
オーディンがらみということは簡単にわかる。
何を考えてるかまったくわからないが……

会談に参加するのはツナ達四人だ。ビアンキも参加すると言っていたのだが、ツナが必死に説得してやめてもらった。獄寺が戦闘不能になる。

了平はボクシング部の試合で不参加だし、雲雀も「ヤダ」の一言で不参加となっている。

ランボは……言うまでもない。

今思うと、かなりクセのあるメンバーだなーと思う。今更だろうが。

「ハァ。リボーンが……」

言いかけ、ツナは口をつぐんだ。

弱音を吐いてはいけない。そんなことを言えば、リボーンにどやされる。

とにかく時間がすぎるのを黙って待っていると、インターホンがなった。

「――！」

四人に緊張が走る。

ツナは立ち上がって、玄関に向かった。

ドアを開いて、まず目に入ったのは昨日のヘルだった。

「お迎えにあがりました。……X世を入れて四名ですか」
「いいえ。五人よ」
ツナ達は驚いて声の方を見た。
いつの間にか、明が門の前に居たのである。
「いいよね、私が居ても」
「……わかりました」
ヘルは無表情で頷いた。
「ならオジサンも入れてくれないかな～」
更に驚いた。なんとシャマルまで現れた。
「いや～ヘルちゃん昨日ぶり～♪　クロームちゃんも明嬢も元気かい？」
女子三人にだらしない笑顔をふりまくシャマル。男子陣は完全無視だ。
「シ、シャマル！　てめー何で居んだよっ。この変態ヤブ医者！！」
獄寺の叱責にもシャマルは涼しい顔で、
「よう、隼人。少しはナンパできるようになったか？」
「あ、アホかーーー！！！！」
獄寺は絶叫し、山本はからからと笑った。
「ご、獄寺君近所迷惑になるから！」
「はっ。す、すみません十代目！」
まるで平和なやりとりに、明がそっとため息をついた。

車に乗って、早一時間が経過していた。
車の中は六人が乗っても余裕があるくらい広い。
時間がたつほどに緊張が増してくる。

（ひぃ～。もう帰りたいよ……）

早くも内心で弱音を吐くツナ。
しかしクロームはともかく、他の四人はまったく普通だった。
獄寺は腕を組んで普通の顔で外を見てるし、山本など口に笑みさえ浮かべている。
明の場合は緊張よりシャマルに対する嫌悪感のほうが強いようで、クロームをかばいながらなるべく離れるようにしている。

（みんな余裕あるなー。俺は……）

ツナはうつむいた。

「……あそこのホテルです」
助手席に座っていたヘルが前方を指差した。
見えたのは高級そうなホテルで、ツナは感嘆の声を上げた。
「随分高そうなホテルだな」
「我々の所有物の一つです」
獄寺が呟くと、ヘルが淡々と答えた。
「あれ、アースファミリーのものなの！？」
ツナが驚いていると、明が普通のトーンで、
「あんなの、うちも幾つも持ってるよ。勿論ボンゴレもね」
「えぇ！？　そうなの？」

「知らなかったの？」
訊き返されてしまった。

車が止まり、降りるとすぐ入口に、ロキが居た。
「よう。ボンゴレ」
ロキは親しげに声をかけたが、獄寺、山本はざっとツナを守るように前に立った。
「そう警戒すんなって。会談がどういう結果になろうと、今日は手を出さねーよ」
「信じられないね」
明が顔をしかめて言った。
「大丈夫だっての。だから」

全員驚いた。
ロキの手には、いつの間にか銃が握られていたのだ。

「こんなモン持ってこなくてもいーって」
「――！」
明が驚いて胸元を叩いた。
「い、いつの間に……」
あの銃は明の物らしかった。

（は、早ぇ）
（ぜんぜん見えなかったぜ）

獄寺と山本は息を飲んだ。
ツナはじっとロキを見つめた。
あの力や跳躍力、それに今のスピード……やっぱりただの人間じゃない。

「そら、返すぜ。まぁ使うことは無いだろうが」
ロキは明に銃を返し、ヘルにねぎらいの言葉をかけた。
「ご苦労」
「いえ」
短いやりとりを済ませ、ロキはツナ達に背を向ける。
「案内するぜ。ボスんとこにな」

派手な装飾などいっさい無い、ごくシンプルなドアを開けると、向かい合わせに置かれた二つのソファーの一つに、オーディンが座っていた。

「よく来たな、ボンゴレX世」
「……」

ツナは一瞬、入るのをためらった。
しかしここまで来て逃げるわけにもいかないので、慎重に部屋に入った。
獄寺や山本も後に続こうとするが、ロキに止められた。
「おっと。この先はボス同士の会談だぜ」
「な！　十代目を一人にできるかよ！」
「獄寺君、落ち着いて！！」
ツナが仲裁に入り、獄寺の暴走を止めた。

「俺は大丈夫だから！　だから心配しないで！！」
「ですが……」
「大丈夫、何も無いよ（多分）」
「……十代目がそうおっしゃるなら……」
獄寺はしぶしぶ下がった。
「ツナ……」
「大丈夫だよ、山本。クローム、それにシャマル、明ちゃんも、心配しないで」
「ボス……」
「危険は無いかもしれないけど、気を付けて」
クロームと明の言葉に頷き、ふとシャマルを見る。
「骨は拾ってやるよ」
なんとも手酷い言葉に憮然としつつ、ツナは部屋のドアを閉めた。

「シャマル、てめえ十代目になんてことを！」
「いーじゃねーか。男に声援なんて送れるかっての」
「この変態スケコ――」

パタンッ

最後まで聞かなかったが、獄寺が何を言おうとしたか、すぐにわかった。
苦笑しつつ、振り返る。

「座れ」
素っ気ない口調だが、なぜか親しみが持てた。
ツナはおどおどしつつも向かいのソファーに座った。

「……」
「……」

無言になるボス二人。

（ひぃ～。き、緊張するよ～！）

ツナは急に帰りたくなった。

「……おい」

「はははははい！！？」

想像以上に上ずった声になってしまった。

オーディンは目を瞬いて、

「どうした？」

「いいいえ別に！」

「そうか。茶は飲まないのか？」

「は？」

そう言えば今気付いたが、ソファーの間にある長机には、紅茶と皿に入ったクッキーがある。

「えっと……」

「毒は入っていない」

「いや、そうじゃなく……」

まるでただのお茶会だ。緊張していた自分は何だったんだと思う。

「私は、リラックスした状態で君と話がしたかった」

オーディンは持っていたカップを戻して言った。

「妙に警戒されては、ちゃんと話ができない」

オーディンは無表情だったが、口調は淡々とはしていなかった。

むしろ、親しげに話そうと努力している。

「……私には未来を知る力がある」

オーディンが切り出した。

「今まで外れたことは無い。……ある時、私は『視た』。世界が壊れるところを」

「世界が、壊れる？」
「……白い男。白くも、闇のように深い黒を持った男が、世界を壊す様を」
「――！」
ツナは愕然とした。
（それって、白蘭のこと……！？）
「あ、あの！　それを視たのはいつのことですか！？」
「二年ほど前だ」
二年前……
ツナは頭の中で二年前のことを思い出した。
二年前……まだ一年になったばかりで、こんなに戦ったり強くなったりするとは思ってもみなかった時代だ。
リンクだって、存在自体知らなかった。
そんな時から、この人は白蘭の脅威を感じ取っていたんだ……
「……それで、俺に何を？」
仲間になれと言われたのと、白蘭と何か関係があるのだろうか。
そもそも、白蘭の脅威は未来での戦いで去ったはず。
なのになぜ？
「……君に」
オーディンの次のセリフは、驚くべきことだった。
「ボンゴレリング、いや、全てのトリニセッテを破壊してもらいたい」

続く……

標的２２　会談（後書き）

こんにちは、沙伊です。
最近この小説の続きどうしよう……と思ってます……結局一週間ぐらいでしあげちゃうんですが。
なんか早く書かないと！　という気持ちが私にはあるようです。ゆっくりでいいのに……
無駄話はこれくらいにして、次の話を書きます！
オーディンの真意とは何か？　ツナの答えは？
最後に、ここまで読んでいただきありがとうございます！

標的２３　援軍

「トリニセッテを壊す……？」
「そうだ」

ツナは絶句した。
「君はすでに知っているだろう、トリニセッテのことを。それも『視た』」
オーディンはまっすぐツナを見つめた。
「白い男は……いや、権力を求める者は皆、いつかトリニセッテを求めるだろう。リングの力が発見されたためにな」
「えっ」
ツナは目を瞬いた。
「ど、どういうことですか？」
「マフィアの間に受け継がれたリング……それの力に気付いた者達は、リングの争奪戦を繰り広げるだろう。もし、私の予知が外れたとしても、白い男と同じ思想を持つ人間が必ずが現れる。そしていずれそいつはトリニセッテを狙うはず。そうなる前に……」
「ち、ちょっと待ってください！」
ツナは慌ててオーディンの言葉を遮った。
「それと俺、何の関係があるんですか？」
「……君も知っている通り、ボンゴレリングもトリニセッテだ」
オーディンの視線が、ツナのリングに注がれた。
「その他のトリニセッテは、ジッリョネロファミリーのマーレリング、アルコバレーノのおしゃぶりだ。トリニセッテの守護者でない私では、彼らはトリニセッテの破壊を拒否するだろう。しかし君なら……」
「で、でももしその人達が拒否したら……」
「……その時は戦うしかないだろう」

「そんな！」
ツナは再び絶句した。

トリニセッテを壊すなんて、そんなことをすれば、ジッリョネロもアルコバレーノも黙っているはずがない。
必ず、戦いになるはずだ。
もしそうなったら……

（ユニのお母さんと、戦わなくちゃならなくなるんじゃ……）

この時代のジッリョネロ―ミルフィオーレファミリーのブラックスペル達のボスは、確かユニの母、アリアのはずだ。
彼女と戦えというのか？

「お、俺は……できません」
オーディンの目が細められた。
「……なぜ？」
「トリニセッテを壊すのも反対だけど、目的のために誰かと戦うなんて俺は嫌だ！！」
「目的のために手段を選んでいては手遅れになる」
「だから戦うんですか！？そのために人達が守ってきたものを壊すんですか！？」

ツナは緊張と恐怖を完全に忘れ、大声で言った。

「貴方がやってることは、白蘭――貴方の言う白い男と同じじゃないんですか！？」

オーディンの目が見開かれた。
ツナはあ、と小さく声を上げる。

「ご、ごめんなさい！　で、でも俺は……」
「何も言わなくていい」
今度はオーディンがツナの言葉を遮った。
「君の言う通りだな。目的のために手段を選ばなければ、あの白い男と同じかもしれない」
だが、とオーディンは右目を細めた。
「たとえ何と思われようと、私は目的のために手段を選ばない。……もう、後悔するのはごめんだ」

オーディンの顔が哀しく歪められた。
過去に何かあったのだろうか。
「君とは平和的な関係を築けると思ったが、残念だ」
「……！」
「私は君達を敵とみなす。容赦はしない」
オーディンの目が冷たくなった。
「今日は何もしないでおこう。帰るがいい」
「あ、あの、最後に一つだけ！」
ツナは慌てて尋ねた。
「あ、貴方の目的は、トリニセッテを壊すことだけなんですか？」
「……いや」
オーディンは首を横に振った。
「革命……我々の真の目的はそれにある」

オーディンの右目は、もはやツナを見ていなかった。

部屋から出たツナに真っ先に駆け寄ったのは、獄寺だった。
「十代目！　ご無事ですか！？」
「う、うん……」
頷くツナに、獄寺は胸を撫で下ろす。
「よかったッス。心配してたんですよ」

「ボンゴレはよかったとは思ってないみたいだぜ」
壁にもたれかかったロキが言った。
「な、てめえ十代目の何がわかるんだ！」
「顔見りゃ誰だってわかるぜ」
「！」
獄寺はハッとツナを見つめた。ツナはうつむく。
「まさか……うまくいかなかったんですか？」
「……」
言葉が無いことが、全てを物語っている。
「ツナ……」
遅れて山本が近付いてきた。
「あんま気にすんなよ。ツナのせいじゃねぇって」
「そうッスよ！　十代目は悪くありません！！」
二人の慰めの言葉に、ツナは少し頷く。
「でも、これからどうするの？」
明が顔をしかめて言った。
「どうするって言われても……」
ツナも返答に困る。
「……ま、大半はうちのボスが悪いだろうがな」
ロキの呟きに全員が振り返った。

「どういう意味ですか？」
「そのうちわかる」
ツナの問いに、ロキは肩をすくめた。
「まぁ、これからは敵同士だ。あんま親しく話すのはどうかと思うんだが」
「ふざけんな！　こっちはてめえらを敵以外に見ちゃいねーんだよっ」
獄寺が今にも噛みつきそうな勢いで言った。
「おーこえ。あ、そうそう。これだけは言っとくぜ」
ロキはニヤリと笑った。
「こっちは蓄えた戦力がある。幹部一人潰したぐらいでいい気になんなよ」
「ハッ。こっちだってな――」
「それ以上はよせ、隼人」
シャマルが仲裁に入った。
「俺達は帰らせてもらうぜ」
「おう。ホテルの前で車を停まらせてある。それに乗りな」
「な！　てめえらの車に乗るかよ！！」
「落ち着け、隼人。好意に甘えよう」
シャマルは獄寺をなだめた。
「じゃあな～」
複雑な面持ちのツナ達を、ロキは笑顔で見送った。

「さあて、何で残ってるか説明してもらおうか」
ロキは背後のクロームに目をやった。
「クローム髑髏……いや、今は六道骸と呼んだ方がいいか？」
「……クフフ」

クローム――いや、クロームに憑依した骸は目を細めた。
「実はお願いがありましてね」

「オーディンと会いたい、か？」
骸が頷くと、ロキは頭をかいた。
「……実はなー、あいつおまえに会いたくないって言っててよ」
「なぜ？」
「俺が訊きてえよ。ま、考えがあるんだろ。悪いな、六道骸」
ロキの言葉にしばらく黙っていた骸だったが、やがてポツリと、
「オーディン、いえ、オッデロの傍にはつねに一人の青年が居ました」

ピクッ

ロキの肩が僅かに反応した。
「彼に名はなかったそうです。研究過程で産み出された命だったそうですから」
骸は観察するような目でロキを見つめた。
「ただ、オッデロはこう読んでいました。ロキ、と」
骸が見つめるなかで、ロキの表情は消えた。
「別にこのことを沢田綱吉達に教えようとは思いません。ただ、確かめたかっただけなので」
クフフ……と笑う骸を、ロキは苦々しげに見つめた。
「貴方は僕と同じ、『仲間』ですから」
「……白々しいぜ」
ロキの言葉に、骸は楽しげに笑った。
「クフフフ。そう言わないでくださいよ」
「……で？　結局何がしたいんだよ」
「忠告、ですかねぇ？」
骸は唇の端を持ち上げた。
身体はクロームだから、凄い違和感だ。
「沢田綱吉を甘く見ないほうがいいですよ。彼は、僕らが持ち合わせることのできないものを持っている」

「それには気付いてる。あれがボンゴレX世の武器であり……同時に最大の弱点でもある」
ロキは腕を胸の前で組んだ。
「俺らは加減はしても、手は抜くつもるはねーぜ」
「クフフ、貴方はね」
骸はニヤッと笑ったあと、ロキに背を向けた。
「伝えておいてください。沢田綱吉は、僕の獲物だと」
そんな言葉を残して、骸は去った。

「交渉は決裂か」
背後からの声にオーディンはソファーに座ったまま振り返った。
「ちゃおッス、オーディン」
「……」
オーディンは無言でリボーンを見つめた。
「だから言ったろ、ツナはおめーの言葉には応じねーってな」
「今、初めて聞いたぞ」
「そうか？」
リボーンはとぼけて見せた。
「さて。俺は帰らせてもらうぞ」
「ボンゴレのところか？」
「いや」
リボーンが首を振ると、オーディンは眉をひそめた。

「俺にはまだやることがある。またイタリアに帰らなきゃならねーからな」
リボーンはニッと笑った。
「その間、ボンゴレX世達がどうなってもいいのか？」
「心配にはおよばねーぞ」
リボーンは帽子をくいっと上に上げた。
「すでに援軍を頼んであるからな」

イタリア、ボンゴレファミリーの本部で、けたたましい咆哮が上がった。
「う〝お〝ぉぉい！！　一体どういうことだぁぁ！」

長い銀髪を振り乱した青年は、目の前のディーノに食って掛かる。
「だから言ってる通りだって」
ディーノは頭をかいた。
後ろではロマーリオが無表情で立っている。
「ざけんな！　日本に向かえだぁ？　行かねぇに決まってるだろぉ！！」
銀髪の青年――スクアーロはじろり、とディーノを睨んだ。
「王子もパス。めんどくさいしー」
頭にティアラを乗せた少年が言えば、
「私もちょっとね～」
「俺はボスが行くなら……」
サングラスをかけたオカマとムッツリ顔の大男がそれぞれの意見を述べた。

不満たらたらの一同のなかで、小さな体躯の術士がポツリと一言。
「僕は行くよ」
全員が術士――マーモンを見つめた。
「僕もアルコバレーノの一人だからね。そのオーディンって男の狙いの一つがトリニセッテなら、僕も戦うことになるだろうし」
「そうか！」
「跳ね馬、Ｓランクの報酬三倍分ね」

結局そこ行くのかよ。

横で聞いていたスクアーロは顔をしかめた。
「マーモンはともかく俺らはどーすんの？　ボース」
少年――ベルフェゴールは後ろを振り返った。

そこには、豪奢な椅子に長身をうずめた黒髪の男が居た。

男は紅い目をずっと閉じていたが、すっと開いた。
男の口が開く。全員が男の言葉を待った。

標的２３　援軍（後書き）

こんにちは、沙伊です。
実は今期末テスト中なのですが……お構い無しで書いてます。勉強はしてません。

私のアホ話は置いといて、次はいよいよヴァリアー活躍！　……かも？　書いてる私自身がわかりません。

とにかく、次も下手なりにがんばります！

標的２４　攻撃

教室に入ったとたん、ツナに視線が集中した。

（な、何！？）

ツナは思わず教室を見渡す。

いつもなら誰も関心を寄せない自分に、幾つもの目が向いてることに居心地が悪くなった。

そそくさと自分の席に座ろうとした時――

「イェーイ！　沢田ちゃん、おっはよー！！」

ツナは内心でげっと呻いた。

「ロ、ロンシャン……」

原型をとどめてない制服を着たクラスメイト、内藤ロンシャンはにかっと笑った。

「沢田ちゃん、見たよ、見ちゃったよ～」

「は？」

「昨日、高級ホテルから出てくるの見たよー！」

「……え゛」

昨日のアレ、見られたー！？

内心で絶叫したツナに気付かず、ロンシャンは続ける。

「俺ビックリしちゃってさ～、みんなに言いふらしちゃった♪」

「はあ！？」

それであの視線か！！　納得したが、同時に青ざめた。
「な、なんてことを！」
「いーじゃん。沢田ちゃん、最近目立ってるしさ～。じゃ、俺、カノジョとデートだからサボるね～」
そう言ってロンシャンは教室を出ていった。出入口には個性的という言葉でさえ控えめな女性（？）が立っている。
ツナはますます青ざめた。

（ど、どうしよう！？）

ツナはとりあえず席に座った。
（ロンシャンの奴、よけいなことを！　さすがマフィア公言してるだけあるけど……でも、本当にどうしよう！！）
こんな時に限って獄寺も山本も居ない。
リボーンはまだ帰ってないし、頼れる人はこの学校には居ない。
（雲雀さんとお兄さんが居てたら……いや、あの二人は無理か）
了平はちゃんとした助言をしてくれるとは思わないし、雲雀は言わずもかなだ。
考えてみれば、ロンシャンが見たのはあのホテルからツナが出てきたところだけだ。会話を聞いたわけじゃない。
それに自分はそういう場にはまったく無縁だ。だったらなんとかごまかせるんじゃないだろうか。
たとえばしらばっくれるとか。ロンシャンはともかく、他の人ならそれでなんとかなるだろう。
しばらくもんもんと考えていると、いきなり影が差した。
顔を上げると、いつぞやの小田と佐藤である。
「どうしたの？」
ツナは首を傾げた。
「な、なぁダメツナ。内藤の話さぁ……」
「あ、ちょっと待って！」

ツナは立ち上がって二人の言葉を遮った。
「ここだとヤバイから移動しよう」

校舎裏に移動したツナは困ったような目で小田と佐藤を見つめた。
「二人は黙ってるんだよね、前のこと」
「死にたくねーし……」

よほどディーノの脅しが効いたようだ。
「あ、あのさぁ。内藤、いっつも自分のことマフィアのボスだーって言ってるけど、まさか……」
「うん、まぁ、一応」
二人はロキ戦である程度事情を知ってしまったので、ツナは素直に頷いた。
「じゃ、高級ホテルに出てきたっての……」
「事情があったんだ」
「……」
二人は顔を見合わせていた。
ツナも何と言ったらいいかわからず、頬をかいた。
と、その時だ。

「……ボス」

ツナは驚いて振り返った。
「クローム！　どうしたの？　並中まで来て」
「うん、あの……」

クロームは小田と佐藤を見て、足を止めた。
一方、二人の方は。

「だ、誰だよその子！　めちゃくちゃカワイイじゃんっ」
「ツナ、おまえダメツナのくせに何でそんなカワイイ子と知り合いなんだよ！」

ツナは思いっきり引いた。
二人の必死の形相に、顔がひきつる。
自分が女子と知り合いだとそんなに変だろうか。
確かに俺は京子ちゃんと出会うまで女子と話したこと無かったけど……
……考えてて虚しくなってきた。

「で、クロームはどうしたの？」
「うん……。町で変な人、見かけたの」
「変な人？」
コクン、とクロームは頷いた。
「外国の人……。何人か居たよ。多分……敵」
「！」
ツナは表情をひきしめた。
「それ本当！？」
「うん。早口のイタリア語だったけど、その人達の会話、聞き取れたから」
「内容は？」
「……並中を、攻撃するって」
「な！？」
ツナは目を見開いた。
後ろの二人が息を飲むのが聞こえたが、そんなの気にしてられない。

「クローム、そいつらのところに案内して！」
「うん」
二人はだっと走りだした。

クロームが見たという外国人達はすぐ見つかった。
獄寺と山本にはケータイで連絡したのですぐ来るだろう。
とりあえず物陰に隠れ、道の真ん中で話す男達を観察する。
全員黒スーツを着ていて、顔はサングラスをしていてよくわからない。
怪しい人物を描けと言われたら、大半が描きそうな格好だ。

「あの人達だよね？」
「うん」
ツナとクロームは男達をじっと見つめた。
「ボス、闘う？」
「ちょっと待って」
ツナは考え込んだ。
彼らが敵だと言うことは、多分本当だろう。
でも、もし違ったら？
とりあえずツナはズボンのポケットに手を伸ばした。
「何をしている？」

二人は飛び上がった。
バッと振り返り、構えをとる。
（この人達……いつの間に!?）
背後に現れた男達に、ツナは目を剥く。
「隊長、こいつらボンゴレと霧の守護者ですよ」
男の一人がリーダー格らしき男に囁いた。
「ふむ……。ボスから攻撃許可は得ている。殺れ」
「はっ」
男達が懐から四角い何かを取り出した。

（!?　匣!!）

ツナがポケットの中の物を取り出した時、男達の匣から何かが飛び出した。

「何でついてくんだよ、野球バカ!」

獄寺の怒鳴り声に山本はヘラッと、
「俺んとこにもツナから連絡があったんだよ。急いできてくれって」
「けっ。十代目の命令ならしかたねー」

獄寺は命令、山本は連絡。二人のツナの言葉に対する感覚は相変わらず違っていた。
しかし早くツナの元に行かなければならない……それだけは共通していた。
全速力で走っていた二人だが、ふと感じた気配に足を止めた。
しかもただの気配じゃない。――殺気だ。

「山本……」
「わかってるぜ」

二人はそれぞれの武器を構えた。
「出てきやがれ！！」
獄寺が怒鳴ると、先程二人が曲がった角から一人の女性が現れた。

「ハァ～イ。お久しぶりねー」

金髪を後ろに払った美女は、ニヤッと笑った。
「てめえは確か……フレイヤ！」
「覚えてくれてて嬉しいわ」
獄寺と山本が驚くなか、フレイヤは含み笑いを浮かべた。
「悪いけど……先には行かせないわ。この間のようにいかないわよ」
「何を言ってやがる。二対一じゃ、てめえのほうが不利じゃねーか」
「私の役目は足止めだもの。それに」
フレイヤの顔に不敵な笑みが浮かんだ。

「誰が一人と言ったかしら」

フレイヤの背後から複数の男達が現れた。それも、かなりの数の。

「な！」
「マジかよっ」

目を見張る二人に、フレイヤは高笑いを見せた。
「ホホホホホホ！　あんた達にはコケにされたからね。倍に返してあげるわ！　特に獄寺隼人っ」
獄寺の年増扱いをよほど気にしていたようだった。

「行きなさい、下僕共！」

フレイヤは鞭を振るって男達に命令する。
向かってくる男達に、獄寺と山本は構えをとった。

「ボス！」

クロームが叫ぶのが聞こえる。
「……大丈夫だ」
ツナはすっと構えをといた。

飛んできた匣兵器のハイエナは、嵐属性の炎をまといながら主のもとに戻った。
「防がれたか」
顔をしかめる男は、後ろの部下に目で合図をした。
部下達も匣を取り出してリングの炎を注入する。
中からは男と同じ嵐ハイエナが現れた。

「こいつらも匣を……！」
ツナは呻いた。
「行け！」
男達の号令と共にハイエナが襲いかかってきた。ツナはそれに応戦する。
「ボス！　……あっ」
いきなり腕を掴まれ、クロームは小さな声を上げた。
「！　クローム！！」
「動くな、ボンゴレX世」
男がナイフを取り出して、クロームの首筋に突き付けた。
「霧の守護者の命は無いぞ」
「くっ……」
ツナが振り上げかけた拳を下ろした時だ。
ドガッバキッ
「ぐあっ」
「がっ」
後ろの男が二人、破壊音と共に倒れた。
「ねぇ、君達」
トンファーを構えた彼に、ツナとクロームは目を見開いた。
「何群れてるの？」

続く……

標的２４　攻撃（後書き）

すみません……ヴァリアー出るかもって言っときながらまったく出ませんでした……

じ、次回こそ出します！　でも雲雀が活躍しそうなんだよな…（汗）

ともあれ、ここまで読んでいただきありがとうございます！

標的25　晴れの炎と嵐の炎

颯爽と現れた雲雀は男達をじろっと睨んだ。

「この群れは何だい？　沢田綱吉」

不機嫌オーラ出しまくりだ。ハイパーモードでなければ泣いてたかもしれないとツナは思った。

「貴様は……雲の守護者かっ」

男の一人が叫んだ。

雲雀はその男を見、次いで嵐ハイエナを見た。

「……匣アニマル……？」

「やれ！」

男達が嵐ハイエナに命令した。ハイエナ達は雲雀に向かって飛びかかる。

雲雀は一歩後ろに下がって懐から自身の匣を取り出した。

ガチッ

ドシュウゥ！

雲雀のボンゴレ匣から雲ハリネズミが飛び出した。

雲ハリネズミが発生させた針の生えた球体は、嵐ハイエナを食い止める。

「君達が何者かは知らないし、知りたくもないけど……」

雲雀はトンファーを構えた。銀色の得物に、紫色の炎が灯る。

「並盛に害をなすつもりなら……噛み殺す」

「食らえ！　ロケットボム！！」

獄寺のダイナマイトが軌道を変えながら空中を切り、男達の傍で大爆発をおこす。

時雨蒼燕流、攻式八の型――

山本は男達に向かって走り出した。

篠突く雨

何人かの男が吹っ飛んだ。

「さぁ……てめえの部下は全員倒したぜ」

獄寺と山本はフレイヤに向き直った。

「覚悟しろ」

「覚悟？　ハン。あんた達こそ、油断には早いんじゃないの？」

「何言って……！？」

二人は目を見開いた。

倒したはずの男達が、起き上がり始めていたのだ。

「ホホホホ！　晴れ属性の特徴は『活性』。彼らは、私のリングの

炎から発せられる晴れ属性の炎で、超人的な回復力を持ったの。だから」

フレイヤはニヤリと笑った。

「息の根を止めるまで動き続けるわ。倒したかったら、殺すことね」

完全な嘲笑いに、二人は顔を見合わせる。

「甘っちょろいあんた達に、それができるかしらねぇ！」

男達が突進してきた。

それだけでなく、匣まで出してきた。

ドシュゥッ

晴れ属性の炎をまとった手裏剣が、二人に向かって飛んでくる。

獄寺は舌打ちしてボンゴレ匣を取り出した。

ガチッ

ドシュウ！

匣から嵐猫の瓜と、複数の匣が飛び出した。

更に手際よく、獄寺は匣を開匣させていく。五秒とかかっていない。

ガチガチッ

ドドシュッ

ドガァァァン！！

獄寺の匣から嵐の炎をまとったシールドが現れ、手裏剣を受け止めた。

しかし、手裏剣はまっすぐ飛んでたわけじゃない。

晴れ属性の炎をまとってめちゃくちゃに曲がりながらシールドをかわして迫ってきた。

時雨蒼燕流、守式七の型――

山本が時雨金時を構えて前に出た。

繁吹き雨

ガキィィン！！

雨属性の炎を宿した刃が、手裏剣を一つ残らず叩き落とした。

「ちっ。いいとこ持っていきやがって……」

獄寺は再び舌打ちした。彼の肩には瓜が乗っている。

「ハハッ。まぁそう言うなって」

山本はからっと笑った。

一方フレイヤの部下達は青い顔をした。

攻撃が防がれたのと、獄寺と山本が匣を使ったためだ。

焦った顔でフレイヤを振り返る。

フレイヤの方は想定済みだったのかにんまりと笑う。

「さすが、やるわね。でも」

フレイヤは匣を取り出してリングに炎を灯した。

「やっぱりあんた達は私には勝てないわ！」

ガチィッ

匣に晴れの炎が注入された。

どんな兵器が出てくるか、と獄寺と山本は構える。

しかし匣から出てきたモノは、二人ではなく、フレイヤの部下にぶつかっていった。
匣の暴走かと思ったが違った。

「ウ、グウ……グオオオオオオ！！！！！」

男達は咆哮を上げた。筋肉が盛り上がり、上半身のスーツが無惨に破れる。

「な、な、な……」
獄寺は言葉を見失った。

男達はもはや、筋肉が異常なまでに膨れ上がった、怪物でしかなかったのである。

「ホホホホホホ！　これが私の匣。晴れの炎による活性で肉体を強化する『狂戦士（バーサーカー）』よ！！」
「バ、バーサーカー？」
山本は意味がわからず首を傾げた。
「獄寺、バーサーカーってどういう意味だ？」
「んなこと言ってる場合じゃねぇだろ、この野球バカ！」
獄寺が怒鳴り付け、腕の匣兵器を男達に向けた時だ。

「楽しそうなことしてんじゃん♪」

全員驚いて上を向いた。上空から言葉が降ってきたのだ。

「俺も混ぜてくんね？」

「う〝お〝お〝い、ベル！　俺達は遊びに来たんじゃねぇぞぉぉ！！」

獄寺の顔はひきつり、山本は笑顔になった。
その違いが生まれたのは無理もない。
「な、何なのよ、あんた達」
フレイヤは動揺した目で屋根の上に居る黒衣の二人組を見上げた。
二人組のかたわれ――スクアーロはニヤリと傲慢な笑みを浮かべた。

「俺達は、ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーだぁ！！」

紫の炎が空を切った。

ボコボコボコボコ！！

雲ハリネズミが更に増殖し、嵐ハイエナを針で貫いていく。
その間にクロームを捕まえている男をツナは殴り飛ばした。
開放されたクロームはよろめいた。
「大丈夫か？　クローム」
ツナは慌ててクロームを支えた。
「大丈夫……」
「そうか」
クロームを地面に座らせ、ツナは残りの男達に向かっていった。

「手出しは無用だよ」
「こいつらは俺の敵でもある」
ツナと雲雀ははからずも共同戦線になった。
「ナッツ、頼む」
ツナはボンゴレ匣を開匣させた。
オレンジ色の小さなライオンが匣から飛び出し、ツナの肩に飛び乗った。
男達も匣を取り出して、リングの炎を注入した。

ドシュウッ

匣から出てきたのは、嵐の炎をまとった巨大な鎌だった。
ツナの脳裏に、ミルフィオーレのブラックスペルが浮かんだ。
確か太猿と野猿という二人も嵐の炎をまとった鎌を使っていたな……

考えていると、嵐の炎がカマイタチとなって飛んできた。
ツナは慌てず構えをとった。

零地点突破・改

嵐の炎は澄んだ音と共に消えた。
「……ロール、防御だ」
雲雀が呟くように言うと、雲ハリネズミは壁のように前に出た。

ドドドォォッ！

強力な破壊音が響いたが、雲ハリネズミの壁は壊れなかった。
「無駄だよ」
「おまえらに俺達は倒せない」

二人の言葉に、男達は顔を歪め、あとずさった。

「待て」

ツナと雲雀はハッとして後ろを振り向いた。

「ボス……！」

クロームが駆け寄ってきた。

「おまえは……！」

「今度は私が相手をしよう」

突然現れたフレイは嵐の炎をまとった大剣を構えた。

続く…

標的２５　晴れの炎と嵐の炎（後書き）

今回はいつもより早く仕上げられました。その分雑で読みにくい（いつものことですが）かもしれませんが気にしないでください。

なんとかヴァリアー出せました（汗）

でもスクアーロとベルだけ……しかも名乗っただけ……

次こそは！　と思いながら有言実行できない沙伊でした…

すみません、これからはちゃんとします。

でわ！

標的２６　おとり

獄寺は目の前の光景が信じられなかった。
何で、何で……

「何でてめーらが居るんだよ！？」

獄寺の叫びに、ベルフェゴールは前髪で隠れた目をこちらに向けた。
「お。爆弾少年じゃん。ひっさしぶりー♪」
「おぉ……じゃなくて、何でここに居んだよ！」
「跳ね馬だぁ」
答えたのはベルではなく、スクアーロだ。
「奴が、日本に向かうよう言ってきたんだ」
「ディーノさんが？」
山本が目を瞬かせた。

一方フレイヤ側は。

「ちょっと！　こっち無視ってどういうこと！？　あとそこの銀髪、ちょっと顔がいいからって私にそんな傲慢な態度とっていいと思ってんの！」

フレイヤの喚きに、獄寺達は顔を見合わせる。
屋根からヒラリと跳び降りたスクアーロは顔をしかめて見せた。
「女、わけわかんねーこというんじゃねぇぞぉ。てめえそんなに偉

いのかよ」
「当たり前でしょ。私はアースファミリーの最高幹部『神格』の一人なんだから！」
スクアーロは鼻で笑っただけだった。
「俺はアースファミリーに所属しちゃいねぇ。だからてめぇが幹部だろうがボスだろうが頭下げる必要ねぇぞぉ」
「なっ……」
フレイヤはワナワナと肩を震わせた。
「この私をコケにするなんて……許さないわよ！」
フレイヤはビシィッとスクアーロを指差した。
「行きなさい、下僕共！　あの男を殺せ！！」
筋肉の塊――もとい、男達はスクアーロに襲いかかってきた。
かなりのスピードだが、スクアーロはあっさりよけ、左手にくくり付けた剣を降り下ろした。
しかし、剣は男の筋肉に血の筋を付けただけにとどまった。
「！？」
「ホホホホ！　そんなナマクラ剣じゃ、彼らを倒すのは無理よ。その筋肉は、晴れの活性によって鋼並に強くなってるんだから！」
フレイヤは勝ち誇ったように笑った。
しかし……
「……」
スクアーロの口元に、不敵な笑みが刻まれた。

フレイの姿を認識したとたん、雲雀は唇を歪めた。
獲物を見つけた獣のようで、ツナは少し恐怖心を覚える。
「手は出すなよ、沢田綱吉」
雲雀はチャッとトンファーを構えた。
「アレは僕の獲物だ」

ダッ
ガギィィッ

トンファーと大剣が火花を散らした。
「随分凶悪な目だな、雲の守護者」
「そうかい？」
雲雀は左のトンファーを振るった。

ガッ！！

トンファーがフレイの横腹に直撃した。
しかし、フレイは揺るぎもしなかった。
「――！」
「その程度の死ぬ気の炎など、私には効かん」
フレイは身を引いき、よろめいた雲雀の脳天めがけて剣を降り下ろした。

ドガァ！！

嵐の炎をまとった刃が地面を穿った。
「！？　居ない……」
フレイはハッと周りを見渡した。
「……させない」

クロームの言葉にフレイがこちらを見た。
雲雀はクロームの隣にムスッとした顔で立っていた。
「手は出すなって言ったのに……」
子供のようにぐちぐち言う雲雀に、クロームはオロオロした顔をした。
その様子に目を細め、ツナは拳に炎を灯した。
「貴様の目的は何だ？」
「え……ボス、この人達の目的は並盛の攻撃じゃ……」
「いや」
クロームの言葉に、ツナは首を振る。
ツナの超直感が、それは違うと言っていた。
「多分おまえらはおとり、だろ」
「……」
「何が目的だ」
フレイは答えなかった。
答えずに、大剣を構えた。
「やる気か。なら……」
「待ちなよ、沢田綱吉」
雲雀がツナの脇腹を押した。勢いよく押されたものだから、息がぐっとつまる。
「アレは僕の獲物だよ」
「……あくまで私と戦うか、青二才が」

ピクリ

雲雀の片眉が反応した。
「……ムカつくね、君」
雲雀の中である感情が膨らんでいた。
それこそ、危険レベルにまで。

ボオゥ！！

トンファーの炎が目を焼くほど大きくなった。

「……噛み殺す」

雲雀は地面を蹴った。

「……ま、マジかよ……」

獄寺はゴクリ、と喉を鳴らした。

地面には、身体がしぼんだ男達。

それの中心に、スクアーロとベルが無傷で立っていた。

「ししっ。弱っちー奴ら」

「う〝お〝お〝ぉい！　手応え無ぇなぁ」

二人は不敵な笑みをフレイヤに向けた。

「一体どうして……」

フレイヤが愕然として呟いた。

「こいつらの肉体は確かに鋼並に硬ぇかもしれねぇ。だが、筋肉の節目はどうだ？　それに強化しようの無ぇ目や身体の内部は防ぎようねぇよなぁ」

スクアーロは腕を組んだ。

「俺達は暗殺者だぜ？　そういうとこ狙うのはわけねーし」

ベルはししっと笑った。

「だって俺、王子だもん」
「今それ関係無ぇだろ」
スクアーロは呆れた顔をした後、剣先をフレイヤに向けた。
「女、残ってんのはおまえだけだぞぉ！」
「くっ……」
フレイヤは顔を歪めた。しかしすぐさまフッと笑う。
「私は戦わないわよ」
「だとぉ？」
「さっき守護者の子達にも言ったけど、私の役目は足止めなの」
フレイヤは一歩下がった。
「私自身が戦う必要なんて無いわ。悪いけど、ここは退かせてもらうわよ！」
フレイヤが何かを投げた。

ボフンッ

「！　煙幕かっ」
獄寺は口を手で覆いながら呻いた。
「ホホホホ！　たとえあんた達が強くったって、最後に勝つのは我々なのよ！！」

フレイヤは高笑いを上げた。
煙幕が消えた時には、赤いドレス姿は消えていた。
「ちっ。逃げたかぁ」
スクアーロは舌打ちをして、獄寺と山本を振り返った。
「う〝お〝ぉい、ケガは無ぇかぁ」
山本は頷いたが、獄寺は無言で倒れる男達を見つめた。
「おい……そいつら、殺したのかよ」
獄寺の問いに、ベルは少しつまらなそえに答えた。
「跳ね馬に殺しはすんなって言われてるんだよ。まぁ二、三人目が

使えなくなった奴が居るかもね」
　ししししっと笑うベルに、獄寺は安堵のため息をついた。
「よかった……死人なんて出したら、十代目に合わせる顔が無ぇとこだった」
　獄寺の呟きに、山本もだな、と頷く。
「……しかし、足止めたぁどういうことだぁ？」
　スクアーロが言うと、獄寺は、
「そりゃ、俺達を十代目のところに行かせないためなんじゃ？」
「だったら幹部クラスが出てくる必要ねーじゃん」
　ベルが馬鹿にしたように言った。
「……おい」
　ふとスクアーロが、低い声を上げた。
「奴らの当面の狙いは確か、ランファミリーの陽明が持つ、『虹石』じゃなかったかぁ？」
　獄寺と山本はさっと顔色を変えた。

　雲雀のトンファーが、フレイの頭を狙って空を切った。

　ガギィィッ

　フレイは大剣でそれを受け止め、腰にぶら下がった匣にリングの炎を注入した。

ガチィィッ

「！」

雲雀はさっと身を引いた。

ブオォォォォ！！

出てきたのは、嵐属性の巨大な猪だった。

「行け」

フレイの命令通り、嵐イノシンは雲雀に向かって突進していった。

「！　ロール」

雲雀の言葉に、雲ハリネズミは素早く反応して壁を作った。

ドガァァァ！！

雲ハリネズミの壁に、嵐イノシンが衝突した。

一見して互角の勝負。しかし……

「……！」

雲雀は目を見開いた。

（ロールの防護壁が、削られている！？）

「嵐属性の特徴は『分解』。雲の炎では相性が悪い。諦めろ」

「っ……」

雲雀が顔を歪めた時だ。

『……フレイ、聞こえるか？』

フレイの耳に付けられた通信機に、通信が入った。
「ロキか。何だ？」
『こっちの任務は終わったぜ。そっちはどうだ？』
「雲の守護者と交戦中だ」
『そうか。だが足止めはもういいぜ。戻ってこい』
「……わかった」
フレイは嵐イノシンを匣に戻した。
「……！？」
「雲の守護者、この勝負はまたに持ち越しだ」
フレイは何かを投げつけた。

ボフンッ

視界いっぱいに白い煙が広がった。
「――！」
なりゆきをじっと見ていたツナは身を固めた。
煙に紛れて誰かがやられるかと思ったのだ。しかしそんなことは無かった。

煙が晴れた時にはフレイの姿は無かった。あの黒スーツの男達も居ない。
「逃げた、のか……」
ツナは息をついた。
雲雀に対し、優勢だったのになぜ？

雲雀を見れば、この世の終わりかと思うほどの負のオーラを背景に突っ立っていた。
ハイパーモードをといたツナはあ、ヤバい……と思った。
超直感ではなく、生き物としての生存本能が働いたのである。
クロームと一緒に後ずさっていると、後ろから聞き慣れた声が。

「十代目！」

ツナは振り返って安堵のため息をつきかけ――凍りついた。

「ご、ごごご獄寺君、その人達……」

「う〝お〝ぉい、元気してるか、ガキィ！」

「ししっ、ひっさしぶりー♪」

スクアーロとベルフェゴールはそれぞれのあいさつを口にした。

ツナは顔がひきつるのを感じながら、頭を下げかけたが、雲雀によって阻まれた。

「ワオ。久しぶりだね、天才君」

「ししっ、エース君じゃねーの。おっひさー」

二人の口調は穏やかだが、放たれる気配は殺気以外の何物でもなかった。

「ひ、雲雀さん！　落ち着いてくださいっ」

「う〝おおい、ベル！　争ってる場合かぁ！！」

今居る面々の中で数少ない常識人のツナとスクアーロが止めに入った。

「それよりガキ、陽明がどこに居るか知ってるかぁ？」

ナイフを持つベルを羽交い締めしながら尋ねるスクアーロに、雲雀を必死でなだめていたツナは首を傾げた。

「い、いえ……見てませんけど……」

そういえば学校にも来てなかった。そう言うと、スクアーロは顔を歪めた。

「だとぉ！？」

「ひっ」

大音量の驚愕の声にツナは短い悲鳴を上げた。

「マジィ……俺の読みが当たってりゃぁ……」

「あ、あの……？」
「聞け、沢田綱吉。奴らの目的は俺達の足止めだぁ。そして本当の狙いは――」
ツナは顔を強張らせた。
明ちゃん……！

明は呻いた。
「か、返して……」
「んなこと言われてあっさり返す奴が居るかよ」

路地裏にうずくまる明の前に立ったロキは唇を歪めた。
「これはリングに精製させてもらう」
「だ、め……！」
「身体がしびれるだろ。そういうツボを突いたから二、三日動けないぜ」
ロキはじっと明を見下ろした。
「おい、陽明」
「っ……？」
「いいこと教えてやる」
ロキはかがんで明に囁きかけた。
「ヘイムダルの死体、処理したか？」

「……」
「したならしたで、まぁいい。奴の死体を調べてみろ。あと、幹部連中の経歴もな」
ついでに、と前置きして幹部全員の名前を挙げるロキに、明は眉をひそめた。
「な、で……？」
「……ボンゴレX世に、アイツを止めてほしいんだよ」
ロキはここで初めて、辛そうな顔をした。
「じゃぁな。これはもらってく。……並盛に警戒線張っとけよ。うちのボスは本気だ」
ロキは『虹石』の入った袋を左手で弄びながら去った。
「……死体を、調べる？」
なんとか上体を起こした明は更に眉をひそめた。
「……随分荒々しい男ですね」
「！！」
明の肩がピクンと跳ねた。
恐る恐る振り返り、目を見開く。
「し、師匠！？」
「こんにちは、明」
赤い中国服に身を包んだ赤ん坊はにっこり微笑んだ。
続く…

標的２６　おとり（後書き）

２００９年最後の小説となりました！
飽き性な自分がよくここまで書けたなと思ってます……私って実はゴキブリ並にしぶといのかもしれません。

２０１０年もこんな感じで頑張っていくので、皆様もう少し沙伊の駄文に付き合ってください。
よいお年を！！

標的27　アルコバレーノ

ツナ達は公園に移動した。
雲雀の姿は無い。
「草壁から並盛に妙な連中が居るときいてね」
雲雀は顔をしかめてそう言っていた。
ツナはリボーンに教えられて雲雀の携帯番号は知っている。
何かあったら連絡すると言ったら頷いたので、協力する気はあるのだろう。

「……で、陽明とは連絡とれたのか？」
スクアーロに尋ねられると、ツナは首を横に振った。
「明ちゃん、携帯の電源切ってるみたいで……」
「ちっ。あのアホ女、十代目がこんなに心配なさってるってのによお」
獄寺が舌打ちをもらす。
ツナはひきつった笑いを浮かべ、しかしすぐその笑みを消した。
「リボーンも居ないし……俺、どうしたらいいんだろう……」
その言葉に、獄寺や山本、クロームはうつむいたが、ベルは辛辣な言葉を投げかけた。
「なっさけねー。それでよくうちのボス倒せたよな」
「……」
「俺らに勝ったんだからもうちょっとしっかりしてくんねーと殺すぜ？」

チャキッ

ベルにナイフを向けられ、ツナは悲鳴を上げた。
「ナイフ野郎、てめぇ！」
「だって事実じゃん」
「今はんなことやってる場合かぁ！」
ベルの頭にスクアーロの鉄拳が落ちた。
「いってぇ！」
「このアホガキがぁ」
スクアーロはため息をついた。
イタズラ好きな弟をしかる兄の図に見えるのは気のせいだろうか。
「こんな馬鹿馬鹿しいことしてる場合じゃねぇだろうが」
スクアーロはツナに向き直った。
「とりあえず、マーモンに頼んで陽明の居場所を……」

「その必要はありません」

ツナ達はハッと振り返った。
まず、明の姿が目に入った。
その次に、彼女の足元に居る、中国服を着た雲雀似の赤ん坊が視界に映る。
「明ちゃん！　それと……君は……？」
「はじめまして、沢田綱吉」
赤ん坊はにっこり微笑んだ。
「私の名は風（フォン）。アルコバレーノの一人です」
優雅にお辞儀する彼――風に、ツナもつられて頭を下げた。
「こ、こちらこそよろしく……」
「沢田君、そんなかしこまらなくても、だいじょ……」

明の身体がグラッと傾いだ。
「明ちゃん!?」
「っ……。大丈夫だよ……」
明は笑ったが、無理してるのがモロバレだ。ツナは慌てて彼女を支えた。
「ロキという男に妙なツボを突かれたようで、身体の機能がマヒしているようなんです」
風はそう言って、スクアーロの方を見た。
「S・スクアーロ。君は職業柄、医学の心得がおありでしょう。明の治療を手伝ってくれませんか?」
「ん゛? あぁ」
スクアーロはツナのかわりに明を支えた。
「沢田君……ごめん、『虹石』を奪われた……」
明の言葉に、ツナは目を見張る。しかしすぐに笑みを浮かべた。
「大丈夫だよ。絶対取り返すから」
「……ありがとう。……師匠」
明は風を見つめた。
「あの……」
「言わなくてもわかってます。今は休みましょう」
「……はい」
明は目を閉じた。
「沢田綱吉」
風はツナを見上げた。
「私は、君の家庭教師、黄色のおしゃぶりのアルコバレーノ、リボーンに頼まれ日本に来ました」
「リボーンに!?」
「はい。君達ヴァリアーもそうじゃないですか?」
風に尋ねられ、ふてくされていたベルは頷いた。
「跳ね馬の話じゃ、俺らを日本に行かせる考えはあの赤ん坊の考えなんだと」

「あ、あいつ……いつの間にそんなに暗躍を……」
ツナは顔をひきつらせ、そしてふと顔をあらぬ方へ向けた。
「十代目？」
「ツナ？」
「ボス……？」
首を傾げかけた獄寺達は空間の一部が歪んだことに気が付き、驚愕した。
「な、何だ？」

グニャリ

歪みが大きくなったと思ったら、そこから黒いフードを目深に被った赤ん坊が現れた。
「お、マーモンやっほー」
ベルはひらひらと手を振った。
マーモンはちろっとベルを見た後、浮かんだままツナを見下ろした。
ツナは驚いた様子もなく、ただじっとマーモンを見つめていた。
「フン……少しはマシになったみたいだね」
マーモンは鼻を鳴らしてふよ～と明のケガの手当てをしているスクアーロのもとに行った。
「マーモン、奴らのアジトは見つかったか？」
「いいや。うまく隠されてるみたいで、僕の粘写でも見つからなかったよ」
「そうか……」
スクアーロはちょっと顔を歪めた。
しかしマーモンは、スクアーロと同じく明の手当てをしている風を見て顔を歪めた。
「まさかまた会うことになるとはね、風」
「本当ですね、バイパー」

「その名で呼ぶな」
唯一見える口をへの字にするマーモンに風はクスッと笑った。
「相変わらずですね、貴方は。……ところで、沢田綱吉」
「は、はい」
「私達以外のアルコバレーノには会いましたか？」
「え。いえ……」
「ふむ……」
風は考え込むような仕種をした。

「多分、日本にアルコバレーノ全員がここに集結するでしょう。……ヴェルデ以外は」
「ヴェルデ？」
ツナは首を傾げた。しかし獄寺はハッと息を飲む。
「獄寺君、知ってるの？」
「十代目、覚えていませんか？　匣を作ったのは、三人の科学者で、一人は……」
「あっ」
ツナもようやく気が付いた。
「そうだ！　確かその内の一人の名前が、ヴェルデ！！」
「そうッス」
獄寺は頷き、風を睨む。
「おい。おまえの口振りから察するに、そのアルコバレーノは……」
「……ええ。リボーンの話では、アースファミリーのお抱え科学者になってるそうです」
風はうつむいた。
「あいつは自分の研究のためなら、何だって犠牲にする」
マーモンが苦々しげに吐き捨てた。
「僕も金のためなら何だってするけど、あの男の場合は異常だよ」
世の中金だよ、と言い切るマーモンが言うのだから、相当なものなんだろう。

（スパナも発明のためなら命も張ってたけど……きっとそれとは違うんだろうな）

ツナは未来で出会ったメカニックを思い出しつつ顔を曇らせた。

「ともあれ、ここに居ない人間をこけおろしにしてもしょうがないでしょう」

風は肩をすくめた。

「沢田綱吉。一応並盛には明の部下が警戒線を張っていますが、相手は未知の武器を使うため、普通の人間では歯が立たない。多分、警戒線はたやすく突破されるでしょう」

ツナ達は表情を引き締めた。

「気を付けて。多分、敵は君を真っ先に狙うはず」

「え！？」

「君は我々の中心なんですよ。ボンゴレX世」

風はじぃっとツナを見つめた。

「将を失えば軍は脆く崩れる。兵法の基本です。そして、我々の将は君なんですよ」

「お、俺が！？」

「逆に言えば、相手の将を討てば、こちらの勝利……ですよね、師匠」

明が言えば、風は頷いた。

「そうです。彼の居場所はうまく隠されてわからない。しかし、君で誘き出せるかもしれない」

「な！？　それってつまり、十代目を囮にするってことかよ！」

獄寺が叫んだ。

「リボーンさんと同じアルコバレーノだかなんだか知らねーが、十代目を囮にするのは、右腕の俺が許さねぇ！」

そう言ってずかずかと風に迫る。そのまま、彼を蹴り上げようとした。

「――！？」

しかし、そこに風の姿は無かった。

「風は力任せでは捉えられない」

いつの間にか、風は獄寺の肩に乗っていた。

「私と同じ、嵐属性のトリニセッテを持つ守護者なら、憶えていなさい」

「くっ……」

獄寺は顔を歪めた。

「沢田綱吉」

風はツナに柔らかく微笑んだ。

「私はいったん帰ります。また会いましょう。イーピンにもよろしく言っておいてください」

「え？　何でイーピン？」

「イーピンから聞いてないんですか？」

風は首を傾げた。

「イーピンは私の弟子なんです」

数秒の間。

「……えええええええええええ！！？」

ツナは絶叫した。

「イーピンがアルコバレーノの弟子ぃ！？」

「……本当に知らなかったんですね」

ふむ、と納得するように唸る風。

「ともあれ、帰ります。では」

風は爽やかに笑って姿を消した。

何と言うか……顔以外はまったく雲雀に似てない。
「それにしても……ハァ」
更なる厄介ごとが増えたようにしか思えないツナだった。

「そろそろ出てきては？」
風が誰も居ない路地の電柱に声をかけると、ライフルを持った金髪の赤ん坊が姿を現した。
「気付いてたのか、コラ！」
「無論です。他のアルコバレーノは？」
「誰にも会ってねぇ、今んところは。しかし……ラルはさすがに来ねぇよな」
寂しそうな彼の口調に、風は慰めの言葉を口にする。
「案外、アルコバレーノとしてではなく、ボンゴレ門外顧問チームとして来るかもしれませんよ、コロネロ」
「だな」
ライフルを担ぎ直し、コロネロは息を吐いた。
「今のところ、日本に居るのは私とコロネロ、バイパーの三人ですか。私はてっきり、ルーチェの娘が真っ先に来ると思ってましたが」
「俺もだぜ、コラ！」
コロネロと風は顔を見合わせる。
「しかし……」

「あぁ。わかってる」
二人は自身のおしゃぶりを見つめた。
微かだが、光輝いている。
「近いぜ、コラ！」
「ええ。ですが、誰なんでしょう？」
「ヴェルデとスカル以外だったら誰でもいいぜ、コラ！」
「……なぜスカルも？」
「役に立たないから」

……哀れな。

今頃くしゃみでもしてるであろう紫のおしゃぶりを持つ赤ん坊に、
風は同情したのだった。

続く…

標的27　アルコバレーノ（後書き）

少し遅いですが、新年あけましておめでとうございます！

とうとうアルコバレーノ続々登場って感じですね。次回は全員出せるよう頑張ります！

あとヴァリアーですが、スクアーロってベルのお兄ちゃん代わりに見えるのは私だけでしょうか？
年齢的にもそんな感じが……あ、次ボスを出そう（適当すぎる）

では今年もよろしくお願いします！！

標的２８　現れた大男

了平は人生の岐路（本人談）に立っていた。

「うーむ……」

汗が額ににじむ。眉間にしわが寄るのを感じた。

「どうしたものか……しかし……」

ブツブツ呟く了平に、周りのクラスメイトは不気味に思う。ただ、奇異の目は向けなかった。

「くっ……」

あぁ派手にぶちぎれるな、と全員が悟った時。

「き……極限にわからんぞおぉぉぉぉ！！」

席から立ち上がり、了平は吠える。

「うるさいぞ、笹川！」

担任の叱責が飛んだ。

以上、了平のテスト風景。

「……馬鹿？」
雲雀はひんやりした目を了平に向けた。
放課後である。ツナに頼まれ、雲雀はしぶしぶ了平に現状報告（報酬はリボーンとのバトル）をした後、了平のテストでの行動を責めていた。

「しかし、極限にわからんかったのだ、この選択問題」
「……それ、基本問題。教科書のままだよ」
ここまで頭の悪い人間が居るのか。雲雀は珍しく常識的な思考をしていた。
ちなみに雲雀の成績は上の中ぐらいである。
了平の成績は下の下。……何で高校に上がれたんだろう。

「し、しかし今はそんなこと言っとる場合では無いだろう！」
露骨に話をそらした。
「アースファミリーの狙いは陽　明の持つ……」
……忘れたようである。
「『虹石』」
「そう！　『虹石』の強奪であったな！　盗られたのか？」
「多分ね」
「うーむ。沢田はこれからどうするつもりなんだろうな」
了平が唸る。雲雀が口を開きかけた時だ。

「久しぶりだな、コラ！」

この教室には誰も居ないと思っていたので、二人はびっくりした。
窓の方を見ると、頭に大型の鳥を乗せた赤ん坊が乗り込んできた。

「おぉ！　師匠！！」
了平がまた吠えた。うるさいので雲雀は両耳を塞ぐ。
「一体極限にどうしたのだ？」
「リボーンに頼まれて来たんだ」
しかしリボーンの名前を聞いた時、雲雀は耳から手を離した。
「君……赤ん坊の知り合いかい？」
「腐れ縁だぜ、コラ！」
「ふぅん。じゃぁ強いんだ……」

チャキッ

トンファーの金属音が響く。
「噛み殺していい？」
「ほぅ。戦闘意欲旺盛だな」
コロネロは唇を歪めた。
「だが、今は相手にできねぇぜ、コラ！　今日、俺はあることを尋ねに来たんだ」
「あること？」
「おまえら、この町でアルコバレーノを見たか？」
雲雀は目を瞬かせた。
「いや。そもそも最近は赤ん坊の姿も……」

「俺は極限見たぞ！」

了平の大声に、雲雀とコロネロは肩を震わせた。
「……見たのか？　コラ！」
コロネロの問いに、了平と頷く。
「ヘルメットを被った、紫のおしゃぶりを持つ小僧を今朝な」
「！　スカルだな」
コロネロは呟いた。

「もうちょっと使える奴が来ればいいのに……」
何やら酷い言われようだ。
……そういえば。
「ねぇ、紫のおしゃぶりってことは、僕と……」
ドガァァァ！！
教室に、第三者が突っ込んできた。
フゥ太はイーピンと一緒にランボを追いかけていた。
それは別にいつものことだ。
……ただ、状況が少し違う。
「ガハハハハ！　牛丼、もっと速く走るんだもんね！！」
バチバチとスパーク音を上げる黒い牛に跨がりながら、ランボは上機嫌だった。
「ランボ！　ツナ兄に無許可でボンゴレ匣を開けちゃ駄目だよっ」
フゥ太の声も、聞こえているかどうか。
ランボと雷牛の『牛丼』の姿は遠くなっていく。
「ハァ、ハァ……。もーランボたら。あとでバテても知らないよー！！」

フゥ太とイーピンは諦め、地面に突っ伏す。
「まったく……全然変わんないね、ランボは」
一年経とうと、ランボはランボであった。
「同い年のイーピンはしっかりしてるのになぁ」
フゥ太はハァ、と子供らしからぬため息をついた。

「……あ」

小さな声に、フゥ太とイーピンは振り返った。
「！　クローム姉……」
「どうしたの？」
クロームは眼帯を付けていない左目を瞬かせた。
「ランボが、ボンゴレ匣を開けちゃって」
「牛の子が？」
クロームは丸い目をますます丸くする。
「大変だね……貴方も、イーピンちゃんも」
同情をにじませつつ、クロームは二人の頭を撫でる。
「ほっといたら、危ない……」
クロームは自分のボンゴレ匣を取り出した。

ドシュッ

霧フクロウが、翼を羽ばたかせた。
「お願い」
「ホー」
返事に一鳴き、霧フクロウの『ムクロウ』は空に舞った。
「？　どうするの？　クローム姉」
「空から牛の子を探すの……。このままほっといたら、駄目だから」
クロームは豆粒みたいに小さくなったムクロウを見上げた。
ムクロウはグルグルと空を回っていたが、やがてある方向に向か

って飛行する。
「！　見つけたみたい。行こ」
「うん！」
クローム、フゥ太、イーピンの三人は、ムクロウを追いかけて走り出した。

その様子を見つめる者が、二人。

「何やってるびょん、あのブス女」
「雷の守護者を、追いかけてるみたいだけど」
黒曜中の制服を着た二人は、クロームの姿を睨みつける。
「行くびょん！　あのアホ女、朝から姿消して、何やってたか聞きらしてやるびょん！！」
「……めんどい」
黒曜ボーイズ――もとい、城島犬と柿本千種は、クローム達の姿を密かに追っていった。

乱入者に真っ先に反応したのは雲雀だった。
制服の上着に隠してあった仕込みトンファーを構え、煙が晴れるのを待つ。
ここが彼の愛する並中だったらすぐさま動いていたろうが、今は

じっと相手の姿が見えるまでじっとする。
ようやく煙が消えてきた。

「久しぶりだな、コロネへぶっ」

コロネロのジャンプキックが、ヘルメット頭にクリティカルヒットした。

「スカル、てめえごときが何派手な登場してんだ、コラ！」
「うるさい！　俺がどんな登場しようと……ぐえっ。すみません、自重します……」
上下関係がはっきりした図である。
「極限にないがしろにされとるな……」
了平は師の行動に少しひきつった顔をした。
「師匠、そいつもアルコバレーノなんであろう。そんな風にしてよいのか？」
「いい！」
……スカルが少しかわいそうである。
「おい、スカル！　他にアルコバレーノは見なかったか、コラ！」
「ふ、風やバイパーには会ったが、他は誰も……あ」
「どうした？」
「いや、怪しいスーツ姿の奴らなら見たなー……と」
「アホ！　そりゃきっと敵だぜ！！」
また蹴り飛ばされるスカル。
それを目で追った後、教室を出る。
「どこへ行くのだ雲雀！」
「並盛に怪しい奴らが居るんだろ」
トンファーを握り直し、雲雀は唇に不敵な笑みを浮かべる。

「そいつらを全員、噛み殺してくるよ」

ランボは道のど真ん中で泣きわめいていた。
「お腹すいたー！！　ブドウ食べたいー！！」
いつもの如く、うざいほどの泣き声に、道行く人は皆、奇異な目を向ける。
声をかけないのは、普段からこの辺りでよく見かける子供だからである。
「……お、そーだ。モジャモジャにあめ玉があるんだもんね！」
頭に手を突っ込んで、もそもそと探る。
「ん。これ違う」
ポイッと投げ捨てる。ちなみに最初に引っ張り出したのは、紫色の――

ドガアアアアン！！

――手榴弾である。
「あめ玉どこだ～」
ランボが投げた手榴弾は、背後の男達をはからずも倒した。
「！　あったもんねっ」
ブドウ味のあめ玉を上機嫌で口に入れるランボ。
「よーし、もう一度牛丼ではしるもんね！」
ランボがボンゴレ匣にリングの炎を注入しようとした時――

「よう、ボウズ」

巨体を誇る大男がランボに覆い被さった。

「？　おっちゃん誰？」

「俺か？　俺はトールっつうんだ」

大男はニヤッと笑った。

「！　居たっ」

クロームはランボを見つけ、一瞬ホッとした。が、すぐ近くに倒れる男達と、ランボの傍に立つ大男を見て、顔を強ばらせる。

「クローム姉どうし……ランボ！」

後から来たフゥ太は息を飲んだ。

「下がってて」

「う、うん」

フゥ太とイーピンを自分の後ろに下がらせ、クロームは鞄から三又槍を取り出した。

石突きの部分で地面を突くと、クロームの頭上に子供ほどもある岩が現れた。

「行って！」

クロームの命令通り、岩は大男の背中にぶつかり、砕けた。

「……ん～？　何だ？」

「え……」

大男は何の痛みも無かったかのように振り返った。

「お、霧の守護者の片割れも居るな。一石二鳥とは上手いことというなぁ、日本人は」

大男は唇に笑みを刻んだ。

「俺はアースファミリーの『神格』、トールだ。よろしくな」

続く……

標的２８　現れた大男（後書き）

どうも～沙伊です！
今回いつもより短くなりました…なのに時間かかったし…

雲雀は成績良いよな～と沙伊は思います。財団作るぐらいだし。きっと得意科目は国語。本読むシーン多いし。
了平は……皆さん同意見だと思いますが…どうでしょう？

次はクローム・ランボｖｓトール中心に書きます！　では、また次回！

標的２９　ｖｓトール

クロームはトールと名乗った大男を睨み付ける。
ランボは何が何だかわからずトールを見上げていた。
「戦う気は無ぇんだよなー、俺」
「は……？」
「いやさー……俺こう見えても穏健派つうか？　フレイヤとかと違って争いごとで解決するの好きじゃねーの。だから大人しくボンゴレリングくれねぇか？」
「……駄目」
クロームはリングを付けた手を強く握り締める。
このリングを持つことは、骸の役に立つことに繋がる。絶対に手離さない。

強い意思を持ってトールを睨むと、彼はふぅ、とため息をついた。
「……めぇんどくせぇ」
トールのリングに雷属性の炎が宿った。

ガチッ
ドシュッ

トールの腰にかけられた匣から、スパーク音を纏った大蛇が飛び出た。
「じゃ～な～」
にこやかに手を振るトールを後ろに、蛇はクロームに襲いかかってきた。
「っ！」

よけようかと思ったが、後ろにフゥ太とイーピンが居ることを思い出し、霧フクロウで防御を取る。

ボオォゥッ

リングの炎を最大限にすれば、霧属性の炎は雷蛇を阻んだ。
リングの精製度と『覚悟』はこちらの方が上。更に匣兵器の性能も自分の方がいいはず。

大丈夫、負けない。

クロームは自分にそう言い聞かせた。

――気を緩めてはいけませんよ、クローム。

クロームはハッとした。
(骸、様……!?)
突然の骸の声に、驚いて前を見る。

防御が削られてる!?

クロームは愕然とした。
なぜ、と思っていると、炎の向こうでトールが笑ったのが見えた。
「嬢ちゃん、知らないのか？　死ぬ気の炎には、相性があるんだぜ」
「……！」

そうだ……忘れてた。

霧属性の炎の特性は『構築』、雷属性の炎の特性は『硬化』。
明らかに、こちらが不利。

それに骸が気を緩めてはいけないと言った。
つまり、油断できない相手だと言うことだ。
そこまで考え、クロームはリングの炎を更に上げようとした。
しかし、半瞬遅かった。

バシュウッ

「あ……！」
ほんの少し気を緩めただけなのに、雷蛇はムクロウの防御を突破した。
目の前に、大蛇の口が迫る。

骸様……！！

クロームはぎゅっと目を閉じた。

グイッ

突然の引っ張られる感覚に、クロームは目を開いた。
「何やってるびょん！　このブス女！！」
自分の右腕を掴む手、それを腕から肩、肩から顔へと目線をスライドさせていくと、見慣れた顔があった。
「……け、ん？」
「おーい柿ピー。そっちのガキ共はらいじょうぶか？」
「あぁ」
フゥ太とイーピンを抱え、千種は頷いた。
「千種？　二人共、何で……」
「勘違いすんなよ！」
犬はビシイッと人差し指をクロームに突き付けた。
「てめーが居なくなったら骸さんが困るからな！　べ、別におまえ

を助けたわけじゃねーびょん！！」
「犬……どもってるよ」
「うるへー、もさメガネ！」
「……怒るよ」
いつものやりとりを見てポカンとしていたクロームだったが、ふわっと微笑んだ。
「……ありがとう」
例を言うと、犬はぷいっと顔をそらした。

一方、トールは犬と千種の姿を見て、目を瞬いた。
「んん？　あいつら確か……」
記憶を辿り、ようやく思い至る。
「そうだ！　ボスが殺すなっつってた奴らだ！！」
「んあ？」
「……？」
犬と千種は顔を見合わせた。
「んーどうするかなー」
雷蛇を匣に戻しながらトールは考え込むような仕草をする。
「霧の守護者を倒す時、おまえらは俺の邪魔をするか？」
「当たり前らびょん！」
「めんどいけど……」
二人はそれぞれの武器を構えた。
犬は付け牙のような形のカートリッジ、千種はヘッジホッグと言うヨーヨーの形の武器だ。
「ふぅむ、そうか。……なら」

ガッ

「ぐぴゃ！？」
「ランボ！」

トールはランボの頭を掴んだ。
「こいつだけ連れていく。まだ子供だが、なかなかどうして才能がある。今から教育すりゃあ、いい戦士になるぜ」
「駄目……！」
クロームは幻覚を出そうとした。
「おっと。今したらこいつまで傷付いちまうぜ」
「っ……」
クロームは唇を噛んだ。
今攻撃して、ランボだけを無傷にできる自信が、クロームには無い。
トールの言う通り、これではランボも傷付けてしまう。
どうしよう……どうすれば……
「……うっ……」
ランボの口から、小さな声が溢れた。
「が、ま……………うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！」
いきなり大音量で泣き出したために、トールは驚いてランボを取り落とした。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」
バチバチバチッ
スパーク音を響かせ、ランボはボンゴレリングに炎を灯した。
「……！　みんな、離れてっ」
クロームは次に起こることを予感して犬達に下がるよう言った。
「な、何！？　何が起こるの！？」

フゥ太は目を白黒させた。
「いいから、早く……！」
クロームが急かす声と、匣が開く音が重なった。

ツナはハルに捕まっていた。

「さぁツナさん。今起こってることを教えてください！」
「わかってるよ！　話すから腕！　腕痛いって！！」
ツナはちゃんと説明する気ではあるが、ハルに腕を強く掴まれて説明の代わりに悲鳴が口からついた。
ようやくハルをなだめ、今の状況を説明できた。

――のだが。

「革命ですか！？　何だかとってもクールです！」
「どこがだよ！　目的のためには手段を選らばないって言ってるんだぞ！！」
ずれた感想を述べるハルに、ツナは半分憤り、半分呆れていた。

道端でたまたま顔を合わせたとたん、最近何かあったんですか！？　と訊いてきたのだ。
ハルに今の状況をいつ話そうかと機会を探していたところだったので、ちょうどよかったのかもしれない。
しかし、オーディン達のやってることをクールって……
ツナは頭が痛くなってきた。

「にしても、一体どこでそのことを？　京子ちゃんから聞いたのか？」
「はひ？　京子ちゃんも知ってるんですか？」
どうも違うらしい。
「うん、まぁ。じゃ、誰に聞いたんだ？」
「一年前にお会いしたことのある人からです」
「へぇ……」
誰だろ。父さんかな？
軽い気持ちでそう思ったツナだったが。
「外国の方で、頭にティアラを被った方です」
「……へ？」
「実は今日初めてて名前を知ったんですけど、ベルフェゴールさんというそうです」
………。

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ツナは絶叫してしまった。
「え、ちょっハル！？　あいつのこと知ってるの？」
「？　はい。前に竹寿司にご案内したことがあって。あ、今日はスクアーロさんというお兄さんと一緒でした！」
「いや！　あの二人兄弟じゃないから！！」
ツッコミを入れ、ツナは唖然とする。
あの、切り裂き王子と呼ばれるベルフェゴールと会話して、よく無事で居られたものだ。
ツナが改めてハルをまじまじと見ていると——

「ねぇ、君達」

ツナの背筋がピシィッと真っ直ぐになった。

振り向けばやはりと言うか、雲雀が居た。
「ひ、雲雀さん！　何でここにっ」
「ちょうどよかった。君に訊きたいことが――」
雲雀が突然トンファーを構えた。
ハルが背後で悲鳴を上げたが、ツナは彼女に同調せず、新たな気配に振り向いた。

「よぉ。ボンゴレX世に雲の守護者」

双剣を携えた美丈夫は不敵に笑っていた。

クロームは見た。
ランボの匣アニマルが、いつも以上に炎をまとっているのを。

「バカ者どもー！！　みんな死ねー！！」

ランボは雷牛に跨がりながら叫んだ。
同時に、雷牛は盾へと姿を変える。
「な、何だぁ！？」
トールが目を瞬いた次の瞬間。

バチバチバチィッ

雷の炎が、槍のようにトールを貫いた。
「！！？」
トールが目を剥いた。
「な、何なんら？　あれ！」
犬が叫ぶ。クロームはそれに答えられなかった。
ランボのボンゴレ匣がどういうものか、クロームはツナから聞いて知っていた。
しかし、話に聞くのと、実際に見るのとではまったく違う。
「……凄い」
クロームは思わず呟いた。

トールは腹を貫かれ、その巨体を傾がせた。
白目を剥くその姿は、死んだようにしか見えない。
クロームは僅かな恐怖心に目を逸らそうとした。
「……ふ」
小さな笑い声が聞こえてきた。
「ク、クローム姉……！」
フゥ太が悲鳴に近い声を上げる。イーピンがくっついてきた。
「どうし……！」
クロームは息を飲んだ。
「……効かねぇなぁ」
トールは壮絶な笑みを浮かべた。
「ど、どうして……」
「くくっ……雷属性の死ぬ気の炎の特性は『硬化』だぜ」

パチッ

トールの身体からスパーク音が弾けた。
「俺の身体には、雷属性の炎が駆け巡っているんだ。今の攻撃は、

ここで止まっちまってるんだよ」
トールは自身の服をめくり上げた。
ランボの雷撃が、割れた腹で止まっていた。……若干血がにじんでいたりするが。
「う、嘘……！！」
「あの攻撃が、何で効いてないびょん！？」
クロームと犬は叫んだ。
「しかし、俺も一瞬駄目かと思ったぜ」
トールは気絶したランボを見下ろした。
「連れていこうかと思ったが……やはり若い目は摘んでおくべきだな！」
トールは拳を振り上げた。
「！　駄目っ」
クロームが飛び出そうとした時――

シュルシュルッ

突然無数の触手がトールの腕を絡めとった。
「させないよ、トールとやら」
空間の一部が歪み、フードを被った赤ん坊がスゥッと姿を現す。
「！　あいつは確かっ」
犬が目を見開いた。
「あ、貴方……何で……？」
「見せてもらってたよ。なかなか金になりそうな映像も撮らせてもらった」
マーモンはふんと鼻を鳴らした。
「手伝ってあげるよ、クローム髑髏。不本意だけどね」
「えっ……」
「ほら、しっかりしなよ。この僕が力を貸したげるって言ってるの」
「あ、はっはい！」

思わず元気な返事をするクローム。
「トールとやら、いくら身体が頑丈だろうと術士二人に勝てるかな？」
マーモンは自信満々に挑発した。
続く…

標的２９　ｖｓトール（後書き）

こんにちは、沙伊です。
まず最初にお詫びを……

遅くなってすみませんでした！！

前に一週間ぐらいで～と言ってた自分を殴りたくなりました。
言い訳みたいになりますが、実は二次創作以外の連載小説を書き始めまして、そっちに気が行ってたもんで…
よかったらそっちも見てください。ちなみにこっちの連載は止めません。プライド（アリ並）が許さないので。

最後に、ここまで読んでいただき、ありがとうございます！

標的３０　注意

現れた男――ロキに対し、ツナと雲雀はすぐさま反応した。
ツナはハルを後ろに庇い、ポケットに手を伸ばす。
もっと速かったのは雲雀だ。
トンファーに炎を灯し、ロキとの距離を一息で詰める。
二秒とかかっていない。

ガギィィィィ！

「よぉ、雲の守護者」
「久しぶりだね。この間の決着を着けようか」
雲雀はさっと身を引いて、再びロキに突進した。
ロキはそれを軽々と受け止め、右足を振り上げた。
雲雀は後ろに身を投げて避け、すぐに体勢を立て直した。
そこへロキが大剣を叩き込む。雲雀はトンファーで受け止めた。
息つく暇もないとはまさにこのことだ。
ツナはハルを背にしながらこの戦いに手を出せないでいた。
「は、はひ！　雲雀さんも相手の方も凄いです！　デンジャラスです！！」
「う、うん。……でも」
妙だ、とツナは思った。
雲雀は人間離れしたロキの動きに互角以上の戦いをしている。
普通なら焦るはずだ。
なのにロキは、笑っている。

ツナが眉をひそめていると、ハルが「ツナさん！」と叫んだ。
振り返ると、一人の男が立っていた。
コートを着て、フードを目深に被った男だ。顔は傷だらけで、目は白く濁っている。
「……我は『神格』が一人、ホズ」
男は掠れた声を出した。
「沢田綱吉……おまえの命、もらう」
霧属性の炎が、目の前に迫った。

「術士が二人、か……」
トールは顎を撫でた。
「そりゃ反則だぜ、おいっ。まぁ、負けねーけど」
「強がりも今のうちだよ」
マーモンはそう言ってクロームに耳打ちした。
「――」
「……え？」
クロームは左目を丸くした。
「できるの？」
「ボンゴレリングと、僕が持つアレがあればね」
クロームはマーモンをじぃっと見つめた。
しばらくして、深く頷く。
「わかった。……犬、千種」

「んあ？」
「……何？」
「時間かせぎ、してほしいの……」
「はぁ？　そんなことする義理……」
「わかった」
「柿ピー！？」
唖然とする犬を尻目に、千種はヘッジホッグから針を飛ばした。
「フンッ」
トールは避けず、腕を盾にしてそれを受け止めた。
「そんなナマクラ針、俺には効かねぇよ！」
「わかってる。でも……毒はアンタにも効くだろ」
「！？　ぁぐっ」
トールは突然苦しみだした。
「しまった、毒針か！」
腕を押さえたトールは呻いた。
「犬、今のうちに」
「てめーに言われなくてもわかってるびょん！」
犬はそう怒鳴って、歯型のカートリッジを付けた。
「コングチャンネル！」
「！！」
犬が振り上げたぶっとい腕が、トールにぶち当たった。
「ぐ、このっ」
トールはよろめきながら体勢を立て直した。
「ちぃっ。調子に乗るな、獣モドキめ！」
トールは先程とは違う匣を取り出した。

ガチッ
ドシュッ

中から出てきたのは、巨大な金槌だった。

「い！？」
「アースファミリー幹部を……ナメるなぁ！」

ドゴオォォッ

降り下ろされた金槌は、地面のコンクリートを粉砕した。
紙一重でかわした犬は口をあんぐり開ける。
「ろんなもん喰ったらこんな力れるびょん……」
「犬、ぼーとしてたら」
千種の言葉が終わらない内に、トールは金槌を振り上げていた。
「喰らえ！」
「！」
犬は慌ててカートリッジを変えた。
人間業では考えられない動きで強力な一撃を避け、すぐまたカートリッジを変える。
「ウルフチャンネル！」
四肢を繰り、犬はトールの首元を狙った。
毒で動きが鈍ったトールは、避けきれない。

ガブッ

「ぐあっ」
トールは呻きながらも、犬に金槌を喰らわせた。
「きゃんっ」
「犬！」
らしくもなく叫ぶ千種に、トールが突っ込む。
「次は貴様だ！」
「っ……」
千種は毒針をトールの顔に放った。
「ぐおっ！　き、さまぁ……」

トールは顔を押さえながらも金槌を振り上げた。

ドガッ

ぐらりと巨体が揺れた。

「今のれやられると思うらよ！」

鼻にサイの角を生やした犬がトールに突進して怒鳴った。

トールは顔を歪め、金槌を持ち上げた。

「犬、千種。どいて！」

クロームが声を張り上げた。

犬と千種は慌てながらも身を退く。

次の瞬間――

闇がトールを覆った。

ハルは固く目をつむった。
今のは敵の攻撃。あぁハルはこんなとこで死んでしまうんですね……まだツナさんとキスもしてないのに！　……と思ったり。

そんな、ツナが聞いたら全力でツッコミそうな思考は、ハルの杞憂にすぎなかった。

「大丈夫か？」
「……はひ？」

閉じてた目をそろ～と開ける。
ツナの顔がドアップであった。

「……はひーーーーーーーーーーーーーーーーーー！？」

「……っと」
急に顔を上げたハルの額を、ツナはひょいと避けた。
普段ならぶつかってたろうが、今のツナはハイパーモードである。
それくらいは軽々避けられた。
「それだけ大きな声を出せるなら、大丈夫だな」
ツナは安堵のため息をついた。
ハルは今の自分の置かれている状況を把握しようと目線を下にした。

……空中に居た。

「！！！？」
「あいつ……殺す気で攻撃してきた。どうやら本気のようだな……」
プチパニックになってるハルに気付いてないのか、ツナは呟く。
ハルを落とさないために、ツナは彼女を強く抱き締めていた。
（はひー！　ツナさんに抱き締めてもらえるなんて、ハッピーデイです！！）
完全にずれてる思いのハルを抱き締めながらツナは地上に戻った。
「ここに居てくれ」
「はい～」
夢心地のハルに眉をひそめつつ、ツナはホズに向き直った。
「貴様の狙いは俺だろう。ハルは関係無いはずだ」
「……沢田綱吉」
ホズの声は聞き取りにくかった。
耳を澄ましていると、掠れた声が聞こえてきた。
「ボンゴレ十代目。年齢１５歳。身長１５７センチ、体重４６．５キロ、血液型Ａ型」
「……？」
「武器、初代ボンゴレボス、ジョットと同じグローブ。死ぬ気の炎の属性、大空。所有リング、ボンゴレ大空リングそして」

ホズの白い目が異様な輝きを灯した。

「我が、敵」

いくつもの矢がツナを襲った。

続く…

標的３０　注意（後書き）

更新遅れてすみませんでしたぁ！！！！

　ホントごめんなさい！続きを楽しみにしてくださってる方々に申し訳ないです……

多分、これからも遅れぎみになると思います。もう一つの連載と平行してやってるんで……

沙伊の馬鹿な謝罪はこれくらいにして、次回予告を。

次でＶＳトール編は終了すると思います。で、ツナＶＳホズが始まります。雲雀ＶＳロキもちらほら…

最後に、読んでいただきありがとうございます！

標的３１　ツナｖｓホズ　　雲雀ｖｓロキ

「……何だ、ここは」
トールは辺りを見渡した。
何もない、闇の空間だ。音一つしない。
幻覚なのは明らかだが……

『ようこそ、幻覚空間へ』

マーモンの声が響いた。
「！　どこだ!?」
「……ここ」
か細い声に顔を上げると、クロームがぽつねんと立っていた。
「ここはてめぇの幻覚かっ」
「クローム髑髏だけの力じゃないよ」
いつからそこに居たのか、マーモンがクロームの傍をふよふよと浮いていた。
「随分大がかりな……」
「それくらいやらないと、勝てそうにないんでね」

ヒュヒュヒュヒュ……

クロームとマーモンの姿がどんどん増えていく。

『さぁ、どれが本物かわかるかな?』
複数の声に、トールは顔をひきつらせた。
「何したんらびょん」
犬は地面に倒れたトールを眺めながら言った。
クロームとマーモンが何かをトールに放ったと思ったら、いきなり倒れたのだ。
「彼は身体は無駄に頑丈なようだったんでね。内側から攻撃したんだよ」
マーモンが手にリングを持ちながら答えた。
「どういう意味?」
「今彼は夢を見てる状態だ。僕とクローム髑髏と戦ってる夢をね」
マーモンは少し笑った。
「奴は夢から覚めない限り、僕とクローム髑髏の幻と戦い続けるのさ。まぁ、そんなことができたのは、これのお陰でもあるけど」
マーモンは懐から一つのリングを取り出した。
「何ら、それ?」
「ヘルリングと言ってね、強力な幻覚を作り出すことのできるレアなシロモノさ。使い方を誤れば、危険なんだけど」
マーモンは突然言葉を切った。

クロームも気付いた。
上空から来る、死ぬ気の炎を。

「みんな、伏せて！」
クロームが叫ぶ声と、嵐属性の炎が突っ込んでくる音が重なった。

「ナッツ！」
ツナが匣を開くと同時に、ナッツはその姿を変えた。

ズドドドドドドドドドドドドドド！！

無数の矢がツナに突き刺さるも、ツナ自身は無事だった。
ツナは手を払った。
矢が音を立てて地面に落ちる。
ナッツが変形した姿、？世のマント（マンテッロ・ディ・ボンゴレ・プリーモ）に、ホズは顔をしかめた。
「その匣兵器、データには無い。一体どこで手に入れた？」
「貴様には関係無い」
ツナは元の姿に戻ったナッツを肩に乗せ、構えをとった。
「……そうか。なら、こちらも本気でいこう」
ホズは左手をすっと下ろした。

何をする気だ？

ツナは相手の出方を警戒して、一歩下がった。

メキメキィッ

「……！」

ツナは目を見張った。

ホズの腕が、鋼鉄に覆われていく。

ものの数秒で左腕は巨大な槍に変形した。

「我が力で、地に伏すがいい。ボンゴレ？世（デーチモ）！」

ホズはツナに飛びかかった。

ガギィィィン！！

同じ紫の炎をまとうトンファーと剣がぶつかり合う。

「さすがボンゴレ最強の守護者と言われるだけあるな！」

「ボンゴレ？　そんなの僕には関係無いよ」

雲雀はロキの横腹に右手のトンファーを打ち込もうとした。

しかしロキは紙一重で避け、剣を持ち上げる。

怪力で振り下ろされた大剣を、雲雀はトンファーで受け止めた。

身体の重心を低くし、威力を逃がすと、だんっと踏み込む。

キィィィン！

「――！」

澄んだ音を立てて、大剣は遠くに飛ばされた。

ロキは舌打ちをすると、腰の匣にリングの炎を注入した。

ガチッ

ドシュウッ

雲属性の炎をまとった狼が、雲雀に襲いかかった。

「行け！　フェンリル！！」

「！　ロール、防御だ」

雲ハリネズミに命令すると、素早く防御壁が目の前に張られた。

ドシュウウウウウウッ

炎同士がぶつかり合い、物凄い音がそこら中に響き渡る。

ロキは、子供相手に互角の戦いなのに、笑みを浮かべていた。

それが気に入らず、雲雀はムッとする。

「……妙な男だね、貴方」

雲雀の一言に、ん？　とロキは顔を上げた。

「まるで殺気を感じない。負けそうなのに、余裕みたいだし。なめてるのかい？」

「いーや？　なめちゃいねーよ？」

ロキは笑みをさっと消した。

「ただな、こっちには勝つわけにも、負けるわけにもいかないんでな」

「意味がわからないよ」

「わかんなくていーよ。……今はな」

ロキのリングの炎が大きくなった。

グルルルル……

雲狼の唸り声が大きくなった。
雲雀ははっとしてトンファーを構え直した。

バキィィッ

案の定、雲ハリネズミの防護壁が破られ、雲狼が首を狙って襲ってきた。

ドギャッ

「ギャン！」
雲狼を殴り飛ばし、雲雀はぎろっとロキを睨んだ。
「それだけの実力があるのに……なぜ本気を出さない？」
「さぁなー」
ロキのいい加減な返事に、雲雀は顔を歪めた。
「……こうなったら、意地でも貴方の本気を出させてあげるよ」
雲雀は雲ハリネズミに目をやった。
「ロール、形態変化（カンビオ・フォルマ）」
呟くような声を皮切りに、雲ハリネズミの姿が変わり始めた。

イーピンとランボを抱えたクロームは、ゆっくり顔を上げた。
すぐ近くで、何かが溶けるシュー……という音がする。

目を凝らすと、コンクリートの地面が抉られていた。
ぞっとするクロームの肩に、誰かが触れた。
「！！？」
「大丈夫……？　クローム」
「ち、千種……あ！　犬は！？　それに術師の子とランキングの子は？」
「大丈夫。みんな無事」
千種が後ろを指差した。
見ると、犬とフゥ太が立ち上がるところだった。
マーモンは、煙が収束するように再び姿を現す。
「よかった……」
ほぅ、と息をついたのもつかの間、マーモンの目が鋭く（フードで見えないので推測）なったので、クロームは身を固めた。
「トールとか言う奴が居ないよ」
「え……！」
指摘されて周りを見渡すと、確かにあの大男の姿は無かった。
「ど、どこに行ったの……？」
「そんなの僕は知らないよ。それにしても……あの頑丈さは見せ物として金になりそうだったのに、残念だ」

『……』

全員、マーモンの強欲振りに言葉を失ったのであった。

意識の無いトールを抱え、フレイは嘆息した。
「無鉄砲なのは知ってたが……策も無しにぶつかっていく馬鹿が居るか」
守護者をぶっ倒してくる！　と言って威勢よく飛び出した結果がこれである。
「幹部は原則二人行動と決めたろうに。……おい」
フレイは背後に控えた部下に声をかけた。
「ホズの部隊に頼んでこの馬鹿の幻覚をといてやれ」
「はっ」
部下はトールをよろよろしながら背負った。
「しかし……あの実力といい、あの匣兵器といい、餓鬼にしては強すぎる」
そう、年齢に不釣り合いなほど、強い。
フレイは唇の端を持ち上げ、その場を後にした。

意識が現実に呼び戻される感覚に、骸は眉をひそめた。
脱獄するか外の干渉が無い限り、復讐者の牢獄から出ることは叶わない。
ましてやここは、最下層の牢獄だ。だいたいの囚人が、ここで一生を終える。

（なのになぜ、僕は現実に呼び戻されている？）

骸は左目を無理矢理こじ開けた。

水の中なのでよくわからないが、復讐者と女性らしき人が居るような……

（見覚え、ありませんね……）

ますます眉間にしわを寄せた骸に、誰かが呼びかけた。

『今から貴方を出獄させます』

耳から入ってきた声ではない。

そもそもこの中では、耳は無いに等しかった。

この女の声は、脳内で響いている。

（貴女は……誰ですか？）

『今はお答えできません』

きっぱり答えた女性の声に骸が憮然としていると、水位が下がってきた。

出獄の話は本当らしい。いや、もしかしたら罠か。

猜疑心まみれで水が完全に無くなるのを待っていると、女性の姿がはっきり見えた。

膝まである長い黒髪の妙齢の美女で、右頬に火傷の跡があった。

やはり見覚えがない。

身体中の管と手枷をはずされながら、骸は今度は顔をしかめた。

「彼と二人っきりで話したいのですが」

「ワカッタ。タダシ十分後ニハ、ソノ男ヲ連レテ出テイケ」

「承知してます」

女性が頷くと、復讐者達は闇の中に姿を消した。

骸は右目を擦りながらその様子を見つめていた。

「右目が痛むのですか？」

「随分長い間、封印されていたので」

答えながら、骸は女性を睨んだ。
「一体貴女は何者なんですか？」
「初めまして、六道骸殿」
女性は黒いワンピースの裾をつまんでお辞儀した。
「アースファミリー幹部ロキ様の部下、ヘルにございます」
「ロキ……」
骸はハッとした。
「なぜ彼の部下が僕を出獄させる必要があるんですか？　オーディンの差し金ですか？」
「いいえ」
ヘルは首を振った。
「ロキ様の望みは、一つ」
無表情のヘルは、整った顔も相まって、人形のようだった。
「オーディン様の暴挙を止めることです」
「……え？」
骸は目を見開いた。
続く…

標的３１　ツナｖｓホズ　　雲雀ｖｓロキ（後書き）

随分遅くなってしまいました！沙伊です。

骸出獄です。この場面は後々重要になるはずです（多分）
ヘルは忘れた方が多いかもしれません。最初の方で一回出てきただけなので。
彼女も重要人物になる予定です。

あと、マーモンのヘルリングですが、実際持ってるかは知りません。
完全な沙伊の捏造です。これからもっとこんなのが増えるかも……

では最後に、ここまで読んでいただき、ありがとうございます！

標的３２　勝敗

がぎぃぃぃぃぃん！！

ぶつかり合う音が辺りに響き渡った。

「ぐっ」
「ぬう！」

ツナとホズはそれぞれ吹き飛ばされた。
靴底を滑らせ、なんとか止まる。
（こいつ、とんでもないパワーの持ち主だが、何より）
ツナは顔をしかめて、ホズの腕を見つめた。
（あの腕。幻覚じゃない。一体何なんだ？）

「貴様はこう考えているんじゃないか？」

ホズの声に、ツナは肩を震わせた。
「なぜ幻覚じゃないのに腕が変形したのか、と」
「……」
「その質問に答える気は無いが、一つだけ教えよう」
ホズは、槍と化した腕を持ち上げた。
「我々『神格』は、人を超えた存在なのだ」

ダンッ

ホズの常人を超えたジャンプ力に、ツナは目を剥いた。
周りに建ち並ぶ民家より高い！
「死ね」
「っ」
ツナは真上から突き出された槍を空中に飛んで逃げた。
死ぬ気の炎で上空に止まりつつ、右手を振り上げる。
ブァッ
素早く腕を振ると、グローブから炎の塊が放出された。
カマイタチのように空を切って進む炎は、まっすぐホズに向かっていく。
「愚か」
ホズは槍の腕を突き出した。
バシイィィィ！
「……！？」
ツナは再び目を剥いた。
ホズの腕が、今度は巨大な盾になっていたからだ。
「そんな……」
「……ボンゴレ？世」
ホズは白濁した目をツナに向けた。
「恐れるに足らず」
ズダダダダダダ！！

霧属性の炎をまとった銃弾が無数に迫ってきた。
「ナッツ！」
「ガウッ」
ツナは再びナッツをマントに変え、銃弾をしのいだ。
（一体何なんだ、あの腕は!?　槍になったり盾になったり）
「気を抜いている場合か？」
背後からの声に、ツナが振り返ろうとした時――
ドガァッ
「がっ」
背中に強烈な一撃を喰らった。
勢いよく地面に叩き付けられたツナの周りが、ぼこりとクレーターのようにへこむ。
「ツ、ツナさん！」
ハルが泣きそうな声で叫んだ。
「だい、じょ、う……ぶ、だ……」
「全然大丈夫じゃないじゃないですかぁ!!」
ハルは涙目でツナに駆け寄ろうとした。
「来るな！」
「……ひぐっ」
ハルはしゃくり上げた。
「大丈夫だから……そこにいろ……」
「は……はい」
ハルは涙を拭きながら頷いた。
ツナはハルに少しだけ微笑みかけたのち、きっ、と上を睨んだ。

ホズはまだ空中に居た。
足から霧の炎が見える。
腕は、今度はハンマーになっていた。
腕を変形できるのか？　しかしなぜ？

考えているうちに、ホズが突進してきた。
ホズの両手がぐにゃぐにゃと歪み、今度は両手が巨大な刃になった。
「今度こそ死ね！　ボンゴレ？世！！」
凄い勢いだった。避けなければ、確実に殺されるだろう。

だがツナは……動かなかった。

「倒されるのは……」
ツナの両手に種類の違う炎が宿る。
片方は柔、もう片方は剛の炎だ。
「おまえの方だ！」
（喰らえ！）

Ｘバーナー！！

膨大な炎がホズに向かって放出された。

ロキはじっと雲雀を見つめた。
正確には、雲雀の人差し指に引っかけられたそれを。

雲ハリネズミが変化したのは、一つの手錠だった。
外側に雲の炎をまとった針が付いているが、おおよそ戦いに活用されるような物じゃない。
まぁ、物は使いようだが。

「おいおい……ケーサツごっこでもする気か？」
「ごっこ遊びなんてしたこと無いよ」
冷たく言い放ち、雲雀は手錠を投げた。
彼の手には、手錠に繋がる鎖が握られている。
（マジで俺を捕まえる気かっ）
ロキは後ろに後退した。
しかし手錠は、生き物のようにロキを追う。
なお逃げていると、後ろに気配を感じた。
「後ろががら空きだよ」
「っ！　ぐあっ」
背中をトンファーで殴られ、ロキは無様に転倒してしまった。
しかしすぐ体勢を回復させ、更に弾き飛ばされた剣を回収してみせた。
「ふぃー。さすが守護者最強と言われるだけあるな」
「当然だろ」
最強と言われ、気分をよくしたのか、少し胸を張る雲雀。
その姿に笑いを堪えながら、ロキは大剣を構えた。
「とはいえ、俺も負けるわけにはいかねぇ。今後のためにもな」
「僕も貴方に君に負ける気は無いよ。それに」
雲雀は両手に手錠二つ持って唇で弧を描いた。
「僕の匣の力は、こんなものじゃないしね」

「……！？」
（増えた……！？　そんな馬鹿な。……まさか）
ロキはハッと気付いた。
「雲属性の特徴、『増殖』かっ」
「気付くのが遅いよ」

ビュンッ
ガチャンッ

両手に手錠がかけられた。
「もう逃げられないよ」
「……ククッ」
勝利の笑みを浮かべた雲雀を見て、ロキは喉を鳴らした。
「逃げられねぇのは、てめえだよ！」

ブンッ
ドガッ

「ぐぁっ」
動きを封じるどころか、投げ飛ばされた雲雀は、地面に叩き付けられた。
「おいおい。俺は大人でおまえは子供だぜ。おまけに俺は常人を超えたパワー持ってる。力の差は明らかだぜ」
地面に倒れ込む雲雀を見下ろし、ロキはニヤッと笑った。
雲雀は眉間にしわを寄せる。これでもか、ぐらいに。
ぐぐっと立ち上がり、ロキを睨み付ける目は、完全に怒っていた。
「そー怖い顔すんなって。この両手の手錠、外してくれたら見逃してやるからさ」
「見逃す？　誰に向かって口をきいてるんだい？」
雲雀はすぅっと笑った。

やれやれとロキが腕を振ろうとした時。
「させないよ」
「……！？」

ガチャガチャガチャ！！

手錠が『増殖』して、腕の動きを封じた。
「何……！？　ぐぁっ」
腕が締め付けられる感覚に、ロキは呻く。
「だから言ったろ」
雲雀は一気に間合いを詰めた。
「逃がさないって」

ドカアアアアア！！

気温が上昇した。

Xバーナーはホズ以外誰も居ない空間に放った。
巻き込まれた人間は居ないはずだ。

ツナは神経を周りに集中させた。
殺気は無い。気配も無かった。

幻覚を使われた感覚も、無い。

逃げたか……

ツナははぁ、と息を吐いて額と両手の炎を消した。

（雲雀さんの方はどうなったんだろう）

手袋を外して、ツナは雲雀とロキの方に行こうとした。

「ヅナ〝ざあ〝ぁん！！」

ハルが涙で顔をべたべたにしながら抱き付いてきた。

「ハ、ハル！　どうしたんだよ！？」

「よかったです～！　つ、ツナさんが無事でぇー！！」

「ちょっ、わかったから離れろって！」

「あ、相手の人、とってもデンジャラスだったじゃないですか。もうハル、ツナさんが怪我するんじゃないかって……」

「わかったから、落ち着けって！」

ツナはなんとかハルを引き剥がした。

泣くとすぐ抱き付いてくる。これは最早癖なのか。

ツナがそう思い悩んでいると、別方向から、声がした。

「居た！　沢田君っ」

「！　明ちゃん！？」

明が風と一緒にこちらに走ってくる。

もう身体は平気なんだ、よかった……

ツナが安堵していると、明は真剣な顔でツナの前に立った。

「沢田君。大変なことがわかったよ」

「え？」
ツナとハルはきょとんとした。
「えと、ハルちゃんは……」
「あ、大丈夫。ハルは事情知ってるから」
ツナが言ったとたん、風はおや、という顔をしただけだったが、
明は大きな目を真ん丸にした。
「知ってるって……教えたの？」
「う、うん」
明は唖然としたようだった。
しかし、肩に乗った風につつかれ、我に返る。
「今はそんなこと責める場合じゃ無かったですね。沢田君、実はね、
敵の力の秘密と、共通点についてなの」
「力の秘密と……共通点？」
「そう」
明はゆっくりそのことを話し始める。

ツナは驚愕で目を見開いた。

ロキはぶっ飛ばされた。
雲雀にここまでするかっ、ぐらいの勢いで。

「げほっ。ゼェ……ゼェ……」
さすがに息が切れてきた。
「大人しく僕に噛み殺されなよ」
雲雀は勝ち誇った笑みを浮かべてうずくまるロキを見下ろした。

「……ククッ」
ロキは、喉の奥から笑い声を絞り出した。
「あぁ、確かに俺の負けだな、こりゃ。だが」
ロキの笑みに、雲雀は警戒心を掻き立てられた。
「倒されるとは、言っちゃ言ねーぜ！」

ブチブチィッ

「……！」
さしもの雲雀も、目を見開かずにはいられなかった。

自分で自分の腕をちぎった！？

言葉を失った雲雀の前で、ロキの腕が再び現れた。
雲雀の脳裏に、未来で戦った真六弔花のデイジーの姿が浮かんだ。

ロキは、彼のように腕を再生させたのだ！

「ハハッ。じゃ、逃げさせてもらうぜ！」
ロキは追撃しようとした雲雀の攻撃をあっさり避け、民家の屋根に飛び乗って逃走した。
残された雲雀は、呆然と立ち尽くす。

「あ、あの～。ひ、雲雀さん」

雲雀のところに近寄ったツナは、そろそろと声をかけた。
「……沢田綱吉」
氷点下零度の声に、ツナは凍りついた。
「僕は機嫌が悪いんだ……君を噛み殺していい？」

ツナが絶叫したのは言うまでもない。

獄寺と山本、了平にクロームの四人は、ヴァリアーの面々と対峙していた。

……敵対心剥き出しなのは、二名のみだが。

「ルッスーリアではないか！　極限に元気そうだな！！」

「おかげさまでね～」

「なぁ、スクアーロ。今度俺んち来ねえ？　寿司ご馳走するからさ！」

「お、いいなぁ。行かせてもらうぜぇ」

「あ、スクずりぃ！　王子も行くし。マーモンはどうするよ？」

「タダなら行くよ」

「わ、私も行きたい……」

こんな具合で友好モードだったわけだが。

「てめぇら……」

「貴様ら……」

二名ほど、納得しない人物が居るのだ。

自称右腕と自称補佐の二人、言うまでもなく、獄寺とレヴィであ

る。

殺気立ってる獄寺とレヴィに、山本とベルは不思議そうな顔をした。

完全に打ち解けた山本とベルにしてみれば、敵対する理由が無いのだ。

「何でそんな怖い顔してんだよ」

「ムッツリキモい。爆弾少年、いちおー今は敵じゃないだからいーじゃん」

「だがな……」

獄寺は顔をしかめた。

レヴィはキモいと言われて道端でへこんでいる。

「ツナは仲良くするよう言ってんだろ？　じゃ、俺らもツナの言う通りようにしようぜ！」

「俺達も、ボスに協力するよう言われてるしな」

山本とスクアーロが言うと、獄寺はうっ、と言葉に詰まった。

レヴィはルッスーリアとクロームに慰められ、ようやく復活した。

「ボスの考えてることが、俺には未だに解らん。なぜ、こいつらの味方をせねばならんのだ……」

「おまえ、ボスに逆らう気かぁ？」

スクアーロに言われ、レヴィはハッとした。

「そんなわけなかろう！」

「じゃあ、文句言う必要無ぇよなぁ」

「ぬ……」

黙り込むレヴィ。完全にスクアーロに言いくるめられている。

そんなふうにわいわい話していると、近付く者が、二人。

「楽しそうね」

全員振り返った。

少し離れた場所に、女性が一人、金髪のオールバックの男を従えて立っていた。
目元に花のタトゥーを入れ、首に鎖を通したオレンジのおしゃぶりをかけている。
「私も混ぜてくれないかしら?」
女性は穏やかな笑みを浮かべた。

続く…

標的３２　勝敗（後書き）

ようやく更新できました。

最後はアリアさんとγ出しました！この二人を見てると何だか切なくなるのは私だけでしょうか…

幻騎士や野猿に太猿も出す予定です。幻騎士は今回味方に徹してもらいます。

あと出てないアルコバレーノはラルですね。出て来ると思います。

リボーンももうすく帰ってくると思います。

すみません、何か予想ばっかで……

標的３３　明かされていく謎

ディーノはシャマルと道端で話していた。
内容は、リボーンの行方について。

連絡はつかず、居場所すらわからない。
イタリアに行ったという情報もあったが、そこからの足取りはまったく不明だ。

「リボーンの奴、ツナ達が大変な時に、何やってんだか」
「まったく、何で俺がヤロー共の世話をせにゃならねーんだが」

さっそく意見が食い違った。

「……シャマル。話すとこそこじゃねぇだろ」
「うるせぇ。俺にとっちゃ重要なことなんだよ。おまえと話すのも、めちゃくちゃ嫌なんだっ。カワイコちゃんとチューしてー！」
もう、怒りを通りこしてあきれた。
女好きもここまでくれば、いっそ立派である。
イタリア人は恋愛やその類に敏感だが、彼の場合、それに輪をかけて恋愛に積極的だ。
ただ、あまりそっちのことに興味無いディーノはあきれる他なかったが。
「……話を元に戻そう」
ディーノが咳払いすると、シャマルは顔を上げた。

「リボーンがわけのわからない行動をしているのはいつものことだし、意味が無いわけでもないだろう。問題は、行動の理由だ」
シャマルは「確かにな」と同意を示した。
ディーノは更に言葉を続けようとしたが、シャマルの注意は別に行ってしまった。
「あれ？　ディーノさんにシャマルさん」
「京子ちゃんじゃねぇの！　久し振りだね～♪」
「……」

頼むから誰かこいつの暴走を止めてくれ！

ディーノは切実にそう思った。
「あの……ツナ君知りませんか？」
京子は小首を傾げて尋ねてきた。
「ボンゴレボーズゥ？　知らねーなぁ。それよりおじさんとチューを……」

ビシィッ

しょうがないので鞭で背中を打つと、シャマルは倒れ込んだ。
「ツナ、学校に居ないのか？」
「はい……。山本君や獄寺君は知らないって言うし……」
京子はうつむいた。
「……悪ぃが、俺もツナがどこに居るかは知らねぇんだ。ごめんな」
「そう、ですか……」
京子はますますしゅんとなった。
「……心配そうだな」
「はい。あ、いえ、あの……」
京子は焦ったように言葉を濁した。

この娘、もしかして。

ディーノは眉をひそめ、すぐさま笑顔を見せた。
「ツナも大変だな。こんな可愛い娘を心配させて」
「そんな……」
「最近は色々あったらしいし」
「はい……」
「昨日も怪我したらしいし」
「え！？　もしかしてアースファミリーと……て、あ！」
しまった、という顔で手を口に当てる京子。
ディーノはやっぱな、と思った。
「知ってんだな。ツナのこと……アースファミリーのことも」
「……はい」
随分間を置いて、京子は頷いた。
「ツナから聞いたのか？」
「はい」
「ったく。あいつは勝手に……」
ディーノはがりがり頭をかいた。
「つ、ツナ君は悪く無いんです。私がっ」
「大丈夫だって。ツナを責めたりしないから」
ディーノは苦笑いを浮かべた。
「そうだ。京子、リボーンを最近見たか？」
「リボーン君？　いいえ」
京子はふるふる首を横に振った。
ディーノは更に質問しようとしたが、復活したシャマルに邪魔された。
「京子ちゃぁん！　哀れなおじさんを慰めてくれー！！」
「誰が哀れなんだか……」
ディーノは本日何度目かわからないため息をついた。

「あ、ディーノさん！」

聞き慣れた声が、後ろからした。

振り返れば、ツナとハル、明、そして知らない赤ん坊の姿。

（てかあの赤ん坊、恭弥に似てないか？）

ディーノは首を傾げた。

ディーノの視線に気付いたのか、雲雀似の赤ん坊は彼に向けてにっこり微笑んだ。

「はじめまして、跳ね馬ディーノ。私は風と言います」

「風？　リボーンと同じアルコバレーノの一人か」

前にリボーンから聞いた話を思い出し、納得する。

「京子ちゃんも……それとシャマル」

「俺はついでか！」

喚くシャマルにそういうわけでは、とツナがなだめた。

「ディーノさん。あの、話したいことがあるんですけど」

ツナの真剣な顔に、ディーノが表情を引き締めた。

突然現れた女性に、全員が身を固めた。

しかしその屈託の無い笑顔に、守護者達が、次いでマーモンも警戒心を解く。

その笑顔に、見覚えがあったからだ。

「んん〜？　誰だ、てめぇ」

スクアーロが眉をひそめた。

「初めまして。私はアリアって言うの。こっちは部下のγよ」

女性はにっこり微笑んだ。

その、無邪気な笑顔に、スクアーロも毒気を抜かれた顔をする。

「あ、えっと、アリアってまさか、ジッリョネロファミリーのかぁ……？」
「ええ。よろしくね」
アリアは笑みを深めた。

一方、獄寺達はやっぱり、と顔を見合わせる。
あの笑顔を見て、もしやと思ったのだ。

やはりこの人は、ユニの母親だ。
γが居る時点で、関係はあるとは思っていたが。

「君がルーチェの娘かい？」
マーモンはじぃっとアリアを見つめた。
「そうです。バイパーさん、ですね」
「その名で呼ぶな」
マーモンは思いっきり顔をしかめた。フードでほとんどわからないが。
「話は私、だいたい聞いています。マーレリングを守護するファミリーのボスとして、アルコバレーノの一人として、及ばずながら共に戦います」
ヴァリアーの面々は目を見開いたが、守護者達は力強い味方ができたことに少々ほっとした。
いくらヴァリアーが居るからといっても、相手に比べてこちらの戦力は少ない。
そこにジッリョネロが入れば、戦力不足を補えるどころか、大きな力になる。
十年後の世界で、獄寺達は彼らの力を知っているのだから。
ただ、僅かな不安もあるのだが。
「ボス、挨拶はいいが、そろそろ戻らねーと、他の奴らが心配するぜ」

γがアリアに耳打ちした。
十年後とあまり変わらない。あの時代よか、若いかと思ったが。
まぁ、ヴァリアーの面々も十年後はあまり老けてなかった。
大人にとっては、十年はあまり変化を与える年月ではないのかもしれない。
随分失礼なことを考えていた守護者メンバーはγに声をかけられ、はっとした。
「悪ぃな。会話にわり込んじまって」
「あ、いや、俺達は別に……」
獄寺はどう返していいかわからず、どもってしまう。
十年後は一時期敵同士だったため、仲良くできそうにない。
ツナや山本は、わだかまり無く接しそうだが。
「別に気にしてないんで、大丈夫ッスよ」

実際そうだった。

「ならいいが。ほらボス、行こうぜ。幻騎士や太猿達が心配してるだろうし」
γに肩を軽く叩かれ、アリアは「そうね」と踵を返した。
「あ、ねぇ、貴方達。沢田綱吉君に伝えておいてくれるかしら」
アリアは首を巡らせて、こちらを見た。

「ありがとう……て」

謎の言葉を残して、アリアはγと共に去ってしまった。
全員戸惑ってしまう。
ただ一人、マーモンだけは、その真意を読み取っていた。
(あいつにどんな借りがあるかは知らないけど、せいぜいがんばってよね)
マーモンは内心でそう一人ごちた。

「ありがとうって、どういうことだ？」
γは不思議そうな顔をした。
「何でもないの。私自身のことじゃないし」

私の娘、ユニと……貴方のことなのよ、γ。

心の中でアリアはそう呟く。
彼らが見た未来は、この世界の未来ではない。
この世界の未来は、また別物になるはずだ。
（この世界で私は、どれだけ生きていけるのかしら。そして）
ここには居ない、娘を思う。
（ユニは、どんな未来を選ぶのかしら）

アリアは一人、微笑んだ。

「奴らの能力の、秘密……？」

ディーノは首を傾げた。
確かに、アースファミリーの幹部達は常人離れした身体能力を持つが、それには何かからくりがあるということだろうか。

「実は」
ツナの代わりに口を開いたのは、明だった。
「前に虹石を奪われた時、ロキという男が言ってたの。それをヒントに突き止めたことなんだけど……」
明は言いにくそうに京子とハルを見た。
どうやらロキに言われたことを、彼女の耳に入れたくないらしい。
「それで、何が解ったんだ?」
ディーノが気を利かせてそう言うと、明は少しだけ感謝したような顔になった。
「奴らは、死ぬ気の炎を体内で精製できるの。でも、それは沢田君やヴァリアーのボス、ザンザスのように生まれついての能力じゃない。人工的な力なの」
「……というと?」
「奴らの体内には、リングの元になる特別な石が埋め込まれていた。しかも、指に付けたリングの精製度が高ければ高いほど体内の炎圧が上がるようにされてる」
「なるほど……人間リングってことか。しかし、それが奴らの力とどう関係あんだ?」
シャマルは眉をひそめて尋ねた。
「身体能力については、肉体改造によるものよ。問題はそこじゃない。奴らは、炎の特性を生かした特殊能力を持つの」
「どういうことだ?」
「例えばさっき、沢田君はホズって奴と戦ったんだけど、奴は腕を武器や盾に変化させた。あれは霧の炎の特性、『構築』によるもの」
ディーノは目を丸くした。
ホズとかいう奴の能力も驚きだが、何より、ツナがついさっき敵

と交戦していたことに一番びっくりした。
「ツナ、おまえ奴らと戦ったのか!?」
「は、はい。雲雀さんも……」
「恭弥も!?」
いつの間に……と思ってしまった。
「雲雀さんはロキと戦ったんですけど、あいつはちぎれた腕を再生したそうです」
「腕を……」
「多分、雲属性の『増殖』で、腕を再生させたんだと思う」
ツナ、明の話で、アースファミリーの秘密がだんだん解ってきた。
しかし疑問が残る。
確かに、そんな力を持つ幹部達なら、新興ファミリーなのに強大な力を持ってることもわかる。

しかし、これではまるっきり化物ではないか。
身体を変質させたり、失った四肢を再生させたりなど、怪物染みている。

「何で奴らは、そんな力を……」
ディーノの呟きに、明が再び口を開きかけた時、全然別方向から声がした。

「一言で言えば執念、でしょうね」

まずツナが反応した。
ビクッと肩を震わせ、すぐさま振り返る。
ツナに倣ったディーノは、驚愕で顎が落ちそうになった。

そこにいたのは、一人の少年だった。

クロームと同じ特徴的な髪型、赤い右目、整った面差し――

直接会ったことは無いが、ディーノにも見覚えがあった。

こいつは――

「骸！　おまえ、何でここに！？」

ツナが叫んだ。

「クロームに憑依……したわけじゃ、ない？」

「クフフ……さすがに超直感を持っているだけありますね。そうです、僕は本物ですよ」

骸はにっこり笑った。

事情を知っている面々は目を剥くが、京子とハルは顔を見合わせて首を傾げた。

「誰かなぁ、あの人」

「はひ、クロームちゃんと似てますけど……あ、クロームちゃんのお兄さんでしょうか！」

いや、違うから！！

ツナとディーノは内心でつっこんだ。

まぁ、クロームと関係があるのは、間違い無いのだが。

「そ、それで骸。何でここにいるんだ？　もしかして、脱獄してきたのか？」

「脱獄……と呼べるのか、どうか」

珍しく言葉を濁す骸。腑に落ちない、という顔をしていた。

ツナと顔を見合わせ、更に質問を重ねようとしたディーノだったが――

「！　皆さん、伏せてください！！」

風の声で、全員が反射的に動いた。
ツナと骸、ディーノは武器を取り出し、シャマルは地面に伏す。
明は、京子とハルをかばうように地面に二人を伏せさせた。

ズガガガガガガガガガガガガガガガ！！

銃声が連続で響き渡った。

続く…

標的３３　明かされていく謎（後書き）

遅くなってすいませんでしたぁ！！

でも沙伊のせいじゃありませんよ。テストのせいです（オイコラ

骸がようやくツナ達と合流！　です。クロームとの絡みは次か次の次になるかも……

読んでいただきありがとうございます！

標的３４　襲撃と再会

銃撃がやんだ。
硝煙が辺りに立ち込める。
「ククッ……これだけやりゃ、誰も生き残っちゃ居ないだろう」
部下にサブマシンガンをぶっぱなさせた男は、にんまり笑った。
「一般人も居たようだが、まぁ、別にいい、だ、ろ……」
男は驚愕した。
煙が晴れると、全員が生きていた。
誰一人として、死んでなかったのだ。
「あれだけの銃弾を炎の壁で防ぐとは……また強くなりましたね、沢田綱吉」
三叉槍を構えた骸は、含み笑いを浮かべた。
「おまえだって、幻覚で奴らの視線を逸らしたろう」
ハイパー死ぬ気モードのツナは淡々と答えた。
「な、な、な……」
「どなたか知りませんが、不意打ちはいただけませんね」
「……」
骸のセリフに、ツナはおまえがそれを言うかっ、という顔になった。
「何で生きているんだ！　三十本のマシンガンの銃弾だぞ！！」
「普通の武器が通用すると思ったのか？」
ディーノは肩をすくめた。
「だとしたら、相当なめられてるな、俺達」
「普通の人間だったら、効くどころか死んでると思うけど」

立ち上がった明はひきつった顔をした。
「……ふっ、ふふふっ」
男はうつむいたかと思いきや、笑いだした。
「気が狂ったんでしょうか。幻覚発動させる必要ありませんね」
骸は片眉を上げて言った。
「狂っただと？　んなわけ無いだろ。嬉しいんだよっ」
男は匣を取り出した。男だけではなく、部下まで。
「俺はシグルズ！　フレイ様の命により、貴様らを殺す！！」

ガチッ
ドシュッ

彼らの手に、嵐属性の炎をまとった武器が現れた。
「斧に鎌にハンマー……リンチでもんなもん使わねぇぞ」
シャマルはすすーっ、と後ろに下がった。
「シャマル」
「な、何だよボンゴレボーズ。言っとくが俺は戦わないぞ」
「……違う。二人を、頼む」
ツナが振り返らずに言うと、シャマルは「しゃあねぇな」と京子達に近寄った。
「つうわけでオジサンがみんなを守るからね～。その礼にオジサンとチューを……」

「近寄るな！」
「はひ！　変態です！！」

バキッ

明の蹴りとハルのパンチがシャマルにクリーンヒットした。

『……』

「……ツナ、六道」
「……何だ？」
「何ですか？」
「あぁゆう大人にはなるなよ」
「……」
「……」
ツナと骸は顔を見合わせ、次いで頷いた。

当初の目的を忘れそうなので、ツナ、骸、ディーノは武器を構え直した。
「ロマーリオ、おまえは下がってろ」
「うぃ」
部下に指示を出し、ディーノは鞭を持つ手の中指に、ゴツめの指輪をはめた。
「！　それは……」
ツナは少しだけ目を見開いた。
「お。気付いたか、ツナ。そうだ、これは」

ボウッ

リングにオレンジ色の炎が灯った。
「死ぬ気の炎を灯すリングだ」
ディーノは鞭を振るった。

バシバシバシィッ

炎をまとった黒鞭が、敵を打ち据えた。
バタバタと倒れる敵を見て、骸はほう、と感嘆の声を上げた。

「さすがですね、跳ね馬ディーノ。一度にあれだけの数を倒すとは。ですが」
骸の右目の文字が、四になった。
「僕も負けません」
ズバババババババ！！
骸は敵の群れに踊り込んで、三叉槍を振るった。
目にも止まらぬ早業で、敵は斬り裂かれる。
「ツナ、早くしねぇと、いいとこ持ってかれるぜ」
「……あぁ」
ツナは身を沈ませた。
ドンッ！！
一気にトップスピードに達したツナは、拳や蹴りを的確に打ち込んでいく。骸も負けじと槍を薙いだ。
そんな二人の合間を、ディーノの鞭が唸るように舞う。
十秒もしないうちに、敵の部隊は全滅していた。
「……」
唖然とするシグルズ。当然のことながら、余裕はぶっ飛んでいた。
「な、ななななな……」
「この程度の実力で、我々を倒そうとするとは、心外ですね」
骸は鼻で笑った。
「……あとはおまえだけだ」
ツナは拳を持ち上げた。
「ぐぅっ……この方法だけは取りたくなかったが」
シグルズは別の匣を取り出した。
ガチッ

ドシュウッ

匣から、大量の炎が放出された。

「気に入らねぇ」

ザンザスが放った言葉に、スクアーロはらしくもなくきょとんとした。

「何が気に入らねぇんだぁ？」

そう訊くと、ザンザスは眉間にしわを寄せて答える。

「アースファミリーのやり方だ」

「……あぁ、なるほど」

スクアーロはザンザスの意図を読み取った。

つまりザンザスはこう言いたいのだ。

奴らのやりようはマフィアらしくないと。

スクアーロも、事前に集めたアースファミリーの情報を見て同じことを思ったのだ。

マフィアは、どれほど強大な力を持っていようと、所詮は裏社会の住民。

表に出ることはなく、影響を与えることも掟で禁止されている。

なのに奴らは、表社会と強い繋がりを持っているのだ。

奴らの非戦闘員の幹部は、イタリアやその他の国の要人ばかりだ。
協力者にも、政治家や大富豪など、表の人間ばかりだ。
無論、ボンゴレにもそういう人間は居るが、少ない。
アースファミリーの場合、マフィアとしては異常なほど表社会との繋がりが強い。
おまけに協力者は、新進気鋭の若い者ばかり。
奴らと繋がりを持つ人間が居ないのは日本他小諸国のみだが……
これはどういうことか。

「餓鬼共の話じゃぁ、奴らは世界の変革を狙ってるとか」
「ふん。改革家気取りか」
ザンザスは不機嫌そうに吐き捨てた。
「……だがもし、奴らの狙いが本当にそうだとしたら、ボンゴレは邪魔だろうな」
ザンザスの言葉に、スクアーロは「だろうな」と返した。

沈黙。

二人して、椅子に座りながら沈思する。

三十秒経過――

一分経過――

二分経過――

三分経過――

ドガァァァ！！

「ってえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！　ザンザスてめっ、何しやがる！！」

沈黙に耐えきれなくなったザンザスが、近くの小さい丸テーブルを投げた。

狙いはスクアーロ。見事にヒットした。

「るせぇ、カスが」

「黙んのが嫌だからって物を投げんなぁ！　てめぇは三才児の餓鬼かっ」

普段は恐ろしいほどだんまりなくせに！

スクアーロは頭痛がしてきた。決してさっきの傷だけのせいではない。

昔からそうだ。

見た目も精神的にも自分より上のはずなのに、変なところで幼い。

おまけに自分以外にいさめる者が居ないのが始末に悪い。

結論を言えば、厄介ごとは自分に回ってくる。

嘆息しながら話を元に戻す。

「奴らが世界の変革を望んでいるなら、なぜマフィアを名乗る必要があるんだぁ？」

「さぁな」

「いや、少しは考えろよ。ボスのオーディンは頭のいい奴みたいだし、理由が無いわけじゃないだろいが……」

「んなもん知るか」

「……頼むから適当発言は止めてくれ」

スクアーロは頭を抱えたくなった。

「こちらに対する執拗な攻撃も、関係があるような気がするが……」

「……」

とうとう黙っちまいやがった。

スクアーロが深々とため息を吐いて立ち上がろうとした時だ。
部屋の扉が開いた。
「ボス、スクアーロ。報告があるんだけど」
マーモンが部屋に入ってきたため、スクアーロは浮かせた腰を下ろした。
「どうした？　マーモン」
ザンザスが促すと、マーモンは小さな口を開いた。

ゴオォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！

赤い炎に、ツナは顔を歪めた。
嵐属性の炎は、ツナ達を囲むように円を描いて燃え盛っている。
「匣内にチャージされた嵐の炎は、消す間も無くおまえ達を『分解』する！　これで終わりだあ！！」
シグルズが炎の向こうから叫ぶのが聞こえた。
「くそっ。このままじゃ、全員焼け死ぬぜ！」
ディーノは呻いた。
「随分物騒な匣兵器を使いますね、彼は」
骸はのんびりと言ったが、セリフほど呑気に構えているわけではない。
笑みは少し歪み、頬には汗が伝っている。
後ろの京子とハルから悲鳴が上がった。

ツナはオレンジの瞳を二人に向けた。
「大丈夫だ、二人共」
京子とハルは顔を上げた。
涙で潤んだ目を、ツナは覗き込む。
「俺が守るから」
ツナが笑みを向けると、二人の涙がぴたっと止まった。
それを確認して、ツナは炎に近寄った。

このまま放っておけば、焼け死ぬどころか灰すら残らないかもしれない。

だが。

「零地点突破」

初代（ファースト）エディション！！

ビキビキビビキィ！！

炎が凍っていく。
さっきまで、あれほど勢いよく燃えていたのに、だ。
「！　初代エディションか。そうか、その手が！！」
ディーノはハッと目を見張った。
気付けば、嵐の炎は氷の円陣に変わった。
ツナはその一部を殴って破壊し、シグルズの前に立ちはだかる。
「な、何だと……？」
シグルズは全ての攻撃が効かず、戦闘意欲を失っていた。
「が、餓鬼のクセに何でそんな力を！！」
「……さぁな」

バキィィ！！

ツナの右ストレートがシグルズに決まった。
シグルズは軽々と吹っ飛ばされ、道端の塀ブロックにぶち当たった。
額の炎を消したツナは動かなくなったシグルズを思いっきり睨んだ。
「京子ちゃんやハルを巻き込んだことは、絶対に許さない」
普段の状態にも関わらず、怒るその目は戦う時のと同じだった。
「……さっきはどうなるかと思ったが、さすがはツナだな」
ディーノが近付いてきてツナの肩を軽く叩いた。
「で……奴は死んじまったのか？」
「いえ。気絶してるだけです」
「そうか」
骸や京子にハル、風、シャマルや明も駆け寄ってきた。
「ツナ君！　怪我は？」
「無いよ。大丈夫」
ツナが笑うと、京子はほっと息を吐いた。

～♪

「？　携帯の着メロ？」
「あ、私だ」
音楽が流れたと思うと同時に、明がスカートのポケットから携帯を取り出した。
「もしもし。どうしたの？　うん……え！？　そんな、でも……。……わかった」
明は一瞬目を見開き、しかしすぐ冷静な顔付きに戻った。
そして携帯を切ると、淡々とした声音でとんでもないことを言った。

「……うちのファミリーが壊滅した」

――!!?

最初に反応したのは風だった。

「本当ですか?」

「はい……。ついさっき、アースファミリーに本部を襲撃されて、それで……」

「……お祖父様とお父様は?」

「……」

明は首を横に振った。

「! そんな……」

ツナは絶句した。

「うちのファミリーだけじゃない。同盟ファミリーも、幾つか……」

「ボンゴレはどうしたんだ?」

ディーノが尋ねた。

「ボンゴレは本拠地は無事だけど、支部のアジトは幾つか……」

「奴ら……俺達に対する執拗な攻撃は、外に目を向けさせないためにか」

ディーノがギリッと歯を食い縛った。

沈黙が、場を支配する。

誰も、何も言えなかった。

特にツナは、一番のショックを受けた。

一体何人が死んだんだろう、オーディンは何を考えてる?

呆然とする一同に、声をかける者が一人。

「何シケた顔してんだ、おめーら」

全員、特にツナは全身を大きく震わせた。

全員この声の主を知っているからだ。
ツナはバッと振り返った。
そして、黒スーツの赤ん坊を視界に収めて、思わず叫ぶ。

「リ、リボーン！」
「ちゃおッス」

最強の家庭教師、リボーンはにっと笑った。

続く…

標的３４　襲撃と再会（後書き）

遅くなってすみませんでしたぁ！！

前回といい、自分の行動の遅さには哀しい限りです……

えっと、とうとうリボーンが帰ってきました！
次回はリボーンと骸に動いてもらう予定です。
あと、オリキャラのロキも暗躍してもらおうかと。

門外顧問チーム、そろそろ出そうかな～…
でわでわ！

標的35　戦力集中

ツナは、目の端に涙が溜まるのを感じた。
「リボーン……おまえ……」
「相変わらず情けねー面だな、ダメツナ」
「な！　う、うるさいなっ」
ツナは拳で目尻を乱暴に拭った。
「おまえこそ今までどこ行ってたんだよ！　俺がどれだけ心配したか、わかってんのか！？」
「知らねーぞ、んなもん」
ばっさり斬り捨て、リボーンは骸の方を見た。
「無事出てこれたみてぇだな、骸」
「……あれは貴方の差し金でしたか」
骸は疲れたようなため息をついた。
「？？　骸、おまえリボーンと何かあったのか？」
ツナは首を傾げる。
「脱獄、というより出獄ですね、その時ある人物の頼みだと聞いたので」
肩をすくめる骸に、ツナはまた首を傾げた。
「……まぁいいか。リボーン、今までどこに行ってたんだ？」
「まぁ色々だな」
「その色々が気になるんだけど……」
「おいおい話す。それより、これからディーノの泊まってるホテルに行くぞ」

『……は？』

「お、おいリボーン。何で俺が泊まってるホテルに来るんだよ」

ディーノは顔をしかめた。

「ディーノが泊まってるホテルが一番ひれーからな」

意味不明。

軽く混乱する一同の中で、風だけが納得する。

「なるほど。皆集まって話をするというわけですか」

「そうだぞ。さすが風。理解が早くて助かる」

「付き合い長いですから」

フフッ、と笑う風に、リボーンもニッと笑い返す。

「決まりだな。ツナ、獄寺や山本達に連絡しろ。勿論雲雀にもだ」

「えぇ!?　連絡って……何て言えばいいの？」

「あぁ」

リボーンは笑みを深めた。

「ボンゴレ十代目ファミリー本格始動、とでも言っておけ」

並盛町の最高級ホテルが、ディーノが泊まってるホテルである。

何で平凡なこの町にこんな高級ホテルが？　とツナが内心ツッコんだことは少なくない。

で、そこの一番広い広間にツナ以下、守護者の七名が集まってい

た。

まだ何人か待たなければならないらしく、全員その場で待機する。

無論、このメンバーがじっとしてられるはずもなく……

ランボは暴れまわって獄寺に蹴られるわ、了平はいきなり叫び出すわ（例によって「きょくげーん！！！！」などと）、もう収拾不可能である。

ただ、微笑ましいこともあった。

骸と現実で会ったことで、感極まったクロームが、嬉し泣きしたのである。

いきなり泣かれたものだからさすがの骸もおろおろしていた。

だが、ようやくクロームの頭をそっと撫でて、彼女を落ち着かせた時には、心底ほっとした顔をしていた。

骸も、女の子に泣かれるのは苦手と見える。それともクローム限定だろうか。

もっと意外だったのは雲雀だ。

てっきり骸に問答無用で襲いかかるかと思ったのだが、そんなことはなかった。

「あの、雲雀さん？　いいんですか、骸のこと……」

ツナが訊くと、雲雀は珍しく肩をすくめた。

「クローム髑髏には借りがあるからね。それに、あれを邪魔するほど野暮じゃ無いよ」

雲雀はしょうがない、という顔で言った。

十年後で聞いた獄寺の話といい、雲雀は意外と義理堅いのかもしれなかった。

「不思議な感じです……人と一緒に居ることが」
骸はぼんやりと言った。
「周りにずっと人間が居ない状態でしたからねぇ」
「……」
クロームは骸の服を持つ手に力を込めた。
骸は本当に、復讐者の牢獄に一年以上も居たんだ……
ツナはうつむいた。
あの、冷たい水の中で、ずっと……

「十代目？」

ツナはハッとした。
顔を上げると、獄寺が心配そうにこちらの表情をうかがっていた。
「ご気分でも優れないんですか？」
「う、ううん！　ただ……こんな日が来るなんてなって思って」
「こんな日？」
「うん」
ツナは控え目に微笑んだ。
「みんなで、こんな風に集まれるなんてなって。だって、一年前まではこんな光景、ありえなかったからさ。何かちょっと……嬉しいなー、なんて」
段々照れ臭くなってきたツナは、笑ってごまかした。
「惰弱な思考ですね」
骸が言った。
「マフィアのボスとは思えませんよ。その甘い考えは、いずれ君の首を絞めますよ」
ですが、と骸はふいっとツナから顔を逸らした。
「それもまた、君のよさでしょうね」

『――！！？』

全員骸を凝視した。雲雀でさえ、目を丸くして骸を見つめている。
ここに居る全員が、骸が誰かを褒めるなど考えなかったのだ。
一方の骸は、何でこんなことを言ってるんだ自分は、という顔をしていた。
ツナが再び口を開きかけた時、扉が唐突に開け放たれた。
「よう、ツナ。連れてきたぜ」
まず最初にディーノが入ってきた。
そのあとに彼の部下が続く。
彼らと少し間を置いて、ヴァリアーの面々が入ってきた。
驚くことに、ザンザスの姿もある。
その相変わらず威圧感たっぷりの態度に、ツナは気圧された。
で、そのあとには明と、リボーン達アルコバレーノの姿が。
だが、最後に入ってきた女性に、ツナは首を傾げる。

あの人……誰かに似てるような……

左目下の花の模様、首からかけられたオレンジのおしゃぶり、どこまでも澄んだ、蒼い瞳――
そして、彼女を守るようにしんがりを務める二人の男を見て、女性の正体に気が付いた。

あ、あの人、ユニのお母さん！？

絶対そうだ。
微笑む姿はユニと面影が重なるし、何より後ろの二人はγと幻騎士じゃないか。
女性はこちらの視線に気付いたのか、ツナの方を見て笑みを深くした。

「沢田綱吉君ね」
「あ、はっはい」
ツナは固くなって頷いた。
「緊張しなくていいわよ。私はアリア。よろしくね、綱吉君」
アリアはこちらに歩み寄って手を差し出した。
ツナがその手をおどおどしながら握ると、アリアはツナの耳元に口を近付けた。
「未来ではありがとう。ユニの頼みを聞いてくれて」
「……え？」
ツナは顔を上げてアリアを見た。
「知って、るんですか……？」
「ええ。あ、でもγと幻騎士は知らないわ。特に幻騎士は、知らない方がいいでしょうし」
アリアの笑顔が翳った。
ツナが何も言えずに居ると、アリアはすっと離れた。
γと幻騎士が近付いてきたからだ。
「そいつがボンゴレ十世（デーチモ）か？」
「ええそうよ、γ」
「……強そうには見えんが」
幻騎士がぽつりと言った。
「てめーに十代目の凄さがわかるか！　このマロ眉がっ」
獄寺が幻騎士につっかかった。
ツナは獄寺を慌ててなだめる。
一方の幻騎士は憮然としていたが、γはけらけらと笑った。
「マロ眉か！　違いねぇ」
「γ……おまえな」
幻騎士があきれ半分の目をγに向けた。
「生まれつきだし、どうにもならないわよ」
アリアが慰めに入った。まったくなってないが。
「遊んでないで、さっさと本題に入るぞ」

リボーンの言葉に、全員表情を引き締めた。
「まず、俺達の狙いは、アースファミリーのボス、オーディンだ。最初に奴の居場所を突き止める」
「いきなり将を討つ気ですか」
風が言った。
「将を討てば軍隊は崩れる。兵法の基本でもある」
リボーンはそう返し、ツナを見た。
「ツナ、おまえオーディンはどこに居ると思う？」
「えぇ！？　えっと……日本？　あ、でももう居ない可能性だってあるよな……」
「そう。確かに普通に考えりゃ、もう日本を出てる可能性がある。だが、それは無い」
「え？　何で？」
「日本の空港は全て、俺の部下が見張っている」
ディーノが言った。
「部下の報告によると、オーディンが日本を出た形跡は無いそうだ」
「裏ルートを使った可能性は無いのか？」
γが尋ねた。
「それはありません」
別方向から答えが来た。
驚いて扉の方を見ると、なんとバジルが立っていた。
「バジル君！」
「お久しぶりです、沢田殿」
バジルはにこっと笑みをツナに向けた。
「親方様の命により、馳せ参じました」
「父さんが？」
っていうか、相変わらず古い言い回しだ。

彼はいつ正しい日本のあり方を知るんだろう。ツナは本気で心配になった。

「はい。それからラル・ミルチも」

バジルの後ろから、ゴーグルを付けた赤ん坊が現れた。

真っ先に反応したのはコロネロである。

「ラル！　久しぶりだなっ。元気してたか？」

嬉しそうな顔でコロネロが近寄ると、ラルはいきなり蹴りを放った。

コロネロはぎりぎりで避けるも、次いで放たれた右ストレートの餌食になった。

吹っ飛ぶコロネロ。地に落ちた彼に、慌てて風とアリアが駆け寄った。

「いってー……何すんだよ、コラ！」

コロネロが怒鳴ると、ラルはゴーグルをはずして彼をギロッと睨んだ。

「常に気を抜くなと教えたはずだぞ！　何だ、今のザマは！！」

鬼教官モード出たー！！

ツナが内心で叫んでいると、コロネロは喚きながらラルに向かっていった。

風がそれを羽交い締めして止める。

「てめぇら……ふざけてるとかっ消すぞ」

「う〝お！？　止めろザンザス！　んなとこで憤怒の炎使うなあぁ！！」

イラつき顔のザンザスを、スクアーロが必死で止めた。

カオス状態の部屋を静かにさせたのは、リボーンの銃声だった。

「おめーらやる気あんのか？」

静まる一同。

「話戻すぞ。裏ルートに関しては、門外顧問チームが押さえてあるから心配いらねぇ。つまり、オーディンは今日本から出られねぇんだ」

逆も同じだぞ、とリボーンは続ける。

ちなみに誰も口出ししようとは考えなかった。

「外からの援軍も奴らは望めねぇ。つまり、これは最大のチャンスだ」

リボーンはツナの方を見た。

「俺の言いたいことはわかるな、ツナ」

「……うん」

ツナはゆっくり頷いた。

「つまり……この機会に、一気に畳みかけろってことだよな」

「そうだぞ」

リボーンは満足げに頷き返した。

「戦力を日本に収束させたのもそのためだ。これでオーディンを倒す準備が整ったぞ」

「で、ですがリボーンさん」

獄寺がおっかなびっくり口を開いた。

「奴らが日本のどこに居るか突き止めないと、意味が無いのでは？」

「……その点は、心配いらないでしょう」

骸はぽつり、と言った。

「どうやら彼らの中に、こちら側のスパイが居るようですから」

『……！！？』

全員リボーンを見た。

リボーンはニッと笑う。

「スパイじゃねぇぞ。あいつは、協力者だ」

「……協力者？」

「あぁ。何しろ俺は」

リボーンは帽子をくいっと上げた。
「あいつの頼みを聞いただけだからな」

「ロキ」

オーディンに呼び止められ、ロキは振り返った。
「何だ？　俺部屋で寝てぇんだけどよ」
「そう時間は取らん。ただ一つ、訊きたいことがある」
オーディンは隻眼をロキに向けた。
「おまえは……俺になぜ付いてくる？」
「昔馴染みだから。それだけ」
ロキは肩をすくめた。
「難しいこと考えるの趣味じゃねぇんだよ。他行くとこねぇし。まぁ」
頭をガリガリかいて、ロキは肩をすくめた。
「あんたに感謝してんのも事実だな。だから恩返し。じゃなきゃ、誰がマフィアの幹部なんてクソつまんねーことやるかよ」
「……そうか」
オーディンは回答に納得したのか、踵を返した。
「明日会議をする。援軍を頼めない以上、手持ちの戦力でこれからどうするか決める」
それだけ言うと、オーディンはその場を去った。

「あんたには感謝してる。だからこそ……止めてみせる」
ロキはオーディンに聞こえないよう呟いた。

続く…

標的３５　戦力集中（後書き）

骸を動かすつもりが、見事に失敗しました……ロキも暗躍してないし……

門外顧問チーム、無理矢理ねじこんだも同然でしたね。バジルとラルしか出てないという……

次は家光出したいですね。

とりあえず幻騎士のマロ眉について書けたのでよしとします！（オイ

読んでいただきありがとうございます！

標的３６　休息

夕方、ツナとリボーンは帰路についていた。
いや、リボーンだけでなく、バジルとラル・ミルチも一緒だ。

「じゃ、父さんは今家に居るはずなんだね」
「そうです」
バジルは頷いた。
「親方様の奥方様にまったく危険が無いわけではありません。ですから、親方様は沢田家に……」
「そっか」
ツナはため息をついた。
「確かに、奴らが母さんを人質に取らない可能性は無くないよな」
そう考え、自分の思考が思った以上にマフィアのそれになってきたことに気付いた。
ツナは一瞬顔を歪め、無理矢理元に戻す。
「その考えだと、京子ちゃんやハルも危ないよな」
「その点も抜かりはない」
ラルは淡々と答えた。
「門外顧問チームのメンバーが、二人に隠密の護衛を付けてる。特に笹川京子は晴れの守護者の妹だからな。護衛が多い」
「そ、か……」
ツナは納得の言葉を口にしつつも、安心はできずにいた。

相手は匣兵器を使う。

対する門外顧問チームは、匣を持ってないはずだ。
アースファミリーに、どう対処する気だろう……

ツナが黙り込んだのを見て、バジルが心配そうにラルと目線を合わせた。
「おい、沢田」
「……っあ、何？」
「ぼーっとするな。いつ何が起こるか解らないんだぞ」
「うん……ごめん」
ラルに叱られたのも久しぶりだ、と思いながらツナは謝る。
「……帰ったら父さんとどんな顔で会わせたらいいだろ」
ツナは疲れたため息をついた。
なんとなく、顔を合わせずらい。

なんだかんだで家に着く。
「バジル君とラルも上がるよね。っていうかうちに泊まるんだっけ？」
「はい！」
「しばらく世話になる」
各々の返事を聞いて、ツナが玄関のドアを開ける、笑い声が被さってきた。
「あれ？　この笑い声……ランボ！？」

居ないと思ったら、先に帰ってたのかっ。

靴を脱いで、居間に足を向けると、案の定ランボと……

「ガハハハハハハ！」
「楽しいか、俺の話は！　じゃあ次はエベレストに行った時の話を……」

父さんが居た。
「あ、ツナ兄お帰りー」
「ただいま……フゥ太」
何だか帰ってくるなり疲れた。
ツナが何度目か解らないため息をついた時、イーピンの弁髪が見えた。
視線をずらすと、イーピンと、なんと風まで居る。
「あ、あれぇ？」
「お邪魔してます。沢田さん」
風はこちらに顔を向けて微笑した。
「なんだ風。おまえも来てたのか」
リボーンは笑みを浮かべながら言った。
「ええ。せっかくですから弟子に会いに来ました」
ね、イーピン。と風が微笑を向ければ、イーピンはこくこくと頷いた。
「そか……あ。そういえばビアンキは」
「お帰りなさい、リボーン！　愛しい人!!」
言ってる傍からビアンキがリボーンに抱き付いた。
頬をリボーンのそれに擦り付け、滂沱している。
「あらあらリボーン君帰ってきたのね」
台所から、大量の料理を盆に乗せて運ぶ奈々が出てきた。
多分家光のだろう。
「ご馳走いっぱい作ったから、いっぱい食べてね～。風君もバジル君も、えっと……」
「ラル・ミルチだ」
「そう。ラルちゃんも」
机に盆を置き、奈々は踵を返した。

「さぁ、もっと作らないと～」

まだ作る気なのーー！！

ツナは顎を落とした。

同じことを、一年前にも思った気がする……

その日、沢田家はいつも以上に騒がしかった。

束の間の休息だと、心の端で感じながら。

黒曜ヘルシーランド。
廃墟となっているこの場所に、骸とクロームは立っていた。
「久しいですね。ここも」
骸は淡く微笑んだ。
クロームはぴたっと骸にくっついて離れない。
正確には、骸の服を掴んで離さないのだ。
骸は微苦笑をもらしながら、一番奥の建物の中へ足を踏み入れた。
骸の記憶では、建物内はほこりっぽかったはずだが、小綺麗になってる。
犬や千種は隅々まで掃除する人間ではない。
となると。
「クロームが掃除をしていたんですね。綺麗になってます」
「……」
クロームは真っ赤になって頷いた。

「髑髏！　帰ってきたんら？」

ずかずかと歩く音が聞こえる。
二人が廊下の奥を見ると、犬がずんずんこちらに向かってくるのが見えた。
「一体ろこいってたんら！　柿ピーも知らないし……て、んあ……？」
「久しぶりですね。犬」

骸は固まってしまった犬に笑いかけた。
「む、骸さん……？」
「ええ。あ、先に言っておきますが、幻覚ではありませんよ」
骸が保証すると、犬は飛びかかってきた。

「骸さん！　え、マジで！？　クロームの悪いじょうらんじゃ！？」
「私、そんなことしないよ……」
クロームは少し傷付いた顔をした。
「じゃ、じゃあ復讐者の牢獄から脱獄してきたんれすね！」
「正確には脱獄じゃありませんが、まぁ出てこれたのは事実ですね」
「う、うおおお！　さすが骸さんれすっ。らてにナッポーじゃな……ギャン！！」
「それは関係無いでしょう！」
骸は犬の頭を容赦無くどついた。
「相変わらずそこを言うんですね、おまえは」
「ス、スミマセンレシタ」
犬は慌ててクロームの後ろに隠れた。
「犬……うるさい。一体どうし……」
犬と同じ、廊下の奥から姿を現した千種は、その場に釘付けになった。
「久しぶりです。元気でしたか、千種」
「……骸、様。なぜ、ここに。まさか、出てこられたのですか？」
珍しく動揺している千種に、骸は笑みを向けた。
「話は奥でゆっくりしましょう」

「……では、そのヘルという女が、骸様を出すよう言ったんですか」

千種は言った。

「らしいです。もっとも、そうするよう指示を出したのはアルコバレーノのようですが」

「ボンゴレも関係あるんれすか？」

「いいえ犬。どうやらここ最近、アルコバレーノは単独行動をしてたようです」

「ボス言ってた。ずっと居なかったって」

クロームが言うと、犬はつっかかった。

「らまってろ！　俺は骸さんに話しかけんらびょん！」

「……ごめん」

クロームはしゅんとした。

「……犬」

「何らよ柿ピー！　俺間違ったこと言ってねーびょん！！」

犬は千種に怒鳴った。

「落ち着きなさい、犬。……ここに来られたのも、ヘルが手引きをしたからです。勿論アルコバレーノも一枚噛んでるでしょう」

そこで骸は顔をしかめた。

なぜ自分は出ることができたのか、まったく見当がつかない。

簡単な交渉では、自分を出すことなど叶わないはず。

何か理由があるのか？

そう言えば、牢獄を出る際に、ヘルは……

そこまで考え、骸はハッと気付いた。

「……クフフフ。なるほど。僕は利用されているわけですか」

「骸様？」

クロームは首を傾げた。

「どうしたんですか？」
「いえ。ただ、不愉快に思っただけですよ」
「え？」
クロームは困惑した顔で犬と千種を見た。
が、当然二人も解らない。
三人を困らす気は無いので、骸は「何でもありません」とだけ言った。

（いいでしょう。今は貴方の思惑に乗ってあげますよ）

骸は不敵な笑みを浮かべた。

（ただし、全てが貴方の思い通りに進みますかね。彼の手強さは、貴方が一番知ってるはずですよ……ロキ）

携帯が振動しだした。
リボーンは手を上着の内ポケットに滑り込ませる。

メールか。

携帯を開くと、手短に地名と詳しい地図が画面に映った。
そして最後には。

『オーディンお抱えの部隊が動いた。
今回みたいなことを想定して日本に留まらせた奴らだ。
実力は「神格」ほどじゃねぇが、特殊な力を持つ。
気を付けろ』

メールを読み終え、リボーンは顔を曇らせる。
周りには気付かれないほどの、小さな変化だったが。

しかし、ツナはそれを見抜いた。

「リボーン？　どうしたんだ？」
「ん？　何でもねーぞ」
「嘘だろ」

こうもすぐに切り返せる奴だったか？

リボーンは驚いてツナを見つめた。
男にしては大きい目は、リボーンの思惑を探るように鋭かった。

最近感じてきたが……
普段のツナと、ハイパー死ぬ気モードのツナの差が無くなってきている。
ふとした時、死ぬ気丸を飲んだのかと思うほどだ。
いい傾向のはずだが……なぜか恐ろしい。

「……リボーン？」

リボーンは我に返った。
ツナの目が、心配するようなものに変わっていた。
「大丈夫か？」
「……ツナ」
「ん？」
「いや……何でもねぇ」
リボーンは自ら目を逸らした。
「ツナ、明日からまた戦いが始まる」

「……うん」
「気ぃ抜くんじゃねーぞ」
「わかってる」
ツナは頷いた。

そう。明日からまた戦わなければならない。
ツナ、その先にある選択肢を選ぶのは、おまえだぞ。

リボーンは心の中で、弟子にそう囁いた。

続く…

標的３６　休息（後書き）

こんにちは、沙伊です。
今回はツナと骸の休息編みたいのを書きました。
次の話、どうしよう…ネタが無い……（汗）
途中で止めるのは嫌だから、頑張りますけど……あ～～ほんとにどうしよぉぉ（泣）

標的３７　決断

闇の中で、何人もの人影が動く。

並盛の町を行き交い、周りを見渡す。

彼らの狙いは、一つ。

『全員、配置に着いたか？』

耳に付けた通信機から、男の声が響く。

『そろそろ時間だ』

男は、非情の命令を下した。

『守護者を、抹殺しろ』

山本は外の物音に目を覚ました。

寝ぼけまなこで外に目をやる。
特に何もない。
（風か……？）
ひときしり窓の外を眺め、また布団の中に潜り込んだ。

この時気付くべきだった。
ただの物音で、自分が目を覚ますわけないと。

敵は、じりじりと包囲網を狭めていた。

バキィッ

雲雀は紫の炎をまとったトンファーを男の頭に直撃させた。
男は一度は倒れた。が、すぐさまゆらりと立ち上がる。
「っ……」
雲雀は唇を噛んで後ろに下がった。

何だ、こいつらは。
噛み殺しても噛み殺しても起き上がってくる……
晴れの炎が身体から立ち上ってるが、そのせいか？

既に戦いが始まって一時間が経過してしている。
雲雀の息は、上がっていた。

一方奴らは息は上がっておらず、傷もすぐ治ってしまった。
奴らが付けたリングによるものだというのは解るが、どうやって奪おうか。
「……いい加減、君達の相手も飽きてきたな」
雲雀は腰の匣に死ぬ気の炎を注入した。
「ロール、形態変化（カンビオ・フォルマ）」
雲針ネズミの姿がどんどん変わっていく。
やがて、一つの手錠になった。
「君達まとめて、逮捕してあげるよ」
手錠の数が、一気に増えた。

ズガァァン!!
すぐ傍で響いた銃声に、ツナは飛び起きた。
「何っ？」
直感でリボーンの仕業だと解り、部屋を見渡す。
リボーンの姿は無かった。
代わりに居たのは、バジルとラル、そして獄寺だった。
「ご、獄寺君!?」

「夜分スンマセン、十代目」
獄寺は頭を深々と下げた。
「何でここに!?　ていうかリボーンは?」
「外だ」
ラルがゴーグルで隠れた目を窓の外に向けた。
ツナが慌てて窓に駆け寄ると、数人の男達との戦闘を繰り広げているリボーンが居た。
「!　アースファミリーっ」
「そうです」
バジルが答えた。
「どうやら奴ら、我々が寝静まった頃合いを狙ってたようです」
「そうなんだ……あ!　そうだ、母さん達は!?」
「十代目のお父様と姉貴がついてますから、大丈夫です」
「そ、そっか。……そういえば獄寺君、何でここに?」
ツナが首を傾げると、獄寺は正座を崩さず話してくれた。
「リボーンさんからメールが来て、今すぐ来いと。で、家を出たんスけど、敵が居たんで倒しながら来たんス。で、裏口からバジルとラルの手引きで家の中に」
ツナは「そうなんだ」と返事を返し、再び窓の外に目をやった。
目を細めてよく見ると、敵は素手だった。
しかし、手に嵐属性の炎が灯っている。
ザンザスが使ってたように、嵐の炎が手の中に集まっているのだ。

「あいつら……一体」
「十代目、リボーンさんから伝言があるんですが」
獄寺に声をかけられ、ツナは振り返った。
「リボーンから?」
「はい。敵のアジトが解った。今すぐそこを攻めろ、と」
「え!?」
ツナは目を見開いた。

「今すぐに!?　ていうか、リボーンはどうするの!!?」
「奴はあんな雑魚に殺られはしない。早く用意しろ」
「でもラル……」
言いかけ、ツナは口を閉ざした。

確かに、奴らのアジトが解った今、移動される前に攻めるのが吉かもしれない。
それに、向こうの総員は解らないが、現在は普段より手薄のはず。
今が好機かもしれない。

でもそれでは、リボーンを見捨てることになる。

どうすればいい？　どうすれば……

「そう言えば」
今思い出したというように、獄寺は口を開いた。
「もう一つリボーンさんから伝言があるんでした」
「え!?　何?」
「い、いや……それが、その……俺の口からは、ちょっと……」
獄寺が口ごもるのを見て、ツナは内容がどんなものか悟った。
「……どうせ、『馬鹿のクセに深く考えてんじゃねぇ、ダメツナが』とかそんなんでしょ」
「い　ぇ!?　よ、よく解りましたね、十代目。超直感スか?」
「うぅん。何となくそんな気がしただけ」

あいつらしい。

ツナは苦笑を漏らした。
何てことは無い。自分は信じてなかっただけだ。
あいつの強さを。

リボーンが負けるはずがない。
だってあいつは、世界最強のヒットマンなんだがら。

「……決めた。行こう」
ツナはそう言って、着替えと匣、そしてボンゴレリングを手に取った。
「他のみんなに連絡は？」
「あぁ、それなら」
獄寺は答えた。

「ヴァリアーの奴らが連絡しに行ってるはずです」

続く…

標的３７　決断（後書き）

ページ数はあるのになんか短い感じになりました。
何でこんなことになったかというと……

ネタが無い。

先がっ……思い付かないぃぃ！！（落ち着け
誰か助けてください状態です。
こんな馬鹿者ですが、今後ともよろしくお願いします。
沙伊でした。

標的３８　襲撃開始

クロームは布団越しに誰かに揺り起こされた。
「……誰？」
「僕ですよ」
「！！　骸様っ」
ガバッとばかりに起き上がると、骸がベッドの傍に立っていた。
「どうして……？」
「敵の襲撃ですよ」
「え……！？」
「僕もついさっきまで気付きませんでした。彼が教えてくれまして」
骸は後ろに目をやった。
フードを目深に被った赤ん坊が、ドアのところで立っていた。
「貴方……」
「ボスの命令に従っただけさ。あと、大金ももらったし」
マーモンはふん、と鼻を鳴らした。
「犬と、千種は……？」
「二人共無事ですよ」
骸に保証され、クロームは安堵した。
「安心してるとこ悪いけど、リボーンから伝言だよ」
マーモンが口を開いた。
「アースファミリーのアジトが見付かったから守護者はそこを襲撃しろとさ」

『……！』

二人は驚いて顔を見合わせた。

「……アジトの場所が見付かるのは解ってましたが、こんなに早く襲撃に向かえと？」

「らしいね。僕らヴァリアーは並盛に居る奴らの処理さ」

「で、でも……犬と千種は？　イーピンちゃんや……京子ちゃんやハルちゃんは無事なの？」

クロームは身を乗り出すようにして尋ねた。

「さっきも言ったけど、ヴァリアーは並盛の敵を処理する。つまりは彼女達を守ることに繋がるよ、一応はね」

「……よかった」

クロームは胸を撫で下ろした。

「とりあえず僕は外に居る敵を片付けるから、早く用意しなよ」

マーモンの姿が消えた。

「……さて、不本意ですが、沢田綱吉のところに行きますか」

「わ、私も行きます！」

部屋を出かけた骸は目を丸くした。

「……クローム、ですがおまえは」

「私も、骸様とボスの役に立ちたい。ボンゴレリングは骸様が持ってるけど、私も守護者だから」

骸は困り果てた。

最初から彼女を置いていくつもりだったのだが。

しかしクロームは、普段は従順な分、いざとなると頑固になるのだ。

滅多にそういうことにならないので、すっかり忘れていた。

しかも、その頑固さを拒否できた試しが、骸には無い。

骸はため息をつくと、微苦笑を浮かべた。

「いいでしょう。おまえも来なさい」
「！　はいっ」
クロームはわたわたと着替え始めた。
覗く気は毛頭無いので、骸は彼女に背を向ける。
(沢田綱吉の甘さがうつりましたかねぇ)
やれやれと首を振る。
人間らしさなど、とっくに失ったかと思っていたが……
いいことなのか、悪いことなのか、よく解らない。
思えば、復讐者の牢獄から脱獄しようとした時、犬と千種を庇った時点で自分らしくない。
変わっていってるのだろうか、自分は。
考えていくうちに、馬鹿らしく思えてきて、骸は思考を止めた。

了平の横には京子、そして目の前にはコロネロとルッスーリアが居た。
「その話は真か！　師匠、ルッスーリア！！」
「本当だぜ、コラ！」
コロネロは了平に劣らずでかい声で返した。
「しかし京子が……」
「その点なら任せて～。私達がちゃぁんと妹さんを守ってアゲル♪」
ルッスーリアは小指を立てて保証した。
「……あの」
ずっと黙っていた京子が顔を上げた。

「ツナ君も、お兄ちゃんと一緒に行くんですか？」
「そりゃそうよ。あの子はボンゴレの次期ボスなんだから」
「そう……ですか……」
うつむく京子に、ルッスーリアはまずかったかしら？　と言いたげな目をした（サングラスでまったく解らないが）。
「京子！　心配するな。沢田の強さは、おまえもよく知ってるだろう！！　無論、俺の強さもな」
了平は拳を作って安心させようとした。
「沢田と俺だけではない。タコヘッドや山本、雲雀やクロームも強い！　ランボだって、なかなかのものだ」
「……お兄ちゃん」
京子は唇を噛み締めた。

もどかしかった。
兄や、友達の力になれないことが。
今更だが、ツナが自分やハルに戦いのことを話さなかった理由が、ようやく解った。
自分ができることは、たった一つ。

京子は、精一杯の笑顔を見せた。
「行ってらっしゃい。気を付けて」
「……あぁ！　絶対帰ってくる！！」
了平は家を飛び出した。

了平が居なくなって、京子は目の端をぬぐった。
「大丈夫か、コラ！」
「大丈夫。心配してくれてありがとう、コロネロ君」
「大丈夫よ！　お兄さんは必ず帰ってくるわ」
「……はい」
コロネロとルッスーリアに励まされ、京子は淡い微笑を浮かべた。

「なぁんだ、全部倒しちゃってやんの」
「君は……」
雲雀は闇から現れたベルに、目を向けた。
「つまんねー。狩る奴居ねーしさぁ」
「……」
雲雀は無言のまま、ベルに背を向けた。
「ん？　どこ行くんだよ、エース君」
「僕の名前は雲雀恭弥だ。……赤ん坊に、草食動物の家に来いと言われてね」
すたすた歩きだす雲雀の後ろを、ベルが追いかける。
「なぁエース君」
「……」
「あいつら手錠まみれになってたけど、何したわけ？」
「……」
「カッチーン。王子キレたし」

ビュビュンッ

銀のナイフが投げられた。

カギギィィン！！

しかしナイフは、トンファーにより打ち落とされる。
「君を噛み殺したいのはやまやまだが、赤ん坊のことを無視するわけにはいかないからね」
「……つまんねー」
ベルは膨れっ面になった。
雲雀も群れたくはないが、リボーンの頼みである。ここで貸しを作るのも悪くない。
よってベルは無視。
……しかし、彼が噛み殺しがいがあるのも事実だ。

「ねぇ、天才君」
「あん？」
「僕が居ない間、並盛を守りきったら、君の相手をしてあげるよ」
「……ししっ。最初からそのつもりだし。じゃあ約束な。破ったらサボテンの刑な」
「何、それ。僕は約束は守るよ」
雲雀は不敵な笑いを浮かべてまた歩きだした。

（ししっ。スクアーロやマーモンと同じぐらい面白い遊び相手、ゲーット）
ベルはにんまり笑った。

「おきやがれぇ、山本おぉぉ！！」

蹴られた。思いっきり蹴られた。

あまりの衝撃に、布団から落ちた。

「って～。ス、スクアーロ！　何で俺の部屋に？」

「外見てみろ」

「外？」

山本は目を擦りながら窓を除き込んだ。

「……！」

ようやく気付いた。

外は、完全に敵だらけだった。

絶句する山本に、スクアーロはため息をつく。

「まったく。何で気付かねぇんだか。おまえ朝まで起きねぇタイプだろ」

スクアーロを見やると、彼は腕を組んで渋い顔をしていた。

山本はスクアーロの苦言に頬をかく。

「ところで、スクアーロは何でここに居るんだ？」

「……携帯」

話すのが億劫だ、と言いたげなスクアーロが、勉強机に目をやった。

ほとんど使われない机の上に放り出された携帯を開くと、着信とメールが一つずつ。

見れば、なんとリボーンからだった。

内容は、アースファミリーのアジトが見付かったから襲撃する、ツナの家に来いということだった。

「メールの音にも気付かねぇとは情けねぇ」

「ハハ……」

否定の言葉が見つからないので、笑うしかない。
そこではたと気付いたことがある。
「そういや、親父は？」
「ここに居るぞ」
スクアーロの後ろから父、剛がひょっこり顔を出した。
「このあんちゃんから聞いたぜ。……大変なことになってる見てえだな」
「……あぁ」
「がんばってこい！」
「へ？」
いきなり激励されて、山本はぽかぁんとした。
「詳しいことはよく解らねぇが、友達のために剣を振るうんだだろ」
「！」
「剣は意味を持ってこそ最大の力を発揮できる。……なぁに、心配するな。俺がここを守るし、このあんちゃんも力を貸してくれるからよ」
剛はスクアーロの肩をバシバシ叩いた。
「親父……スクアーロ……」
山本は父を見、次いでスクアーロを見た。
「う〝お〝おい、山本！　負けたら承知しねぇぞぉ！！」
スクアーロは傲慢な笑みを浮かべて言った。
「……あぁ！　がんばってくるっ」
山本は壁に立てかけた時雨金時を掴んだ。

着替え終わったツナと、獄寺、バジル、ラルが出てくると、リボーンはすでに、敵を倒し尽くしたところだった。
「ようやく起きたか、ツナ」
「うん……」
ツナが頷くのを見て、リボーンはにっと笑った。
「もうすぐ守護者全員が来るぞ」
「うん。あのさ、ランボはどうするんだ?」
尋ねると、リボーンは肩をすくめた。
「アホ牛は襲撃には向かねぇ。だから並盛で戦ってもらうぞ」
「そっか」
並盛に居ても、襲撃に加わっても、どちらも危険度は変わりない。なら、守ってくれる人間が多い並盛に居た方がいい。そう思った。
「お、来たな」
リボーンが目線をあらぬ方向に向けた。
見ると、雲雀が歩いてくる。
少々不機嫌そうだが、一緒に行ってくれるようだった。
ふと、感じた気配にツナは振り返った。
クロームと骸が居た。
クロームはともかく、骸は来ないかと思ったのに。
「こんばんは、沢田綱吉」
「む、骸! 来てくれたのか」
ツナがそう言うと、骸は唇の端を少しだけ上げた。
「君達だけでは不安ですからね。それに、オーディンが何を考えているのか、確かめたいですし」
なんというか、ひねくれた言い方である。
しかし来てくれたのは事実なので、「ありがとう」と言って笑うと、骸は複雑な表情を浮かべた。
「クロームも、来てくれてありがとう」

「私……骸様とボスと一緒に戦いたいから」
クロームの照れた笑いより、その言葉にどきりとした。
骸のためは解るが、まさか自分も含まれるとは。
何だか少し、くすぐったい。
「……一緒にがんばろうねっ」
「はいっ」
ツナが笑いかけると、クロームも満面の笑みで応えた。
「！　十代目、山本と芝生頭が来ましたよっ」
獄寺の声に顔を上げると、同じ道から山本と了平が走ってくるのが見えた。
「よっ。ツナ」
「極限がんばるぞ、沢田！」
夜中だというのに、二人は気合い充分なようだ。
ただ、二人の大声に、獄寺と雲雀が顔をしかめた。
「これで全員そろったな」
リボーンはニッと笑った。
「地図は全員の携帯に送信しておいた。確認してくれ」
守護者は自身の携帯（骸はクロームのを除き込んだ）を見た。
「これ……並盛の東南に位置する山じゃないのかい？」
真っ先に雲雀が反応した。
「さすが雲雀だな。途中までの道は解るな」
「解るけど……言っとくけど、僕は山に詳しくないよ」
「その心配はいらん」
ラルが前に出た。
「俺がアジトまでの道案内を勤める。言っておくが、ついて来れん奴は見捨てるからな」

出た、鬼教官モード！

ツナ、獄寺、山本は期せずして思った。

ただ、彼女がどんな人物かよく知らない雲雀、クローム、骸、了平はラルを見ただけだが。
「拙者も、及ばずながら助太刀いたします！」
「バジル君も？　心強いや！」
ツナは破顔した。
雲雀は同行者が増えることに、嫌な顔をしていたが。
「並盛は俺達に任せろ。安心して暴れてこい」
「うん……ありがとう、リボーン」
「あぁ。……そうだ、明が幹部連中の情報をくれた。そいつも送ったから道中見ろよ」
リボーンはそう言って、また銃を取り出した。
「また敵が来たな。早く行け」
「う、うん。行こう、みんな！」

『おう！』

全員（雲雀と骸は覗く）が応えるのを見て、ツナは走り出した。
迷いは、無かった。

続く…

標的３８　襲撃開始（後書き）

やっと襲撃編に突入しました。
本当はもっとあとにするつもりだったんですけど、ネタ切れで泣く泣くこんな早く……情けない……
……今気付いたけど、終わり近付いてる？
さ、作者のくせに本気で今気付いた！↑馬鹿
え、どうしよう！？
な、なんとかして引き伸ばそうか……うぅ。
と、とにかく、ここまで読んでいただきありがとうございます！
次の話も読んでくれたら嬉しいです！！

標的３９　侵入

アリアは顔を上げた。
「戦いが始まったわ」
隣に居たγは、アリアを見る。
「戦い？　……ってのはボンゴレの守護者達のことか？」
「ええ」
アリアは辺りを見渡した。
今のところ敵には会ってないが、そのうち会ってしまうだろう。
どっちにしろ、敵の殲滅が自分達のするべきことなのだ。
「γ、幻騎士。みんなに連絡して。周りをもっと警戒した方がいいって。敵は思った以上に行動が早いから」
「了解」
γと、ずっと黙っていた幻騎士は頷き、それぞれ携帯を取り出した。
「太猿か？　ボスが……」
「二ゲラ、ボスの新たな指示だ」
部下二人に目をやり、アリアは銃を取り出した。
（母さん……どうか、ボンゴレの若者達を助けてください）
アリアは一瞬目を閉じ、歩き出した。

山道は、当然のことながら荒れていた。
「まだ……距離があるの？」
ツナは少々バテ気味になっていった。
「まだだ。山の中腹辺りにアジトの入口があるからな」
ラルは厳しく言った。
「そ、そっか。みんなは大丈夫？」

「大丈夫だぜ」
「極限へっちゃらだ！」

すぐ返事を返したのは、山本と了平である。
獄寺は頷き、雲雀はふいっと顔をそむけたところを見るに、二人は大丈夫そうだが、骸は少し汗をかいていた。
最近まで復讐者の牢獄に繋がれていたのだから、体力が下がっているのかもしれない。
クロームなど、息が絶え絶えだ。女の子であるゆえに、かなりキツいのだろう。
「クローム、平気？」
「だ、いじょ……ぶ……」

……全然大丈夫じゃなさそう。

「辛かったら言ってね。我慢しなくていいから」
「う、うん……」
「みんなも、無理はしないでね！　無茶して怪我したら駄目だし」
全員返事はしなかったが、まぁ無理をすることは無いだろう。も

しもの時は、止めに入る。

数十分後、ラルが足を止めた。
「この辺りだ」
手振りで下がってろ、と指示し、ライフルを構える。

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！

鼓膜をぶち抜くような銃声に、全員耳を塞いだ。
硝煙が晴れ、土の中から現れたのは、灰色の鉄板だった。
「鉄の……壁？」
「ただの壁ではない。対炎のナノコンボジットアーマーだ」
ラルは顔をしかめた。
「ちょっとやそっとでは傷一つ付けられんぞ」
ラルの言葉に、ツナは少し考え、獄寺の方を向いた。
「獄寺君。君の匣兵器なら、壊せるんじゃないかな」
「俺のッスか？」
「うん。あの実弾の」
「！　なるほど、わかりました」
獄寺はツナの考えを察し、ボンゴレ匣を開匣させた。
「ラル、下がってろ」
獄寺が実弾ミサイルを鉄板に向けると、ラルは飛び退いた。
獄寺は実弾を発射させた。

ズカアァン！

ミサイルが鉄板にぶつかった。
煙がたちこめ、皆げほげほさせる。
その煙が晴れると、鉄板はものの見事に破壊されていた。「よし。次にクローム、六道！」

ラルに呼ばれ、クロームと骸は同時に顔を上げた。
「次はおまえ達の幻術だ」
ラルはライフルをかけ直した。

「居たぞ！」

黒スーツの男が叫んだ。
「あっちだ！　早くしろっ」
「逃がすな！　奴らボンゴレの守護者だぞ！！」
男達は口々に叫び、樹林の奥へ進んでいく……

「……行ったみたいです」
バジルが言うと、ほうとした空気が漂った。
「さすが骸とクローム。敵、居なくなっちゃったよ」
「当然です」
少しだけ胸を張る骸と対照的に、クロームは照れたようにうつむいた。
「よし。全員耳に通信機を着けたか？」
ラルが訊くと、頷く一同。
「よし。アジトに侵入するぞ」
ラルは穴と化した入口に、ロープをたらした。

「沢田、おまえから行け」
「う、うん」
ツナはロープをおっかなびっくり降り始めた。
骸の幻覚で周りから見えないようにされているとはいえ、やはり緊張する。
（ん、けっこう深い、な……）
よほど天井が高いところに出たらしい。
十分かけて、ようやく地面に足が着いた。
「……研究室？」
灰色の薄暗い空間に並ぶ鉄製の棚と、溶液に満たされた幾つもの筒状の水槽。
そこはまさに、研究室と形容するにふさわしかった。
しかも、溶液に浮かぶのは。
「……人？」
ツナは水槽に触れた。
中に居たのは、多くの管に繋がれた女性だった。
胸元まで水槽の底に繋がる機械に埋まっており、頭や腕に太いチューブが付けられ、口には人工呼吸器のようなものが付けられている。
それ以外の水槽にも、人が同じような状態で入っていた。
男や女や（圧倒的に男が多いが）が入った水槽に、ツナはぞっとした。
目を閉じているその姿は、生きてるかすら解らない。
「十代目ぇ！　大丈夫ですか！？」

獄寺の言葉で、ツナは我に返った。
「大丈夫！　降りてきて！！」
大声で返すと、獄寺が降りてくるのが見えた。
「な、何なんスか、ここは？」
「解らない……。多分、研究室みたいなのだと思うけど」
「こんな光景、昔見ましたね」
骸が降りてきた。
「昔って、あの」
言いかけ、ツナは言いよどんだ。
骸は一瞬顔を歪ませた後、いつもの読めない笑みを浮かべた。
「何の研究か知りませんが、ここには誰も居ませんね」
「みてぇだな」
山本が降りてきた。その後に、雲雀が続く。
了平、バジル、ラル、最後にクロームが降りて、全員が集まった。
「何なんでしょうか、ここは？」
バジルは眉をひそめて辺りを見渡した。
「極限に不気味なところだな」
「……人は、出払ってるのかな」
了平、クロームが言う。
だんまりしていた雲雀は、じっと水槽に付けられたプレートを見つめていた。
「どうしたんですか？　雲雀さん」
「これ……何て読むのかな？」
雲雀はプレートを指差した。
ツナが覗き込むと、アルファベットの羅列が並んでいた。
「な、何て読むんでしょう？　イタリア語かな」
「いえ、十代目。これはイタリア語じゃありませんよ」
獄寺が横からひょっこり顔を出した。
「確かにイタリア語ではありませんね。英語、でしょうか」
骸もプレートを見て、首を傾げる。

「う～ん……あ、バジル君、ラル。君達なら、解る？」
「え？　拙者達ですか？」
「うん。門外顧問チームって、イタリア以外の国に行ったりするんでしょ。前にリボーンから聞いたんだ。だったら、英語とかも解るんじゃないかな？」
「は、はい！」
バジルは駆け寄り雲雀の横からプレートを見た。
「えっと……『ベルセルク』、ですね」
「英語？」
「いえ。ドイツ語ですね、これは」
「何でまたドイツ語で……」
「おい、おまえら」
ラルが厳しい声を発した。
「こんなとこで油売ってないで、さっさと進むぞ！」
「う、うん」
全員バタバタとその部屋を後にする。
「……？」
その途中で、骸は妙な違和感を覚えた。
振り返ってみても、特に変わりは無いが……

「骸様……？」
「おい、骸！　置いてくぜっ」
「あ、はい」
クロームと獄寺に言われ、骸は足を進めた。

誰も居なくなった研究室。

ゴポッ……

溶液の中に、空気の泡が現れる。

『……』

溶液の中の人々が、いっせいに目を開けた。

続く…

標的３９　侵入（後書き）

前回同様、ページ数だけで中身は短かったです。
骸が感じた違和感の正体は次で明かす予定。
ていうか次の話どうするか思いつかない～どーしよー（汗）
誰かネタを提供してほしいです。

と、とにかくっ、がんばります！

標的４０　別行動

警備カメラの死角になる場所に座り込み、ラルは何やら取り出した。
「ラル、それは？」
ツナが尋ねると、ラルは淡々と話す。
「警備カメラの機能を一時的に麻痺させる機械だ。特殊な電波でカメラの回路を停止させる。ずっと六道とクロームの幻覚に頼るわけにはいかんからな。ただし、停止時間は十秒だ。それまでに向こう側に行くぞ」
「わ、解った。みんなもいい？」
「俺はオッケーッス！」
「俺も大丈夫だぜ、ツナ」
「極限準備万端だ！」
返事を返したのは、獄寺、山本、了平のみである。
バジルと骸、クロームは頷いたからいいものの、雲雀はまったくの無反応である。
「あの～、雲雀さん？」
「……」
不機嫌オーラ炸裂中。
無理も無いかもしれない。
群れることを嫌う彼が、こうも長時間誰かと居ることなどなかったろうから。

考えれば、集団で密集しての行動は、雲雀にとって初めてのはずだった。
「雲雀さん、いいですか？」
「……」
「雲雀さん？」
「……了解だよ」
ぼそり、と返してくれた。
相変わらず、不機嫌モードだけど。
「よし。作動させるぞ。俺の合図で動け」
ラルは機械のスイッチを押した。
「今だ！」
全員いっせいに走り出した。
無論、ぶつからないよう、一列でだ。

あと八秒――

「クローム、先に行って！」

あと五秒――

「山本！　早くしやがれ！！」
「解ってる！」

あと二秒――

「急げ！　時間が無いぞ！！」

零――

「……全員居るな」

ラルの言葉に、守護者は一様に頷いた。
「よし。では、ここから二手に別れる。沢田、おまえがメンバーを決めろ」
「は、はい！」
ツナはあわあわしながら守護者を見つめた。
「えと……術者の骸とクロームは、別れた方がいいよね」
「あぁ」
「じゃ、じゃあ雲雀さんはクロームと一緒に行ってください」
骸と一緒にしたら、衝突するのは目に見えてる。
「えっと……あと、ラルとバジル君はそれぞれ別れて行動してほしい」
「解りました！　では、拙者は骸殿と行きましょう」
「なら俺は、クロームと雲雀と行く」
「う、うん。あと、獄寺君は骸とバジル君の方に。山本とお兄さんはクローム、雲雀さん、ラルの方に」
「了解ッス」
「解ったぜ」
「極限任せろ！」
「うん。俺は、獄寺君達と行くね」
メンバーが決まったところで、ラルが新たな指示を出す。
「よし。俺達は警備システムを破壊する。沢田達は自家電源を破壊しろ。場所は解るな」
「うん。地図があるから」
ツナは上着のポケットの中の携帯を軽く叩いた。
「よし。敵に出会った場合、なるべく回避しろ。では、解散！」
『おう！』
それぞれのチームは、標的の元へ走り出した。

山本は足を止めた。
（雨の人……？）
（どうしたのだ？）
（しっ。敵が居る）
ひそひそ声で向こう側を見ると、黒スーツの男が二人、サブマシンガンを手に突っ立っていた。
（見張りだな。やりすごすぞ）
（面倒だね。噛み殺そうよ）
（駄目だって！　ただでさえ侵入時にあれなんだから、ここで暴れたらさすがに気付かれるって）
トンファーを取り出した雲雀を、山本はなだめる。

「おい、聞いたか？」

見張りの声に、全員が身を固めた。
「何がだよ」
「例の人体実験の被験者。全員成功だとよ」
「マジかよ！　かなり難しいと科学部の奴ら、言ってたのに」
「多分、覚悟の差だろうよ。全員自ら進んで被験体になったんだからな」
「覚悟ねぇ……俺ら下っ端じゃ一生無理たわ」
「ハハハ！　違ぇねぇ」
ゲラゲラ笑いながら、二人の男は歩み去る。
「……被験者？」

山本は首を傾げた。
「何か実験をしてるらしいな」
ラルは端末機械を取り出した。
「おそらく、幹部と関係あるだろうな。特に……」

ガシャンッ

『――――……！？』

足元が消失した。
何の前触れも無く、唐突に。
視界は、一気に降下した。

「……？」
ツナは足を止めた。
「？　どうしました、十代目？」
「今……何か聞こえた……」
「？　僕には何も聞こえませんが」
「拙者も……」
「？？　気のせいかなぁ？」
ツナは首を傾げて前に進んだ。
「それより……幹部のデータ、見た？」
「はい。……悲惨ッスね、けっこう」
獄寺は同意した。

「ホズって人……自分の国が紛争地域で、その戦いに巻き込まれて目を失ったんだ……」
「現在の目は、義眼のようですね」

バジルが言った。
「ホズだけじゃない。この人みたいに身体の一部を失った人は居ないけど、戦争や紛争で辛い目に会ってる……」
どんなに辛かったんだろう。
どんなに哀しかったんだろう。
戦いに身を置いてるのは自分達も同じだが、彼らの方が辛かったはずだ。
俺は、彼らを助けることができないんだろうか。
黙り込んだツナを見て、獄寺達は顔を見合わせた。
獄寺が何か言おうとした時、背後から殺気を感じた。
全員振り返る。しかし何も居ない。
「気のせい……じゃ無いよね」
「ええ……この殺気は本物ッス！」
獄寺はダイナマイトを取り出した。
気配が近付いてきた。
「来ます……！」
バジルは自身の武器を構えた。骸も、三叉槍を取り出す。
現れたのは、ごく普通の、壮年の男性だった。
シャツにズボン姿の、ここでは違和感ばっちりな服装。
それが返って、ツナ達の警戒心を煽った。
なにより疑いようの無いこの殺気。ただの人ではあるまい。
「誰だ？」
ツナはなるべく穏やかに言った。
男は何も言わない。
何も言わないまま、襲いかかってきた。

驚くことに、自身の爪に、死ぬ気の炎を灯して。
男はまっすぐ、ツナの首筋を狙った。

「いっ……た……」
クロームは起き上がった。
額を打ったらしく、生え際がズキズキする。
だが、だいぶ落ちたはずなのに、なぜそれだけですんだのだろう。
しかも、地面がなぜか不安定なような……

「……クローム髑髏、起きたならどいてくれるかい？」
「え……きゃっ」

クロームは下を見て飛び上がった。

自分はなんと、雲雀を下敷きしてしまっていたのだ。
更にその下には――

「クローム、雲雀、早くどいてくれ～」
「き、極限重いぞー！」

雲雀の下には山本が、更に下には了平が居た。
「ご、ごめんなさい……！」
消え入るように謝り、そそくさと雲雀から降りる。
動けるようになった雲雀はさっさと山本から降りた。

山本はよっ、と言って起き上がるが、了平は動かない。
「先輩、大丈夫ッスか？」
「……生きてはいるみたいだけど」
「わ、私のせい……？」
クロームはわたわたと了平を揺さぶった。
「晴れの人、大丈夫……？」
「き、極限へっちゃら、だ……クレープ」
「クロームだし、全然へっちゃらじゃないでしょ」
雲雀が珍しくツッコんだ。
「何を言う！　俺は極限元気だーーー！！　……あぐっ、せ、背中が……」

信憑性、零。

とりあえずクローム、山本、雲雀は辺りを見渡した。
「ラルの奴、どこ行ったんだろ？」
「あの人……居ない」
「人間の気配もしないね」
薄暗い空間は何も置いておらず、出口はおろか、入口すら無い。
「ラルだけ落ちなかったのか？」
「さぁね。とにかくここを出るのが先決でしょ」
「だな。色々調べてみるか」
先々と話を進める山本と雲雀に、クロームは付いていけず慌てる。

（落ち着かないと……骸様と……ボスの役に立つために）

いつまでもあの二人に頼るわけにはいかない。自分で考え、行動できるようにならなければ。
そう考えてるクロームの後ろから、高飛車な笑い声が響いた。

「ホーホホホホホホホホホホホホホホホホホ！」
聞き覚えのある声に、クロームと山本は振り向いた。
雲雀と了平も振り向くが、二人と違い、敵に対する臨戦態勢で声の方を見た。
「久しぶりね！　雨の守護者に霧の守護者！」
やはりと言うべきか、赤いドレスを着た金髪美女が、なぜかスポットライトに当てられて立っていた。
「おまえは確か……フレイヤ！」
山本が大声で名前を言うと、フレイヤは豊満な胸を張った。
「そう！　あんた達を抹殺するために現れたわよ！！」
完全上から目線の態度のフレイヤに、雲雀は衝撃的な一言を言った。

「何？　あの厚化粧の派手なおばさん」

空気が固まった（フレイヤの周りだけ）。
雲雀としては、見たままの印象を口にしただけなのだが。
だが、フレイヤにとっては、完全エヌジーワードだったりした。
「……雲の守護者。だ・れ・が、おばさんですて！？」
「誰って……貴方」
今度は指差しも付いた。
天然と常識はずれの人間しか居ない今、彼の言動を止める者は居ない。
当然の結果ながら――
「誰がおばさんだ！　この糞餓鬼ィィィィ！！」
フレイヤは、女性だと忘れたくなるほどキレた。

一方、怒らせた本人たる雲雀は、枯葉を見るような目でフレイヤを見つめていた。

つまりはまったく気にもとめてない。

更には無視して部屋の壁を調べ始めた。

「無視すんじゃないわよ！」

フレイヤは腰に装着した鞭を振るった。

しかしまっすぐ雲雀を打つはずの鞭は、三叉槍で軌道を変えられた。

「……！」

「させない」

クロームはフレイヤの前に立ちふさがった。

続く…

標的４０　別行動（後書き）

あれ？　骸が感じた違和感を書くはずが……書けてない（汗）
雲雀のおばさん発言にキレるフレイヤ書くのが面白すぎて（おい
次で書けるかなー……でもクロームとフレイヤのバトル一色になるかも。
女の戦いって、書いてて楽しいし…

とにかく、次回は適当になるかもしれません（コラ
ここまで読んでいただき、ありがとうございます！

標的４１　クロームｖｓフレイヤ、そして…

山本は雲雀の方を向いた。
「いいのか？　あの人怒らせといて」
「別に。僕は知らないよ」
雲雀はトンファーに死ぬ気の炎を灯した。

ドガァッ

トンファーが鉄の壁を思いっきり打った。
……が、僅かにへこんだだけで、ビクともしなかった。
「無駄よ。その程度じゃ壊れないわ！」
フレイヤは胸を張った。
「ここはもともと競技場なの。ちょっとやそっとじゃ脱出できないわ！」
「……あっそ」
雲雀はムスッとした。
「その顔はカワイイのに……何でボンゴレの人間みんなは生意気なんだか」
フレイヤは忌々しげに言った。
「……まぁいいわ。私のしもべに殺されなさい！」
フレイヤは鞭で床を打った。

ガチャンッ

突然天井が開いた。
そこからどさどさと巨躯を誇る男達が落ちてきた。
全員目がすわってる。はっきり言えば、イカれてた。
「私の部下の中で、トップクラスの実力者よ。彼らのパンチは一撃で人間を肉塊にするわ！」
フレイヤはもう一度鞭を振るった。
「行け！　下僕共っ」

「グ……グアアアアアアアアアアアアアア！！」

男達は咆哮を上げた。
ぶっとい腕を振り上げ、クロームに拳を振り上げる。
クロームは一瞬ひるみ、意をけっして三叉槍の石突きで地面を突く。

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド！！

霧の炎をまとった火柱が、男達をいっしょくたに焼く。
「早く、逃げ道を探して……！」
「！　わかったっ」
山本は頷いた。
「ふふん。言っとくけど出口なんて無いわよ」
フレイヤは鼻を鳴らした。
「ここは敵を追い込む罠なんだもの。変だと思わなかった？　あれだけの爆発があって、気付かれないと思ったの？」
全員黙り込む。幻覚でごまかせたかと思ったが、完全にごまかしきれてなかったようだ。
「あと出口だけど、さっきも言った通り無いわ。私を倒さない限りね」
守護者の顔が引き締まった。

「おっと、もしもの話よ。私自身も、そしてしもべ達も、簡単に殺せないわよ」

「……！！」

クロームは目を見張った。

火柱だけでなく、蓮の花で縛り動けなくしたのに……

力づくで、こっちに向かってくる！？

「！　いやっ……」

クロームは後ろに下がった。

その時、幻覚が緩み、男達が解放された。

「グギャアアアアアアアア！！」

男達は獣のような声を上げてクロームに襲いかかった。

「！！」

クロームはぎゅっと目をつむった。

ボス、骸様……！！

ドガアァァァ！！

男が一人ぶっ飛んだ。

「大丈夫か！？　クローム！」

「！　は、晴れの人……」

匣兵器のグローブを手に付けた了平に、クロームは目を見開いた。

「おい！　フレイヤとやら！！」

了平はビシィッ！　と効果音付きでフレイヤを指差した。

「貴様の部下の相手は極限に俺がしてやる！　かかってこい！！」

言下と同時に了平は走り出した。

「うおぉぉぉぉ！！」
了平のパンチが男達に叩き込まれる。
「加勢するぜ、先輩！」
山本は刀を振るった。

時雨蒼燕流、攻式・八の型――

男達の群れの中心に踊り込み、刃が煌めかす。

篠突く雨。

巨体が中を舞った。
「君達……」
雲雀がトンファーを構えた。
「群れすぎだね」

ドガガガガァ！！

トンファーが確実に男達の首や左胸を打った。
鬼神のごとき戦いっぷりに、敵も味方も思わず手を止める。
クロームもその一人だったが、我に返ってフレイヤを見据える。
「あの容姿……あの実力……超が付くぐらい私好みなのに、敵なのが惜しいわ」
フレイヤは感嘆のため息をついていた。
どうも、雲雀を見てのコメントのようである。
「さぁて……霧の守護者、クローム髑髏」
フレイヤはニヤリと笑った。
「私……女の子をいたぶる趣味は無いけど、敵は別」
フレイヤの鋼鉄製の鞭に、晴れの炎が灯った。
「せいぜい泣き叫びなさいな！」

「……負けない！」
クロームは三叉槍をぎゅっと握り締めた。

ズガアァン！

ザンザスの銃が火を吹いた。
「あらかた片付きましたね、ボス」
「……」
レヴィの言葉を無視し、ザンザスはずんずん歩く。
その途中で、耳の通信機のスイッチを入れる。
「おい、スクアーロ」
『んゞん？　その声はボスかぁ』
「そっちの首尾はどうだ」
『上々だぜぇ。山本の親父も、思った以上に強ぇしな』
おそらく向こうでお得意の傲慢な笑みを浮かべているであろう部下に、新たな指示を出す。
「並盛の西側に行け。まだ敵が残ってるかもしれねぇ」
『了解』
短い返事の後、プツッと通信が切れた。
「レヴィ、俺達は東側に行くぞ。その後……」

ザンザスは言葉を切った。
向こうから、誰かが走ってくる。
敵かと思って2丁拳銃を構えかけたが、すぐに下ろした。
「……ランファミリーの陽　明か」
「！　貴方は確か……ヴァリアーのボス、ザンザス……」
明は目を見開いた。
「……そっか。貴方も参加してたのね。なるほど」
納得したように頷く明に、ザンザスは疑問を投げかけた。
「こんなところで何してやがる」
「何って……」
明は肩をすくめ、太もものホルダーに手を伸ばした。
「決まってるじゃない」

ズガガァン！！

後方に銃弾が放たれた。
背後に身を潜めていた敵が二人、声もなく倒れる。
「加勢しに来たの。私の部下も配置させたし」
「足手まといだ。失せろ、カスが」
「そうもいかないよ」
明は再び肩をすくめた。
「いくらヴァリアー、ジッリョネロ、アルコバレーノが一点に集まったからって、この町を完全に守れるとは限らないでしょ。特に貴方の部下は」
「俺のやり方に口を出す気か、てめぇ」
「貴方んとこの幹部。ベルフェゴールだっけ？　一般人を殺しかけたよ」
「……」

あとで仕置き決定だ。

ザンザスは心の中で呟いた。
「ともあれ、私も戦うから……ってあれ？」
明が声を上げた。
ザンザスも気付いた。
この空間の変化を。

「術士が居るな……」
ザンザスは不機嫌に言った。
「しゃらくせぇ。この俺に幻覚が通じると思ってんのか？」
ザンザスは銃を持ち上げた。
「全員……かっ消す！」
銃声が、夜空にとどろいた。

ドガァ！！

「ギャッ」
男は殴り飛ばされ、壁に叩きつけられた。
「何だ……こいつは？」
ハイパー死ぬ気モードのツナは、男を見下ろした。

「やはり、アースファミリーの者でしょうか」
バジルは眉をひそめた。
「骸てめー、幻覚で俺達の侵入バレてねぇんじゃねぇのかよ！」
「そのはず、ですけれど……」
獄寺の剣幕に対し、骸は顔をしかめた。
「それよりこいつは一体……！？」

ガッ

男が突然起き上がり、ツナの首を掴んだ。
「が、はっ……」
「……殺す」
男が呻き声を上げた。
「排除……敵は排除、排除、ハイ、ジョ……」
「十代目！　じっとしててください！！」
獄寺の声に、ツナはハッとした。

ヒュンッ
ドガアァァァァン！！

ダイナマイトが男の頭に命中した。
力が緩んだすきに、ツナは男の手を振り払い、後ろに下がる。
「沢田殿！　大丈夫ですか！？」
「ゲホッゲホッ……あぁ……」
ツナは喉をさすった。
「！！　沢田綱吉、まだですよっ」
骸の声に、ツナとバジルは顔を上げた。

男は、頭を半分火傷で覆われながらなおも立っていたのだ。
「何でだ!?　モロに喰らったはずだぜ!!」
獄寺は目を見開いた。
「……妙ですよ」
骸は呟いた。
「かなりのダメージを与えられたはずです。痛覚を無視しない限り、こんなこと……!?」
突然骸は膝を着いた。
それどころか、頭を抱えて苦しそうな声を上げた。
「骸!?　どうしたんだっ」
「あ、頭が突然……う、ぐっ……」
骸は目をぎゅっと閉じた。
「い、一体何で……」

「閉ざされた記憶が動いた」

ぎくり、とツナは肩を震わせた。
ばっと振り返り、バジルと共に構えを取る。
「……!　おまえは、ホズ!!」
「久しぶり、でもないか。ボンゴレX世」
盲目の術士は目を細めた。

続く…

標的４１　クロームｖｓフレイヤ、そして…（後書き）

私は更新前に、一通り読んでから更新するんですが……

我ながらわけわからん。

えっと…作者の私ですら意味不明な作品に……大丈夫か、これ。

しかも次の話考えるたびにあぷあぷしてます……誰か助けてください（泣）

標的42　過去の実験と生物兵器

クロームは石突きで鉄の床を叩いた。
触手がフレイヤの腕に絡み付く。
「無駄よ！」
フレイヤは鞭で触手を断ち切った。
クロームはもう一度、石突きで床を叩いた。

ドササササッ

「!?　ひぃっ。へ、蛇！」
フレイヤは悲鳴を上げた。
どうも蛇が苦手なようである。
クロームとて蛇が好きなわけではないが、操る側なので冷静でいられた。
頭の中で命令すると、蛇達はフレイヤに頭を向けた。
フレイヤはひっ、と短く声を上げた。
蛇が向かっていくと、フレイヤの中で、何かが切れたようである。
「キィヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」
離れて戦っていた山本達が、思わず手を止めるほどの絶叫だった。
特にクロームは、大きな声が苦手なのでびっくりした。
隻眼を見開き、無意識に後ずさる。
「……ヒステリック」

雲雀がぼそりと言った。

だが、更に驚いたのはこの後だった。

「来ないでえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

フレイヤはなおも絶叫しながら、鞭を振るった。

晴れ属性の炎が燃え盛り、膨れ上がる。

鞭にかすめられた蛇は、一瞬にして膨張し、破裂した。

それを見たクローム達が目を見張る中で、蛇は次々に鞭に当たり、膨らみすぎた風船のように爆発する。

小規模でこちらに被害はないものの、瞠目するには充分だった。

だが、鞭の被害は蛇だけにとどまらなかった。

バシィィィィィィ！！

「！？」

鞭が了平の足元を打った。

了平は慌てて後ろに下がる。

クロームはそこで眉をひそめた。

あの鞭に打たれたのに、床はなんとも無い。

そういえば、触手を断ち切った時も何ともなかった……

「……！　もしかして、あの鞭は身体を活性させるの？」

なら蛇が膨張したのは、炎が注入されすぎて細胞が暴走したせいか。

もし自分や仲間に当たったら……

（あの鞭を封じないと！）

クロームは三叉槍を構え直した。

さっきは防がれた。でも今なら！
クロームは槍の石突きで床を再度叩いた。

ヒュンッ

「！　あ、やだっ」
フレイヤは鞭に絡み付いた無数の触手に目を見開いた。
クロームは左手をぎゅっと握った。
触手はギリギリとフレイヤの腕を締め上げる。
フレイヤは悲鳴を上げて、鞭を取り落とした。
「私達をここから出して……」
「誰が、出すもんですか！」
フレイヤはキッとクロームを睨んだ。
「お願い。これ以上やると、貴方の身体が……」
「持たないって言うの？　馬鹿にしないで！」
フレイヤは怒鳴り声を上げた。
「私は幹部として、肉体の強化手術を受けているわ。この程度で壊れるもんですか！」
フレイヤの声は、もはや狂的なものを含めていた。
その声音に、クロームはぞっとする。
「例え私を壊せても、あんた達に他の幹部の相手ができるかしら？　あんた達は結局っ」

ドンッ

フレイヤの足元から、火柱が吹き出した。
火柱は激しく燃え上がり、たちまちフレイヤの姿は見えなくなる。
しばらくして、ところどころ火傷を受けたフレイヤが倒れ込んだ。
クロームの手には、先程までフレイヤが付けていた、黄色の石がはめ込まれたリングがあった。

ドガッ

後ろから殴る音が聞こえた。

振り向くと、山本、雲雀、了平の三人が、敵を倒したところだった。

「どうやら敵は、極限に肉体強化だけに、晴れの炎を使ってたようだな」

了平は匣を開匣させて言った。

「山本、腕を見せろ。極限に治してやる」

「あ、どもっ」

山本は血がにじんだ腕を差し出した。

「……どうかしたのかい？」

クロームの様子がおかしいことに気付いた雲雀は、クロームを見た。

「……何でもない。それより、あれ」

クロームは、フレイヤの後ろにあった壁を指差した。

壁の一部が消失している。その先に、道が見えた。

「進もう。やるべきこと、やらなきゃ……」

「でもよ、クローム。おまえ大丈夫なのか？」

「怪我、してないから……」

「俺が言いたいのは怪我じゃなくてさ」

山本は頭をかいた。

「その……何ての？　心の方っていうかさ」

「心……？」

「うん、まぁ。何でか解んねーけど、心が傷付いてる気がしてさ」

クロームが目を見開く中、山本はにかっと笑った。

「何か俺にできることがあったら言えよ。俺達仲間なんだからさ！」

「なか、ま……」

「そうだぞ！」

了平は大声で同意した。
「困った時は極限助けてやる！　なぁ雲雀！！」
了平に声をかけられ、離れた場所に立っていた雲雀はふい、と顔をそらした。
「僕は馴れ合いなんてするつもりは無いよ」
「何ぃ！？」
「……でも」
雲雀は腕を組んだ。
「貸し分は返すよ。借りを作ったままにしとくのは、嫌な性分でね」
ひねくれてはいるが、ようは助けてやるということだろう。
真意を感じ取ったクロームは胸が熱くなるのを感じた。
友達は居ても、共に戦う仲間など、居ないと思っていたのに……
（これも骸様と、ボスのおかげ……）
クロームはきゅっと三叉槍を掴む手に力を込めた。
「さ。行こうぜ、クローム！」
山本が笑顔で手を差し出す。
クロームは、笑みを返して頷くことができた。
「ホズ。今の話はどういうことだ」
ツナは油断なく構えながら、ホズに尋ねた。
「そのままの意味。六道骸よ、貴様、記憶に矛盾を感じたことはな

いか？」
「む、じゅん……？」
骸は頭を押さえながら、眉をひそめた。
「そうだ。なぜか記憶が欠落している……そんな部分は無いか？」
「欠落……」
骸は顔をしかめた。痛みが酷くなってきたのだ。
矛盾……欠落……何だ？　違和感が……
「……！」
思い出した。
埋もれていた記憶が、頭をもたげた。
『また失敗か』
男の声が、脳内で響く。
『やはりこの実験はここの設備では継続不可能だな』
『あぁ。ひとまずこのことは封印しよう』
『モルモットの子供達はどうする？』
『始末しろ。……がこの子供を殺すのは惜しい』
『あぁ。素晴らしい力の持ち主だからな』
『とりあえずこの子供の記憶は封印してしまおう』
「う、ぐぁっ……」
そうだ。あの時自分は、あの実験の被験体だった。
だが実験は中断され、唯一生かされた自分は、情報を外に漏らさないよう、記憶を封じられていた。
思い出した。あれは、あの男は……

「……生きた、機械人形」

骸の呟きに、ツナは彼を見た。
が、ホズの存在を思い出し、拳から炎を放った。
炎はホズにぶち当たり、爆発を起こす。
「一旦退くぞ！」
「！　はいっ」
獄寺が真っ先に反応した。
バジルも次いで頷く。
「大丈夫か、骸？」
「え、ええ……」
ツナが骸に肩を貸すと、弱々しい返事が返ってきた。
ツナ達はだっと走り出した。

逃げたか……

ホズは耳を澄ませながら、眉をひそめた。
「まぁいい。目指す場所の検討がついてる」
見えない目で、辺りを見渡す。
「すでに囲まれていることに気付くべきだったな、ボンゴレ」
ホズは不気味に笑った。

「ここまで来ればひとまず安心かな……」
ハイパーモードを解いたツナは、ほう、と息を吐く。
「む、骸……大丈夫か？」
「……」
骸はツナに肩を貸してもらったまま、黙りしていた。
「おい骸！　十代目が大丈夫かどうか訊いてんのにてめぇ」
「まぁまぁ獄寺殿。骸殿は体調が本調子ではないのですから」
バジルは獄寺をなだめた。
「……なぁ骸」
ツナが声をかけると、骸は顔を上げた。
「教えてくれ。一体過去に何があったんだ？」
「……貴方には関係ありませんよ」
「あるよ。だって俺達は仲間だろ？」
ツナがなんのこだわりも無く言うと、骸は目を丸くした。
やがて、嘲るような笑みを浮かべた。
「つくづく甘い男ですね。僕は君を狙った人間ですよ」
「でも今は仲間だよ。おまえがどう思ってても、俺は仲間だと思ってるよ」
素直な、素直すぎる言葉に、骸は言葉を失った。
やがて、再び嘲りの笑みを浮かべる。だがそれは、自嘲の笑みだった。
「……僕もだいぶ毒されてますね」

「え？」
「……ホズという男が言っていたのはおそらく、生物兵器の製造のことでしょう」
骸はぽつぽつと話始めた。
「肉体改造を行い、脳の一部を麻痺させて人間を操り人形にする実験です」
「エストラーネオファミリーで？」
「ええ。僕もその被験者の一人でした。ですが、当時の科学力では、秘められた力を引き出す段階止まりでした」
骸は右目のまぶたをさすった。
「もしかしてその右目は、その実験で？」
ツナが尋ねると、骸は顎を引いた。
「ファミリーの研究員は続行不可能と判断して被験体の子供達を処分しました。僕はこの力のおかげでそれをまぬがれましたが」
骸はハァ、と弱々しく息を吐いた。
「……おそらく、あの男はその実験の完成体です。オーディンが完成させたのでしょう」
「たぶん、一人だけじゃねーだろうな」
獄寺がそう言った時――

「……！」

ツナはハッとした。
「みんな、誰か居る！」

『！！』

全員身構えた。
しんと辺りが静まり返る。
だが痛いほど感じる。これは……殺気だ。

やがて、殺気の正体が現れた。

標的４２　過去の実験と生物兵器（後書き）

何だか久しぶりの更新の気がします。
ちょっと骸の過去を捏造しました。なるべく原作と違和感無いようしたつもりですが……どうでしょう？

いきなりですが、新学期が始まったので更新は今まで以上に遅くなると思います。
楽しみにしてる方（少ないかもだけど）、申しわけありません！
書くのを止めるわけじゃないんで許してください。

標的４３　偽者

「ここだな」
山本は目の前の機械を見上げた。
「これが、警備システム……？」
クロームはちょこんと首を傾げる。
人が何人か入ってそうな大きな機械を、じぃぃぃっと見つめて動かない。
「それにしても……極限にラルはどこ行ったのだ」
了平は辺りを見渡しながら言った。
未だ、ラルとは合流できていない。
「そんなことより、早くこれを壊そうよ」
雲雀が若干苛立ちぎみに言った。
「あぁ、そうだな」
山本も頷いてポケットから小型の爆弾を取り出した。
それを機械に取り付け、皆を振り返る。
「急げ！　すぐ爆発するぜ」
言われた通り、全員がすぐさま離れる。
ついさっき曲がった道まで戻ってくると同時に、背後で爆発が起こった。
「よし、これで幻術を使わなくてもよくなったな」
警備システムを破壊したことにより、監視カメラなどは使いものにならなくなったはずだ。

「よし、ツナ達と合流しようぜ！」
山本はそう言って、ふと、クロームの様子がおかしいことに気付いた。
「どうした、クローム？」
「何だか……骸様、苦しんでるみたい……」
「もしかして沢田達に何かあったのではないか？」
了平の言葉に、山本も顔つきを苦くする。
「そうッスね……とりあえず連絡取ってみます」
山本は耳の通信機を起動させた。
「ツナ、聞こえるか？　ツナ？」
呼びかけてみるも、返ってくるのはノイズのみ。
「地下だから調子悪いのかなー」
「さっきの機械を壊したせいかも……」
クロームの言葉に、山本はんー……と悩む。
「とりあえずここから離れようぜ。じき敵も来るだろうし」
山本がそう言って歩き出そうとした時だった。

「待て」

突然かかった声に、全員振り返った。
「やっと見つけたぞ、おまえら」
「ラル！」
山本は驚いて赤ん坊を見下ろした。
「全く。あの程度のトラップにかかるとは情けないぞ！」
「悪ぃ。まさかあんなことになるなんてさ……」
山本が答えかけた時だった。
「雨の人、近付いちゃ駄目！」
「え？」
思わずクロームの方を見る山本。目の端で、銀色が光った。

ヒュゥンッ

ナイフが山本の目に迫った。
頭に突き刺さる直前、グイッと首根っこを引っ張られた。
ナイフがすれすれ山本の頭をかすめる。
「……っとお！　あっぶねっ。さ、サンキュー雲雀」
「……」
山本を引っ張った雲雀はプイッとそっぽを向いた。
雲雀らしい反応に苦笑しつつ、山本はラルに向き直った。
「……悪ぃ、クローム。俺気付かなかったぜ」
「いいの」
山本は刀、クロームは三叉槍を構える。
雲雀はすでにトンファーを手にしていた。
「??　どうしたのだ、みんな。武器など構えて」

……一人解ってない奴居た。

「先輩、このラルは偽者ッスよ」
「？　どうみても本物ではないか！」
「……君、変装って言葉知らないでしょ」
山本と雲雀に言われ、了平はガリガリ頭をかく。
「むぅ……とりあえずあのラルは敵なのだな！」
「そういうことッス」
「そして俺達を試しておるのだな！」
「……いや、そこはちょっと違うような」
さしもの山本も二の句が次げない。
ボサッとしてる間に第二撃が飛んできた。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ

「うわっ」
「きゃ……」
「ぬお！？」
「っ……」
頭を狙ったナイフを、四人はギリギリよける。
「くっ」
山本は刀を構えた。

時雨蒼燕流、攻式・一の型――

山本が走り出すと同時に、垂直に構えられた刀に雨の炎が宿った。

車軸の雨。

突きがラルの偽者に直撃した。
「っ……！？」
山本は目を剥いた。
ラルの姿が揺らめいている。そのままふっと消えてしまった。
「！？　どこに行った？」
山本は辺りを見渡した。
「……！　雨の人、後ろ！！」
クロームの声に、山本は振り返る。
「っ！？」
目の前に、手榴弾が迫っていた。

「どこからこんな人数が出てくんだ……」
獄寺の呟きに、全員無言で同意した。
通路にひしめくようにして現れる人々。
皆取りつかれたかのような目をしている。
亡者のような男女の群れは、その手に色とりどりの炎を灯していた。
「あれは……リボーンと戦ってた奴らも、手に炎があった」
「そういえばそうっスね」
ツナが言うと、獄寺も頷きを返した。
「どうやら奴ら……死ぬ気の炎とあの技術を併合させたようですね」
骸は呻くような声を上げた。
「骸、おまえは下がってろ」
死ぬ気丸の飲み込んだツナは骸に向かって言った。
「っ。なぜですか？　僕は戦えますよ」
「リングと匣を持たないおまえでは、奴らと同等に戦えない」
「っ……」
骸は黙り込んだ。
骸も、今の自分はあまりにも無力なのは解っているのだろう。
だが、簡単に引き下がる奴でもない。
ツナは無言で骸を見つめた後、敵に向き直った。
「この人数では、長く戦うのは不利です。何とかして突破口を作りましょう」
バジルは武器を構えながら言った。
「よし。十代目、下がってください！」
獄寺は大量のダイナマイトを両手に構えた。
バラバラと、ダイナマイトが中を舞う。
ドガガガガガガガガガガガガガッ

爆音が響き、ブワッと煙が目の前を覆った。
悲鳴は聞こえない。が、煙が晴れると、敵が倒れているのが見えた。
ツナを先頭にして、四人は走り出す。
その間に数人の敵が覆い被さってきた。
「邪魔だ！」
ツナは両手を一閃させた。
うっすら炎を帯びたかまいたちが、敵をまとめて吹っ飛ばす。
それを繰り返しながら進んでいく。
「これでは、目的地にたどりつけませんね」
バジルは苦々しげに言った。
骸は一瞬眉をひそめ、僅かに三叉槍を振った。

ズドドドドドドドドドドドドドドドッ

床や壁から火柱がほとばしった。
「うわっ」
「ぐっ……おい骸！　俺達も居ること忘れてんじゃ……！？」
獄寺の言葉が途中で途切れた。
「じ、十代目！　骸の野郎が居ません！！」
「何っ……」
ツナは目を見開いた。
確かに居ない。どこにも……
「っ……獄寺、バジル。ここは任せた！」
ツナは別方向を走り出した。
超直感を働かせ、足を速める。
（骸……どこに居る？　なぜ一人で行動した？）
一体何を考えているんだ。
ツナの頭の中で警鐘が鳴り響いている。
嫌な予感がする。誰かが死ぬかもしれないという、不安が。

……――！！

ツナの脳裏に、一人の少女が浮かび上がった。
常に微笑みを浮かべながら、未来と過去のために命をなげうった大空の少女。
（もう、誰かを救えなくなるのは……嫌だ）
ツナは歯をぎりっと食い縛った。

「どこに居るんだ、骸ぉ！！」

ツナの叫びが、壁を跳ね返って反響した。

続く…

標的４３　偽者（後書き）

こんにちは、沙伊です。
更新最近遅れ気味です……。
絶対新学期始まったせいじゃまりません。
ふがいないこの馬鹿めのせいです。最近全然話が出てこない。代わりに短編のネタがポンポン出てくる。連載の話は……？　状態です。

本編ですが……
骸、どこ行っちゃったんでしょうねー（おまえが言うなツナ、誰かとぶつけよーかなー。その前に山本か……
では、また次回！

標的４４　骸ｖｓホズ

爆発音が鼓膜を貫いた。

「……っごほ、げほげほ！」

山本は咳き込んだ。

爆風で受けた傷は無い。だがなぜ？

「……あ」

山本は顔を上げてハッとした。

刺の生えた幾つもの球体がくっついたようなものが、自分を守るように目の前にあった。

「これ……雲雀の匣兵器か？」

目を瞬く山本の腕に、誰かが触れた。

見るとそれはクロームで、心配そうにこちらを見ている。

「雨の人、大丈夫？」

クロームの言葉に、山本は「なんとか……」と返した。

「山本！　極限に無事か！？」

了平の声に振り向くと、彼と雲雀がこちらに走り寄ってくるのが見えた。

「大丈夫ッス。サンキューな、雲雀！」

「君に死なれたら、並盛の野球部の戦力はがた落ちだからね」

ひねくれた返答が返ってきた。

山本は苦笑しつつも、偽ラルが居た方を見る。
煙で視界がぼやけているが、人影らしきものは見えない。
「さっきのは、幻覚だったんだよな……でも、術者が居ねぇってどういうことだ？」
「私も解らない……。多分、離れたとこで誰かが作り出したんだと思うけど……」
山本が首を傾げると、クロームも困ったように顔をしかめた。
「だが、まだ敵が近くに居るかもしれん。気を付けなければ」
了平はすっと拳を持ち上げた。
痛いほどの沈黙が数秒流れ――
「よぉ。ボンゴレの守護者達」
男の声により、沈黙は破られた。

息が乱れる。
一年以上牢獄に繋がれてたとはいえ、予想以上に体力が下がっている。
骸は立ち止まりたいのをこらえ、足を動かした。
「ハァ、ハァ……沢田綱吉達は、まくことができましたね」
骸は後ろを振り返り、ほっと息をついた。
だが、既に自分が居ないことを彼らは気付いているだろう。

このペースではすぐ追い付かれるかもしれない。
骸は顔をしかめて足を速めた。

「どこへ行く？　ボンゴレ霧の守護者」

突然頭上から声がした。
骸はハッとして上を見る。
「おまえは……！」
「匣も死ぬ気の炎も使えないのに一人で動くとは」
天井に足を付けた男――ホズはリングに霧属性の炎を灯した。
「貴様の狙いは解っている」
ホズの右腕が硬質な槍に変化する。
「行かせるわけにはいかん」

ダンッ

ホズは天井を蹴った。
迫る槍を、骸はバックステップで避ける。
ホズは追撃してきた。予想していた動きに、骸は三叉槍で受け止める。
だが、その威力は考慮してなかった。

「う、ぐっ……！？」
骸は骨がきしむ感覚に呻いた。
（このままでは、いけない……！）
骸の目の字が変わる。

六から、四へ――

ズバンッ

ホズの槍が跳ね返された。
よろめくホズに、骸は更なる攻撃を加える。

ズバババババッ

骸の槍が、空中で舞った。
ホズはギリギリで避けるも、腕に浅い切傷を作る。
「っ……」
ホズは骸と間合いを取った。
「……貴様、いつの間にそんなものを手に入れた」
ホズの視線は、骸の指に注がれている。

骸の指にはめられた、目玉を模した指輪に。

「これはある人物から譲られたものでしてね」
炎を灯しながら骸はふっと笑う。
「ヘルリングという、強力なリングです。もっとも、それなりにリスクはあるようですが」
「……その病み上がりの身体で、そんな危険なものを扱っているのか」
ホズの、光を映さない目に呆れが浮かんだ。
「それまでして、ボスの……オーディン様のところに行きたいか」
「さぁ……どうなんでしょうね。ですが」
骸のリングに霧の炎が灯った。
「オーディンを、彼を止めたいという気持ちはあります」
三叉槍を持ち直し、刃先をホズに向ける。
「そこを、どいてもらいましょう」
骸は決然として言った。

雷撃が空気を裂いた。

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」

鼓膜をビリビリ揺らす泣き声に、さしものリボーンも顔をしかめた。

「アホ牛め……場所もわきまえず泣きやがって」

レオンが変形したハンググライダーで空を舞いながら、リボーンは地上を見つめる。

「まぁ、敵を倒した点は上出来だな」

ランボのボンゴレ匣、ランポゥの盾により戦闘不能にさせられた敵を見下ろし、リボーンはふむ、と頷いた。

ツナ達の作戦には足手まといになるだろうからこちらの戦闘に参加させたが、どうやら正解だったようだ。

リボーンはハンググライダーから飛び降り、地上に降り立った。

「おい、アホ牛。もういいぞ」

「死(ち)ねぇぇ！　みんな死(ち)んじゃえぇぇぇぇ！！」

バキッ

「うぜぇぞ」

「！　ぐぴゃっ」

リボーンの飛び膝蹴りにより、ランボは地面に寝転がった。
「さて、おめーの方は大丈夫だな」
「ええ、リボーン」
ランボと共に戦っていたビアンキは顎を引いた。
ちなみにリボーンは別に、高みの見物をしていたわけじゃない。
空中から敵を倒していたのである。
「ねぇ、リボーン」
ビアンキの不安げな声に、リボーンは顔を上げた。
「一体こいつらは何者なの？　私のポイズンクッキングも？にしないと効かなかったし、異常な戦闘力を持っていたわ」
ビアンキは気丈に振る舞っているが、本当はかなりの疲労が溜まっているだろう。
それを見せないのは、ひとえにリボーンに弱々しい自分をさらしたくないゆえである。
それに気付きながらも見ぬふりをして「さぁな」と答える。
「アースファミリーの人体実験によるものかもな」

人体実験は、マフィア間でも禁止されている。
ましてやボスのオーディンはエストラーネオファミリーの実験体だった。
人体実験をするとは思えないのだが。
だが、可能性はゼロとは言えない。
短い間とはいえ、リボーンはオーディンと行動を共にした。
その時……時折、ほんの僅かな間だが、オーディンの目に『何か』が宿るのを見たことがある。
あれは何だったのか。
いいものではあるまい。あの暗い光は……

「！」
不意に、骸の姿が浮かんだ。

人の暗い、醜い部分のみ見て育ったために歪んだ少年。
初めて彼に会った時の、あの目。

同じだ。表面には見えない、僅かな暗い光。

――絶望と、憎悪。

「ちっ。マジーな」
「リボーン？」
突然舌打ちするリボーンに、ビアンキはきょとんとする。
気付いた事実に、リボーンは珍しく顔をしかめる。
あの目と今まで自分が集めた過去の情報が、一気に繋がった。
もし、自分の予想が当たれば……

己の考えに没頭していたリボーンは、周りへの注意力が散漫していた。
そのために、反応が遅れた。

「リ、リボーン！」
ビアンキの悲鳴に近い声に、リボーンは我に返った。
「！　しまったっ」
いつの間にか、無数の敵に周りを取り囲まれていた。
リボーンは再び舌打ちをして銃を構え直そうと……

ズパパパパパパパパパパパパパパパン！！

黒く長い何かが、オレンジの炎を帯びて敵を打ち据えた。
驚くリボーンと敵の間に、誰かが躍り込む。

「大丈夫か、リボーン！」

「！！　ディーノ」
リボーンは大きな目を丸くした。
金髪の青年――ディーノが部下を従え、目の前に現れた。
「らしくねぇぜ、おまえが反応遅れするなんてよ」
「うるせーぞ、へなちょこが。おめーよりはマシだ」
軽口に軽口で返す。
それに苦笑したのち、ディーノは敵に向き直った。
「行けよ、リボーン。ツナんとこ行きてーんだろ。ここは俺に任せとけ」
「……」
「大丈夫だって！　俺はおまえの一番弟子だぜ」
「……誰もおめーの心配なんてしてねーぞ。ママンやビアンキの心配してんだ」
リボーンがそう言えば、ディーノは「そっか」と笑った。
「……だが、今回は言葉に甘えさせてもらうぞ」
リボーンは帽子をくい、と上げた。
「頼むぞ、ディーノ」
「おう！」
ディーノは力強く答える。
リボーンはニッと笑うと走り出した。

続く…

標的４４　骸ｖｓホズ（後書き）

前回もそうですが今回中身が短いです。
ネタ切れです。誰か助けて（泣）

本編ですが、リボーン動き始めました。
彼がしばらく行方をくらましてたのは、オーディンの情報を集めるためだったんです。

次はアルコバレーノ出したいなぁ……うん、無理だな（おい

では、次回で会いましょう！

標的４５　記憶と未来

紅い。目の前が、紅い。

視界に映るのは現在ではなく、未来の風景だった。
荒廃した世界。憔悴した人々。
何度、何度、未来を変えるための行動を起こしても、それは変わらなかった。
崩れた世界。
全ては人の手によるものだった。
全ては、争いのためによるものだった。
古い考えが、新しい未来を崩した。
それは消えることのない、変わることもない、世界の最期。

彼は……生まれた時から、その未来を見続けた。

引き裂かれるような痛みを、心にも身体にも受けながら。

骸の作り出した幻覚の火柱が、ホズの動きを封じる。
ホズは見えない目を見開いた。
その隙を逃さず、骸はホズに向かって走り出す。
霧属性の炎を灯す三叉槍を振り上げ、ホズを貫いた。
一瞬力を抜きかけた骸だったが、ハッと後ろに跳んだ。
「っく」
骸は顔を歪めた。
「……避けたか」
ホズは巨大な刃と化した両腕を下ろした。
貫いたと思ったのは、幻覚で作り出された偽物だ。
「だが、これで終わりと思うな、霧の守護者よ」
ホズがそう言ったとたん――

バシィッ

「な……!?」
骸は目を見開いた。

幻覚が、破られただと!

「術士だと言うことが解らんかったか」
ホズは右腕の刃を骸に向けた。

ズギュルゥッ

「!?　がっ」
刃先が伸び、ぐわっと広がる。避ける間も無く、骸の首に巻き付いた。
(何だ!?　これも幻覚なのか!)
骸は首に巻き付く刃を掴んだ。

「無駄だ」
「！！　ぐ、がはっ」
締め付けが強くなる。
気道が完全に抑えられ、息ができない。
「オーディン様には貴様は殺すなと言われていたが、仕方ないだろう」
ホズは白濁した瞳に、暗い光を灯した。
「死ね、六道骸」

ギシャアアアアア！！

「！？　むうっ」
ホズは後ろに吹っ飛ばされた。
腕や身体を裂かれつつも、それの発生元を見つめる。
自分を斬り裂く無数の刃。
それは、骸のリングから放たれたものだった。
ホズは顔を歪めるが、骸もまた、めまいを覚えて膝を着く。
慣れないせいと、体力が足らないせいで、脳がぐらぐら揺れる。
せれでもなんとか気力を振り絞り、満身創痍ながら立ち上がった。
「行か、なければ……」
目の前が霞む。今の自分の力では、ホズは足止めしかできないだろう。
彼が再び動けるようになる前に、オーディンの元に行かなければ。
（……オッデロ……）
オーディンのかつての名を、骸は心の中で呟く。

諦めたような目。
歪んだ使命感。
繰り返される、痛み。

その中で、「六道骸」という人格は構成されていった。
その途中で、オッデロに会ったのだ。
周りに居る子供よりも賢く、周りに居る大人より幼かった青年。
彼が何を思い、行動を起こしているかは知らない。

『ムクロ、私は――』

遠い記憶が思い起こされると同時に、目の前が揺らいだ。
「っ、く……」
再び膝を着き、浅い呼吸を繰り返す。
(体力がもう、限界に……)
立ち上がろうとしても、足に力が入らない。
(動け！　動け！！)
思いとは裏腹に、足はいっこうに動こうとしない。

「どうやら、それ以上動くのは無理のようだな」

底冷えした声に頭を上げれば、ホズが目の前に立っていた。
所々傷を負ってはいるが、致命傷らしきものは無かった。
「っ……！」
「終わりだ」
黒光りする、巨大な刃が振り下ろされる――

ガギィィィィィィィィィィンッ

「――っ！」
骸、ではなく、ホズがかっと目を剥いた。

「俺の仲間に……手を出すな」

オレンジ色の炎が、ホズの刃を焼ききった。
「沢田……綱吉……？」
骸は目の前に立つ小さな背中を見つめた。

「あっ……！」
クロームはハッと目を見開いた。
煙から現れた人物は、見覚えのある人物だったからだ。
「ふん……四人か。いい具合だな」
筋肉質な大男はニヤッと笑った。
「貴方……確か、トールって人……」
クロームの呟きに、大男は顔をしかめて反応する。
「クローム髑髏。てめぇのせいでエライ目に合った。おまえの相手は俺がするぜ。いいだろ、フレイ」
トールが後ろに目をやると、金髪の男が姿を現した。
「クローム髑髏は妹の仇なんだが。……まぁいい」
男――フレイは目線を雲雀と了平に向けた。
「ならば、私は雲の守護者と晴れの守護者をやろう。雨の守護者は貴様がやれ」
「へへっ。りょぉかい」
山本達が驚いている間に、話はどんどん進んでいく。
「じゃぁ、やるとするか」

トールが匣を取り出した。
指のリングに雷属性の炎が灯る。

ガチッ
ドシュウッ

匣から、大蛇が飛び出した。
クロームは身を固めた。
「行け！」
トールの声に、大蛇は尾で床を叩いた。
メキィッ、と鋼鉄製の床が壊れる。次いで、滑るように山本とクロームに突進してきた。
山本は刀を構え、大蛇に向かっていく。

ガギィィンッ

金属同士がぶつかり合う音が響き渡る。
「……っ！！」
スパーク音を耳にして、山本はさっと身を引いた。
「あっぶね。感電するとこだったぜ」
山本はほっと息をついた。

「安心するのは早いぜぇ！」

今度はトールが突進してきた。
後退する山本とクロームを追うようにして、大金槌が振り上げられる。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

床が壊れるどころじゃ無かった。
床だけでなく、壁や天井まで亀裂が走る。
「なっ……！」
山本は絶句した。
（この力……人間じゃねぇ！）
ひるむ二人に、トールはニヤッと楽しげに笑った。
「さぁ……遊ぼうぜ、ボンゴレよぉ！」

了平は山本達に駆け寄ろうとした。
あんな化物みたいな相手、二人だけでは無理だと思ったのだ。

「手出しはさせん」

だが、フレイの剣により、それはできなくなる。
頭上に振り下ろされた剣を、了平は後退して避ける。
床に叩き付けられるかと思った刃は、寸前で軌道を変えて了平の首筋を狙った。
「ぬっ」
了平は事前に開けておいた匣兵器のグローブでそれを防いだ。
嵐の炎で、グローブがボロボロになる。が、瞬時に晴れの炎で再生した。
「！　随分変わったグローブだな……」

「まぁな。それと」
了平はふっと笑った。
「俺は一人で戦っているわけではないぞ」
「――――！！」
フレイは振り返り、剣を背後に横殴りにした。

ガイィィィィィンッ

フレイの剣と雲雀のトンファーがぶつかり合った。
「っく」
「……」
いったん離れ、再び突進する。
何度も金属のぶつかり合う音が響く。
「っ。さすがだな、雲雀恭弥」
「君は前に噛み殺せなかったからね。今度は、噛み殺すよ」
雲雀はトンファーをブンッと振った。

ドゴオォッ

「……！？」
雲雀は目を見開いた。

フレイは、トンファーを避けなかった。

防ぐか避けると思っていたため、さしもの雲雀も驚いて動きを止める。
「私の力は」
フレイは素早く空いた手で雲雀の左腕を掴んだ。
「接近戦でこそ、いかされる」

ボボオゥッ

「っ……！？」

フレイの右手に嵐の炎が灯った。

更に炎は膨れ上がり、掴んだ雲雀の腕を焼く。

「っあ……！！」

雲雀は思わず声を上げた。

肉の焼ける、嫌な臭いが辺りに立ち込める。

「！　貴様、離せっ」

了平はフレイの頭に拳を叩き付けようとした。

フレイは雲雀を離し、バックステップで避ける。

よろめいた雲雀を、了平は慌てて受け止めた。

「雲雀、大丈夫か！？」

「っ……」

酷い火傷だった。

肌はシュゥゥッ、と音を立てており、焼けるどころか溶けていた。

ただの炎だったらここまでならなかったろう。

嵐の炎だったからか、短時間でできた火傷に見えなかった。

「私の身体には、嵐の炎が駆け巡っている」

フレイは再び剣を構えた。

「近距離戦闘を得意とする貴様らに、触れずに私を倒せるか？」

フレイは挑発の言葉を口にした。

続く…

標的４５　記憶と未来（後書き）

七日振りです、沙伊です。
今回書くのしんどかった……文字数そんなにないのに……
ネタが尽きかけてるんです。すみません、何か毎回言ってます……

えっと、予告をしますと……

雲雀、了平ｖｓフレイを中心に、山本、クロームｖｓトール、ツナｖｓホズを書こうと思ってます。
獄寺とバジルとラルは……すみません、放置で（オイ
並盛陣営ももっと後ですね～。書く予定ですが。
リボーンをどこで出すか、タイミングが難しいです……
頑張ります、一応……

標的４６　了平、雲雀ｖｓフレイ

骸は目を疑った。
ここに居るはずがない人物が、目の前に現れたからだ。
「さ、沢田　綱吉……なぜここに？」
「……」
ツナは答えずに、掴んだホズの槍先を握り潰した。
バキィィッ
「ぐっ」
槍が半壊したため、ホズは慌てて後ろに下がった。
「無事か、骸」
「ええ、まぁ。そ、それよりなぜここに？」
骸の質問に、ツナは振り返った。
「もう誰も死なせない。未来で、決めたんだ」
「え？」
目を瞬く骸に、ツナはぬぐえぬ哀しみを含んだ瞳を向けた。
「……そこでじっとしていろ」
ツナは骸から目線を外し、ホズと対峙した。

了平はどうすべきか考えた。

雲雀は怪我を負っている。しかも重傷だ。

一対一で戦うか。いや、それでは雲雀が黙ってはいないだろう。

なら、どうすべきか。

あまり使わない頭で考え、たどり着いた結論はというと。

「極限（マキシマム）キャノン！！」

了平は拳を放った。

フレイにではなく、天井に。

「！？　何っ」

フレイは崩れだした天井を見て目を剥いた。

鉄の塊が幾つも降ってくる。

「雲雀、こっちだ！！」

「……！？」

いきなり引っ張られたせいか、雲雀は驚き顔になった。

が、傷のせいか抵抗してこない。

了平はそのまま、全速力でその場を離れた。

ある程度走り、了平はようやく足を止めた。
「よし、ここまで来れば安全だな！」
了平は引っ張ってきた雲雀の方を見た。
さすがにいきなり全速力の了平のペースにはついていけなかったらしく、息を切らしている。
だが、さっきの火傷以外に怪我は無いので、とりあえずほっとした。
「雲雀、腕見せてみろ。匣で治してやる」
「必要無いよ」
雲雀は了平の腕を振り払った。
「何を言ってるのだ！　酷い傷ではないか！！」
「……」
雲雀はふいっとそっぽを向いた。
「うぬぬ……とにかく、腕を見せろ！」
がっとばかりに火傷のある方の腕を掴むと、雲雀はビクッと肩を震わせた。
「つっ……」
「ほら見ろ！　とにかく貸せ！！」
了平は匣を開匣させた。
晴れコテを雲雀の傷口に当てると、火傷が少しずつ消えていく。
その様子を、雲雀は興味深げに見つめた。
（こいつ、こんな顔もできるのだな）
了平は少し驚いてしまう。
自分の記憶の中で、雲雀は常に無愛想か不敵に笑うかのどちらかだった。
こんな、子供らしい表情（もう高校生だが）は見たこと無かった。

「……なぁ、雲雀」
了平はふと、思ったことを口にすることにした。
元々、黙ってられない性分なのである。
「おまえ、なぜ独りになりたがる？」
「え？」
雲雀は切れ長の瞳を瞬かせた。
「単なる人嫌いにしては度が過ぎんか？　群れるのが嫌なら、関わらずに行き過ぎてしまえばいいではないか」
前々から不思議に思っていたことを口にすると、雲雀は迷うような顔をした。
てっきり「君には関係無い」と切り捨てられるかと思ったのだが。
逆に了平の方が驚き、口を閉ざしてしまう。
雲雀はうつむき、ずっと押し黙っていたが、ややあって口を開いた。
「……僕にも、解らない」
「何？」
「ただ、言えることは」
雲雀はすっと目を閉じた。まるで視界に、誰も入れないように。
「僕は孤独が好きだ。暗い闇が好きだ。染まらない黒が好きだ。僕が、僕でいられるから」

雲雀の言葉は、了平には理解できなかった。
だが、彼には彼の思いがあり、そのために戦い、孤独を望んでいるんだと直感した。
「……よし！　傷は極限治ったぞ！！」
了平が晴れコテを離すと、雲雀はじぃぃっと火傷があった場所を見つめた。
「本当に治ってる……」
どうやら信用してなかったらしい。
憮然としつつも、了平は辺りを見渡した。

「周りに敵はおらんな……戻るか」
了平は歩き出し、数歩進んで雲雀が着いてこないことに気が付いた。
「どうしたのだ、雲雀」
何かを考え込むような表情の雲雀に、了平は尋ねる。
「……あの男、全身に嵐の炎が巡ってるって言ったね」
あの男とはフレイのことだろう。
了平は頷きを返す。
「あぁ。俺にはグローブがあるからいいが、おまえはトンファーを素手で持っているから……」

「何で、奴の服は燃えてないんだろう」

雲雀のセリフに、了平はきょとんとした。
「それは……やはり特別製なんじゃないか？」
「じゃ、僕のトンファーは？　それに、さっきの君のパンチだって、避けずに嵐の炎で防げばいいじゃないか」
「……」
了平は呆気に取られた。まさにその通りだ。
「それに、全身に嵐の炎が巡って触れるだけで『分解』されるなら、もっと早い段階でなってるはず」
「つ、つまりどういうことだ！？　極限解りやすく教えてくれ！」
了平は前に乗り出した。
雲雀は不快げに顔をしかめた後、口を動かした。
「全身に嵐の炎が巡ってるというのはハッタリ、もしくは常にじゃないかもしれない」
「――！！」
思いもよらなかった予想に、了平は目を丸くした。
「まさか……それは真か、雲雀ぃ！」
「確証は無いけどね。可能性としては、充分あり得る」

雲雀の言葉に、了平は感動した。
「雲雀……おまえがそこまで考えていたとはな！」
「……まるで僕が考え無しで突っ込む馬鹿みたいじゃないか」
君に言われたくない、と言いたげな雲雀である。
しかしすぐさま表情の消すと、すたすたと歩き出した。
「ん？　どうしたのだ」
「戻るんだろ。早くしないと置いてくよ」
雲雀は了平を一瞥した後、また歩き出した。
「お、おい待て！」
了平は慌てて雲雀を追いかけた。
「しかしどうするのだ？　どちらにせよ、うかつに近付けんのは変わらんぞ」
了平の言葉に、雲雀はくるっと振り返った。
「そんなの解ってるよ。ようは、直接触れなければいいんだ」
雲雀は自身のボンゴレ匣を取り出した。

山本は匣を開匣させた。
匣から雨燕と雨犬が飛び出す。
「次郎！」
山本が声をかけると、雨犬は背負っていた三つ刀の柄を投げやった。
山本が器用に左手でそれを掴むと、雨属性の炎が刃のように噴出した。

「！　ほぉ、おもしれー匣だなっ」
ニヤッと笑うトールに、山本も笑い返す。
「ハハッ、まぁな。でもよ、面白いだけじゃねーぜ！」
山本は時雨金時を振り上げた。
同時に、死ぬ気の炎の刃で突進力を上げる。
時雨蒼燕流、攻式・一の型――
雨属性の炎のまとった刃が突き出される。
車軸の雨。
トールの腹に、突きがぶっ刺さった。
が、しかし。
「この程度か？　雨の守護者！」
刃が止まっていた。
腹筋に拒まれるように、ピタッと。
「なっ……！？」
山本は目を見開いた。
馬鹿なっ。
死ぬ気の炎のまとった刃を生身で！？
呆然としている山本の耳に、スパーク音が届いた。
身の危険を感じてトールから離れると、彼の身体が電撃にまとわり付かれているのを見た。
しかもただの電撃ではない。
リングから発生する雷――雷属性の死ぬ気の炎だ。

しかも全身からとなると、直接攻撃ができない！
「くっ。クローム！」
「うんっ」
山本が後ろを見ると、後方で控えていたクロームは三叉槍を構えた。
クロームのボンゴレリングに炎が灯った。

ズドドドドドドドドドドドドドドドッ

幾つもの火柱がトールを襲う。視覚だけでなく触覚まで侵す幻覚に、山本は少し顔をしかめた。
「相変わらず、すげー幻覚なのなー」
「私……未来から帰ってきて、いっぱい練習したから……」
クロームはちょっとだけ微笑んだ。
「未来で、私……ちゃんと戦えてたか心配で……だから、幻覚の練習したの……」
「そっか」
必死なその姿に、山本も微笑みを返す。
頑張れば、必ず結果が付いてくる。それを、山本はよく解ってるつもりだ。
そして、自然とそれを教えてくれた親友のことを思い出し、顔を曇らせる。
（ツナ……無事だろうか）
こっちがこんな状態だ。向こうも何ごとも起こってないとは限らない。
山本は油断無く刀を構え直した。
もっとも、有幻覚にまともに攻撃されてるのだから、必要無いかもしれないが。
その考えが……隙を生んでいた。

バチィッ

火柱が弾け飛んだ。

驚く山本の眼前に、巨大なハンマーが迫ってきた。

「っぐ！」

山本はすぐさま後ろに下がった。

だが避けきれず、ハンマーは彼の左肩に直撃した。

「……――っ！！」

肉を打つ音と痛みに目を剥きつつも、山本はハンマーから逃れた。

だが激痛からは逃れられず、三本の柄を落とす。放出されていた雨の炎が消え失せた。

「雨の人！！」

クロームの叫び声が聞こえた。

「う、ぐっ、くそぉ……」

山本は膝を着き、左肩を押さえた。

ずきずき、なんてもんじゃない。骨を握り潰されたような、例えようの無い激痛だ。

「こんなもんかよ、雨の守護者。うちの雨のとは大違いだぜ」

トールはスパークをまといながら嘲笑った。

「命、もらうぜ、雨の守護者！」

トールはハンマーを振り上げた。

「……まだ、終わらねぇ」

山本は時雨金時を持ち上げた。

「小次郎、形態変化（カンピオ・フォルマ）」

天井付近を飛んでいた雨燕が、時雨金時に向かっていった。

「……戻ってきたか」
フレイはすぅっと目を開いた。
「てっきり逃げ帰ったかと思ったがな」
「極限見損なうな！　俺達は逃げたりせん！！」
了平はファイティングポーズをとりながら叫んだ。
その後ろでは、雲雀がゆったりと腕を組んでいる。
「貴様らに不利な戦いだと解ってるのか？」
「あいにく、俺達はまったくそう思っとらん！」
了平はだんっと地面を蹴った。
「喰らえ！　極限ラッシュ！！」
顔面を狙った攻撃を、フレイはあっさりとかわす。
「貴様も雲の守護者の二の舞になりたいか」
フレイはふっと手を伸ばした。
了平はさっと身を退き、匣を開匣させる。

ガチッ
ドシュウッ

「行くぞ、我流！」
匣から飛び出した晴カンガルーに大声をかけると、腹の袋からグローブが噴出された。
それを装着し、再び突っ込む。
「うおぉぉぉぉ！」
目にも止まらぬラッシュに、フレイは目を見開きながらギリギリでそれを避けていく。

だが、避けきれずに頬や腕などをかすってく。
「く……このっ」
フレイは業を煮やしたように右手の手の平を了平の眼前に突き出そうとした。

ガチャンッ

「……！？」
フレイの目が再び見開かれた。
突き出そうとした腕に、手錠がかかっている。
雲の炎が灯った、幾つもの針を持った手錠だ。

「捕まえたよ」

雲雀は口唇の端を吊り上げた。
彼の手には、鎖が付いた手錠があった。しかも鎖は、フレイの手にかかった手錠に繋がっている。
「な、にっ……」
「もう逃げられないよ」
クスリと笑う雲雀に、フレイは怒りを込めて睨み付けた。
だが、それも長く続かず。

「極限（マキシマム）キャノン！！」

了平の声に、フレイはハッとして顔を正面に戻した。
避けようとするも、手錠で動きが封じられ、避けられない。
了平の拳が、フレイの腹に喰い込んだ。

標的４６　了平、雲雀ｖｓフレイ（後書き）

こんにちは、沙伊です。
思ったより遅くなりました……
それも全てテストのせいだ！（泣）
明日からテストなんです。勉強中です。
来週までほぼ書けません……すみません……

標的４７　それぞれの戦い　それぞれの思惑

フレイはかっと目を見開いた。
「う、ぐぅ……」
口の端からボタボタと血が伝う。見るからに大ダメージだ。
了平はさっと身を引き、うずくまるフレイに言った。
「もう貴様は戦えん。諦めたらどうだ」
了平の言葉に、フレイは何の反応も見せなかった。
それどころか、再び手を伸ばそうとする。
「ぬっ」
了平は更に間合いを取った。
構えを解かずにいると、フレイはブツブツ呟きだした。
「まだだ……まだ、終われん……！」

ブワッ

全身から死ぬ気の炎が吹き出した。
「……！　手錠が……」
雲雀は目を見開いた。
フレイの手にかけられた手錠が、嵐の炎で溶けている！
「負ける、わけには……いかんのだ……私は、私は……！」
フレイは了平に向かって走り出した。
「死ね！　晴れの守護者！！」
フレイは口から血をまき散らしながら了平に迫る。

了平は気圧されながらもさっと避けた。
「お、おい！　おまえの身体はもう限界なんだぞっ。極限諦めろ！！」
「黙れ！　貴様に何が解るっ。私の……私達の覚悟が解るものか！！」
フレイは右手を振りかぶった。
ブンッ、と腕を横凪ぎにする。了平は避けきれずに胸元の服がスッパリ裂かれた。
「なっ……」
「おまえに解るか？」
ゆらりと顔を上げるフレイ。その顔は、怒りと哀しみが入り交じった表情だった。
「ぬくぬくと、周りに守られながら育ったおまえらに！　私達の気持ちは解るものかぁ！！」
フレイの両腕が振り上げられた。

ガシャシャンッ

金属音と同時に、フレイの動きが止まる。
「！　雲の、守護者っ……」
フレイの両手首には、再び手錠がかけられていた。
「僕を無視するなんて、いい度胸だね」
二つの手錠を持った雲雀は、はっきりと表情をしかめさせていた。
「それに、まるで自分が誰よりも不幸だというような言い方も、気に入らないな」
「っ。黙れ！　こんな手錠、再び溶かしてやるっ」
フレイの炎が肥大した。
「なら僕は、君の『分解』より早く」
雲雀のボンゴレリングの炎が大きくなる。
「『増殖』するだけだ」

ガシャガシャガシャガシャガシャガシャンッ
ガシャガシャガシャガシャガシャガシャンッ

フレイの手首の手錠が一気に増殖した。
「！　な、何っ」
フレイの戸惑いの声に呼応するように、炎が減じた。
その隙を逃さず、雲雀はフレイに突っ込む。
「噛み殺す」
雲雀のトンファーがフレイにヒットした。

ズシャッ

斬り裂く音が響いた。
「ぐあっ！」
トールは腕を押さえた。
筋肉に覆われた腕に、赤い線が引かれる。
「油断、大敵だぜ」
長刀を構えた山本は立ち上がった。
肩が尋常じゃないぐらい痛むが、かえってその方が目が冴えた。
「な、何だ……その匣は！」

トールは叫ぶ。
「聞いてねぇぞ、そんな匣兵器！　ヴェルデの野郎からは、何もっ」
叫ぶトールの言葉に、山本は眉をひそめた。
「ヴェルデ？　小僧と同じ、アルコバレーノの？」
山本は思わずクロームを振り返った。
「だよな？　ヴェルデって」
「う、うん。匣を造った三人の内の、一人……」
クロームは頷きを返し、そしてハッとした。
「雨の人、前！」
クロームの声に、山本は前を向いた。
トールがハンマーを振り上げている。
「やめとけよ」
山本は痛む肩を押さえながらトールを見上げた。
「雨属性の炎が身体に回ってきてるはずだぜ。じきに動けなくなる」
「黙れっ……俺は、負けるわけにはいかねぇん……」

「いいえ、負けてください」

声に、トールの表情が固まった。
「っ……この声！　まさかっ、う！？」
バッと振り返ったトールの身体が、ぐらっと揺らいだ。
そのままふらぁっとその場に倒れ込む。
「すみません。しばらく眠っていてもらいます」
彼は意識を失った大男に小さく頭を下げ、山本とクロームの方を見た。
「初めまして、山本　武さん、クローム髑髏さん」
青年――バルドルは淡く微笑んだ。

「十代目ぇ！　どこッスか、十代目ぇぇぇ！！」
「ご、獄寺殿、落ち着いてください！」
狂ったように叫びまくる獄寺を、バジルは必死で抑えた。
周りには動かなくなった（死んではいない）敵が積み重なっている。
「そう遠くへ行ってないはずです。だから落ち着いて！」
「はっ！　そうだ、瓜っ。おまえなら匂いで十代目の居場所が解るんじゃないのか！？」
「……獄寺殿、猫に何をやらせる気ですか？」
バジルはあきれ果てた。
犬じゃあるまいし、匂いをかぎわけることなどできるはずがない。
例えできたとしても、気まぐれな猫に尋ねることなど無理なのでは。

「んぎゃっ。な、何しやがる！」
「シギャアァァ！」

……ましてや、こんな様子では。
（しかし……沢田殿と骸殿は、一体どこに……？）
バジルは耳を澄ました。隣で繰り広げられる小バトルは無視。
何も聞こえない。戦闘音も、何も。
「いったん山本殿達と連絡を取った方がいいかもしれませんね」
「このヤロッ。やめ、髪引っ張るなー！」
「……訊いた拙者が馬鹿でした」

バジルはげんなりして通信機のスイッチを入れようとした。
「んなことする必要ねぇぜ」
バジルはバッと身構えた。
声のする方を睨み付け、鋭い声を浴びせる。
「何者だ！　出てこい！！」
バジルの声に獄寺も気付いたようで、ハッと顔を上げた。
「誰だ……？」
「解りません。おそらく敵でしょうが」
匣を持ち上げた獄寺は、リングに炎を灯した。
「出てきやがれ！」
「……言われなくても出てくるっての」
気だるげな声の主は、通路の奥からぶらっと現れた。
「！！　てめぇはっ」
「よう。久しぶり、だよな。そっちはお初か」
突然現れた金髪の男に、獄寺は腕の匣兵器を向けた。
「てめぇ……ロキ！　わざわざ倒されに来たのか！？」
「いや。俺は案内人として来ただけさ」
ロキはおどけた仕種をして両腕を広げた。
「案内人だぁ？　ふざけたこと言ってんじゃねーぞ！」
獄寺のリングの炎が大きくなった。
「おいおい。猫じゃあるまいし、そう威嚇するなって」
ロキは一歩下がって背を向けた。
「ほら、ついてこいって。ボンゴレと六道　骸のところまで案内してやる」
「……」
「そう警戒すんなって。だいたい、伊達や酔狂で敵に背ぇ向けるわけねーだろ」
ロキはへらっと笑った。

「罠だと思ったらすぐそれで俺を撃てばいい。俺の力は雲属性の『増殖』だからな。嵐の炎を防ぐ余地は無ぇ」
ロキはゆっくりとした足取りで歩き出した。
「……どうします、獄寺殿？」
「十代目と骸の所在が解らない以上、行くしかねーだろうな」
獄寺は兵器を匣に戻さないままバジルに答えた。

そのままロキを追いかけて数分した後、獄寺はロキに尋ねる。
「なぁ、何でおまえ、俺達の手助けをするんだ」
「ん？　ああ。……いずれ解る」
ロキは言葉を濁し、目線だけを獄寺とバジルに向けた。
「ただ、アースファミリーを裏切ったのは俺だけじゃねぇ。骨だったぜ、一人説得するのはよ」
ロキはため息をついた。
「なんせ、ここの連中の、オーディンに対する忠誠心は半端じゃねぇからな」
「……地獄のどん底から引きずり出されたからか」
獄寺の言葉に、ロキの足が止まった。
「陽　明に幹部の名前を教えたのは、無駄じゃなかったみてぇだな」
ロキはふっと笑った。
「あぁ。俺以外の幹部連中は、自国で戦争や内戦があったり、くだらねぇ不幸で虫以下の生活をしてきた連中だ。そこでオーディンが世界を変えようなんて言えば、そりゃついてくる」
俺も似たような境遇だが、とロキは肩をすくめた。
「……さて、無駄話はこれくらいにして、ボンゴレんとこ行くか」
ロキは再び歩き出した。

ギィィィィィィィィィィィィィィィンッ

ツナとホズの武器が互いに弾かれた。

「さすがはボンゴレ?世」

ホズは槍と化した腕を押さえた。

僅かながら刃こぼれしている。

「いい加減諦めたらどうだ」

ツナは余力を残したまま、静かに構えを取った。

「……諦める? そんなことするわけなかろう」

ホズは突然槍を元の腕に戻した。

「……? 言ってることとやってることが噛み合ってないが」

「いいや。これから噛み合うのだ」

ホズのリングの炎が大きくなった。

「?世……おまえに地獄を見せてやろう。二度と、オーディン様に逆らえぬように」

空間がグニャリと歪んだ。

定まらない視界と足元にツナは気分が悪くなる。

(何だ……何をするつもりだ……)

ツナが額を押さえていると、骸が声を上げた。

「沢田綱吉……!」

「え……?」

ツナは閉じかけていた目を開いた。

いつの間にか、空間が元に戻っている。

だが一つだけ、最初と違うものがあった。

「沢田さん」

ツナは驚愕した。

ここにいるはずの無い人物が、この時代にいるはずの無い人物が、目の前にいたからだ。

未来で、自分達を過去に戻そうとして命を落とした、大空の少女が。

「……ユニ」

ツナはただ呆然と、少女を見つめることしかできなくなった。

続く…

標的４７　それぞれの戦い　それぞれの思惑（後書き）

こんにちは、沙伊です。
テスト終わったので一気に書き終えました！
ていうか、後書きに特に書くことありません。
感想などお待ちしております。では！

標的４８　幻と涙

「くそっ、奴らどこ行った?」
ラルは悪態をついた。
地図と周りに目をやりながら歩を進める。
すでに敵と数度戦闘している。
だが、ラルは出会った全ての敵と戦ったわけではなく、逃げつつ応戦していた。
「先程の仕掛けといい、守護者のみを狙っているのか……?」
戦った敵は、皆こちらを行動不能にするために攻撃をしているように見える。
分断されたことも踏まえて、狙いは守護者のみと言うことだろう。
「くそっ、山本達はどこ行った!」
ラルは再び足を進めた。
と。

「ラル!」

聞き覚えのある声に、ラルは振り返った。
「!!　リボーン、何でおまえがここにいる!?」
スーツ姿の赤ん坊に向かって、ラルは叫ぶ。
「ちょっと気になることがあってな。他の奴らはどうした?」
リボーンの質問に、ラルは今に至るまでを話した。
話し終えると、リボーンはふむ、と唸る。

「こりゃ合流を急いだ方がいいな」
「無論だ。行くぞ！」
赤ん坊二人はだっと走り出した。

ツナは凍り付いた。
いるはずの人間が目の前にいる。しかも、死んでしまった人間が。
（これは……幻覚じゃ、ない……？）
ツナの頭で警鐘が鳴り響く。
目の前にいる少女は、本物ではない。だが、幻覚でもない。
なら、何だと言うのだ。
「驚いたか、ボンゴレ？世」
少女――ユニの後ろで悠然と立っていたホズは、唇を歪めた。
「察してるだろうが、これは幻覚ではない。おまえの記憶を肉付けしたものだ」
「俺の、記憶……？」
ツナは改めてユニを見た。
考えてみれば、ホズはユニを知らない。幻覚を作りだすことなどできないはずだ。
だが、自分の記憶というなら、これもまた幻覚じゃないのか。
でも、幻覚の雰囲気など……

「沢田さん」

ユニそのものの声に、ツナは固まった。
「ユ、ニ……」
記憶と寸分違わぬ声、仕種、笑顔……
これが偽物なのか。これが、本当に……？
ユニはゆっくりとした足取りでツナに近付く。
そのまま手を伸ばし――

ビュンッ

「……っ！？」
目の前で煌めいた銀の刃に、ツナは反射的に後ろへ下がった。
ナイフだ。刃の細い、レイピアのような物だった。
そしてそれを握っているのは。
「沢田さん……」
「くっ」
ユニの手に握られたナイフに、ツナは顔を歪めた。
「ホズ……貴様……！」
「言ったろう、地獄を見せてやろうと」
ホズはニヤッと唇を歪めた。
ホズに気を取られてる間にも、ユニは攻撃をしかけてくる。
「っく……！」
反撃しようと思うも、目の前の少女の笑顔に手が止まってしまう。
偽者とはいえ、自分にユニを傷付けることができるのか。
「……く、そぉっ」
ツナはダンッと後ろへ跳んだ。
着地した瞬間、誰かが肩に触れる。
振り向いたツナは目を見開いた。
「九代目！？」
肩に手を置いているのは、優しい表情を浮かべた老人。ボンゴレ九代目だった。

呆然としている間に、九代目の手は肩から上へ移動する。

ガッ

「ぐっ！？」

いきなり気管が封じられた。

節くれ立った手が、ツナの細い首を締め付ける。

「きゅっ……だい、めっ……」

九代目の表情は変わらない。穏やかに笑ったまま、手に力を込める。

「くっ」

ツナはその手を振り払い、後ろに下がった。

「――！？」

ハッと上を見た瞬間、無数のダイナマイトが落ちてくるのが見えた。

ツナは反射的に炎の出力を上げてダイナマイトの爆発を逃れる。

ほっとしたのもつかの間、必殺の勢いで刃が襲いかかってきた。

ギィィィィィンッ

「や、やま、もと……」

ツナは刃を受け止め、刀の主の顔を見て驚愕した。

更に奥には、ダイナマイトを構えた獄寺までいる。

ツナは混乱しそうな頭を必死に沈めようとした。

しかし、視覚がツナの心をかき乱す。

（どうすれば……！　そうだっ）

ツナは山本の刀をかいくぐり、ホズに向かっていった。

（ホズを直接叩けば……！）

「愚かな、ボンゴレ？世」

ホズは光を映さない目でツナを見つめた。

「私が貴様に狙われることを考慮してないとでも思ったか」
「……！？」
ツナは目を見開いた。
だが止まるわけにもいかない。ツナはそのまま突っ込んだ。
「ツナ君」
ツナは頭が真っ白になった。
ホズの前に立つ少女。
ショートカットに明るい笑顔を浮かべた彼女は――
ドスッ
腹に激痛が走った。
「うっ……」
ツナは傷を押さえた。
指の間からポタ、ポタ、と血の滴が落ちる。
「きょ……こ……」
目の前の少女、京子はニコニコと微笑んでいる。
微笑んだまま、ツナの血が滴ったナイフを握り締めていた。
ツナは痛みで呻き、ふらふらと後退する。
ドンッ、と壁にぶつかり、ツナはずるずると座り込んだ。
「さ、沢田綱吉……！」
骸が声を上げた。
ツナは動かない。ぴくりともしない。
「せめてもの慈悲だ」
ホズはツナの前に立った。
「一撃で葬ってやる」
ホズの腕が再び槍に変化する。
「死ね、ボンゴレ？世！」

槍がツナに襲いかかった。

ガギィィィィィッ

金属片が辺りに散らばった。

「！！　ぐあぁっ」

ホズは砕けた腕を押さえてよろめいた。

ホズの腕を破壊したツナは立ち上がり、うつむいたまま口を開いた。

「……許さねぇ」

ボオォォォッ

ツナの拳の炎が大きくなった。

まるでこの場に太陽が出現したような大きい炎に、ホズの顔に焦りが浮かんだ。

「おまえだけは……おまえだけは！」

ツナは炎をホズに向けた。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

炎がその空間全体に広がっていく。

辺りが、白く染まった。

「雲雀！　先輩！！」

肩を押さえた山本が走ってくるのを見て、了平は顔を上げた。
「おお！　山本、クローム！！」
了平は彼らに走りより、二人の後ろにいる人物を見て目を見開いた。
「ひ、雲雀！」
了平の声に、しゃがんでいた雲雀は立ち上がった。
「何？　一体どうし……」
雲雀も顔に驚きを浮かべた。
「貴方……」
「お久しぶりです。雲雀君、笹川君」
バルドルはニコッと笑顔を向けた。
友好的な態度だったが、雲雀はさっとトンファーを構える。
「まだ戦ったこと無かったよね」
「！　ま、待てよ雲雀。この人は味方だってっ」
山本は慌てて仲介に入った。
雲雀は何かいいかけてふと、いぶかしげな顔をした。
「君……肩をどうしたの？」
「あー……敵の攻撃受けて……その、骨にヒビが……」
「なっ、極限に大丈夫なのか！？」
了平はあわあわと晴れゴテを出した。
山本の傷を癒す匣兵器を見つめながら、バルドルは床に目をやる。
「……フレイさんは」
床に倒れたフレイを見つめ、バルドルは顔を歪めた。
「僕が噛み殺したよ」
「おい雲雀！　こいつは極限死んでおらんぞ！！　気絶しただけだろうが」
了平の指摘に、雲雀はぷいっとそっぽを向いた。
「……じゃ、生きているんですね」

バルドルは安心したように息をついた。
表情を変え、山本達をざっと見渡す。
「ボスの……オーディンの居場所は僕が知ってます。ですがまず、綱吉君達と落ち合いましょう」
バルドルの言葉に、了平も頷く。
「うむ！　その方がいいな。だが、沢田達はどこか解るのか？」
「大体の見当はついてます。だから……」

「その必要は無い」

男の声が響いた。
驚いて固まる一同の耳に、足音が届く。
「おまえが裏切るとは思わなかったぞ、バルドル」
全員振り返り、そして驚愕する。
いつの間にか、金色の長い髪をした男がゆったりと近付いてきていたからだ。
黒く長い槍を持った男に、誰も気付けなかった。
動けないでいると、男――オーディンは穏やかに言った。
「さて……誰から私に倒されるんだ？」

骸は目を開けれないでいた。
ツナの炎が大きくなったと思った瞬間、辺りが白い光で覆われた

のだ。
眩しさに目を閉じ、炎が燃え上がる音を耳にする。
身の危険を感じて身体を縮こまらせるが、それで防げるとは到底思えなかった。
(沢田綱吉は今、怒っている)
炎の量でも解る。
仲間を使われたことに対してなのか、思い出を汚されたことに対してなのかは解らないが。
更に身を固めていると、すぐ傍で咆哮が響いた。
驚いてうっすら目を開けると、オレンジ色の体毛をした小さなライオンが炎を防ぐように猛っていた。
(このライオンは確か沢田綱吉のものでは)
考えている内に、炎が減じていく。
このライオンが炎から自分を守るために吠えていたのだと骸が気付いたときには、炎は完全に消えていた。
ホズの姿は無い。ただ壁の一部に、僅かな焼け焦げがある。
(彼の怒りを買って、骨すら残らなかったのか)
ある意味当然の結果だろう。あの盲目の男は、ツナの逆鱗に触れたのだ。
そしてツナは、その焼け焦げの前で立ち尽くしていた。
こちらからは顔が見えないが、肩が震えている。
腹の傷口はまだ塞がっておらず、血が彼のシャツやズボンに滴っている。
「沢田綱吉?」
立ち上がった骸は、一向に動こうとしないツナに声をかけた。

ドサッ

「!!?」
骸はいきなり倒れたツナに思わずビクッと身体を震わせた。

「え、ど、どうし……」
「……ふ、ひっく」
聞こえてきた嗚咽に、固まっていた骸は目を見開いた。
ツナは泣いていた。
床に倒れながら、大きな目から大量の涙が流れ、頬を濡らしていた。
「く、ひく……ぐ、ぅ」
両手の拳を握り、抑え込むように泣きじゃくるツナを、骸は見下ろすしかなかった。
「……何で、泣いてるんですか？」
返答は無い。口元を塞いでいるため、喋れないのかもしれない。
「傷が、痛むんですか？」
ツナは首を横に振った。
「ホズを殺してしまったことを後悔してるんですか？」
再び首を横に振る。一番あり得そうだったので、骸は少なからず驚く。
「……仲間を、利用されたからですか」
「……違う」
ツナは口から手を話し、上体を起こした。
傷口から血が流れている。常人だったら失血死してそうな量だ。
「仲間を使ってから攻撃された時」
ツナは顔を歪めながら傷口を押さえた。いくら彼でも、放っておけば死んでしまう。
「思ったんだ。こいつらを倒せば全部終わるって」
流れる涙の量が増えた。
「俺、最低だ。いくら幻でも、みんなを倒してやりたいなんて、思う、なんて」
ぐず、と鼻をすするツナ。骸は泣き続ける彼を見て、なぜかうら

やましいと思った。
自分は人間としての心の機能が一部、壊れてしまっている。
そのためか、心から笑うことも、激しい怒りを持つこともできなくなった。
ただ一つ、心にあるのは憎悪だけである。
世界を憎み、人間を憎み、存在する全てを憎み。
そんな自分を虚しく感じることもあったが、哀しいとは思えなかった。
そのためか、自分は昔から涙を流すことはなかった。
哀しみや歓喜、怒りで涙は流せなかった。
別に不便とは思わなかったし、弱さの象徴として必要としなかった。
なのに今、泣いているツナをうらやましがってる。
自分の弱さを嘆くツナを、まぶしく思っている。
骸は何と言っていいかわからず、うつむいた。

「じゅうだいめえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

けたたましい声が聞こえてきた。
泣いていたツナも、己の思考に沈んでいた骸も、その大声は想定してなかった。
「じゅ、十代目ぇぇ！　どうなされたんですか、その傷はぁっ」
術か何かを使ったかのような速さで、獄寺はツナに駆け寄った。
「あぁぁ。な、涙など流して！　骸、てめぇ十代目に何しやがった！！」
「え、あ、いえ。僕ではなく……」
骸は壁の焼け焦げを指差した。
「……んだ、あれ？」
「ホズの死体です、一応。彼の怒りを買いまして」
解りやすく説明してやると、獄寺は納得した顔をした。

「なるほどな……しかし十代目、この傷……」
獄寺はあわあわとポケットからハンカチを出した。
ツナの背に手をそえ、ハンカチで傷口を軽く押さえる。
「骸、救急セットみてぇなの、無いか？」
「あったらすでに出してますよ」
骸はそう言って息をついた。ようやく一安心できたからである。
「沢田殿！　骸殿！！」
たたっと足音がしたと思うと、バジルの声がした。
振り返ると、獄寺に置いてかれたであろうバジルが走り寄ってきたのが見えた。
だけでなく、なんと見覚えのある金髪の男までいた。
「ロキ……！」
「よう、六道骸」
ロキはしゅたっと手を上げた。
「あーあ、ひでぇ傷だなぁ。ホズの方は……自業自得か」
仲間が倒されたというのに、ロキは淡々と呟いた。
「『神格』の中じゃ、一番歪んだ性格だったからな。ゴミ溜めで生きてきたから当たり前か」
ロキは肩をすくめ、ツナの前にしゃがみこんだ。
「大丈夫か？」
「は、はい……」
ツナは腹を押さえながらも頷いた。が、すぐさま顔を歪める。
「うっ……」
「十代目、大丈夫ですか！？」
「待ってください。今止血を……」
バジルは荷物から治療道具を出した。
「……なぜ彼らと一緒にいるんですか？」
骸はロキをジロリと睨んだ。
「ん？　あぁそのこと」
ロキは頭をポリポリかいた。

「俺アースファミリー裏切ったから」

「……はい？」

骸はロキを呆然と見上げた。

この男は何と言った？　裏切った？

「……冗談でしょう」

「いや、マジ」

ロキはあっさり言った。

「まぁ、それより。ボンゴレの傷の治療が終わったら移動するぞ」

ロキは笑みを消し、ふと真剣な顔をした。

「そろそろ、最終決戦だ」

続く…

標的４８　幻と涙（後書き）

こんにちは、沙伊です。
ロキも言ってた通り、次回から最終決戦始まります。
といっても、最初はツナ抜きで行きますけど。
では、また次回！

標的４９　大空と三つの天候と

最初に動き出したのは雲雀だった。
炎をまとわせたトンファーを振り上げ、オーディンに迫る。

ブンッ

必殺の一撃が放たれる。
「無駄なことを」
オーディンの手に炎が灯った。

ボオォォォッ

オレンジの炎が燃え上がる。
「……！」
雲雀はバッと身を引いた。
吹き出した冷や汗が頬を伝う。
今、首に刃を突き付けられたような感覚があった。脳裏に恐怖がかすめる。
「ただの戦う獣ではないらしいな」
全身に大空の炎をまとったオーディンはあくまで静かに言った。
「な、何だあれ！？　身体中に炎が……」
山本は刀を構えながら叫んだ。
「父さんの能力が……発動、された」

バルドルは目を見開いて呟いた。
「皆さん離れてください！　このままでは……」
「我流！」
バルドルが注意を呼びかけてるそばから、了平は大声を張り上げた。
「形態変化（カンビオ・フォルマ）！」
了平の声に、晴れカンガルーの姿が変化していく。
瞬きしている間に、了平のグローブが変化していた。
「行くぞ、オーディン！」
「愚かな。自ら死にに来るとは」
オーディンは炎を宿した槍を構えた。
「うおぉおぉおぉ！」
了平のラッシュが次々と放たれる。しかし、オーディンは全て紙一重でかわしていった。
「いけない、笹川君！　一人じゃ無理だ！！」
バルドルが叫んでも、熱くなった了平を止めることはできない。
「貴様は邪魔だ」
オーディンは了平から距離を置き、槍を構え直した。
「消えろ」
槍の炎がちろちろと大きくなり始める。
そして。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

轟音と、閃光。
辺りが赤い炎で染まった。

「治療完了です」
バジルは救急箱を直し始めた。
「ありがとう、バジル君」
「いえ。これくらい、門外顧問チームで習った応急手当ですから」
「ですが、やはり芝生の野郎の匣でちゃんと治した方がいいですね」
ツナの傷口を覗き込んだ獄寺は言った。
「そうなると……合流を急いだ方がいいですよ」
骸は厳しい表情を通りの曲がり角に向けた。
「誰か来ます」

『――!?』

全員武器を構えようとした。
「待ちな。おまえらはじっとしてろ」
ロキがバッと前に出た。
「裏切ったとはいえ、下の奴らにとっちゃ俺はまだ『神格』だ。俺がおまえらを確保したって言えばやり過ごせる」
「確かにな……」
獄寺は納得したような返答をしたが、まだ信用してるようには見えなかった。
気持ちは解らないでもないが、警戒心全開での対応はどうかと思う。
ツナは腹部の傷を押さえながらそう考えていた。
それに、わざわざそんなことをしなくてもいいと、ツナは解っていた。

この気配には、覚えがある。

「お、いたな」

角から現れた小さな人影に、ツナ以外の全員が驚いた。

「リ、リボーンさん！　ラルも……何でここに！？」

「ちゃおッス、獄寺」

「あ、どうも……じゃなくて！　並盛の方を守ってたんじゃないんですか！？」

「ちょっと気になることがあってな」

リボーンは獄寺にそう返し、ツナの方を見た。

「情けねー格好だな、ダメツナが」

「……」

ツナは言い返さなかった。ただリボーンを見つめ、何か問いたげな眼差しを投げかけている。

「……オーディンのことだな、おめーが訊きてーのは」

「……うん」

ツナはバジルの肩を借りながら立ち上がった。

「でも今はそんな時じゃないし……行かなきゃ」

「その傷でか？」

リボーンはツナの傷を眺めた。

ガーゼなどで塞いではいるが、所詮応急処置だ。傷口が塞がるわけではない。

常人を超えた体力の持ち主であるツナだからこそ生きているのであり、普通だったら即死の重症だ。

この状態で戦ったら、結果は考えずとも明らかである。

ツナもそれが解ってるだろうに……首を縦に振った。

「行かなきゃ……止めるんだ、オーディンを！」

ツナの目には恐怖も迷いも無い。

あるのは、強い意思だった。

包まれる。煙と、熱風と、轟音に。

「……間に、合ったぁ……」

山本は安堵のため息をついた。

「サンキュー、小次郎」

雨の炎のシールドを作った雨燕に礼を言い、山本は後ろを振り返った。

「大丈夫か、みんな」

「き、極限無事だー！！」

「私も、平気。雲の人は……」

「……」

「無事ですね。不機嫌だけど」

了平、クローム、雲雀、バルドルの顔を順に眺め、山本は再び安堵した。

しかしすぐ意識を前方に向ける。

（今の炎……最初の大空の炎じゃない。嵐の炎だった……？）

間違い無い。あれはオレンジの炎ではなく、赤い炎だった。

赤い炎は嵐の炎。死ぬ気の炎は色だけでなく形状も独特なので、絶対そうだと思えた。

（でも、何で嵐の炎を？）

獄寺のように複数の炎を操れるというのか。

だが、オーディンの指にはまってるリングは一つ――虹石から作られたものたった一個だ。
リングを隠し持ってる？　いいや、リングは指にはめないと意味が無いはずだ。
だとしたら……なぜ？
山本が思考を巡らせながら刀を構えると、オーディンもまた、槍を構え直した。
「雨の守護者……か」
槍の穂先に炎が灯った。
黄色い、輝くような炎が。
「……！？」
山本は目を見開いた。
思わずリングを見る。
炎は……灯っていない。
「よそ見をしている場合か？」
ハッとした時には、オーディンは眼前まで迫っていた。
「くっ」
山本は刀で槍を迎え撃った。
刃と刃がぶつかり合い、いったん離れる。
まるで磁石のように山本とオーディンは再び互いに迫った。
ギンッギギンッギギギギンッ
何度も響く剣戟の音。当事者以外の全員が、その迫力に飲まれて

動けなくなる。
「惜しいな」
オーディンは刃を交えながら呟いた。
頬や二の腕にかすり傷をおっているが、攻撃の勢いは止まらない。
「それほどの実力を持ちながら、ここで消えるのか」
「何言って……！？」
オーディンのスピードが一気に上がった。
先程の動きでは考えられないほどの速さだ。

ズバッ

「ぐあっ」
山本は攻撃を避けきれずに右肩から袈裟懸けに斬られた。
浅いが、それにしてもダメージは大きい。
山本はこらえられずによろめいた。
「終りだ、雨の守護者よ」
オーディンは必殺の突きをくりだした。
それは迷い無く、外れることも無く、まっすぐ山本の心臓へと……

ギィィィンッ

弾かれた。
オーディンの槍が、彼ごと後ろに吹っ飛ばされる。
「並中の生徒に手を出さないでくれる？」
オーディンを殴り飛ばした張本人である雲雀は怒りをにじませながら言った。
靴底を滑らせながらもこらえたオーディンは、ふむ、と唸る。
「……少し気になったので訊くが、並中の生徒でなければ傷付いてもいいということか？」
「うん」

うわぁ、うんって言っちゃったよこの人！

誰もが瞬間的にそう思った。

「面白い持論だな、雲の守護者。しかし……それを通し続けることができるか？」

オーディンの姿がかすんだ。

いや違う。残像を残す勢いで走り出したのだ！

「……！」

雲雀はトンファーでオーディンの攻撃を迎撃した。

一発目をしのいだ、と思ったらオーディンの長い足が蹴り上げられる。

喉を狙った一撃を、雲雀は後ろに身を投げることで回避した。

トンファーを持ったまま雲雀は床に両手を着き、バク転の要領で蹴りを返す。

オーディンは槍の柄でそれを受け止め、手刀を放った。

しかし雲雀はその腕を両足で蟹挟みし、オーディンを投げ飛ばす。

オーディンはあっさり投げ飛ばされた。

雲雀は間髪入れず間合いを詰め、トンファーを振り上げる。

バチバチバチィッ

オーディンの手から雷撃が放たれた。

「ぐっ……！？」

雷撃に肩をかすめられた雲雀は後退した。

「今度は雷属性の炎！？」

山本は思わず大声を上げた。

大空、嵐、晴れ、雷。彼はその四つの炎を操れるのか？

「！！　……嘘、そんな……」

クロームが呆然とした声を出した。

見れば彼女は霧フクロウを形態変化（カンビオ・フォルマ）させており、魔レンズを通してオーディンを見つめている。
「どうしたのだ、クローム！」
了平が大声で尋ねると、クロームはこくんと唾を飲み込んだ。
「あ、あの人……全属性の死ぬ気の炎が身体を巡ってる……！」

『……！？』

山本、雲雀、了平は驚いてオーディンを凝視した。
「……そうです」
バルドルは厳しい表情で頷いた。
「僕ら『神格』は、死ぬ気の炎を武器ではなく己の身体に宿し、戦います。ですが、それは実験にすぎません」
バルドルはオーディンを見つめた。
「全ては父が……いえ、オーディンが完全となるための過程なんです」
「つまり……どういうことだ？」
山本は傷を押さえながらバルドルに尋ねた。
「……その実験は成功しました。つまり」
バルドルの言葉と同時に、オーディンが立ち上がる。
その手に、色とりどりの炎を灯して。
「父は……全ての属性を操ることができるんです。しかも、『神格』全員の能力を持っています」

標的４９　大空と三つの天候と（後書き）

どうも、沙伊です。
前回やたら長かったので今回は文字数少なめに……まぁ普段と大差ないんですが。
今回雲雀は軽業師みたいな戦い方してましたが本物はあんな風に戦いませんね……よくよく考えると。
ディーノとの修行で身に付けた戦闘方だと考えてください！（オイ
次は並盛町のチームを出そうと思ってます。
では、次回で会いましょう！

標的５０　調和

ツナ達は長い通路を走っていた。
ツナは獄寺に肩を借りて走る。傷が酷く痛むが気にしてられない。
「山本達、無事、かな……」
ツナは途切れ途切れに呟いた。
「さぁな。だがあいつらのことだ、死んじゃいねーだろ」
リボーンはロキの肩に乗りながら淡々と答える。
「だが、奴の能力は恐ろしい。……急がねーとな」
リボーンのセリフに、全員身を引き締めた。
「……！　誰か来ますっ」
バジルがハッと声を上げた。
「今度こそ敵、ですかね」
骸の言葉が終わらない内に、彼らは姿を現した。
「！　やっぱ敵だっ！！」
獄寺は声を上げた。
「……まだこんな戦力が残ってたけっな、うちには」
ロキはボソッと呟いた。
「ロキ様。オーディン様より貴方の抹殺命令が下っております。お覚悟を」
「はっ、なるほどねぇ。裏切りはとうにバレてたわけか」
ロキはニヤッと笑みを浮かべた。しかし、目は笑ってない。
「ボンゴレ?世とその守護者達にも消えてもらいましょう」
「できるもんなら、やってみやがれ！」

獄寺はツナをバジルに預け、匣を開けた。
「瓜、形態変化（カンビオ・フォルマ）！」
獄寺の匣兵器に飛び乗った嵐猫の姿が変わっていく。
気付いたときには、一つの洋弓（アーチェリー）に変わっていた。
「喰らいやがれ！」
獄寺は矢を放った。
嵐の炎でできた矢は、敵を次々に貫いていく。
「ひ、ひるむな！　雨部隊は集中して炎の壁を……がっ」
司令官らしき男が倒れた。
「敵は獄寺殿のみではありませんよ！」
バジルは戻ってきた武器をキャッチし、ふっと笑った。
「クフフ……彼に活躍の場を取られるのは癪ですね」
骸は不敵に笑って三叉槍の石突きで床を叩いた。

ズドドドドドドドドドドドドドド！！

火柱が床やら壁やら天井やらから飛び出してきた。
「うぉっ！？　骸てめぇ、俺まで焼き殺す気かよっ」
「おや、すみません」
全然すまなさそうじゃない。
「元部下（？）には悪ぃが」
ロキもまた、匣を開匣させた。大剣が彼の手に握られる。
「立ち止まってる場合じゃねぇんだよ！」
「ぐぁっ」
敵が一気に七、八人はぶっ飛んだ。
「なっ、人間技じゃねぇぞ！」
「凄い……なんという力だ」
「さすがオーディンの右腕だっただけありますね」
獄寺、バジル、骸はロキの人間離れした戦い方に目を剥く。
「沢田、傷の方はどうだ？」

ツナをかばって戦っているラルが尋ねた。
「今のところ大丈夫……でも、みんなが」
「おめーはこれでも飲んで待ってろ」
「むぐっ」
いきなり口の中に何かを放り込まれた。ツナは思わず飲み込んでしまう。
「な、何だよ今の！」
「死ぬ気丸の改良版だ」
「改良版？」
「従来の死ぬ気丸とは違い、そいつは治癒能力を引き上げる。ただし」
「……！？」
ツナの全身に激しい痛みが襲いかかった。
「っ、ぐ……あ゛……」
「再生が早い分、痛みが強ぇ。気を抜くと死ぬぞ」
リボーンはうずくまるツナの頬に触れた。
「おまけに治るのは傷だけで、流れた血は戻らねぇ。痛みも身体に残る。戦わねぇなら、打ち消し効果があるこれを……」

バシッ

リボーンが持ち上げたビンを、ツナは弾き飛ばした。
「いら、ない……」
ツナは息が絶え絶えになりながら歯を食い縛った。
「俺は、オーディンと戦わなきゃ、いけない。戦って、あの人が戦う理由を、確かめなくちゃいけないんだ！」
また痛みが来たのか、ツナは手を床についた。
「いい答えだ。それでこそ俺の生徒だぞ」
リボーンはにっと笑った。
「奴らのことは心配すんな。あんな奴らにやられる奴らじゃねーこ

とぐらい解ってんだろ」
「……っ、うん……」
「それに」
「……？」
「もうすぐ増援が来るはずだ」
リボーンはそう言っていつものように不敵に笑った。

「全ての死ぬ気の炎を操れるだって！？」

山本は目を見開いた。
「そんな馬鹿なこと……！」
「ありえるんですよっ……」
バルドルは奥歯を噛み締めた。
「父は、大空属性の炎しか操れなかった。だからこそ、全属性の炎を操れるんです」
「？　どういう、こと……？」
クロームは眉をひそめた。
「……大空の特徴は『調和』。本来バラバラの力を持つ七つの死ぬ気の炎を大空の炎で操っているんです」
バルドルは匣を開匣させた。雨属性の炎をまとった鷹が飛び出す。
「全身を全ての死ぬ気の炎で操る。これが我々アースファミリーの大空です。いや」
バルドルはもう一つの匣を開匣させた。右腕全体を覆う鎧のようなものがバルドルの腕に装備される。
「僕にとってはだった、というべきか」

「……ふん。完全に裏切ったようだな、バルドル」
オーディンは冷たい声を発した。
「まぁ『視た』通りか。さして驚きも無い」
オーディンは傷で塞がれた片目に触れた。
「……時間があまりない。一気にカタをつけさせてもらう」
オーディンの全身が嵐の炎で包まれる。
「！！　何なのだ、あれはっ」
了平は目を見開いた。
「！　っく」
バルドルはダンッと地面を蹴り、鎧をまとった右腕を振り上げた。
「遅い」
オーディンは左手でそれを受け止める。

バキィィィィィィッ

鎧が砕け散った。
「！！」
バルドルは目を剥きつつ地面に降りた。
「バルドル……それに雨の守護者、雲の守護者よ」
嵐の炎が膨れ上がる。
「まずは貴様らからだ！」

赤い炎が全てを覆った。

敵は大方倒した。
「獄寺殿のボンゴレ匣とロキ殿の力が無ければ、すぐ全滅していたかもしれませんね」
バジルは上がった息を吐き出しながら不吉なことを呟いた。
「失礼ですね。僕だけでは力不足だとでも言いたいんですか？」
骸は笑顔のまま、しかし眉をひきつらせながら言った。
「何言ってやがる骸。てめーは最初から疲れてんじゃねーか」
獄寺はけっと悪態をついた。
「もしおまえがその状態で一人で戦ったら、三秒でまた六道巡りだぜ」
「さっ……」
「だからよ骸」
怒鳴ろうとした骸の言葉を、獄寺は遮った。
「俺らを頼れる時は頼れよな。てめーがどう思ってようと、俺達はファミリーなんだからよ」
「……！」
骸は目を見開いた。
まじまじと獄寺を見つめた後、独特の笑いを浮かべる。
「クフフ。全く揃いも揃って甘く馬鹿な集まりですね、君達は」
「んだとてめっ」
「ですが」
今度は骸が獄寺の言葉を遮った。
「それを聞いて安心する僕が、一番馬鹿かも知れませんね」
骸はふぅ、と息をついた。
「全員殲滅しますよ」
「てめーに言われなくても解ってるぜ」
「急ぎましょう。山本殿達が心配です！」

少年三人が武器を構え直す姿を、ロキは頼もしく感じた。
（こういう若造達もいる）
数は少ないが、確かに存在するのだ。
（そんな少年達のためにもオーディン、俺は）

おまえを、裏切る！

自分がやってることの間違いは解ってる。だが、前から思ってたことだ。
四人が再び戦い始めた時――

ザッザッザッザッザッザッザッザッザッザッ

『……！？』

新たな足音と姿を現した大量の敵に、全員目を剥いた。
「なっ、またか！？」
「ハハハッ、馬鹿めが！」
傷だらけで床に這いつくばっていた敵の一人が嘲笑った。
「このような事態を予測して、増援を用意していたのだ！　おまえらが思うほど、我々は小さな組織ではない」
「おいおいマジかよ」
ロキの頬に冷や汗が伝った。
「聞いてねーぜ。こんな人数」
「ただでさえ拙者達は疲弊してるというのに」
バジルは唇を噛んだ。
「死ね！　ボンゴレに裏切り者！！」
匣兵器がいっせいに獄寺達に向けられ――

ドゴゥッ

敵が数人吹っ飛んだ。
呆然とする獄寺達と敵の前に第三者が、第三者達が現れる。

「騒ぐんじゃねぇ、どカス共」

第三者である黒服の集団の先頭に立つ男――ザンザスは、いきなり暴言を吐いた。
「貴様らをボンゴレにたてつく者と見なし、抹殺する」

標的５０　調和（後書き）

こんにちは、沙伊です。
ヴァリアー出しました、ヴァリアー！　でもあんま活躍の場面が無いかも……（汗）
戦闘シーン出したいけど書けない……文才欲しいと常日頃から思います……。精進しよう……
少しでも読みやすく書く努力をします！

標的５１　合流

「ザ、ザンザス！　何でおまえがここにっ……」
ツナは痛みに顔を歪めながら声を張り上げた。
「勘違いすんじゃねぇ。沢田綱吉」
ザンザスは目にぐっと力を込めた。ツナは思わず後ずさる。
「俺はてめぇを助けに来たわけじゃねぇ。ボンゴレに仇なす奴らをかっ消しに来ただけだ」
ザンザスの両手に銃が握られた。
「う〝お〝ぉぉい！　何ぼさっとしてやがる！！」
突然のことで呆然としていた獄寺達に、スクアーロは叱責を浴びせた。
「ここは俺達が引き受けたっつってんだぁ！　さっさと行きやがれぇぇ！！」
「そーそー。ここにいてても邪魔なだけだし」
ししししっ、とベルフェゴールは笑った。
「……どうする？　ツナ」
リボーンはツナを振り返った。
「ど、どうするって……」
「決めんのはボスであるおめーだぞ」
ツナはぐっ、と一瞬言葉に詰まったが……意を決してザンザスを見た。
「ザンザス、ここを頼む！」
ツナは痛みをこらえながら走り出した。
その後を、獄寺達が追いかける。

（頼んだぞ、ザンザス）
リボーンは心の中でそう呟き、ラルと共に後に続いた。

「最初っからそう言やぁいいんだ、どカスが」
ツナ達が去った後、ザンザスはそう悪態をついた。
その様子に、スクアーロはやれやれと首を振る。
（いなくなってまで口悪く言ってもせんねぇだろ）
いつものことなのでいちいち口にはしないが。
小言を頭の隅に追いやり、スクアーロは声を張り上げた。
「う〝お〝ぉぉい！　死にたい奴から前に出やがれぇ！！」
「全く、並盛だけじゃなく敵の殲滅まで……。後で残業代出るんだろうね」
「んもう！　マモちゃんそんなこと言わずに。これも任務よ」
「ししししっ。王子的には殺しがいっぱいできて満足だけど」
「この戦いが終わればヴァリアーの功績も一気に上がる。そうすれば……」
「うっさいムッツリ」
「何！？」
ぎゃあぎゃあ騒ぎまくるヴァリアーの面々に、敵は色んな意味で圧倒される。
だが、ヴァリアーが武器を構えたことにより、その顔には緊張が走った。
「行くぞ、カス共」
『おう！！』
ザンザスの号令に、幹部達は動き出した。

ガラガラと天井が崩れ、コンクリートが剥き出しになる。
壁は外装の鉄板が溶け、ついでに中のコンクリートまでドロドロになっていた。
「っぐ……ってあれ？」
山本はガレキから這い出て、自分が怪我をしていないことに気付いた。
いや、すり傷や打撲はあるが、死ぬ気の炎で焼かれた火傷の跡が無い。
「何で……」
辺りを見渡そうとして、起き上がろうとする雲雀を見付けた。
「雲雀！　無事か！？」
「！　山本　武……」
頭でも打ったのか、額を押さえた雲雀は少しだけ目を見開いた。
「そうだ、先輩やクロームは」

「山本ぉ！　極限に無事かぁ！！」

聞き覚えのある大声に遮られた。
振り返ると、瓦礫の上に立つ了平とクロームがいる。
了平とクロームはほっと弛緩したような表情を浮かべたが……山本の後ろを見て目を剥いた。
何だと思って振り向いた山本も同じく目を見開く。

目の前に、バルドルが立っている。
しかもただ立っているのではなく、全身火傷だらけで、服もボロボロだった。

「バ、バルドルさん!?」
山本が驚いて声を上げると、バルドルは錆び付いたブリキのような動きで振り返った。
「よかった……みんな無事ですね……」
バルドルは息をついたかと思うと、がくんと膝を折った。
「だ、大丈夫ッスか!?」
「あぁ……」
バルドルは足元の壊れた匣を手に取った。
「最新技術の匣兵器でも……父さんの攻撃を防ぐので精一杯だった……」
バルドルは唇を噛み締める。
「父さんの本気はこんなもんじゃないのに……僕には止められ無かった……」

「全くだ」

土煙からオーディンが姿を現した。
「正直失望したぞ」
嵐の炎をまとったオーディンは眉根を寄せた。
「この程度か……力を得、匣兵器も得たというのに」
オーディンの目には、言葉通り失望の色が浮かんでいた。
「……守護者は無傷か。貴様らはバルドルほどやわではあるまい」
嵐の炎が再びオーディンの全身に灯る。更に、緑色をしたスパークも炎の中に混じった。
「今度こそ、消えろ」
混合された炎が放たれた。

「……！」

真っ先に動いたのは雲雀だ。匣に炎を注入し、開匣させる。

「ロール、防御だ」

雲雀の声に呼応するように、雲ハリネズミの球体が増えていく。

バヂバヂバヂィッ

混合された炎と球体がぶつかりあった。

しばらくせめぎ合いが続き、バシィッ、と弾ける。

炎は消えたが、雲ハリネズミの球体も霧散してしまった。

目を見開く雲雀に向かって、オーディンは大空属性の炎を灯した槍を突き出す。

雲雀は紙一重で避けたものの、炎で服の一部が焼け焦げた。

更に攻撃を加えようとしたオーディンに向かって、山本は刀を振り上げる。

ギィィィィンッ

金属音が鳴り響いた。

ギチギチと鍔ぜり合いになり、痛めた肩に負担がかかる。

（くそっ。肩が痛ぇ。けど、ここで退くわけには）

山本のリングの炎が大きくなる。

「いかねぇんだよ！」

雨の炎が膨れ上がった。

身体中が痛い。さっきまで襲いかかっていた痛みが、まだ残っているのだ。
「大丈夫ですか、十代目？」
獄寺が心配そうに尋ねてきた。
「うん。痛みはまだ残ってるけど……戦えないほどじゃないよ」
血が足りないせいで頭がくらくらした。だが傷口は塞がっている。
（大丈夫、戦える）
ツナは唇を引き締めた。
「！　誰か来ますよ」
骸が声を上げた。次いで足音が響く。
「また敵ですか！」
「いや……足音が違うぜ。しかもこれは一人だ」
バジルの言葉に、獄寺は眉をひそめて否定する。
「音からして……女だな」
ロキは不審げな表情を浮かべた。
「うちが使ってる軍靴じゃねぇ。でも誰……」

「見付けた！！」

少女の声に、全員足を止めた。獄寺の目が見開かれる。
「お、おい……あいつは」
「明ちゃん！？」
曲がり角から現れた少女を見て、ツナは叫んだ。少女――明は腕に何かを抱えている。
……て。

「何でランボまでいんのー！？」
ツナの顎が落ちた。
「綱吉君、みんな、無事！？　……て、おまえは！」
明はロキを見て目を剥いた。
「なぜ敵と行動してるの！」
「いや、これには色々わけが……」
「それより、ちゃんとアホ牛を連れてきたな」
言いわけを始めようとしたツナを遮り、リボーンは明に抱えられたランボを見やる。
「ええ。……連れてくる間に寝ちゃったけど」
「いや、それでいい」
リボーンはニヤリと笑った。
ツナは「あ、何か企んでる」と直感したが、獄寺達は意味が解らず顔を見合わせる。
「よし。……お、さっそくアホ牛が役立つ時が来たぞ」

『は？』

全員顔を見合わせた。
「いたぞ！　ボンゴレだ！」
「ロキ様も一緒だ！　裏切ったというのは本当だったのかっ」
敵だ。それも大量の。
武器を構えようとした獄寺、骸、バジルを制し、リボーンはニッと笑う。
「おまえらは何もしなくていいぞ。おいアホ牛、起きやがれ」
「ぐぴゃっ」
鼻風船を膨らませていたランボは、リボーンに蹴っ飛ばされたことにより目を覚ました。
「なにすんだリボーン！」
「うるせーぞ」

更に蹴り。
「ぐぴゃっ。……が、ま……うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」
当然の結果だが……ランボは泣き出した。
「リボーンのアホがぁ！　死ねぇっ」
ランボのリングに炎が灯り、匣に注入された。
バチバチィッ
辺りに雷の炎が広がり、その中心に雷牛が現れる。
「牛丼ー！！」
ランボが叫ぶと同時に雷牛の姿が変わっていた。
気付いた時には、ランボの全身を守る盾に変化する。
「っげ、マジィッ！」
獄寺は目を剥いてわたわたと匣を取り出す。
「みんな……みんな死ねぇ！」
電光が放たれた。
「……嘘、だろ……」

山本は目を剥いた。
「私がいつ、三つの炎を『同時』に操れないと言った」
オーディンは槍を握り直した。
「大空、嵐、そして……雷」
山本の手から刀が落ちる。刃には、ヒビが入っていた。
そしてオーディンの槍は。
「ぐっ……がはっ」
山本は血塊を吐く。

槍は、山本の腹を貫いていた。

「ボンゴレの守護者も、しょせんこの程度か」
オーディンは槍を引き抜いた。同時に、山本の身体がぐらりと倒れる。
「山本ぉ！」
了平が叫ぶ声も、今は遠い。

「まずは一人……」

見下ろすオーディンの隻眼は、どこまでも冷たかった。

続く…

標的５１　合流（後書き）

こんにちは、沙伊です。
いつもより少し更新に時間かかりました……なのに相変わらずの駄文……（泣）
今回書くこと無いです、すみません。

では、また次回！

標的５２　対峙

槍が、非情なスピードで振り下ろされた。
山本は身体が動かず、避ける手だても思い付かない。
（くそっ……！）
山本はぐっと目を閉じた。

ドガアァァァァァァァァァァン！！

鼓膜を震わす破壊音。しかし、身体には新たな衝撃は来なかった。
「……あり？　ってあ」
山本は目を開けて、誰かに抱えられていることに気が付いた。
「あ、雲雀……」
自分を抱える腕をたどり、顔を見るとしかめっ面の雲雀だった。
山本の方が体格がいいはずなのに、軽々と抱えられている。更に雲雀の反対側の手には、時雨金時が握られていた。
「助けてくれたのか？　ハハッ……サンキューな」
「……君のせいでトンファーを駄目にしたよ」
「へ？」
山本は改めて周りを見渡した。
離れた場所にオーディンがいる。あの一瞬で大分間合いを空けたようだ。
そしてオーディンの足元。ぐにゃりと歪んだ、銀色のトンファーが落ちていた。
「……！」

「死ぬ気の炎をまとっていたんだけどね、受け止めたとたんあの様だよ」
淡々とした口調だが、武器を失って冷静でいられるはずがない。
事実、雲雀の頬にはつ、と汗が伝っていた。
「マジ、かよ……雲雀まで……」
山本は呆然とした。
「山本、大丈夫か！？」
了平が駆け寄った。
「傷が……酷い……」
クロームは青ざめた顔で呟く。
山本は痛みで顔をしかめながらも自身の傷を見下ろした。
血が絶え間無く溢れており、自分で見ても酷い傷だと解った。
「待ってろ、今治療を……」

「させん」

了平の言葉を遮り、オーディンが地面を蹴った。
「私が！」
クロームが前に出て三叉槍を構えた。
トンッ、と床を叩くと、床から突き出るように壁が現れた。
それを剛槍で破壊し、オーディンは突進する。
クロームが三叉槍を回転させると、なだれるように頭上から岩石が幾つも落ちてきた。
それらを避け、または凪ぎ払ってオーディンは走ってくる。
「この程度の幻術で私を倒せると思うな」
「……」
クロームは答えずに再び槍で床を突いた。

ドシュシュシュッ

触手が床を突き破って現れた。
触手はオーディンの腕や足に絡み付き、動きを封じる。
「晴れの人、今の内に！」
「うむ！　すまん、クローム！！」
了平は匣を開匣させ、山本の傷に晴れゴテを当てた。
「ふむ……『神格』を上回る幻術だ……よもや常人にこれほどの術士がいるとは」
「……！」
クロームは大きな目を更に大きくした。
かなりの力で締め付けられてるにも関わらず、オーディンは余裕の表情を消さないからだ。
「何、で……」
「……霧の炎をまとった有幻覚か。実体ある幻」

バシィィィィィンッ

触手が弾け飛んだ。
辺りに破片は飛び散り、スウッと消える。
「だが、所詮紛い物よ」
オーディンの槍がクロームに振り下ろされる。クロームはとっさに三叉槍で受け止めた。
強力な幻覚で創られた槍は簡単に壊れたりしない。
だが馬力では完全にクロームが劣っている。
「っう……」
クロームは押してくるオーディンの力に耐えきれず、膝を着いた。
「少女と言えど敵は敵」
槍に三色の炎が灯る。
「容赦無く消し炭にしてくれる」
死ぬ気の炎がクロームの眼前に迫る――

ドガガガガガガガガガガガガッ
突然吹き出した火柱がオーディンを押し返した。
「クロームを傷付けさせませんよ」
ザッとクロームの隣に立つ者が一人。
「む、骸様……！」
クロームが歓喜の声を上げると、骸は振り返ってほっと息をついた。
「安心している場合か」
オーディンは槍を構え直した。
「てめぇこそ、敵は一人とは限らねぇぜ」
別方向から声。
「喰らえ！　赤竜巻の矢（トルネード・フレイムアロー）!!」
嵐の炎をまとった矢がオーディンを貫いた。
「手応えねぇな」
ザンザスはけっと悪態をついた。
「幹部連中みーんな沢田綱吉達にやられたみたいだからなー」
王子的にもつまんねー、とナイフを壁に向けて投げるベルに「止

めろ」と言って、スクアーロは辺りを見渡した。
「あらかた片付いたなぁ……後はどうする？　ボスさんよぉ」
「……残党のカス共を駆逐する。それから……ん？」
ザンザスはふと眉をひそめた。
今微かだが振動しなかったか？
スクアーロも気付いたようで「何だ、今の」と呟く。
「沢田綱吉達が戦ってんのか？」
「だとしたら、随分派手にやってるみたいだね」
マーモンはふよふよ浮かびながら言った。
「ここは地下だ。あんまり暴れられるとここが崩れて僕達まで危ないよ」
「だったらここから出るの？　このままだと危ないんでしょ」
さっきまで死体を嬉々として眺めていたルッスーリアが顔を上げた。
「まがりなしにもアジトだろ。そう簡単に崩れるとは思わねぇけどなぁ」
スクアーロは顔を少ししかめた。
「しばらく様子見てた方がよくね？　なーんか新手来たっぽいし」
ベルの言う通り、また敵らしき男達が現れた。
ただ先程の奴らとは違い、武器を持っていない。
不審に思ったヴァリアー一同だが、すぐさまその理由に気付くことになる。
『グオ〝ォオオオオオオオオオオオオオオオ！！』
鼓膜を破るかと思うほどの集団咆哮に、全員が驚いたり後ずさったりする。
その間に、男達の筋肉は膨張し、全身から死ぬ気の炎をほとばし

った。
「あれは……」
ザンザスの超直感が告げる。
あれは……人体実験の被験体達だ。
それを思い、だがザンザスは一片の同情も彼らにやらなかった。
それがどうした、と思ったし、今の彼らは自分達にとって倒すべき相手である。
問題があるとすれば、彼らが先程の敵よりはるかに御しにくいという点か。
「気を抜くんじゃねーぞ、カス共」
ザンザスの声に、幹部達は遅滞無く答えた。
再び全員が武器を構える。
その目に……怯えは一切浮かんでいなかった。
獄寺の矢は外れること無くオーディンを貫いた。
それは全員が思ったことだし、確信したことだった。
……骸とクロームを除いては。
「獄寺　隼人！　あれは本物じゃありません！！」
骸の声に、獄寺は一瞬いぶかしげな顔をした。
しかし、クロームが作り出した触手に引っ張られ、目を剥く。
そのまま無様に床に倒れてしまった。

「うお！　何しやが……」
獄寺の語尾が消えた。
さっきまで獄寺の頭があった場所をオーディンの槍が貫いたからだ。
「ふむ……やはり術士はごまかせんか」
槍を手元に引いたオーディンはさほど残念そうでもなく呟いた。
「な、何でこいつまで幻術使えんだよ！」
クロームの幻覚で引っ張られたおかげで助かった獄寺は冷や汗をかきながら叫んだ。
「オーディンの能力（チカラ）だ」
オーディンと獄寺達を隔てるように一人の男が現れた。
「……ロキ」
「よう、オーディン」
ロキは苦みの残る笑みを浮かべた。
「て、き……！？」
「なぜ敵の幹部がいるのだ！？」
クロームと了平が叫んだ。
雲雀は何も言わないが、表情が厳しくなる。
「貴様も裏切ったか」
オーディンの目が僅かに揺れた。
「俺のことも視たんだろ？　なぜ驚く」
ロキは一歩後ろに下がった。
「それに戦うのは……俺じゃねぇ」

ズガァァンッ

銃声が鳴り響いた。
「死ぬ気の俺の生徒は強いぞ、オーディン」
硝煙を上げる銃を片手に、リボーンがロキの肩に飛び乗った。
その銃弾が向けられたのは。

ガギィィィィィィィィィィィンッ！！

槍とグローブがぶつかり合った。

「ボンゴレ、？世……！」

「オーディン、おまえを倒す！」

額に死ぬ気の炎を灯したツナはオーディンを睨み付けた。

続く…

標的５２　対峙（後書き）

こんにちは、沙伊です。
今回特に書くこと無いです……あえて書くなら最終回が近いという点でしょうか……
本当はもっと先延ばししたかったけど、何か書いてる間にこんな早くツナとオーディンが出会っちゃった……（汗）
とりあえず次回最終決戦です。
バトルシーン書くの好きだけど、解りやすく書けてるかは謎なんですよね……

標的５３　ツナｖｓオーディン

ツナとオーディンは間合いを取った。
「来たか……ボンゴレ?世」
「オーディン、俺はあんたを倒す。そして……訊きたいことがあるんだ」
ツナは拳を持ち上げた。
「ほう？　訊きたいことか。何だ?」
「勝ってから話す」
「……そうか。では」
オーディンは地面を蹴った。
「一生訊けそうにないな」
槍に大空、嵐、雷の炎が宿った。
ツナは後ろに下がってそれを避け、拳に炎を灯す。
加減無く突き出された拳を、オーディンは槍の柄で受け止めた。
オーディンはツナの拳を押し返し、再び槍を振るう。
今度はツナが槍を受け止めた。瞬間、槍を氷が包んでいく。
「むっ」
オーディンは掴まれた槍を引き寄せると、間合いを大きく開けた。
ツナは追撃せず、だらりと両手を下げる。しかし、拳に炎は宿ったままだった。
オーディンの肩も、力が抜けたように下がった。しかし、槍は構え直される。
観客と化していた守護者達から息が漏れた。

ほんの短いやり取りのはずなのに、両者から放たれる闘気は半端じゃない。
「まだお互い匣も使ってねぇのに……何て殺気だよ」
獄寺はつばを飲み込んだ。
山本も顎を引いて同意しつつ……ふと眉をひそめた。
「ツナの動き……何かおかしくねぇか？」
「確かにね」
雲雀が片眉を上げて頷いた。
「沢田綱吉の動きに精彩が無い」
短い呟きだったが、今のツナの戦い方を形容するにふさわしかった。
「沢田君は、全快の状態じゃないんだよ」
背後からの声に、全員がいっせいに振り返った。
「明！　何でいるんだ？」
「こんばんは、山本君。この子を連れて来たんだよ」
明は抱えたものを見せた。
「ランボではないか！　しかしなぜこんなところに……」
了平が首を傾げると、クロームはランボの頭をそっと撫でた。
「牛の子……疲れてる？」
「ふひ～……ランボさんもう動けないもんね～」
ランボは目を回していた。
「リボーンが連れてこいって言って……連れてきたら、ランボ君が匣で敵を倒したの。そのせいで疲れたみたい」
「何で連れてきたの？」
クロームが尋ねると、明は肩をすくめた。
「楽に進めるからだって」
そんなことに守護者使ったのか！？
辺りにそんな空気が流れ、皆リボーンを見る。

「そいつも守護者だからな。戦うのは当然だぞ」
リボーンは悪びれもせず言い放った。

「解らんな」

オーディンはツナに囁きかけた。
「なぜそれほどの力を持ちながら、世界を変えようとは思わない？」
「俺は世界を変えるために戦うんじゃない」
ツナは淀み無く答える。
「それにオーディン。おまえのやってることは世界を変えることじゃない。世界を壊すことが目的だろう」
「……！」
オーディンは隻眼を見開いた後、ふっと笑った。
「当たらずとも遠からず、だな。確かに第一目的は世界を壊すことだ。だから」
オーディンの目が、ツナのボンゴレリングに注がれた。
「世界を創り出したトリニセッテを破壊する。二度と、同じ世界を創り出せないように」
「……そうか」
ツナは短く返すと、構えを取った。
オーディンが走り出す。槍が嵐、大空の炎をまとって突き出される。
ツナはそれを真っ向から受け止めた。槍の穂先が凍っていく。
オーディンはバッと身を引くと、匣を取り出し、開匣させた。

ドシュゥッ

出てきたのは、大空属性の炎をまとったカラスだ。
大空カラスは一鳴きすると、嵐の炎と雷の炎をまとって突っ込んできた。

ツナは目を剥きつつも後方に飛ぶ。
「七種の炎を操れるのは私だけだと思うな」
大空属性のカラスはツナを追撃した。
炎が膨れ上がり、壁や天井を溶かす。

「消えろ、ボンゴレ?世」

炎の塊が、ツナとぶつかり合った。

「こんなもんか」

ディーノは鞭を手元に引き寄せた。
地面に倒れた複数の敵を見渡し、満足げに頷く。
「よし！　敵は全員倒したな。ロマーリオ、みんなに連絡してくれ」
「はいよ」
後ろに控えていたロマーリオは携帯を取り出した。
（ヴァリアーは敵アジトにいるツナ達の援護に行ったし、残ってんのはキャバッローネとジッリョネロ、アルコバレーノだけか）
ディーノはアースファミリーのアジトがあるであろう方向に目をやった。
（ツナ達、大丈夫かな）
ディーノの胸に不安がよぎる。
（ツナ達を信じてねぇわけじゃない。でも、何だ、この嫌な感じ）
ディーノが顔をしかめていると、ロマーリオが「ボ、ボス！」と叫んだ。

「どうした、ロマー、リ、オ……」
ディーノは振り返り、言葉を失った。
「嘘、だろ……」
ディーノの頬に、冷たい汗が伝う。
「何で……何でこいつらがいるんだ！」

煙が上がった。
辺りから何かが蒸発する音が聞こえる。
「終わりだな」
オーディンは煙で埋まった視界を見て一つ頷いた。
「もう生きてはいまい……！？」
オーディンの言葉が途切れた。

ツナが、無傷だったからだ。

ツナはボンゴレ匣を形態変化（カンビオ・フォルマ）させてマントに変化させて攻撃を防いだのである。
「……なるほど。報告に聞いていたマントか」
オーディンはややあって頷いた。
「ならば、私も本気を出さねばそれは貫けんな」
「貫けると思っているのか」
ライオンの姿に戻ったナッツを肩に乗せたツナは構えを取った。
ツナは勝てる自信があった。
確かに複合炎は強力だが、こちらも負けるわけにはいかないのだ。
「勝てるさ。私の」
オーディンは左目の傷に触れた。

「この左目があればな」

左目が開いた。

傷で塞がれていたはずの目が開いたことで、ツナは驚く。
更に、オーディンの瞳を見てぞっとした。
(瞳に、炎が!?)
開かれた瞳に、大空の炎が灯っている。
瞳から炎が吹き出してるのだ!

「ここから私の本気だ。ボンゴレ?世」

オーディンはあくまで静かに、しかしはっきりと殺気をまとって槍を構えた。

続く…

標的５３　ツナｖｓオーディン（後書き）

ごめんなさい、更新遅れました！
テスト期間中だったため、なかなか書けなかったんです……すみません。
次はもっと早く書けるよう努力します！
読んでいただきありがとうございました！！

標的５４　左目

左目の炎は、ゆらゆら揺れながら輝いている。
オレンジ色の炎――大空の炎を灯した瞳を、ツナは信じられない思いで見つめていた。
（何だあの目は……炎が宿ってる……）
一体何の能力なんだ？
アースファミリーで手に入れた力なのか、それとも……
ツナは少しだけ顔を動かし、骸の方を見た。
骸は顔を歪めた後、こくりと頷く。
「前に話したでしょう。オーディンは予知以外に、もう一つ能力があると。あの左目がそうです」
骸はじぃっとオーディンを見つめた。その目は、僅かに揺れている。
オーディンはツナから骸に目線を向けた。
「……そういえばおまえに話したことがあったな。そう、私の両目には、ある能力（ちから）が宿っている」
オーディンは右目に触れた。
「右は存在するものを映す。それはおまえ達の目と変わらん。が、もう一つ、未来を視るという能力もあるな。そして」
今度は左目、炎が灯る目に触れる。
「大空の炎を灯すこの目は」
オーディンの足元のガレキが揺れた。
「万物を操る力だ」

ヒュンッ
ガッ

ガレキが突然ツナにぶつかってきた。
ガレキが中に浮いて、ツナに突進してきたのだ！
「がっ、はっ」
腹に直撃を受けたツナはぐらっとよろめく。傷があった場所だったために、ダメージがいつもより大きい。
「反応が遅かったな。それほど意外だったか」
オーディンは少しだけ首を傾げた。
ガレキが勝手に動いたという非現実的なことに驚きもしない。

「おい、ガレキが今……！」
獄寺が声を上げると、骸は顔を更に歪めた。
「オーディンの能力ですよ。言っていたでしょう、万物を操る力だと。彼は意志の無いものを操り、意のままにすることができるんですよ」
「生物は無理なのか？」
リボーンが尋ねると、骸は顔を少しうつむかせた。
「いえ、可能です。ですがかなり体力を使うため、あまりやらないはずです」
「何でだ？」
山本が首を傾げると、骸はふっと息をついた。
「意志があるため、操っても抵抗される可能性があるんですよ。マインドコントロールとは違いますからね」
「つまり……意志までは操れないってことか？」
獄寺が問えば、骸は顎を引いた。
「ええ。催眠術とは違い、脳までは操れませんから」
「よく解らんが……それとあの左目の炎、どういう関係があるのだ？」

「え……そこまでは……」
了平に訊かれ、骸は困り顔になった。
「なにせ、前は死ぬ気の炎の存在など、全く知りませんでし」
「私が知ったのも、一年半前だ」
オーディンが口を開いた。
全員、彼に注目する。
「前はこの目が嫌いでな。ロキに頼んで潰したのだが、なぜか再生した」
『……!?』
全員オーディンの言葉に驚き、ロキを見やった。
視線を集めてしまったロキは、顔をしかめる。
「潰す？　おまえが俺にやらせたのは潰すって言うより、くりぬくだろ。再生した時はびびったぜ」
全員が黙り込んだ。
目が再生したことに対してではなく、オーディンがロキにやらせたことに、ゾッとしたからだ。
「おまえ……なぜそこまでしてその目を嫌うんだ?」
腹を押さえたツナはオーディンを見つめた。
別のところだったならともかく、さっきまで傷があった場所への一撃だ。
体力が無くなってきているツナには相当こたえた。
「……おまえなら解るだろう。使い方を誤れば、これは世界を壊しかねん」
「……」
「だが今は、この力に感謝している」
足元のガレキが、崩れた壁が、剥き出しになった鉄筋が、次々宙

に浮いていく。
それだけでなく、なんと大空の炎が灯り、燃え盛りだした。
「私の望む世界を創るために、壊すことは必要なのだからな！」
それぞれが、かすむ速さでツナに向かっていった。
「同じ手は何度も喰らわない」
ツナはそれを次々かわしていく。
全てが紙一重であり、超直感がなければ危ないところもあった。
だがツナは、完璧にそれらをかわし、壊して、着実にオーディンとの距離を縮めていく。
その距離があと一メートルといったところで、ツナは拳を振り上げた。
「終りだ！」
ツナはオーディンの腹に拳を叩き込もうとした。
「甘い」
しかし、オーディンは数歩下がるだけでそれを避けてしまう。
狙いが外れたツナは、体勢を崩してしまった。
「終わるのはおまえだ、ボンゴレ」
オーディンの左目の炎が燃え上がる。
「十代目！」
獄寺の叫び声に、ツナは振り返った。
すぐ後ろを、炎のガレキが覆い尽くしている！
「くっ……」
ツナはとっさに横に避けようとするも、間に合わない。
炎のガレキが、ツナの上に降り注いだ。

轟音と、空気が揺れる感覚。それらに、獄寺達は思わず目を閉じた。
それらが収まり、恐る恐る顔を上げた彼らは、言葉を失う。
ツナがいた場所。そこに、燃え上がるガレキの山があった。

「ま、まさか……十代目……」
獄寺が呆然と呟く。
「あっけない……。これがボンゴレ?世の最期か」
オーディンはガレキの山を見つめた。
「てめぇ……よくも!」
獄寺が匣兵器をオーディンに向けた。
守護者達が次々武器を構える中で、ロキとバルドル、そしてリボーンは動かなかった。
「! リボーンさんっ。何で動かないんですか!!」
「焦るな、獄寺。まだ終わってねーぞ」
リボーンはくい、と帽子を上げた。
「オーディン。俺の生徒は……そんなにやわじゃねーぞ」
がらっ、とガレキが揺れた。

ガラガラガラッ

ガレキの山が勢いよく崩れ去る。
「何……!?」
オーディンは一、二歩後ろに下がり、両目を見開いた。
「まだ……まだ、終われない」
マントをまとったツナは、闘志の消えない瞳でオーディンを見据えた。

「おまえを倒すまで、俺は倒れない」
マントが大空ライオンに戻り、ツナの肩に飛び乗る。
すぐさま構えるツナを見て、オーディンは息をついた。
「全く……強い。強すぎる。その強さが、あだにならなければいいがな」
オーディンは目をツナから、骸に向けた。
「おまえがこいつの下に付くのも、解る気がする。強く、酷くまっすぐだ」
「……勘違いしてもらっては困りますね」
骸は嘲るようにふっと笑った。
「沢田綱吉は、あくまで僕の標的ですよ。昔から、ね」
「な!?　骸てめぇ、まだそんなこと言ってんのかっ」
獄寺がいきりたって怒鳴り上げた。しかし骸はどこ吹く風である。
「そうやって言い合えるのは信頼してるからこそだ」
オーディンの目が哀しげに揺れた。まるで失ったものを懐かしむような……
ツナがそれに驚いていると、オーディンの左目の炎が膨れ上がった。
「先程、骸は生物を操れないと言ったな」
ゆらゆら揺れる瞳の炎に呼応するように、肩の上のナッツが身じろぎした。
「確かに操れんな、『ただの生物』は」
この言葉を聞いた瞬間、ロキの顔色が変わった。
「マズイ！　ボンゴレ、そいつを匣に戻せ!!」
「え?」
「遅い」
左目の炎が更に膨れ上がった。
「!?　ナッツっ」
ナッツが肩から飛び降りたのを見て、ツナは目を見開いた。
「しかし死ぬ気の炎で動く匣アニマルなら」

しゃべり続けるオーディンの肩の上に飛び乗り、そこに収まる。
「操ることは、可能」
「な、に……！？」
ツナはオーディンの肩に乗ったナッツを凝視した。
「ナッツ！　おい、ナッツ！！」
ツナが呼びかけても、ナッツは動かない。それどころか、牙を剥き出しにして威嚇し始めた。
「無駄だ。こいつはもう、私の命令しか聞かん」
オーディンはツナを見下ろし、傲然と言い放った。
「戦力を削がれたおまえに、私に勝つすべは無い！」

続く…

標的５４　左目（後書き）

今回、話が短いです。書くこと想像以上に少なかった……！　ついでに言うと、あとがきも書くこと無いです……
次回はもっと長く書けるよう努力します！

読んでいただき、ありがとうございました！
感想などお待ちしております！！

標的５５　決着（前書き）

更新遅れてスミマセン。

標的55　決着

ツナは全身を震わせた。
「ナッツ……」
未来で共に戦ってきた『相棒』が、自分を裏切ったことが信じられないからだ。
「敵の匣アニマルを操る力なんざ、反則にもほどがあるだろ！」
獄寺が叫んだ。
「十代目！　俺達も加勢しますっ」
「ボンゴレ匣を相手に一人じゃ、分が悪いぜ」
獄寺だけでなく、山本も刀を構える。了平のおかげで、傷は不完全ながらも塞がっていた。
「貴様らは私の話を聞いていたか？」
オーディンは冷め切った右目で獄寺達を見つめた。
「私は、万物を操ることができるのだぞ」

『……！』

武器を構えようとした全員が、目を見開いた。
「ほ、炎が灯らねぇ！」
獄寺が呆然と自身のリングを見下ろした。
獄寺だけではない。山本や雲雀達の匣も同様だった。
ただの指輪になってしまったかのように、何の反応も示さない。
「邪魔はしないでもらいたい」
オーディンは左目の炎を大きくした。

「今はボンゴレ?世との戦いに集中したいのでな」
「まさか……これもおめーの力か」
リボーンは眉根を寄せた。
(ボンゴレリングまで無効化しちまうとはな)
正直言って、あり得ない。
こんなことができるなんて、思ってもみなかった。
この様子だと、普通の武器も使いものにならないと思っていいだろう。
リボーンは銃に触れた。
引き金はぴくりともしない。リボーンは舌打ちしたくなった。
(やべーな、この状況。ツナの勝率は大幅ダウンだぞ)
さしものリボーンも焦る。
ここまで強敵とは思わなかった。
いったん退いて、態勢を立て直すしか……
「例えおまえが特別な力を持っていたとしても」
ツナは凛とした声でオーディンに言い放った。
「俺は諦めないし、絶対に負けない」
辺りが静まり返った。
ツナが口にしたのは、不退転の覚悟だ。
この状況下でそんなことを言うのは、あまりにも愚か過ぎる。
しかし誰も、ツナを止めようとは思えなかった。
「……よくそんなことが言えるな。勝算があるのか?」
オーディンが尋ねれば、ツナはあっさり首を振った。
「いや。正直作戦も何も思いつかないし、勝てるとは言い切れない。だが」
ツナは拳を持ち上げた。

「俺はおまえに勝ちたいと思っている。戦う理由は、それで十分だ」
これにオーディンは目を見開いた。
驚いた顔でツナをまじまじと見つめ……ふっと笑う。
「さすがだ……そうでなくてはならない」
槍を構え、ツナをじっと見据える。
「そうでなければ、戦いがいが無い！」
オーディンはだんっと地面を蹴った。
ツナは拳に炎を灯し、自分もまた走り出す。
槍とグローブがぶつかり合う。
オーディンの肩に乗ったナッツが雄叫びを上げた。
ツナの服の袖がコンクリートになって固まっていく。
ツナは慌てて後ろに下がった。
退いたツナを追うように、大空烏が突進してくる。
「しかしその強がりが、いつまで続くかな？」
大空烏の炎が膨れ上がった。
炎そのものが巨大な飛鳥のように、ツナに向かっていく。
周り壁や天井がどろりと溶けた。
「なんて炎だ！　離れてても熱気が伝わってくる！！」
獄寺が叫んだ。彼の言う通り、守護者の周りまで温度が上がったようだった。
「ツナ！　避けろ！！」
山本が声を張り上げるも、ツナは微動だにしなかった。
そのまま炎の鳥は、ツナの心臓めがけて突っ込む。

ガッ

それをツナは。
「……何……！？」
受け止めた。

「相棒（ナッツ）を失ったからといって」
炎が音を立てて凍っていく。
「あれは……零地点突破・初代（ファースト）エディション！」
獄寺がまたもや叫んだ。今度は、歓喜をにじませて。
完全に凍ってしまった大空鳥がごとんと音を立てて落ちた。
おそらく、二度と炎を宿すことは無いだろう。
「俺は、弱くなるわけじゃない」
ツナはぐっと拳を握り直した。
「今度こそ覚悟しろ」
ツナは炎を使って滑るように飛んだ。
膨大な炎を灯した拳が、オーディンに振り下ろされる。

ガギィィィン！

ツナの拳が、受け止められた。
「何っ……！」
「操れるということは、能力を使いこなせるということだ」
オーディンは、形態変化（カンビオ・フォルマ）したナッツをまとっていた。
「先程見させてもらったこの機能。一度見ただけなら、充分だ」
「！　がっ」
ツナの腹にオーディンの蹴りが入った。
ツナは五メートルも吹っ飛ばされる。
ガレキの山に背中から突っ込み、一瞬身体が動かなくなる。
「今度こそ、その命、もらう」
地面を蹴ったオーディンはツナの額に槍を振り下ろした。

もう駄目だ、と思った。
身体中が痛いし、息も絶え絶えなのが解る。
諦めれば楽になれる。死んでしまえば、後のことを気にする必要は無い。
（でも、ここで諦めたら、大切なものが傷付く）
それを自分は望んでいるのか。
（みんなを……守りたい……そう願ったのに、こんなところで、諦めたくない！）
ガシッ
額に迫る槍の刃を受け止め、ツナは目を見開くオーディンを真っ正面から見据えた。
「俺は、諦めない！」
ぐぐっと力を入れれば、槍にぴしぴしとヒビが入った。
オーディンは慌てたように槍をツナの手から引き抜き、手に霧の炎を灯す。
槍からヒビが消えていった。霧の『構築』で直したらしい。
ツナは震える身体で立ち上がる。
目がかすんで周りの風景がぼやけて見えるが、オーディンだけははっきり映っていた。
「……驚いた。まだ動けるとは」
オーディンが感嘆の声を上げた。
「どこからそんな力がわいてくる……」
「……『独り』で戦うおまえに、解りはしない」

ツナはだらりと両手を下げた。
「オーディン、相棒を返してもらう」
「何……？」
オーディンは片眉を上げた。
「……妙なことを言う奴だ。こいつは私の支配下にある」
「片目だけで、俺達の絆を壊せると思うな」
ツナはきっぱり言い放った。
「全てを操れる……そんなこと、できると思うな」
ツナは拳の炎を大きくした。
それは戦いのための炎ではない。

「あの炎……死炎印に似てるぞ」
リボーンの呟きに、全員が彼の方を見た。
「死炎印って、前に九代目が押したもののことッスか？」
獄寺が尋ねると、リボーンはこくりと頷く。
「死炎印は、ボンゴレのボスが己の署名だと証明するためのもんだ。つまり、自分を表す炎でもある」
リボーンはツナとオーディンを見比べた。
「ツナは、ナッツにその炎を見せて思い出させようとしているんだ」
「……そんなこと、可能なんですか？」
骸が眉をひそめて尋ねた。
「解らねぇ。だがこれが、ツナが超直感で悟った行動だとしたら……」
リボーンが呟くのと同時に、ナッツに変化が現れた。

さっきまで敵意を剥き出しにしていたのに、唸り声が妙に弱々しくなってきている。
その様子に、オーディンは目を見開く。
「オーディン、おまえが思うほど、その左目は万能じゃない」
ツナは一歩踏み出した。

「それにナッツは、ただの道具でもない」
「何を言っている……」
オーディンは眉をひそめた。
「ナッツは俺の……仲間だ！」
ツナの炎が更に大きくなった。
「ガウ！？」
ナッツが驚いたように鳴く。
身体を震わせ、迷うような仕種をする。
ツナを――正確にはツナの炎を見つめ、どうしようか迷っているようだった。
「ナッツ」
ツナが静かに声をかけると、ナッツはぴくんと身体を震わせた。
「おいで」
優しく呼べば、ナッツはオーディンの肩を蹴ってツナの胸に飛び込んだ。

『……！！』

全員驚いてツナとナッツを見つめた。
「……なぜだ。完全に操られていたはずなのに」
オーディンが呟くのと同時に、ナッツがツナの肩に飛び乗った。
「おまえには解らない」
ツナはぐっと拳を握った。
「仲間をかえりみないおまえには、絶対に俺達の絆は理解できない！」
「っ、ほざくな！」
オーディンの槍の炎が巨大になった。
だけでなく、七色全ての炎が混じりあった死ぬ気の炎が槍に宿る。
「あれは……！」
ツナは思わず身構える。

全ての炎が混り合い、膨大な質量を持つ槍の炎は、虹のような綺麗な色ではなく……混沌とした、禍々しい黒だった。

「仲間など、大切なものなど……手にしていても、滑り落ちるだけではないか」

オーディンは柄まで黒い炎に包まれた槍を両手で構えた。

「私は知っている……失う痛みを。またあの痛みを負うくらいなら」

オーディンの目は、今ここには無い、別のものを見ているようだった。その目は、あまりにも、哀しい。

「全て捨て置く！　もう何も持たん！！　ボンゴレ?世、貴様とは相容れないのだ！！！」

オーディンは地面を蹴った。獣のようにツナに迫る。

「行くぞ、ナッツ！」

ツナの声に、ナッツがツナの右手に飛び乗った。

「形態変化（カンビオ・フォルマ）、攻撃モード（モード・アタッコ）！」

ナッツは咆哮を上げた。

その姿が、みるみる内に変わっていく。

I世のガントレット（ミテーナ・ディ・ボンゴレ・プリーモ）に変わったナッツを右腕にまとい、ツナも走り出した。

「一騎討ちか！」

「全員離れろ！」

獄寺が叫び、山本が忠告の声を上げる。

ツナとオーディンは声を張り上げた。

獣のように雄叫びを上げ、互いの武器を振り上げる。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！』

辺りに爆発音が響き渡った。

標的５５　決着（後書き）

更新遅れてすみませんでした！
執筆が思うように進まなかったので……本当はもっと早く投稿したかったんですが……
読んでもらったら解るように、最終回が近いです。多分あと二回ぐらいだと思います。
皆様が納得できるような最終回が書けるよう頑張ります。では！

標的５６　過去

爆風が視界を覆った。
踏ん張っていなければ飛ばされてしまいそうだ。
「ど、どうなった！？」
「解らねぇ！」
獄寺と山本が叫ぶ。その声も、かき消されてしまいそうだった。
リボーンはじっと耳と澄ました。
今のところ何も聞こえない。
一体どうなったのか。
ツナは無事なんだろうか。オーディンは？
じっと動かず、爆風が収まるのを待つ。

やがて、視界がゆっくり広がった。

煙から現れた影は二つ。
ツナもオーディンも、倒れてはいない。
ただ、服はぼろぼろで、身体中火傷だらけだった。

ということは、引き分け……？

そう思った瞬間、二人が崩れ倒れた。
「十代目！」
「オーディン！？」
獄寺とロキが同時に声を上げた。

ロキとバルドル以外の全員がツナに走り寄る。
「ツナ、大丈夫か！？」
山本が助け起こすと、ツナは「何とか……」とか細い声を出した。
「待っていろ！　極限に治してやる！！」
了平は匣から晴れゴテを出した。
「ダメツナが。無茶しやがって」
「リボーン……あはは、ごめん。でも」
ツナは疲れ果てた顔に笑顔を浮かべた。
「勝ったよ」
「……ふん。当たりめーだ」
ほんの僅かでも彼の勝利を疑ったことをおくびにも出さず、リボーンはニッと笑い返した。

「……まさか、私が負けるとはな」

オーディンの声に、全員が彼を見た。
オーディンはロキとバルドルに助け起こされている。
表情は消えて、左目は閉じられていた。
「なぜだ……私の力は完璧だった。なのになぜ、貴様は匣アニマルを取り戻せたのか」
隻眼に力は無い。ただ疑問が、瞳を占めている。
ツナはしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。
「ナッツは、俺の友達だから」
「友達……？」
「確かに貴方の力は、匣アニマルを完全に支配できるかもしれない。でも、心までは操れない」
オーディンの片眉がぴくりと上がった。
「妙なことを言う……兵器に心があるものか」
「ナッツは、兵器じゃない。一緒に戦う、大切な仲間だ」
ツナがきっぱり言うと、オーディンは理解不可能という顔をした。

それでもツナは続ける。
「仲間とできた絆は、そう簡単に切れるものじゃない。例え強力な力を持っていたって、絆までは作れないんだ」
ツナの声は、崩れた空間に響き渡る。誰も、それを止めようとはしなかった。
「ナッツだけじゃない。俺は、たくさんの人との絆を持っている。リボーンや獄寺君や山本、雲雀さんやお兄さん、バジル君や明ちゃん、クロームや骸だって、俺の大切な仲間だ」
ツナは大きな瞳で、オーディンの目を覗き込んだ。
「こんなにも俺は支えてくれる人、守りたいと思える人がいる。でも貴方にはそれが無い。それがきっと、勝敗をわけたんだ」
オーディンは黙りこくってツナの話を聞いていた。
聞き終わって、自分の身体を支えるロキとバルドルを見、地肌が剥き出しになった天井を見つめる。
「そうか……支えるもの、守りたいものか。……いらぬものだと思っていたものが、敗因を呼ぶとは」
どこまでも、どこまでも疲れた声。聞いていると、だんだん苦しくなってくる。
その顔はどこまでも虚ろで、先程まであれほどツナ達を苦しめた敵とは思えないほどだった。
「皮肉だ……あの時捨てたものが、弱いものだと決めつけていたものが、こんな結果を招くなんて」
「あの時？」
ツナは首を傾げた。
オーディンは顔を正面に戻し、微かに笑う。
「聞くか？　過去に怯え、恨み憎しみからさえも逃げ続けた男の話を」
オーディンは自嘲めいた口調で話し始めた……

私は、ロキと同じエストラーネオファミリーの実験台だった。

繰り返される実験。外に出れば武器を向けられた。

辛かった……苦しかった……何度自分の運命を呪ったか。

内にも外にも信用できる奴はいない。ロキと骸といる時が、一番心休まったよ。

特に骸は……私と似ていた。

自分の運命を呪い、実験を受けていく内に人としての心を失っていっていた。

……ただ、彼は私とは別の思いを秘めていた。

――憎悪だ。疲れ切った私には、そんな気力は残っていなかったがな。

そしてあの日……エストラーネオファミリーは骸の手によって壊滅した。

私はその時を見計らってロキと共に逃げたよ。

そう、逃げたんだ。他にも実験台になった子供達もいたのに、彼らを残して。

それから数年。私はある人物と出会った。

バルドルの母……フリッグだ。

彼女はあるマフィアのボスの娘だった。

私のような人間にも優しい女性だった。

彼女だけではない。父であるボス、そのファミリー達も私達を受け入れてくれた。バルドルと出会ったのもその時だ。

私とロキはそのファミリーに入り、やがて私は、フリッグと結ばれた。

彼女の家のファミリーは新興ファミリーで、少しずつ力を付けていっていた。
それが気に入らなかったんだろう……古者のファミリーが襲撃してきた。
私とロキも戦った。敵は弱かったよ。なぜ戦いをしかけたのかと、疑問に思ったほど。
……奴らは狡猾だった。国と手を組んで我々を攻撃を始めたのだ。
ファミリーは全滅。私とロキ、フリッグとバルドルは辛くも逃れたがな。
だが敵は執拗に追い続け……その内に、フリッグを失った。
守れなかったんだ。近くにいたのに、彼女を。
私の力も役に立たなかった。あの時ほど、自分を無力だと感じたことは無い。
だが、それだけでは終わらなかった。
国の老人達は私達を追うのは不可能と感じたのか、私達を追う手を引いた。……手を組んでいたマフィアを潰してな。
その手もまた、狡猾だったよ。交渉と称してボスを呼び出し、その場で射殺。
追われる心配が無くとも私達は逃げ続けた。その中で、私は骸の気持ちが解ってきた。
憎悪だよ。古い考えを持つ者達により、私は持っていたものを全て失った。
私だけでは無い。世界中には、同じ理由で全てを失った者が大勢いる！
世界は間違っている。だから、私はこの先を視る力と全てを操る力で、世界を変えよう。そう、思ったのだ……

オーディンは長い語りを終えて口を閉ざした。
その顔には虚無が浮かんでいて、生気が全く感じられない。
ツナは黙って、オーディンを見つめた。
彼は目を合わせようとしない。何を考えているのか、全く解らなかった。
「……馬鹿馬鹿しいだろう」
オーディンは乾いた声を出した。
「世界を変えようといきがった結果がこれだ。骸……おまえとは大違いだな」
「え？」
骸は目を瞬いた。
「何がです？」
「おまえは憎悪と狂気でボンゴレに戦いを挑み、負けた。だがその代わり、様々なものを手に入れた」
オーディンは骸の傍に立つクロームに目をやった。
「それに比べ、私はこの戦いで全てを失い、こんな醜態をさらしている。なんて違いだ……」
「……」
「本当に、全てを失った……ここまで予知と同じだと、逆に笑えてくる」
「え？　それってどういう……」
ツナが尋ねようとした瞬間。

ガチャンッ

オーディンの首に、鉄製の首輪がかけられた。

驚く一同の前で、ロキとバルドルの首にも同じものがかけられる。
ツナとリボーン、そして骸は、それに見覚えがあった。
やがて彼らの背後から、黒いコートに帽子、そして顔中に包帯を巻いた三人の男達が現れる。
「あ、あれは……！」
「復讐者（ヴィンディチェ）っ……」
ツナと骸の声に、全員が目を剥いた。
「あ、あれがマフィア界の掟の番人……」
明が呟いた。
「どうやらオーディン達を連れて行こうとしてるみたいだな」
リボーンの言葉に、ツナは「そんなっ」と呟いた。
「と、止めないと……！」
ツナの動きを、骸が止めた。
「止めなさい、沢田綱吉」
「いいのか、骸！　このままじゃ、オーディン達が……」
「それが、復讐者とロキとの交渉条件なんですよ」
骸の言葉に、ツナは動きを止めた。
「なん、だって……？」
ツナは骸を見上げた。
「僕を復讐者の牢獄から出すために、ロキは代わりに自分達アースファミリーが牢獄に入ることを条件にしたんです」
「そんな……じゃ、もう……？」
ツナはリボーンを見た。彼は黙ったまま、うつむく。
「っ……！」

ツナは唇を噛んだ。
こんな、こんな終わり方って……

「沢田綱吉」

ツナは八ッと顔を上げた。
オーディンは、引きずられながらも、ツナに語りかける。
「私は罪を犯した。裁かれるのは当然だ」
「っでも！」
「おまえなら」
オーディンは微笑んだ。
ふっきれたような、憑き物が落ちたような笑顔だった。
「そんな罪を犯さずとも、世界を変えられると、信じている」
「オーディン……」
「それから、骸」
骸は肩をぴくりと震わせた。
「もう、憎むのは止めろ。その娘のためにもな」
「……言葉を返すようですが、『オッデロ』」
骸はオーディンの目をまっすぐ見つめた。
「それを決めるのは、僕ですから」
「そうか」
オーディンは苦笑した。
「ボンゴレ！」
ロキが声を張り上げた。
「オーディンの意思を継げよ！　勿論、ちゃんとした形でな！！」
ロキの隣では、バルドルが静かにツナ達を見つめている。
これから希望も光も無い、絶望とも言える牢獄に行くのに、三人の顔には悲壮感は無い。
晴れやかな――清々しささえ感じる顔だった。
やがて彼らの姿が視界から消え――ツナの瞳から、涙があふれ出た。
「何泣いてやがる、ダメツナ」
「っ、だって……」
ツナは涙をぬぐった。
「やっぱり、こんな終わり方、酷いよ」

彼らはどれだけ苦しかったろう。世界を憎み続けて、全てを失って。

彼らの痛みは想像できないし、解るなんて言えないけれど……もっと別の方法があったんじゃないかと思う。

「どうしてオーディン達みたいな人達が生まれちゃうんだろう。こんなの、間違ってる」

「……だがこれが現実だぞ」

リボーンは帽子のつばを下ろした。

「そんな現実を変えられるかどうかは、おまえ達次第だ」

「……うん」

ツナは山本の肩を借りながら立ちあがった。

ボンゴレ十代目ファミリーとアースファミリーの戦いは、こうして幕を閉じた……

続く…

標的５６　過去（後書き）

こんにちは、沙伊です。
戦いが終わりました。次回最終回（の予定）です。
今回勢いで書いたので、色々変なところがあるでしょうが……そこはツッコまないでください。
感想などお待ちしております！

最終標的　別れと未来とそれから…（前書き）

最終話です。

最終標的　別れと未来とそれから…

ツナは並中の屋上にいた。
戦いから一週間経過しており、怪我などはほとんど完治している。
空は快晴で、屋上には自分達以外誰もいなかった。
まぁ屋上は元々立ち入り禁止なので、誰もいないのは当然だが。

ツナの両脇には獄寺と山本と京子、目の前には明がいた。
「じゃぁ明ちゃん、中国に帰っちゃうんだ……」
ツナが残念そうに言えば、明も眉を下げた。
「うん……。今うちのファミリーは、統率できる人がいないからね。虹石も取り戻せたし、ボスとしてファミリーを守らないと」
「そっかぁ……寂しくなるね……」
そう呟いたのは京子だ。
「手紙、書くね！」
「うん。私も時々遊びに来るから」
寂しそうに笑う少女二人に、ツナも釣られて泣きそうになる。
しかし京子にそんなところ見せたくないのでぐっと我慢していると、明がこちらを見つめた。
「な、何？」
「や、沢田君に謝らなきゃいけないことがあって」
明は申しわけなさそうに頬をかいた。
「私ね、最初沢田君のこと信用してなかったんだ」
「え？」
「だって、弱々しくて、頼りないと思ってたし……」
「んだと！　てめぇ十代目が弱ぇなんてどの口できいてやがるっ」

獄寺がいきりたって突っかかった。
「まぁまぁ、獄寺」
山本がなだめにかかった。
「明も悪気があって言ったんじゃねぇよ」
「うるせぇ！　十代目を侮辱する奴は許さねぇ！！」
ぎゃあぎゃあ叫ぶ獄寺に、明は慌てて言葉を重ねる。
「前はだって。今は違うよ！　強くてカッコよくて優しくて……凄く素敵だと思う」
「えっ」
明の言葉にツナが驚いていると、明は足を前に出した。
「じゃ、私先生に挨拶してくる」
「おう！　じゃぁなっ」
「またね」
山本と京子は軽く手を振った。
明も笑顔を返し、通り過ぎようとして……ツナの横で止まった。
くるりとツナに向き直り、じっと目を覗き込んでくる。
「綱吉君」
「え、な、何！？」
いきなり下の名前で呼ばれ、ツナは驚いた。
明はにこっと微笑む。
「謝謝（シェシェ）」
中国語が聞こえてきた後に、頬に柔らかい感触が――

「うえぇぇぇぇぇぇ！？」
（俺、今キスされたーーー！？）

ツナが固まっていると、またもや獄寺が吠えた。
「てめっ、何やって……」
「ん？　ライバル宣言」
そう言って明は京子の肩をポンと叩いた。

「負けないヨ♪」
「えっ……」
ウィンクしてその場を立ち去る明。固まっているツナと京子。憤った獄寺を、山本が抑えていた。
「あのアマァァァ！　十代目になんという狼藉をおぉぉぉ！！」
「まぁまぁ、落ち着けって。ツナも戻って来いよー」
「……ハッ！　ごめん、いきなりだったから……。……京子ちゃん？　どうしたの？」
「え？　あ！　うぅん、何でも無いよ」
ボーッとしていた京子はハッとした後両手を顔の前でブンブン振った。
「？　そっか」
ツナは首を傾げつつもフェンスの外に目をやった。
（明ちゃんが中国に帰る……ディーノさんも、ヴァリアーも、アリアさん達も、アルコバレーノ達も帰った）
戦いが終わったのだから、当たり前だ。
ただ、日常に帰るだけだ。
それだけなのに、なぜだろう。少し、寂しい。
十年後から帰ってきたときも、そんな感じがした。
スパナや正一達と別れた時と同じ……

（……あぁ、そうか）

今やっと気付いた。
（誰かがいなくなるのが、寂しいんだ）
戦いの中で出会った人達。
その人達と会えなくなるのが、自分は哀しいんだ。
別に一生会えなくなるわけじゃない。でも、もう会えない人もいる。
（オーディン……）

今頃彼はどうしてるだろうか。
死んではいないだろう。
だが、死ぬより酷い思いをしているに違いない。
（……あいつに、会いに行こうかな……）
ツナは指のリングをいじりながら学校の外を眺めた。

黒曜ヘルシーランド。

相変わらず、建っているのが不思議なぐらいボロボロである。
「いるかなぁ……いなかったらちょっとショックかも」
ツナは重箱を抱えながら呟いた。
（そもそもここは入るの勇気いるし……何か怖いし……）

「ボス」

「！！！？」
ツナはこれ以上無いぐらい身体を震わせた。
「ク、クローム！」
「何か……用？」
買い物袋を持ったクロームは首を傾げた。
「あー、うん。骸、いるかな？」
「骸様？　いるけど……」
クロームは不思議そうな顔をした。

「骸様に用……？」
「うん。話したくて」
「そう……。でも、それは？」
クロームは重箱を指差した。
「あぁ、これは……」

『おにぎり！？』

黒曜チームは目を瞬かせた。
「うん。母さんに頼んで、作ってもらったんだ」
ツナは骸の部屋の床に重箱を置いた。
「そ、そんなことおまえにしてもらう義理はねーびょん！」
犬がいきりたって怒鳴った。
「おめーは敵らびょん！　何敵に砂糖」
「犬、塩」
「うるへーもさメガネ！　その塩送る真似してるびょんっ」
「え、だって、あの……」
ツナはどもってしまう。
ツナは特に他意は無く、ただ行くんだったら差し入れでも持っていこうと思っただけである。
「ねぇ、具は何？」
ビビるツナに、千種が尋ねた。

「え……と。昆布とか、シャケとかだと思うけど」
「それにしても随分作りましたねぇ、君のお母様」
三段ありますよ、と言ったのは骸だ。
「む、骸さん!?　まさかこいつの持ってきたやつ、食べる気じゃあ……」
「犬は食べないの……？」
クロームが尋ねた。
「だ、誰が食べるか」

グウゥゥゥゥ

『……』

全員が犬に注目する。正確には、犬の腹を。
「……どうやら一番空腹だったのは、犬だったようですね」
骸が苦笑すると、犬は真っ赤になってうつむいた。

「そういえば、僕に話というのは？」
おにぎりを食べ終わった骸はツナに尋ねた。
少し離れた場所では犬がまだおにぎりを食してる最中であり、その勢いのせいでクロームと千種に辟易されている。
「あー、うん。……そういえばおにぎりどうだった？」

「……おいしかったですよ。いいお母様ですね」
少し間を置いた返事。そういえば彼は、親というものを持っているのか。
(持って、無いんだろうな)
ここにいる全員がそうだ。親の愛情を知らず、互いに身を寄せあって支えている。
その点では、ツナと骸達には大きな溝があった。
「母親とは、どういうものなんですか？」
唐突に骸が尋ねてきた。
いきなりの質問に、ツナは首を捻る。
「えぇ！？　えーと……口うるさく言うこともあるけど、優しい、かな。あと……」
「あと？」
「うちの母さんの場合だけだけど、おおらかというか、細かいことは気にしないというか」
「はぁ……」
「だって母さん、父さんのでたらめな嘘を信じちゃうんだよ？　北極で石油掘ってるとか、世界中を交通整理してるとか」
「……よく常識を持って成長できましたね」
さしもの骸もあきれている。いや、誰だってあきれるだろうけど。
「全くだよ。母さんはわけわからないチラシ信じるし、父さんは帰ってこない上に一年前まで死んだって嘘つくし」
「……」
骸は絶句したようだった。当たり前だが。
「自分でよく、ダメダメとはいえ常識人として育てられたなと思うよ」
ツナはふー、と長いため息をつく。
「でもさ、何だかんだで大切なんだよね。俺、一人っ子だから兄弟いないし、あの二人が唯一の家族なんだ」
ツナはしょうがないという気持ちで笑った。

血の繋がりは変えられない。家族であることも……
あんな二人の間に生まれたのかと悩みそうになるが、この事実は変えられないのだ。
「だから、大切にしようと思うよ。守りたいと思う。まぁ父さんはどこにいるか解らないから、守りようが無いんだけどさ」
ツナは笑いながら立ち上がった。
「俺、もう帰るよ」
「おや？　話があったのでは？」
骸は首を傾げた。
「うん。ちょっと話がしたかっただけなんだ。……ところでさ、骸。おまえ今幾つ？」
「え？　……十六ですけど、何か？」
「十六か。お兄さんと雲雀さんと一緒だな。いや……雲雀さん未だに年齢不詳なんだよな」
ツナがぶつぶついっていると、骸は眉根を寄せた。
「一体君は何が言いたいんですか」
「あー、うん。確かめたかっただけだよ」
「確かめる？」
骸が訊き返すと、ツナは顎を引いた。
「骸は俺達と変わらないっていう、ことだよ」
骸は目を見開いた。
「あ。重箱は今度返してくれればいいから。じゃぁね」
ツナはそのまま、その場を後にした。
骸はツナの後ろ姿を、黙って見つめていた。
「骸様……」

クロームが骸の右手に触れる。
「まだ……ボスのこと、標的にしてるの？」
不安そうな目。こんな感情らしい感情、初めて会った時は見ることはなかった。
「私……ボスと戦いたくない」
静かな、拒否の声。骸は無表情でにうつむいた。
「そうですね……しばらくは、オーディンの代わりに見守りましょうか」
骸の呟きに、犬と千種が顔を上げる。
「骸さん？」
「骸様……」
骸は二人の声に答えない。
ただ自分の指に収まった、霧のリングを見つめていた。

ツナは帰路に着いていた。
「今思うと……俺骸に凄いこと言っちゃったな～。びっくりしてなきゃいいけど」
「こんな時でも他人の心配か」
少し上からの声。ツナが顔を上に上げると、塀の上にリボーンがいた。
「あ、リボーン」
「あ、じゃねぇよ。おまえ今何時だと思ってんだ」

ツナはえっ、と声を上げて携帯を開いた。
「あれ？　もう七時……？」
家を出たのは五時だったはずである。
確かに日は沈みかけてはいるが、そんなに時間を喰っていたとは思わなかった。
「ママンが心配してるぞ。もっと速く歩きやがれ」
「こ、これでも速く歩いてるよ！　競歩じゃあるまいし、これ以上速くしたら走ることになっちゃうよっ」
「うるせぇ。がたがたぬかしてねぇできりきり歩け」
リボーンはげしっとばかりにツナの頭を蹴った。
「って～！　おまえなぁ」
「ふん。それでもマフィアのボスか」
「だから俺はボスになんか――」

赤い日差しに照らされながら、ツナとリボーンは道を歩いていく。
その先にある未来の明暗など解らない。
ただ明日は、平穏な日常に戻っていく。
戦いの傷を記憶に変える、日常に――

終わり

最終標的　別れと未来とそれから…（後書き）

こんにちは、沙伊です。
「更なる戦いへ」はこれで終了です。
こんな駄作を長々と読んでいただき、感謝でいっぱいです。
個人的に消化不良で直したいところがたくさんあるので、時々直していこうと思っています。
感想などお待ちしております。
最後に、今までありがとうございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1401h/

更なる戦いへ

2010年10月8日10時29分発行